

協同教育実践資料 20

地域の学校を貫く研究的実践の 文化づくりと授業改善

—犬山市授業研究会2012年度の成果

犬山市授業研究会 著
杉江修治・水谷茂 監修

地域の学校を貫く研究的実践の文化づくりと授業改善
—犬山市授業研究会2012年度の成果

犬山市授業研究会 著

杉江修治 監修
水谷 茂

はじめに

2001年からはじまった犬山市の教育改革は、制度面という「器」を変えるだけの改革ではなく、子どもの学びを変えるための「中身」の改革だった。私は、そこでの授業改善に、市教育委員会の客員指導主幹として8年、かかわることになった。本書に掲載された報告の著者である「犬山市授業研究会」は、その初年度に、私が提案して立ち上げたものである。市内14の小・中学校が目指すべき事柄は、これまでの学校教育文化の見直しであり、実践を自らの確に改善していく「研究的実践文化」の定着だと考えたことによる。そのためには、個別学校での研究に加えて、学校間の交流を促すことで、批判、検証の機会が増し、地域全体の実践づくりに新たな視点が加わることが促進されるべきだと考えたのである。こういった改革に慣れない各校の模索の状況に対応すべく、当初、この研究会には授業研究で中心的な役割を校内で担っている教師が多く集った。

犬山の改革で、私が最も重要なポイントだと考えるのは、教育委員会が「学校の自立」を掲げたことである。教師を縛るような行政対応をするのではなく、教師の力を開放し、そこから生まれる成果に期待したのである。

犬山授業研究会には毎年30人前後、多い時には40人を超える教師が集った。犬山の教師全員の1割に近い。この研究会では、これまで様々な工夫を重ね、素晴らしい実践を積み重ねてきた実践力に優れた教師たちが元気に表に出て来、その経験をさらに整理し、共有するという、教師の力の醸成の場となっていた。生き生きと意見交換が重ねられる様子を常に見ることができた。毎回の研究の様子をニュースにして、市内の教師に配布することを行ってきたが、それはこの研究会発足時からのことであり、参加できない教師も、何が関心となっているか、どんな工夫が出てきているかを共有できるようにするためであった。

数年の間、改革の軸づくりとしての役割を果たしていった授業研究会ではあるが、2005～6年あたりには、学校を取り巻く状況、とくに若手教員の急激な増加が対応すべき重要な課題となった。授業研究会は、各学校の取り組みの方向性が定まり、学び合い、高め合いの協同的な学習指導の原理を共有するという文化が定着したのちは、発足当時の役割はほぼ終え、これを若手教員の成長支援の場として活用する形に次第に変わっていった。

この頃から、この研究会の意義を積極的にとらえ返し、あり方、進め方に有効な改善を加えた担当責任者が、本書の監修を共同して行っている水谷茂氏である。市教委の指導主事として、城東小学校の校長として、改革に取り組む傍ら、より有効な研究会の進め方が数々提案され、効果をもたらした。授業研究会の活動を前提に、さらに広い範囲の教員に呼び掛けた「公開授業研究会」を企画し、進めていったのも彼であった。年に2～3回、市内の小・中の教師の実践を1本ずつDVDにとり、実践者自身の語りでそれを公開し、たっぷり時間をとってそれについての議論を交わすスタイルの研究会である。毎回80～90

名の教師が集まり、熱心な討議が続けられた。

数年前から、この研究会は、教育委員会から犬山市校長会が主催する形に変わっていた。水谷氏は2012年で城東小学校を定年で退職されたが、そのタイミングで、校長会はこの研究会は継続しないことにした。したがって、本書が、犬山の教師たちが学校を横断して共同研究をしてきた報告書としては最後になる。私は2008年以降は教育委員会からは離れているので、市内全校の様子は把握できないのであるが、改革当初に言われた「犬山の子は犬山で育てる」という合言葉に沿った活動が、形を変えて継続されることを祈っている。

授業研究会では、私は当初から、経験交流の場といった水準のものにはしたくないと明言してきた。研究の内容を、教師個人やその学校の中だけにとどめてしまうのではなく、幅広く外部にまで発信することを視野に入れて研究してほしいという指針を示してきた。日本の学校文化は極めて謙虚であり、成果の発信は非常に少ない。それを美德とする文化は、教育には必要ではない。子どもたちの学びでも、人に説明できて初めて理解にいたるわけであり、発信までの手続きを経て、教師たちにも実践の中身が自分自身にとって本物になっていくのではないか。こういった方針に対して、参加した教師たちはしっかりと応えてくれた。その意義を確かに了解していた水谷氏の強力な働きかけも重要なポイントであった。研究の成果は下のような形で公表されている。『協同教育実践資料』として発行されているものは、日本協同教育学会のホームページ (<http://www.jasce.jp/>) にある出版物案内にPDFファイルで張り付けてあり、誰でも容易に参照可能になっている。ぜひご覧いただきたい。

単行本

1. 犬山の少人数授業—協同原理を生かした実践の事例 一粒社 2005
2. 犬山がめざす学力の追究—犬山市授業研究会 2007年度の成果(協同教育実践資料7)
日本協同教育学会 2008
3. 授業を変える研究的実践の文化の中で—犬山市授業研究会 2008年度の成果(協同教育実践資料10) 日本協同教育学会 2009
4. 教師力を高める教師の協同—犬山市授業研究会 2009年度の成果(協同教育実践資料11)
一粒書房 2010
5. すべての子どもの高まりを促す協同の学びの追求—犬山市授業研究会 2010年度の成果
(協同教育実践資料14) 一粒書房 2011
6. 子どもの確かな学びづくりと教師の協同(協同教育実践資料17) 一粒書房 2012

論文

1. 少人数授業による算数科小学校3年生「重さ調べ」の設計 中京大学教養論叢 43-2,
143-165, 2002. (島崎香代子・宇野恵子・川崎徹)
2. 少人数授業における望ましい教室環境に関する調査的研究 中京大学教養論叢 43-2,

- 183-197, 2002. (後藤正行・佐橋史朗)
- 3 グルーピングの工夫による少人数授業改善の試み 中京大学教養論叢 44-1, 177-199, 2003. (犬山市少人数授業研究会グルーピング部会)
 - 4 少人数授業による5年生「垂直と平行」の実践資料 中京大学教養論叢 44-1, 265-281, 2003. (犬山市少人数授業研究会5年生授業開発部会)
 - 5 確かな学びを育てる少人数授業の設計—協同的スモールグループ活用の意義と方法の実践的検討 中京大学教養論叢 45-1, 155-203, 2004. (浅輪郁代)
 - 6 少人数授業・ティームティーチングを生かした「学び」の実現をめざす評価の工夫 教育心理学研究資料(中京大学 杉江修治研究室) 9. 2004. (土井寛子・滝茂己・水野寛子)
 - 7 効果的な学び合いを促す指導過程の工夫—少人数授業での九九の習得を事例として 中京大学教養論叢 45-2, 265-290, 2004. (犬山市立楽田小学校2年生部会)
 - 8 少人数クラスを生かした主体的学習の工夫 中京大学教養論叢 46-3, 89-103, 2005. (村上英子)
 - 9 効果的な国語授業の事例的研究—伝え合いとワークシート、自己評価の工夫を軸とした実践資料 中京大学教養論叢 47-2, 89-128, 2006. (犬山市授業研究会「のびのび国語部会」)
 - 10 学校を越えた教師の協同による授業実践研究会の成果事例—犬山市における若手教師の取り組みと成長の手ごたえ 中京大学教養論叢 48-2, 29-100, 2007. (犬山市授業研究会算数低学年グループ、犬山市授業研究会算数4年生グループ、犬山市授業研究会理科がんばるチーム)

地域の学校全体を横につなぐ授業研究会を閉じた後に、「学校の自立」を図った犬山の教育改革がどのように発展的に継続していくか、市内14校の小・中学校の新たな取り組みが問われていくであろう。

監修者 杉江 修治

目次

| | |
|---|------------|
| はじめに | 3 |
| I 分科会研究報告 | |
| 平成 24 年度 犬山市授業研究会がめざす研修 一犬山の子は犬山で育てる | 9 |
| 自分の考えや意見に自信をもって、活発に意見交流し、論理的に文章化 できる子どもの育成 | 11 |
| 豊かな言語力を身につける子どもの育成を目指して | 61 |
| 自分の考えを深める子どもの育成—伝え合う活動を通して | 101 |
| 既習事項を基に自分の考えをもって、よりよい解法を導き出せる子どもの育成 | 121 |
| 道徳実践につながる授業をめざして—自分を見つめ高めるための資料の活用 | 153 |
| すべての子どもが楽しく、分かる授業を目指して 一意欲的にかかわり合う授業の工夫 | 203 |
| 郷土を好きになる子どもを目指して —私たちのまち犬山を見つめる学習を通して | 219 |
| 楽しく学習や活動に取り組む姿を目指して —機能訓練を取り入れた学習の工夫 | 231 |
| 意欲的に学び合う児童生徒の育成 —支え合い、認め合う学習集団を目指して | 257 |
| II 犬山市公開授業研究会・授業研究会成果発表会の記録 | 285 |

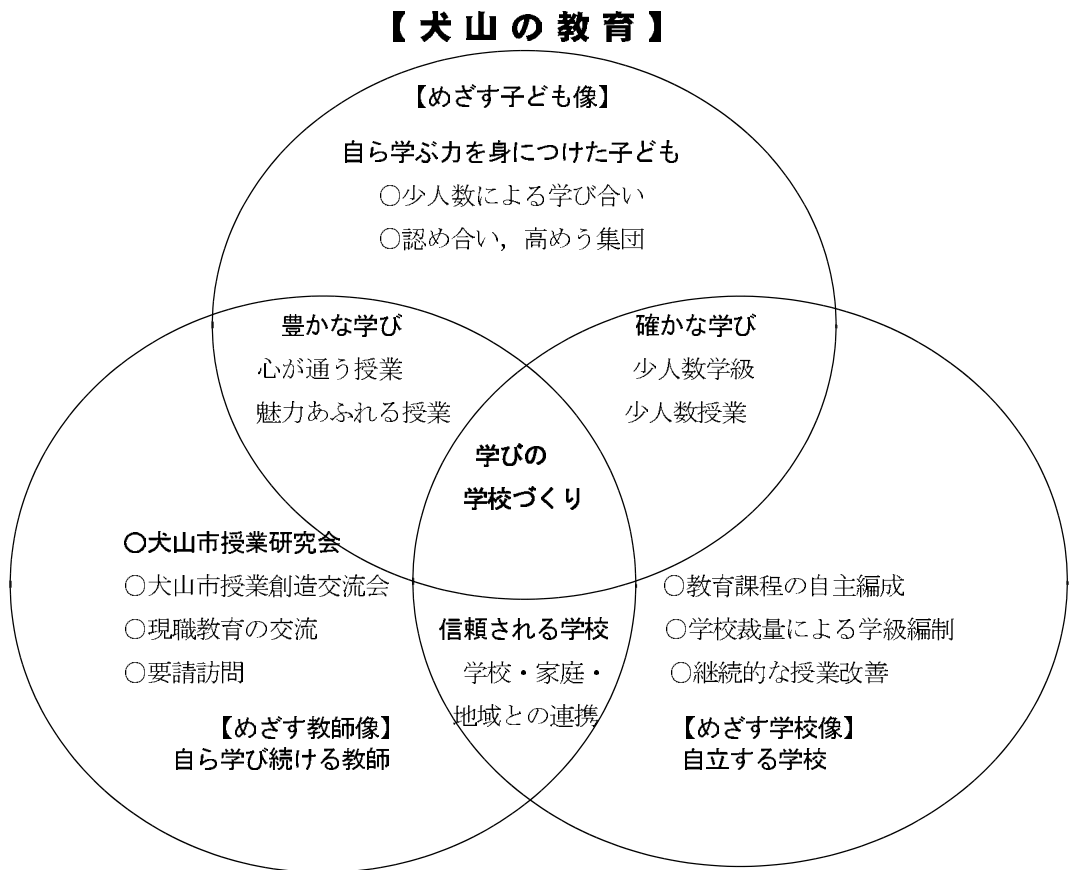
I 分科会研究報告

平成24年度 犬山市授業研究会がめざす研修 －犬山の子は犬山で育てる－

1 犬山市授業研究会のねらい

犬山の教育は、人格の完成をめざし、すべての子どもの学びを保障することを主眼としています。学校の役割は、すべての子どもの「学び」を保障することであり、教師は、子ども同士、子どもと教師の温かなふれあいの中で「学び」が深まるように図り、子どもたちに確かな学力と豊かな人間性を育むように努めなければなりません。そのためには、教師は常に研修を心がけ、自ら学び続ける姿勢を持ち続けることが重要です。学び合う教師集団で、お互いの成果を共有しあいながら同僚性を育むことで犬山の教育は発展をし続けます。

犬山市校長会では、犬山市教育研究会の中に研修部を設け、教師の授業改善の研修装置として授業研究会を開催しています。授業研究会は、熱意ある各学校の教師が集い、研究的実践を持ち寄り、交流しながら共に育つことを目標にしています。さらに授業研究会で得られた成果を各学校の現職教育に還元し、新たな視点や手法を紹介することで学校全体を活性化させるねらいも合わせもっています。



2 授業研究会の進め方

小グループによる研究的実践を1年間継続して行います。年間を通し、毎月1回の割合で研究会を開催します（年間9回を予定）。小・中学校の垣根をはらい、それぞれの発達段階に応じた授業改善の在り方を議論を通して追究していきます。研究会の進め方は、各会員がグループごとに設定した研究テーマに沿った実践を持ち寄り、グループ協議で交流を図ります。その後、グループによる研究の進捗状況を全体会の場で報告し、杉江修治先生（中京大学教授）の助言を受けます。各会員はそれを各自の学校へ持ち帰り、次の実践に生かす研究的な構えで研究を深めています。各グループの研究の成果は、協同教育実践資料として年度末にまとめ上梓します。さらに、年2回公開授業研究会（8月・12月）を開催し、授業研究会の会員以外にも市内・市外を問わず広く参加を呼びかけ、ビデオ公開授業をもとに子どもの豊かな学びを創る授業づくりについてヒントを掴むことのできる場を提供します。

3 24年度授業研究会開催予定

| 期 日 | 開催時刻 | 備 考 |
|-----------|-------------|-----------------|
| 5月23日（水） | 16:00～18:15 | グループ編成・研究教科設定 |
| 6月20日（水） | 16:00～18:15 | 仮説と研究の方法を決める |
| 7月31日（火） | 14:00～17:00 | グループによる追究 |
| 8月 1日（水） | 13:00～17:20 | 公開授業研究会 |
| 9月 5日（水） | 16:00～18:15 | グループによる追究 |
| 10月 3日（水） | 16:00～18:15 | グループによる追究 |
| 11月 7日（水） | 16:00～18:15 | グループによる追究 |
| 12月 5日（水） | 16:00～18:15 | グループによる追究 |
| 12月25日（水） | 13:00～17:20 | 公開授業研究会 |
| 1月23日（水） | 16:00～18:15 | グループの研究の内容をまとめる |
| 2月19日（水） | 16:00～18:15 | 24年度成果発表会 |

自分の考えや意見に自信をもって、活発に意見交流し、 論理的に文章化することができる子どもの育成

野村 実香 (犬山市立東小学校)
宇佐見聡志 (犬山市立栗栖小学校)
太田 育宏 (犬山市立犬山北小学校)
松本 哲廣 (犬山市立城東小学校)
木村 英晃 (犬山市立犬山中学校)
野田 亜希 (犬山市立南部中学校)
吉永 理恵 (犬山市立東部中学校)
三浦 光俊 (犬山市立犬山中学校)

はじめに

最初に「国語の力」とは何かについて話し合った。

今までどんな授業をめざしてきたのかという話題になった。その中で、活発に意見交流のある授業ができるようになりたいという意見がでてきた。たしかに子どもがよく活動して意見がたくさん出る活発な授業ができると教師は満足する傾向がある。しかし、それだけで本当に国語の力がついているのだろうか。活発に意見交流をしているように見えても意見を出しているのは一部の子どもで全員参加にはなっていないのではないか。いや、活発な意見交流を聞くことで発言しない子どもも考えているのではないか。意見を出している子どももその時の思いつきを発言しているだけではないのかななどの意見が出てきた。そうした話し合いのなかで、やはり「書く」活動を伴わなくては力はつかないだろうし、力がついたかどうか確認できないのではないかということになった。そして、意見交流した内容を再度文章化することで、意見をメタ化でき、論理的な文章を書くことができるであろう。そして、そういう活動ができれば「国語の力」がついたといえるのではないかということになった。

そこで、本年度は「自分の考えや意見に自信をもって、活発に意見交流し、論理的に文章化することができる子どもの育成」というテーマで研究を進めることにした。

1 研究の仮説

次のように仮説を設定した。

仮説

- 1 自分の言葉で考えをもつようになれば、それに自信がもてるであろう。
- 2 交流の仕方を工夫すれば、活発に意見交流できるであろう。

3 振り返りで自分の考えを再度書かせるようにすれば、論理的な思考力が高まるであろう。

わたしたちは、この仮説のもと、自分の考えや意見に自信をもって、活発に意見交流し、論理的に文章化するという授業に取り組むことにした。いろいろな手だてを試し、その有効性を確認していくことにした。

2 自分の考えや意見に自信をもって、活発に意見交流し、論理的に文章化する手だて

実践の中に多くの手だてが示されている。それを仮説に示した3項目と授業の流れに分けて以下に示す。後ろの数字は実践の番号である。

(1) 自分の言葉で考えをもつようにするための手だて

- ① 教科書の本文に罫線をつけた「マイノート」の作成 (1)
- ② 本文に書き込める「ワークシート」の活用 (2)
- ③ 豊かな音読 (3) (4)
- ④ 本文を引用した作文指導 (3)
- ⑤ 要点をつかみ、それに対する意見文の作成 (7)

(2) 活発に意見交流するための交流の仕方の工夫

- ① 相手に伝わる話し方・聞き方・声の大きさの意識化 (1)
- ② ハンドサインを取り入れた相互指名 (1)
- ③ コの字型の机の配置による話し合い (1)
- ④ 「ペア・グループ \leftrightarrow 全体」を取り入れた話し合い (1) (2) (7)
- ⑤ 話し方、聞き方の話形指導 (2)
- ⑥ 近くの人との意見交流 (3)
- ⑦ 人の名前を入れた発言 (3)
- ⑧ 本文を引用した発言 (3)
- ⑨ バズセッションの活用 (5)
- ⑩ 教科委員による司会進行 (6)
- ⑪ ピアタイムの設定 (6)

(3) 論理的な思考力の高まる振り返りを書かせるための手だて

- ① 評論文の指導 (2)
- ② 三段論法の文型指導 (3)
- ③ 本文を引用した振り返り作文の指導 (3)
- ④ 日常的な論理的文章の作文指導 (3)
- ⑤ ていねいなノート指導 (4)
- ⑥ 振り返りの視点の明確化 (4)
- ⑦ 「たしかに構文」の作文指導 (4) (5)
- ⑧ 課題に対する自分の答えを書く作文指導 (6)

⑨ 他人の意見を踏まえた自分の意見の再構築（7）

（4）授業の流れ

① 授業のパターン化

- 考えを書く（個）→交流する（全体）→振り返り（個）（1）
- 音読→個人思考→グループ交流→全体交流→振り返り（4）
- 適切な自己評価（6）

ここにあげた手だてはどれも大変有効なものばかりであった。詳しくは以下の実践を参考にしていきたい。

3 研究の実際

研究の実際を記述するとき次々の3点を意識して取り組んだ。

- ① 手だてを具体的に示し、その活用がわかるような授業記録を載せる。
 - ② 単元を見通すことが可能なように、単元計画に毎時間ごとの実際に子どもに示す課題を示した。
 - ③ 授業記録は、特に形式は定めずに自分の書きやすい方法で記述することにしたが、発問・指示・課題を具体的に示すことだけは統一した。
- これにより、具体的な授業の姿が教師にも子どもにも見えてきたのではないかと考える。

（1）実践1 自分の考えをもち、意見交流を通して自分の考えを再構築する授業 「ちいちゃんのかげおくり」 光村図書 小学校3年

1) 単元名 物語の感想をまとめよう

2) 単元の目標

- 場面の移り変わりに注意しながら読み、人物の行動、情景、会話などの表現に着目して読むことができる。
- 細かい点に注意しながら読み、場面をまとめたり、文を引用したりして感想を書くことができる。

3) 自分の考えや意見に自信をもって、活発に意見交流し、論理的に文章化するための手だて



図1 声の大きさ表

①話し方・聞き方

教室には話し方名人・聞き方名人、声の大きさ表を掲示している。授業はもちろん、どんな場面でも、話す活動を行う時には常に良い聞き方を意識するように声かけをしてきた。聞くときにはおしゃべりをしないで聞くという基本ルールも意識させた。また、聞いてもらうためには良い話し方でなければならない。

話す対象（ペア・グループ・全体）によって声の大きさも考える必要がある。相手に伝わる話し方・聞き方、声の大きさを意識させるために、常に教室の前面に声の大きさ表（図1）、話し方名人（図2）・聞き方名人（図3）の掲示がしてある。

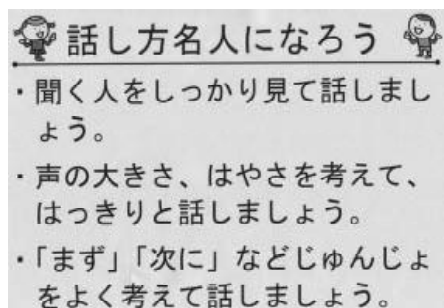


図2 話し方名人

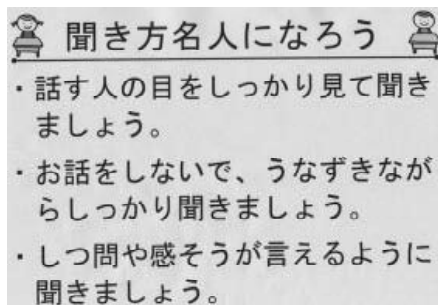


図3 聞き方名人

②相互指名

話し合い活動を行う際には、ハンドサインを取り入れて相互指名を行っている。ハンドサインは全学年全クラスに掲示してあるものである。しかし、このハンドサインはいい加減になりがちであり、何でもかんでも「いいです」と言って賛成のハンドサインをあげる児童が多くいた。算数の決まった答えに対してはそれでいいのだが、国語や自分の考えを発言する場面では、一人一人が全く同じということはありません。そこで、まずは友達の意見をよく聞くことが大事だと考えた。話をよく聞いたうえで、それに対して賛成なのか、反対なのか、質問があるのか、よく分からないのか、付けたしがあるのか、など、自分と比べて反応を示すように何度も声かけをした。また、意見が右往左往しないように、意見が似ている児童同士からつなげて発言できるようにした。

③話し合いの隊形

全員での話し合いを行うときには、机の配置をコの字型にして相手の顔が見えるようにした。話し方名人・聞き方名人にあるように、話すときには聞く人を見て話す、聞くときには話す人を見て話す、ということを見学には常に言っている。この隊形であれば、友達同士の顔が見やすいだろうと考えた。ただし、自分よりも後ろの友達が話すときには体ごと向けて話を聞くように声かけをした。

④交流方法

交流の際には、全体交流を基本としたが、全体交流でなかなか意見が出ない場合にはペアやグループを取り入れた。アンケートで、少人数だと発表しやすいと答えていた児童が多かったことから、少人数で相談する時間を設け、全体で意見が言いやすいように少人数での交流方法も取り入れた。

⑤マイノート

教科書の本文をコピーし、その余白に罫線をつけたものを「マイノート」として綴じた。本文には文章一文一文に文番号をつけた。本文の余白に自分の考えを書くと同時に、その考えの根拠となる部分に線を引く。それによって、想像で発言するのではなく、根拠を明確にして考えられるのではないかと考えた。発言する際にも文番号と根拠にした文をもと

に発言する。例えば、「2ページの③文に～と書いてあるから～と考えます。」というように発言する。このことによって、どの文に根拠をもって発言しているのかが聞く側にとってもすぐに分かる。また、友達の良い意見は⊗マークを書いてマイノートに書き込むようにした。自分では考えられなかった友達の良い意見をただ聞くだけではなく、書いて残すことで、その良い意見もまとめの考えに反映できるようにした。

⑥パターン化

第2次では、毎時の授業の流れを同じパターンで進めた。そのパターンは、考えを書く（個）→交流する（全体）→振り返りをする（個）という流れである。意見交流が活発に行えるように、まずは個人思考の時間を十分にとり、全員がマイノートに自分の考えを書けるようにした。また、交流がただの言い合いにならないように、最後の振り返りでは交流で深まったことをもとに自分の考えを書くようにした。

4) 単元計画

| 次 | 時 | 目標 | 学習活動 | 手だて・工夫 |
|---|---|--|---|--|
| 1 | 1 | ・学習の見通しをもつことができる。 | ・全文を通読し、初発の感想を書く。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">「ちいちゃんのかげおくり」を読んで感想を書こう。</div> | ・児童の感想は次時の学習以降の補助発問に生かすようにする。 |
| | 2 | | ・あらすじをつかみ、場面分けをする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">「ちいちゃんのかげおくり」を場面分けしよう。</div> | ・時・場所・出来事などの叙述をもとに場面分けをさせる。 |
| 2 | 3 | ・家族そろってかけおくりをする様子や登場人物の心情を、叙述に即して読み取ることができる。 | ・家族みんなでかけおくりをするちいちゃんの気持ちや両親の気持ちを読み取りまとめる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">一場面のちいちゃんと家族の気持ちを考えよう。</div> | ・ちいちゃんの気持ちや様子が表れているところにサイドラインを引かせて考えさせる。 ・机の配置をコの字型にし、話し方・聞き方を意識させて相互指名で伝え合いをさせる。 |
| | 4 | ・ひとりぼっちになっていくちいちゃんの気持ちを、ちいちゃんの会話文や様子を表す言葉から想像し、考える | ・お母さんとお兄ちゃんとはぐれてひとりぼっちになっていくちいちゃんの気持ちを読み取りまとめる。 | ・ちいちゃんの気持ちや様子が表れているところにサイドラインを引かせて考えさせる。 ・机の配置をコの字型に |

| | | | | |
|---|----|---|--|---|
| | | ことができる。 | 二場面のちいちゃんの気持ちを考えよう。 | し、話し方・聞き方を意識させて相互指名で伝え合いをさせる。 |
| 5 | | ・お母ちゃんやお兄ちゃんの帰りを待つちいちゃんの気持ちを、ちいちゃんの様子や会話から読み取ることができる。 | ・ひとりぼっちで家族を待つちいちゃんの気持ちを読み取りまとめる。 三場面のちいちゃんの気持ちを考えよう。 | ・ちいちゃんの気持ちや様子が表れているところにサイドラインを引かせて考えさせる。 ・机の配置をコの字型にし、話し方・聞き方を意識させて相互指名で伝え合いをさせる。 |
| | 6 | ・一人でかげおくりをするちいちゃんの気持ちを、叙述に即して読み取ることができる。 | ・たった一人でかげおくりをするちいちゃんの気持ちを読み取りまとめる。 四場面のちいちゃんの気持ちを考えよう。 | ・ちいちゃんの気持ちや様子が表れているところにサイドラインを引かせて考えさせる。 ・机の配置をコの字型にし、話し方・聞き方を意識させて相互指名で伝え合いをさせる。 |
| | 7 | ・ちいちゃんの登場しない場面でのちいちゃんの気持ちを想像し、主題を考えることができる。 | ・ちいちゃんの登場しない戦後の様子から、ちいちゃんが今の様子を見た時の気持ちを想像してまとめる。 五場面のちいちゃんの気持ちを考えよう。 | ・ちいちゃんの気持ちや様子が想像できるところにサイドラインを引かせて考えさせる。 ・机の配置をコの字型にし、話し方・聞き方を意識させて相互指名で伝え合いをさせる。 |
| 3 | 8 | ・前時までの各場面の様子を思い出しながらちいちゃんや戦争に対する感想を書くことができる。 | ・前時までの感想をもとに「はじめ」「中」「おわり」の形式で感想をまとめる。 感想文の書き方を知り、自分の考えが分かるようにくふうして感想を書こう。 | ・書き出し・むすびの工夫例をカードに書いて黒板に掲示し、参考にできるようにする。 ・感想を書くときに使ってみたい言葉を掲示する。 ・グループで読み合い、アドバイスをし合うようにする。 |
| | 10 | ・友達と感想を交流し、友達との考えの違い | ・感想文交流会を行い、友達との考えの違いにつ | ・自由にペア交流させる。 ・友だちの感想のよいとこ |

| | | | |
|--|---------------------|--|-----------------------|
| | いや書き方の違いに気づくことができる。 | いて意見を交流する。 感想を伝え合い、友だちとの考えと自分の考えをくらべよう。 | ろに気づいてメッセージを書くようにさせる。 |
|--|---------------------|--|-----------------------|

5) 授業記録 「ちいちゃんのかげおくり」 第3時

目標：家族そろってかげおくりをする様子や登場人物の心情を、叙述に即して読み取ることができる。

説明1：前の時間は場面分けをしましたね。今日は一場面の学習をします。今日のめあては、「一場面のちいちゃんと家族の気持ちを考えよう」です。

指示1：では、登場人物の気持ちを考えながら一場面を立てて音読しなさい。一度読み終わったら座って、「止め」の指示があるまで繰り返し一場面を音読しなさい。

読み取りをする前には必ず音読をするようにしている。音読の方法は、このパターンが多い。「一度読めたら座って待つ」という指示にすると、すらすらと読めてしまう児童は退屈してしまうし、読む速度が遅い児童にとっては、最後だったらどうしようという不安がある。そのため、読む速度が遅い児童は最後になりたくないから速く読み、全く内容が頭に入らないということになりかねない。内容を考えながら自分のペースで読めるようにこの音読方法を取り入れている。

指示2：それぞれの登場人物の会話に線を引きなさい。ちいちゃんは黒、お父さんは青、お母さんは赤、お兄ちゃんは黄で線を引きなさい。

一場面は家族みんなでかげおくりをする場面であり、二人同時や全員同時に話しているという所もある。まずは誰が何を言っているかを理解できなければ気持ちも考えられないと思い、色別に線を引くようにさせた。

線を引いたところを確認すると、正しく線を引くことができない児童が何人かいた。全体での話し合いで、理由もつけて答えさせると、『「…重なりました』と書いてあるから』というように叙述にもとづいて答えられていたので、間違っている児童も納得できていた。

発問1：線を引いた会話から登場人物のどんな気持ちがわかりますか。

指示3：それぞれの会話からわかる気持ちを考えてマイノートに書きなさい。

〈児童の意見〉

ちいちゃん、お兄ちゃん

「ななあつ、やあつ、ここのうつ。」「とお。」

→嬉しい、おもしろい、楽しい（一緒に数えだしたから）

「すごい。」→嬉しい、おもしろい、楽しい

お父さん

「かげおくりのよくできそうな空だなあ。」

「父さんや母さんが子どものときに、よく遊んだものさ。」

→懐かしい

お母さん

「体の弱いお父さんまで、いくさに行かなければならないなんて。」

→悲しい、心配

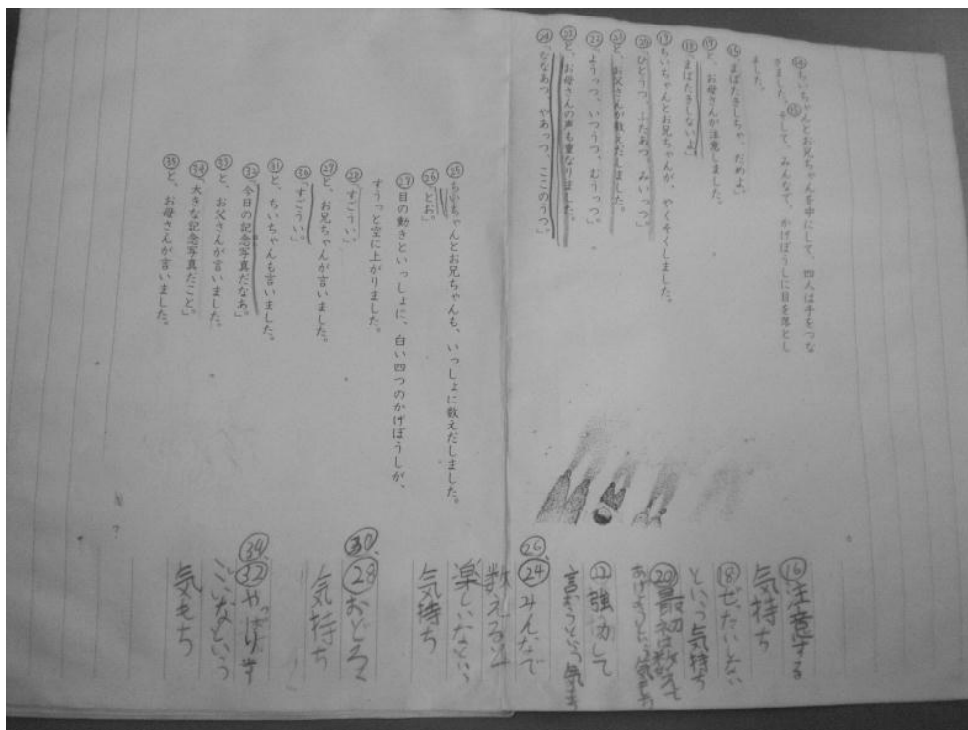


図4 マイノート

ちいちゃんとお兄ちゃんの気持ちは、嬉しい・おもしろい・楽しいというような同じ気持ちという意見が出てほとんどの児童が理解していた。しかし、かげおくりの時の両親の気持ちはなかなか出なかった。そこで、ちいちゃん・お兄ちゃんの気持ちと両親の気持ちを対比させるために次の補助発問を投げかけた。

発問2：なぜお父さんは「今日の記念写真だなあ。」と言ったのでしょうか。

〈児童の意見〉

- ・ もう最後になるかもしれないと思っているから。→悲しい気持ち

発問3：第一場面で失われたものは何でしょうか。

〈児童の意見〉

- ・ お父さん
- ・ 楽しい空

発問4：第一場面はどんな場面ですか。「～するちいちゃん」となるように20文字ぐらいで考えて題名をつけなさい。

要約に初めて挑戦した。初めてだったので、要約の形を「～するちいちゃん」というように限定し、文字も20文字ぐらいと限定した。

〈児童の意見〉

家族といっしょにかげおくりをやっているちいちゃん

家族みんなでかげおくりをするちいちゃん

楽しく、はじめてのかげおくりをするちいちゃん

家族とはじめてかげおくりをするちいちゃん

家族とかげおくりで遊ぶちいちゃん

初めての要約にしては、多くの児童が「家族」「かげおくり」というキーワードを入れて要約できていた。

指示4：第一場面を学習して思ったことや考えたこと、分かったことなどを書きなさい。

〈児童の意見〉「学習後の振り返り」

- わたしは、初めは、お父さん、お母さん、お兄ちゃん、ちいちゃんのかげおくりをしている時の気持ちは同じだと思っていたけれど、友達意見を聞いて、お父さんとお母さんの気持ちが悲しいと分かりました。
- 「体の弱いお父さんまで、いくさに行かなければならないなんて。」という部分で、お父さんが死んじゃうといけないから、お母さんは心配でさみしい気持ちだから、わたしも悲しかったです。
- わたしは、一場面を話し合う前はお父さんとお母さんも楽しい気持ちだと思っていました。けれど、話し合ってから、お父さんは、いくさでもう家に帰れないかもしれないから少し悲しい気持ちじゃないかな、と思いました。
- ちいちゃんやお兄ちゃんのかげおくりをして楽しかったけれど、お父さんはちいちゃん・お兄ちゃんとはちがって戦争に行かないといけないから、これが家族の記念写真だと思っていて悲しいと分かりました。お母さんもお父さんが戦争に行ってしまうからお父さんと同じように悲しい気持ちだと思いました。
- お父さんはいくさに行かないといけないからつらい気持ちだと思いました。お母さんも、お父さんがいくさに行かないといけないからつらい気持ちだと思いました。ちいちゃんやお兄ちゃんのはじめてのかげおくりをやって成功したから、楽しくて嬉しい気持ちだと思いました。お父さんとお母さんはつらい気持ちで、お兄ちゃんとちいちゃんは楽しい気持ちだと気づきました。
- お父さんまでいくさに行かなきゃだめだから、悲しい気持ちになったと思います。ちいちゃんとお兄ちゃんはまだそのことを知らないと思います。ちいちゃんは、まだ小さいからかわいそうだと思います。お父さんも家族と別れるのは悲しいと思います。

6) 考察

本学級は23人という少人数学級であり、おとなしい児童が多い。4月当初は、全体交流で発言する児童が少なく、また、その意見につながりがなかった。以前は教師に発言していた多くの児童であったが、「どんな聞き方を心がけていますか」「どんな話し方を心がけていますか」というアンケートで約半数が「相手を見て」と答えていた。聞く時には話す相手をしっかり見て聞き、話すときにも教師ではなく友達の方を見て話す児童が増えた。また、聞く時には「質問が言えるように」とか「自分の考えとくらべて」というように、

次に発言するためのつながりを意識して意見を聞こうとする態度が出てきた児童もいる。しかし、活発な意見交流ができていないとはまだまだ言えない。マイノートを用いてまずは自分の意見をもつことで、発言が増えたが、自分の考えをもっている、はずかしい、自信がないなどの理由で意見が言えない児童がまだまだ多い。どのように自信をもたせるかが今後も課題である。

書くことについては、最後の振り返りに文章で書かせたことにより、交流で分かったことや思ったことなどを自分の考えにふまえて書くことができる児童が増えた。「友達の意見を聞いて・・・」という記述が見られた児童も何人かいたことから、交流したことを再構築することができたように思う。また、マイノートを用いて叙述をもとに交流をしたことから、叙述をもとに考えを書いたり理由を書いたりすることができていた。今後も振り返りで自分の考えを文章化することは継続していきたい。

(2) 実践2 話し合い活動を通して物語に浸り、自分の考えを深める授業 「大造じいさんとガン」光村図書・小学校5年

1) 単元名 作品を自分なりにとらえ、朗読しよう

2) 単元の目標

- 大造じいさんと残雪の気持ちが書かれた叙述を元に、残雪や大造じいさんの人物像、大造じいさんの残雪に対する気持ちの変化を読みとることができる。(読むこと)
- 登場人物に共感しながら友達との話し合いを通して作品を読み味わおうとする。(話すこと・聞くこと)
- 自分の思いや考えが伝わるように音読や朗読をするとともに、優れた叙述について自分の考えをまとめることができる。(書くこと)

3) 自分の考えや意見に自信をもって、活発に意見交流し、論理的に文章化するための手だて

①ワークシートを活用し、自分の考えに自信をもつ

本文に書き込めるワークシートを使って、ポイントとなる言葉にサイドラインを引き、重要語句を押さえた上で大造じいさんの気持ちを書き込むことで自分の考えを明確にできると考える(図5)。文章を読み進めながら、イメージをふくらませる学習をすることで、正確に読み取り、考えをまとめる力を伸ばすことになると考える。

課題に向かって個人で考える時間を十分に確保し、登場人物の心情を読み取り、作品とじっくり向き合えるようにする。

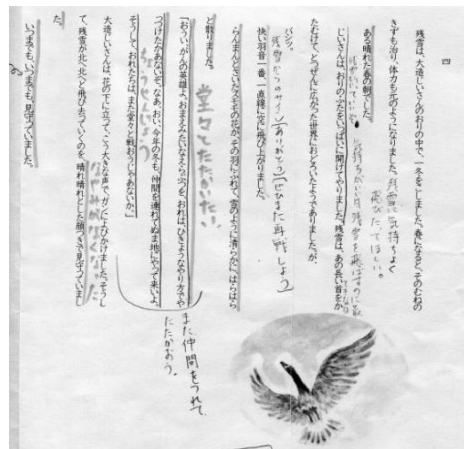


図5 本文に書き込めるワークシート

②自分の考えを伝える方法を工夫して、友達の意見を聞き合う

個人の考えを相手に分かりやすく伝えることで、自分の思考を深めることができる。まずは、ペア交流を通して共感したり、異なった考え方にふれたりする。さらに、それを全体で交流することにより考えを深める。昨年度から継続して実施している話型の習得にも意識して取り組む。こちらから、声かけをしないと話型を使って発言しないことが多いので、話型を意識することで、お互いの意見を聞く意識を高める。

☆聴き方に挑戦! ③
(話すために、聴かなくては!)

ステップ③・話の要点は何か、中心点は何かを正しく聴く。

「自分書くとOOは同じだけ、OOは違うな」
「OOは、ううううかな。自分はう思う。」
「さかばを言いたらい、OOは、ううううかな。」

☆話し方に挑戦! ③
(相手の考えをじっくり聞いて話す)

ステップ③・理由を付けて話すことができる。
・相手と自分を比べて話すことができる。
・相手の内容に関係つけて話すことができる。

「OOと同じだが、理由がなう(OO、話)は。」
「前はOOと同じだったが、今OOとOOの話がOOとOOと同じだ。」
「OOはOOと同じだが、OOはOOとOOと同じだ。」
「もし、OOならば、△△と違います。」

図6 教室掲示した話型(話し方・聞き方)

③話し方・聞き方の習得

現職教育で研究、実践している話型を活用することで、話し合いや文章を書く活動がスムーズに行うことができると考えた。昨年度から取り組んでいる話型指導では、学年に応じた到達目標を設けているが、まだ十分に達しているとは言いがたい(図6)。今、自分がどの段階までできているのか、一時間の授業内でどのレベルまで高めることができたかを振り返りカードに記入していくことで話型への意識を高めたい(図7)。

| 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 時 |
|------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|--------------|------------------------------|------|
| 物語を通して筆者が伝えたいことを | 四の連動読み、話し手に知らせたい自分の気持ちを書く。 | 三の連動読み、話し手に知らせたい自分の気持ちを学ぶ。 | 二の連動読み、話し手に知らせたい自分の気持ちを学ぶ。 | 一の連動読み、話し手に知らせたい自分の気持ちを学ぶ。 | 事件が起る場面まで読む。 | 物語の読点を離し、読者の考えを述べ、 「 」 | 授業内容 |
| | 6 | 7 | 8 | 8 | 7 | 6 | 話し方 |
| | 5 | 4 | 5 | 6 | 3 | 0 | 聞き方 |

「大造じいさんとガン」振り返りカード

① 一番初めに何を学んだか。
② 何人かを見て話すこと
③ 友達と比べて発言すること

○ 文章や章目注目して、大造じいさんの残念に思える気持ちを表す語句を挙げて。
○ 読み取ったことをみんなに分かるように伝えよう。
○ 自分の思いも書き加わるように聞かせよう。

図7 1時間の授業で話し方・聞き方を記入する振り返りカード

④評論文の指導

今回の実践では、学習のまとめとして、評論文を書くことにした。全体の章立てを（初発の感想、物語の概要、中心人物について、話の主題、授業のまとめ）のように立てた。児童にとって、評論文を書くことが初めてなので、1時間の授業の最後を書くまとめを評論文に活かせるように、まとめ方の書き出しをこちらから提示することで文章のまとめ方に慣れていくようにした。

4) 単元計画

| 次 | 時数 | 学習内容 |
|--------|----|---|
| 導 入 | 1 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 全文を読み、初発の感想をもつ。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 分かることや気付いたこと、不思議に思うことなどを書く。 ○ 物語の設定を確認し、学習の見通しをもつ。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「時」「場」「人物」を押さえる。 ・ 中心人物（主役）を考える。 |
| | 2 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 物語の事件を起承転結にまとめる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 文末を登場人物の名前にして事件をまとめる。 ・ 事件を場面ごとに整理し、起承転結に分類する。 |
| 読 解 | 3 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 第一場面の読み取りをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 第一場面を音読する。 ・ 一人読みをする。 ・ ワークシートへ記入する。 ・ 全体交流する。 ・ 第一場面を短い文で要約する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-left: 150px;">大造じいさんは、「今年こそはどうしかったのか。</div> |
| | 4 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 第二場面の読み取りをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 第二場面を音読する。 ・ 一人読みをする。 ・ ワークシートへ記入する。 ・ 全体交流する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-left: 150px;">第一場面の「ううむ」と第二場面の「ううん」を言った大造じいさんの残雪に対する気持ちは同じであるか。</div> |
| | 5 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 第三場面の読み取りをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 第三場面を音読する。 ・ 一人読みをする。 ・ ワークシートへ記入する ・ 全体交流する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-left: 150px;">なぜ、銃をおろしたのか。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-left: 150px;">どうして、「ただの鳥に対してい気がしなかった」のか。</div> |
| | 6 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 第四場面の読み取りをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 第四の場面を音読する。 ・ 一人読みをする。 ・ ワークシートへ記入する。 ・ 全体交流する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-left: 150px;">大造じいさんにとってこの別れはつらかったか。つらくなかったのか。</div> |

| | | |
|--------|---|--|
| 発 展 | 7 | ○ 物語の主題を考える。 <ul style="list-style-type: none"> 各場面ごとに短い文で要約し、大造じいさんとガンの関係を確認める。 「大造じいさんの残雪への思いとは」 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">筆者が伝えたかったものは何か。</div> |
| | 8 | ○ 学習のまとめをする。 <ul style="list-style-type: none"> 評論文を書く。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">「大造じいさんとガン」について 評論文を書こう。</div> |
| | 9 | ○ 朗読発表会をする <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">大造じいさんの気持ちを考えながら、工夫して朗読しよう。</div> |

5) 授業記録 5/9時の展開

①目標

- 大造じいさんは、なぜ、ただの鳥に対しての気がしなかったのかを読み取ることができる。
- 大造じいさんと残雪の行動に目を向け、自分の考えと比べながら友達のを聞き、自分の考えを根拠をもって話すことができる。

②学習過程

| 段階 | 児 童 の 活 動 | 教 師 の 支 援 ※ 評価 |
|---|--|--|
| つ か む (7) | 1 学習の流れを知る。 前時までの学習を振り返る。 【全体】 | <ul style="list-style-type: none"> 第2場面での大造じいさんと残雪の関係や気持ちを確認する。 本時のめあてを示す。 本時の学習の流れを示し、児童が学習の見通しをもてるようにする。 |
| | 2 本時のめあてを知る。 【全体】 | |
| 残雪に対する大造じいさんの気持ちの変化を読み取り、自分の考えをまとめ、みんなに伝えよう | | |
| 取 り 組 | 3 第3場面(P112.L14~P117.L16)を音読する。 【個人】 | <ul style="list-style-type: none"> 残雪に対する大造じいさんの気持ちが表れているところを意識しながら、音読するように指示する。 情景描写の文には、必ず線を引くように指示する。 机間指導をしながら、残雪に対する大造じいさんの気持ちに線を引くことができているかを把握し、線を引いた |
| | 4 学習課題の根拠となる部分を読み取り、サイドラインを引く。 【個人】 <ul style="list-style-type: none"> 東の空が真っ赤に燃えて、朝が来ました。 大造じいさんのむねは、わくわく | |

- む してきました。
- (33) ・ 「さあ、今日こそ、あの残雪めにひとあわふかせてやるぞ。」
- ・ 大造じいさんは、かけつけました。
- ・ 大造じいさんが手をのぼしても、残雪は、もうじたばたさわぎませんでした。

5 サイドラインを引いたところをもとに、自分の考えをワークシートに記入する(図8)。 【個人】

なぜ、銃をおろしたのか。

- ・ おとりのがンを助けようとする姿に驚いたから。
- ・ 仲間を助けるために戦っている残雪をねらうようなひきょうな手を使いたくなかったから。
- ・ 仲間を助けようとする残雪に感動したから。

どうして、「ただの鳥に対しての気がしなかったのか。

- ・ 残雪が、最期のときを感じて、頭領としてのいげんをきずつけまいと努力していたから。
- ・ 残雪が、いかにも頭領らしい堂々とした態度をしてきたから。
- ・ 大造じいさんが手をのぼしても、じたばたさわがないで堂々としていたから。
- 6 意見交流をし『大造じいさんは、なぜ、「ただの鳥に対しての気がしなかった」のだろうか。』を話し合う。 【ペア→全体】

C1：頭領らしい堂々とした態度に強く心を打たれたからです。

C2：ぼくもC1さんの意見と似ていて、仲間を助ける勇敢な姿に感心して、頭領らしい態度に圧倒されたからです。

C3：C2さんの意見に付け足して、胸のあたりが血だらけになっているのに、大造じいさんに向かって堂々とした態度で、にらみつけてきた残

根拠が書けているか確認する。



図8 児童が書いたワークシート

- ・ 大造じいさんが銃を下ろしたのは残雪のどんな姿に心を打たれたかを考えるように助言する。
- ・ ハヤブサとの戦いが終わった後の残雪の様子に着目し、大造じいさんが強く心を打たれた理由を考えるよう助言する。
- ・ 変化したと思うポイントを明確にし、考えた理由や根拠を文章中から導くことができるように本文を何度も読み直すよう助言する。
- ・ 友達の考えの良いところ、共感できるところは色を変えてワークシートへ記入するように伝える。

| | | |
|------------------------------------|---|---|
| | <p>雪のいげんに圧倒されたからだと思います。</p> <p>お互い自分の意見は言えたが、それ以上話し合いなかなか深まらなかった ので、話題を変えてみた。</p> <p>T : じゃあ、せっかくのチャンスなのに、どうして殺さなかったのかな。 C 3 : 仲間を助ける勇敢な姿に感動したから。 C 2 : 最後のいげんある態度で立ち向かってきているのに、こちらも正々堂 堂戦わないと卑怯だと思う。 C 4 : 私もC 2の意見に賛成で、死にそうなのに大造じいさんに立ち向かっ てくる姿を見て、卑怯な手で殺したくないからだと思います。</p> | |
| | <p>7 みんなの意見を聞いて、残雪に対 する大造じいさんの気持ちの変化を 自分なりにワークシートにまとめ る。 【個人】</p> <div data-bbox="319 778 724 923" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【まとめ方】 大造じいさんは、残雪にひとあわ ふかせてやると思っていた。 しかし、～。</p> </div> | <p>※ はやぶさと戦う残雪の姿から、大造 じいさんの心情が変化の様子を読み 取ることができたか。 (発表・ワークシート)</p> <p>※ 自分の考えと比べながら友達 の考えを聞いたり、話したりする ことができたか。 (ワークシート・発表)</p> <ul style="list-style-type: none"> 話し合いの中で得た友達の考えも参 考しながら、自分の考えをまとめて書 くよう指示する。 大造じいさんの取った行動に共感さ せることで、正々堂々と戦うことの 大切さを伝える。 まとめるのにつまずく児童には、自 分が残雪に話しかけるように書くな どの助言をし、大造じいさんに共感 できるように支援する。 |
| <p>ま と め る (5)</p> | <p>8 本時のまとめをする。 【ペア】</p> <ul style="list-style-type: none"> 大造じいさんの気持ちを考えなが ら、ペアで朗読し合う。 | <ul style="list-style-type: none"> 残雪に対する大造じいさんの気持ち の変化が分かる朗読ができるように助 言する。 |

6) 評論文の実際

今回の実践5 / 9時間目のまとめである。時間が短く書ききることができなかった
ので、次の時間は追試を行い、前時と比べて書かせたものである。児童Bは、残雪を撃たなかつ
たのは、胸を紅に染めた瀕死の状態の残雪に対して、卑怯な手を使って殺したくないとい
う考えをもっていた児童である(図9)。児童Dは、前時では読み取りが浅く、頭領とし

での威厳をを保とうとした態度に注目していたが、そこに至るまでの背景までは網羅できていなかった児童が書いたものである（図10）。

三年目の今年、大造じいさんは残雪（ひび）をあわかせやると思っていた。
しかし、おとり作戦でヤサと残雪がゴッた。大造じいさんは、もう系をたか
いもう下ろした。その後残雪とハアサがまを言、地面に落ちた。大造じいさん
は残雪の事を鳥がうらむもた理由、頭をいじり、度を見たか。大造じいさん
んのは持ちがはなれた。残雪
天中問をへ中かけたなすけた雪。だが第一手が来てもたかあかこい
た。

図9 児童Bが書いたワークシート

三年目の今年、大造じいさんは残雪（ひび）をあわかせやると思っていた。
しかし、ハヤブサにおとり作戦をしようとした。残雪は必死に落ち
いさんが近く、頭領としてこのいげんをキチつけたくない思いで怒
かした。その事で、強ん心を打たれがみえで、まを中、おとり作戦がひまよつな
手てつかまえたんないと言つた。おとり作戦に変わった。
残雪をいまよつな手てつかまえたんない、
最初は雪を見下していたけれど
元仲間を命をかけたすけとれたから
残雪は死にかけているのに空をたつた。能く度
心をつたれた。

図10 児童Dが書いたワークシート

7) 考察

今回の単元では、ワークシートに本文をのせ、大切なところに線を引いたり、友達の意見を書き込んだりするものを用いて授業を行ってきた。個人で考える時間を十分に確保し、文章を読み進めながら、自分で読み取り考えをまとめる。そして、ペア交流や全体交流を通して考えを深め、最後に自分なりにまとめるというスタイルを作ることで、まとめることが苦手な児童も前向きに授業に臨むことができた。また、線を引いてくることを宿題にしたことで、事前に予習することができ、授業の中では自信をもつことができた児童もいた。

継続して行っている話し方・聞き方では、個人差がある。4人という少人数での話し合い活動には限界を感じていた。今回は、振り返りカードにこの単元を通して、個別に身に付けてほしいこと（アドバイス メモ）を付箋で貼り、自分以外には見せないように話し合いをさせた。ゲーム性をもたせたことにより、積極的に話し合い活動に参加することができた。

また、話し合い活動で身に付けなければならないことが明確になったことで、この実践を機にいろいろな授業でも話し方・聞き方に対する意識が変わってきた。

事前と事後のアンケートを比べると、「自分の考えに自信をもって発表できているか」「少人数（ペア）だと話しやすいですか」の項目にそうでもないと答えていた児童Cと児童Dがどちらかといえばに変化していた。また、「書くことが好きですか」の項目に対してそうでもないと答えていた児童Aと児童Bは、どちらかといえばに変化していた。さらに、「どんな話し方を心がけていますか」という項目に対しては、「大きな声で話す」と

3名が書いていたが、相手を意識して話したり、相手に伝わるように話したりするなど聞いている側への意識が強くなっていた。

課題としては、少人数で授業をしてきた児童たちの話し合い活動をマンネリ化させないために、教師も児童の中に入って一緒に考え、話し方・聞き方の手本になったり、児童の考えを深めさせる助言も必要であると感じた。また、よくできる児童に、他の児童が依存してしまわないようきめ細かい指導をしていく必要がある。意見が同じであっても自分と言いが違うならばメモを取らせたり、前の意見に対する自分の考えを必ず言わせるなど、小規模校ならではの一人一人が活きる授業を目指していきたいと考える。

(3) 実践3 話し合い後の自分の考えを論理的に書くことができる授業

「論語」光村図書・小学校5年

1) 単元名 声に出して読もう

2) 単元の目標

○漢文を音読し、漢文特有の言い回しやリズムを味わい、文章のおおまかな内容を知ることができる。

3) 自分の考えや意見に自信をもって、活発に意見交流し、論理的に文章化するための手だて

①内容を把握するために、書き下し文と訳の音読を重ねた。

②全体の意見交流のときに活発に意見交流することができるように、近くの人との意見交流を繰り返し行った。

③自分の考えを論理的に文章化するために、三段論法で書くように指示し、その文型を示した。

④人の意見につなげた発言をするために、発言のときには必ず人の名前を使うようにさせた。

⑤教科書の記述と自分の経験・考えをつなげるために、必ず教科書の記述の引用を使って発言したり作文するよう指示した。

⑥古典的作品と作文を書くことに慣れさせるために、日頃から古典の音読と論理的文章を書くことを重ねた。

4) 単元計画(1時間完了)

| 時 | 目標 | 学習活動 | 活発に意見交流し、論理的に文章化するための手だて・工夫 |
|---|--|---|--|
| 1 | 3つの論語の言葉のおおまかな内容をつかみ、それらを自分の考えと結びつけて批評的かつ論理的に表すことができ | 3つの論語の言葉の中で、どれが一番参考になるか話し合い、論理的に文章化することができる。 3つの『論語』の言 | <ul style="list-style-type: none"> ・全体の話し合いの前に近くの人との意見交流を重ねさせた。 ・文型を示してから、まとめの文章を書かせた。 ・発言のときには必ず人の名前を使うよう指示した。 |

| | | |
|----|-------------------------|----------------------------|
| る。 | 葉の中で、どれが一番参考になるか、説明しよう。 | ・引用を使って発言したり作文したりするよう指示した。 |
|----|-------------------------|----------------------------|

5) 授業記録 「論語」第1時

①本実践に関連する普段の実践

国語の授業開始5～15分を使って以下のことを毎時間行っている。

- ア 漢字ドリルの音読
- イ 漢字50問テスト
- ウ 詩の音読（最近は古典の音読と混合している。）
- エ ある文や詩、俳句などの解釈の全員発表（最近では現代短歌）
- オ ある文の表現読み（例えば、「彼はおはようと言った」を様々な読み方で読む）

国語の基礎基本の力の徹底を目的として行っている。同じ内容を最低でも1週間続けている。そうすると、どんどん時間が短くなっていく。時間が短くなれば、授業でやらなければならないことが長くできる。ちなみに、本実践のときはア～オまでをすべて行って、8分であった。

すべての学習活動に意義があるが、本実践で最も有益だと思ったものがウとエの活動である。

ウの活動で、1か月前から論語の音読を行うことができた。「読書百遍。意、自ずから通ず」という言葉があるが、子どもたちは訳の説明なしで、おおまかな訳をつかんでいた子どもがほとんどであった。したがって、本実践の前日に、訳の音読を5回しただけで、意味をつかんでしまった子どもが全員であった。

また、エの活動では、与えられた文や詩、俳句の解釈を行う。4月初めから行っているが、子どもたちは徐々に深い解釈ができるようになってきた。4月初めはイメージを述べるにすぎなかった子どもたちが、最近ではほとんどの子どもが、語句に忠実に解釈をしようとしている。待ち時間を利用して辞書で調べる子どもも増えた。この継続的な活動のためか、論語の中にある漢字を調べる子どもがいた。例えば「謂」「勿」「殆」などの漢字である。議論として取り上げられる時間は少なかったが、子どもたちの解釈の幅を広げることに貢献した。

②本実践の記録

教科書には3つの論語の言葉とその訳がある。

- ・ 己の欲せざる所は、人に施すこと勿かれ（以下Aとする。）
- ・ 過ちて改めざる、是を過ちと謂ふ（以下Bとする。）
- ・ 学びて思はざれば、則ち罔し。思ひて学ばざれば、則ち殆し（以下Cとする）

①で紹介した活動をした後、それぞれの論語の言葉に、上記の記号をつけるよう指示した。そして、めあての聞き取りおよびノートへの記述をさせた。3回反復した。

3つの『論語』の言葉の中で、どれが一番参考になるか、説明しよう。

まず、ノートに自分の意見とその理由を書かせた。制限時間は3分である。無駄な時間を極力減らすために基本的に作業の時間は短めである。文章で書ける子どもには文章で、文章で書けない子どもには、メモ程度でいいから書くように指示し、3分で全員に意見をもたせることができた。26人の子どもの意見の人数分布は以下の通りである。

A・・・12人　　B・・・10人　　C・・・4人

次に、近くの人と意見の交流をさせた。制限時間は1分である。意見の交流をしたくてうずうずしている様子であった。制限時間が短いので、無駄な会話をする子どもはいない。これをやると、子どもたちが次の全体交流の心構えができる。また、静かな雰囲気から温かい雰囲気へと変わる。アイスブレイクのような役割もある。

そして、全体交流である。制限時間は20分である。予想通り発言が途切れない。「人の名前を使って発言をしなさい。引用も使いなさい。」と注意をすれば、さらに活発に、つなげた発言もできた。こういった間接的な支援だけで発言できる子どもは26人中24人であった。以下、議論の一部を示す。

- | | |
|-----|---|
| C 1 | Cです。Aは参考になりません。小さい子から大人までの常識だからです。「欲せざる」というのはしてほしくないことだから、それをしないのは人として当たり前です。 |
| C 2 | C 1の意見に反対です。Aは人が初めにやらなければいけないことです。B、Cはその後にやるものです。Aができてなければ、B、Cはできません。やってほしくないことがわからない人が、勉強のことができるとは思えません。 |
| C 3 | C 1の意見に似ていますが、AとBをまとめたものがCだと思えます。だからCが一番参考になると思えます。なぜならば、「思ひて学ばざれば」というのはよく考えるということ。AもBもよく考えなければわからないことだと思うから、Cが一番参考になります。C 2とは逆の意見ということですよ。 |

このような議論が続いた。最後に、1度も発言できなかった2人に発言させ、まとめの文章を書くことを告げた。

順位をつけるように指示した。一番参考になるものに◎、二番目には○、三番目には×をつけるよう指示した。そして、次のように書くように指示した。なお、「たしかに～」以降の書き方は何度も書かせている。

| |
|---|
| ×はそこまで参考にならない。～ また、たしかに○は参考になる部分もある。～ しかし、◎が最も参考になる。 なぜならば～。 |
|---|

制限時間は9分である。必ず制限時間で書き切ることを、引用をなるべく多く使うこと、接続語もなるべく多く使うことを注意した。書くことが苦手な子に対しては、「あと30秒したら、『しかし』を書き始めなさい。」というようにタイムキーパーもした。その結果、制限時間内に26人中24名が書き切ることができた。

隣同士で読み合い、時間が余ったらノートを回してもよいということを指示した。制限時間は2分である。「感想を言い合いなさい」と指示しなくても、思い思いに感想を述べ合う子どもたちの姿があった。

その後、教師の考えと話し合いと作文でよかった点を話し、授業を終えた。

6) 考察

まとめの文章で書かせたものを2人分紹介する。

C 1

Cはそこまで参考にならない。

なぜならば、Cは、ちゃんと学んで考えて勉強しましょうということだ。これはだいたい守れていると思うからだ。

また、たしかにBは参考になることもある。

それは、私は勉強でのまがいを直していたからいいと思った。でも、さっきのRさんが発言した意見は、勉強だけでなく、生活にも関わると言っていた。すると、AとBが実際に結びついていく。だからBは参考になることもある。

しかし、Aが最も参考になる。

なぜならば、この論語には、人が生まれてから、おじいさんやおばあさんになるまで必要なことである。Cの勉強のことは、ほいく園児ぐらいにはあまりかんけいのないことだと私は思う。でも、Aだったら小さい子にも必要なことである。

だから私は、BやCよりも1ばんAを参考にすべきだと思う。

C 3

Aはそこまで参考にならない。

なぜならば子ども～大人まで使うじょうしき（基本）のことで小さいころからやっているからだ。

また、たしかにBは参考になることもある。Bは大人も子どもも気をつけたいことだ。仕事でミスをして、それを直す。友達とケンカしてひどいことを言ってしまうとその仲をもどすなど日じょうでとても大切なことだからだ。

しかし、Cが最も参考になる。

なぜならば今、小学生の私たちへのメッセージが書かれている。「広く学ぶ」これだけのことでいいこともある。悪いこともある。しかし学んだことをよく考えないと「明」ではなく「罔」になってしまうと。「罔」は目がくらむということだ。そうすると、正しいこともわからなくなりそうだ。一方の考え方でなくたくさんの方の考え方で学んだことがしっかりわかり、正しいこともわかりそうだ。

C 1の文章は R という子の発言によって、考えが固まった、もしくは変容したことがわかる文章である。少なからずこのような書き方をしている子どもは26人中15人であった。半分程度である。議論をよく聞いて、自分の意見はどうかと考えているのだと考えられる。

また、C3の文章は生活に直結し、自分の意見とつなげて書いていたことがわかる文章である。全員が少なからずこのようなことを書いていた。また、漢字に注目して些細な意味にもこだわっている。議論の最中にそれに触れる程度の発言をする子どもはいた。しかし、このように文章にしている子どもは、C3も含め3人であった。私はまだまだ少ないと考えている。

文章を紹介した2人の児童は、どちらかといえば国語が苦手と答える子どもたちである。そのような子たちが、不自然なところがあるにせよ、こうして短時間で論理的にまとめられるようにするために次のような指導を行った。

まず、徹底して文型を教え、何度も何度も書かせたことである。宿題でも毎日の日記は欠かさない。「書きなさい」といっても子どもたちは書けない。でも、「このように書きなさい」と言えば、不自然なところがあっても形にはなる。それを、添削指導して徐々に修正してきた。そして、繰り返すことで、書くことに対する抵抗感を少なくしていった。多少長いものでも、すすんで書くようになった。

毎日、添削指導はできない。そこで、第2の方法として、いい作文を紹介し、読ませたり写させたりした。私はこれが最も効果的な指導法ではなかったかと考えている。子どもたちは作文に限らず何事も上手くなりたがっている。「いいところはどンドン真似しなさい」と言えば安心して真似し、目に見えて上手くなっていった。

また、あらゆる機会を見つけて全体交流がある授業を心がけてきた。国語に限らず、社会や道徳、学級活動などでも、できる限り多く取り入れた。その結果、発言量は増え、発言の質は高くなり、そして全員発言ができるようになった。これについては、何よりも「慣れ」ということが大部分を占めるのではないかと思う。事実、そう答える子どもが多くいる。「全員言うのが当然」という雰囲気さえあるかと思うときがあるほどだ。

本実践を通して、普段の積み重ねと学級経営の大切さを改めて実感した。普段の積み重ねがなかったら、おそらくこの実践は不可能だっただろう。また、安心して意見が言えるクラスでなかったら、議論は白熱しないだろう。

クラス作りと継続の力。これが子どもたちを育てるうえで、必要不可欠のものである。

(4) 実践4 自分の考えを基に交流し、更に考えを深化することのできる授業を目指して

「やまなし」〈資料〉イーハトーヴの夢 光村図書 小学校6年

- 1) 単元名 作品の世界を深く味わおう
- 2) 単元の目標
 - 宮沢賢治の作品を進んで読み、作者の生き方や考え方を考えることができる。
 - 叙述に基づいて情景を想像し、それらに対する自分の考えをまとめることができる。
 - 作品の中で使われている豊かな表現（色彩語、擬音語、擬態語、比喩、対比）に関心を持ち、語感や言葉の使い方に関心をもつことができる。
- 3) 自分の考えや意見に自信をもって、活発に意見交流し、論理的に文章化するための

手だて

- ①学習の流れをパターン化すると共に、1時間の流れを視覚的に示すことにより児童が主体的に学習に取り組むことができるようにする。
- ②より効果的な学び合いが進められるように、必ず個の考えをもってから交流活動に臨むことができるよう学習過程を工夫する。基本的には、「音読→個人思考→グループ交流→全体交流→振り返り」という流れになる。
- ③物語の流れをイメージし、深い読み取りができるようにするために音読練習を毎時間必ず取り入れる。音読の方法も工夫する。
- ④日頃からノート指導を丁寧に行い書く力を高めるようにする。毎時間朱書きを入れ、励ますことで成就感を味わえるようにし、意欲化を図る。
- ⑤振り返りの視点を明確に示し、書き方の型を提示することで、学んだことを再構成し、有意義な言語活動につながるようにする。

4) 単元計画

| 次 | 時 | 目標 | 学習活動 | 手立てや工夫 |
|---|---|---------------------------------|--|---|
| 1 | 1 | ○五月について叙述に即して情景や出てくるものについて読み取る。 | ○音読練習、言語事項の学習をする 五月について情景や出てくるものについて読み取ろう | <ul style="list-style-type: none"> ・範読をして分からない語句などの確認を行う。 ・音読練習を様々な方法で行う。 |
| | 2 | | ○音読練習をし、初発の感想を書く。 「やまなし」で心に残った表現を出し合おう | <ul style="list-style-type: none"> ・個人思考の時間を十分取った後、交流する。 ・感想の書き方の型を示す。 |
| | 3 | | ○「イーハトーヴの夢」を読み、宮沢賢治の生き方や考え方を知る。 作者の生き方や理想を知り、考えをまとめよう | <ul style="list-style-type: none"> ・読み取った内容は今後の学習につなげていけるように画用紙にまとめ掲示しておく。 |

| | | | | |
|---|---|--|---|---|
| 2 | 4 | <ul style="list-style-type: none"> 登場人物や時、場所などについて読み取ることができる。 叙述を根拠にして、作品の主題をまとめることができる。 | <p>○五月について叙述に即して情景や出てくるものについて読み取る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">五月について情景や出てくるものについて読み取ろう</div> | <p>○「時」「場所」「登場人物」「大きな事件」「表現技法」という読み取りの観点を示し、活動にスムーズに取り掛かることができるようにする。</p> <p>○「音読→個人思考→グループ交流→全体交流→振り返り」という授業の流れをパターン化する。</p> |
| | 5 | | <p>○五月で作者が伝えたかったことについて検討する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">五月を通して作者が伝えたかったことを根拠をはっきりさせてまとめ考えを伝え合おう</div> | <p>○話し合いの仕方や全体交流の仕方について方法や観点を明確に指示する。</p> <p>○振り返りの書き方の型を明示し、学んだことを再構成し、論理的な思考を促すようにする。</p> <p>○机をコの字配置にする。</p> |
| | 6 | | <p>○十二月について叙述に即して情景や出てくるものについて読み取る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">十二月について情景や出てくるものについて読み取ろう</div> | |
| | 7 | | <p>○十二月で作者が伝えたかったことについて検討する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">十二月を通して作者が伝えたかったことを根拠をはっきりさせてまとめ、考えを伝え合おう</div> | |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 3 | 8 | <ul style="list-style-type: none"> 学習したことを振り返り「やまなし」の批評文を書くことができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 「やまなし」の批評文を書く。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 「やまなし」の主題についての批評文を書こう </div> | <ul style="list-style-type: none"> 批評文の書き方を明示して、活動にスムーズに取り掛かれるようにする。 上手な児童の作品を取り上げ紹介する。 |
| | 9 | <ul style="list-style-type: none"> 宮沢賢治の他の作品を読み、読書の幅を広げることができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 宮沢賢治の他の作品を読む。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 宮沢賢治の他の作品を読んで読書を楽しもう </div> | <ul style="list-style-type: none"> 作品の見どころやあらすじなどを簡単に紹介し、意欲がもてるようにする。 (銀河鉄道の夜、グスコブドリの伝記、なめとこ山の熊など) |

5) 授業記録「やまなし」第7時

①目標

- 本文の叙述や今まで話し合ってきたことを根拠にし、十二月を通して作者が伝えたかったことをまとめる。 (読む能力)
- 十二月を通して作者が伝えたかったことを、相手の考えとの共通点や相違点を意識しながら話し合う。 (話す・聞く能力)

②準備

教師・・・揭示用カード（本時の流れ、音読の約束）、短冊（11枚）

③学習過程

・・・本時の目標

学習形態：一個別 一ペア 一グループ 一全体交流 一斉

| 段階分 | 学 習 活 動 | 教 師 の 支 援 と 留 意 点 | 評 価 (評 価 方 法) |
|-------------|--|--------------------|-----------------|
| つ か む | 1 前時までの学習を振り返り、作者の生き方や考え方、十二月の情景描写などを確認する。 <input checked="" type="checkbox"/> | ○ ノートの授業記録を見るよう促す。 | |

| | | | |
|--|--|---|---|
| 5 | <p>と流れを確認する。 <input type="checkbox"/></p> | <p>的に示し、児童が見通しをもち、主体的に取り組めるように配慮する。</p> | |
| <p>十二月を通して作者が伝えたかったことを根拠をはっきりさせてまとめ、考えを伝え合おう</p> | | | |
| とりくむ 35 | <p>3 十二月をペアで二文以上音読する。 <input type="checkbox"/></p> <p>【音読するとき意識すること】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はきはきとよみなく。 ・間違えずに。 ・句読点に気を付けて。 ・語尾を下げて。 <p>4 十二月を通して作者が伝えたかったことを考え、ノートに書く。 <input type="checkbox"/></p> <p>【予想される意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生きていると楽しいことや嬉しいことがある。 ・植物は多くの恵みをもたらしてくれる。 ・やまなしのように他の生物に幸せを与える生き方は大切だ。 <p style="text-align: right;">など</p> <p>5 三人グループ</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 互いの良い点を意識しながら相手の音読を聞けるように評価の観点を視覚的に明示する。 ○ 自分の考えの根拠を書くよう伝える。 ○ 早く書けた児童には複数の意見を書くように伝え、前向きな取り組みを賞賛する。 ○ 考えが浮かばない児童には十二月を読んで感じるイメージや作者の生き方、理想などについて思い出すよう助言する。 ○ 文章化が難しい児童には、キーワードのみを列挙しておくよう伝え、後の話し合いに臨めるよう配慮する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 四つの点に気を付けて音読ができたか。 (音読の様子) ○ 叙述を基に根拠を示しながら、考えをまとめることができたか。 (ノートの記述) ○ 交流を通してやまな |

| | | | |
|---------------------|---|--|---|
| | <p>で考えを交流してまとめる。㊦</p> <p>【伝え合う力】</p> <p>6 相互指名で意見を出し合い、全体で交流する。㊧</p> <p>【発表の話型】</p> <p>「私は○番の意見がいいと思います。理由は…。」</p> | <p>聞いたりすることの大切さを伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 早く終わったグループは、複数の意見を考えるよう指示し、前向きな取り組みを賞賛する。 ○ 短冊に出された意見を内容別に分けて掲示し、話し合いがしやすくなるようにする。 ○ 短冊に書かれた意見にはナンバリングをすると共に、発表の話型を示し、円滑な話し合いになるように配慮する。 ○ 作品の本質に迫る意見が支持されていない場合は、五月と対比した十二月のイメージや作者の生き方や理想などについて再考するよう助言する。 ○ 話し合いの経過を基にし、それぞれの考えの支持されていた点を合わせながら、学級としての考えをまとめる。 | <p>しが表していることや、作者の生き方について考えを深めることができたか。(短冊、発言)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 交流を通してやまなしが表していることや、作者の生き方について考えを深めることができたか。(短冊、発言) |
| <p>まとめ</p> <p>5</p> | <p>7 学習を振り返り、本時の学習で学んだことをまとめる。㊨</p> <p>【振り返りの型】</p> <p>「今日の授業は…について考えました。確かに A という考えの…というところもいいと思いました。でも私は B という考えがよりいいと思います。理由は</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 振り返りの文章の型を指定し、児童の思考を文章化しやすいようにする。 ○ 本時の児童の良かった点について賞賛し、次時の予告をする。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 本時の授業で学んだことを基にして、型を利用した論理的な振り返りが書けているか。(ノートの記述) |

| | | |
|--|-----|--|
| | …。」 | |
|--|-----|--|

以下に指導案の学習活動6の場面の授業記録を示す。

T1：考えを発表しましょう。

C1：十二月で賢治が表したかったことは「自然は美しく、素晴らしいものである」ということだと思います。理由は、108ページの水晶の粒や金雲母のかけらという表現から自然の美しさがよく表されているからです。

C2：私も付け足しで、108ページのラムネのびんの月光がいっぱいすすき通りというところからきれいな月明かりの様子が分かるからです。

～同様の意見が続く～

C3：私は「生きていれば辛いこともあるが、楽しいこともある」ということを表したかったのだと思います。理由は112ページの「待て待て。もう2日ばかり待つとね…」というところから五月とは違ってかにの子どもたちにとって楽しみなことがやってきて2日後が楽しみだということが分かるからです。

C4：私も付け足しです。五月では恐怖や悲しみのイメージだったけど、十二月ではやまなしがお酒になるのを楽しみにしているかにの子どもたちの様子が分かるからです。

～同様の意見が続く～

C5：私は「自然は厳しさもあるが、幸せも運んでくれる」という考えです。理由は五月ではかわせみが飛び込んできて、かにの子どもたちは死の恐怖を感じたけど、十二月ではやまなしが飛び込んできて、うきうきして生きてる喜びを感じていると思うからです。

T2：やまなしはどんなふう落ちてきた？教科書に戻りましょう。

C6：トブンと落ちてきたと思います。

T3：トブンはドブンとかと比べるとどんなイメージかな？

C7：優しい感じのイメージだと思います。

T4：五月はかわせみの口がとがっていて怖いイメージだったから対比されているね。

④評価

- ・ 本文の叙述や今まで話し合ってきたことを根拠にし、十二月を通して作者が伝えたかったことについてまとめることができたか。
- ・ 自分の考えを立場や根拠をはっきりさせながら、相手に伝えることができたか。

⑤反省

導入部分では、前時のノートを振り返ることにより、全員が同じ視点をもって十二月の学習事項を思い出すことができた。「やまなしが落ちてくる」という大きな事件を五月のかわせみと比べて考えさせるような声かけを行うことができた。

展開部分で音読は、ほぼ全員の児童がよどみなくすらすらとできていた。これまでの練習の成果がよく表れていたと感じている。また、間違えたら交代するという「自由読み」という方法を取り入れて音読をしている。間違えないように心地よい緊張感をもって取り組める音読の方法である。個人思考の時間は

「作者が十二月で伝えたかったことは…です。理由は○ページ△行目から～ということがわかるからです。」という型に沿ってまとめましょう。叙述に沿って理由を考えることが大切です。

という指示を出し、理由を叙述に求めることを強調した。早く終わった児童は複数の意見を書くよう指示しておく。

グループ交流では3人というグループサイズでお客さん状態にならないようにした。また縦に長い短冊を用意し、意見を書き込めるようにした。

自分と相手の意見の共通点と相違点を意識しながら交流しましょう。グループでまとめる時は根拠となる叙述に戻って、より説得力のあるものを選びましょう。

という指示を出すことで、話し合いの仕方が明確になるように配慮した。どのグループも予定の時間内に話し合いを終えることができ、複数書くグループも現れた。

全体交流では

- ①自然は美しく、素晴らしいものである
- ②生きていけば辛いことだけでなく、楽しいこともやってくる
- ③自然は厳しいものもあるが、幸せも運んでくれる

という3つの意見を中心に話し合いが行われた。積極的に挙手をして、自分の意見を自信をもって発表する姿が見られた。教師の側から、教科書に戻って根拠となる部分を全体に広げたり、五月との対比について意見を深められるような発問をしたりした。

振り返りの時間には指導案にある「振り返りの型」を基に文章を論理的に書くよう指示した。この「確かに…。でも～」という書き方には以前から慣れているためスムーズに書くことができていた。児童のノートを見ると、上記の②や③の意見に賛同する者が多かったように感じた。以下に児童が振り返りの時間に書いたノートの記述を記す。

私は今日の授業でかのに子どもらはやまなしからお酒ができるのを楽しみにしていることから、確かに未来に希望をもって生きるという意見もいいなあと思いました。でも私は自然の美しさや素晴らしさがあるという意見がいいなあと思いました。理由はJさんが言ったように「金雲母のかけらも…」や「月が明るく…」などの表現から自然の美しさやきれいなところを賢治は伝えたかったからだと思いました。

僕は自然の美しさやきれいさという意見も「金剛石の粉が…」などの表現があるから確かにいいなあと思いました。でも僕は「未来に希望をもって生きる」という考えになりました。理由はやまなしを書く前に賢治は妹のトシを亡くして悲しいことがあったけど時が経って前向きに生きることができるようになったということが十二月の描写から伝わるからです。かにの子どもたちも明るく楽しく話していることが会話から分かるからです。

6) 考察

6月と実践を終えた12月に同じアンケートを行った。以下はその項目である。

- 1 自分の考えに自信をもって発表できていますか
- 2 少人数（グループなど）だと発表しやすいですか
- 3 どんな聞き方を心がけていますか
- 4 どんな話し方を心がけていますか
- 5 文章を読むことは好きですか
- 6 書くことは好きですか
- 7 国語の授業で思っていることを自由に書きましょう

※ 1、2、5、6については4件法で、3、4、7については自由記述。

まず項目1と2についてである。6月の時は

| | | | |
|-----|-------|-----|-------|
| 項目1 | 4…10人 | 項目2 | 4…25人 |
| | 3…15人 | | 3…5人 |
| | 2…6人 | | 2…2人 |
| | 1…1人 | | 1…0人 |

という結果であった。これが12月は

| | | | |
|-----|-------|-----|-------|
| 項目1 | 4…23人 | 項目2 | 4…28人 |
| | 3…5人 | | 3…5人 |
| | 2…5人 | | 2…0人 |
| | 1…0人 | | 1…0人 |

※ 転入生があり合計人数が一人増えている

となった。この国語の授業だけで項目1の人数がよい方向へ増えたわけではないが、日々の実践の中で児童が自信をもって発表できるようになったといえるのではないだろうか。

次に項目5と6について考えてみる。6月は

| | | | |
|------|-------|------|-------|
| 項目 5 | 4…12人 | 項目 6 | 4…10人 |
| | 3…10人 | | 3…6人 |
| | 2…5人 | | 2…11人 |
| | 1…5人 | | 1…5人 |

という結果であり、書くことに抵抗を感じている児童が多いように感じた。12月は

| | | | |
|------|-------|------|-------|
| 項目 5 | 4…20人 | 項目 6 | 4…25人 |
| | 3…10人 | | 3…6人 |
| | 2…3人 | | 2…1人 |
| | 1…0人 | | 1…1人 |

※ 転入生があり合計人数が一人増えている

とどちらも大幅に数字が上昇している。特に書くことに対しては、児童の意識に大きな変容が見られる。国語だけでなくどの教科においても「書く活動」を重視し、書くことに対する抵抗をなくしていった結果であろう。また、「一生懸命書いたら先生がしっかり見てくれる。」とその理由を書いた児童もおり、児童の活動を認め、励まし続けることの大切さを実感した。ノートは学習の足跡として残るものである。成就感や達成感を味わえるような授業とその評価を繰り返していけば、児童は意欲的に文章を書いたり、読んだりできるのではないだろうか。

最後に自由記述の項目についてである。項目 3 や 4 で出てきた意見は

- 発表者の方を向いて聞く。
- 頷くなど、反応しながら聞く。
- 自分の考えと比べながら聞く。
- 話がいくつあるか指を折って聞く。
- 聞いている人を意識して話す。
- 話す速度に気をつける。
- 大切なことを最初に言って、要点を分かりやすくする。

などであった。これらの姿を教師が評価規準をしっかりもち、目の前に居る子どもの現状に応じてレベルアップさせていくことが大切であると感じている。できたら褒め、次の段階へ導いてやるのが教師の役割である。項目 7 については

- 新出漢字の学習方法は覚えやすい。
- 討論など意見をいう学習は楽しい。聞いているのも楽しい。
- 音読を毎時間やって上手になってくるとうれしい。
- 穴埋め問題が楽しい。
- 登場人物の気持ちを考えるのは難しいけど楽しい。
- ノートが見やすく書けると嬉しい。

- ・ 交流がたくさんある授業がやりたい。

などの意見が出た。教師と子どもの考え方に隔たりがある場合があるので、こうしたアンケートは有効だと感じた。今回の実践に限って言えば、音読やノートの記述、交流や討論形式の授業など、児童のニーズにあった授業を実践したことが、授業後の成就感や満足感につながっているのではないかと考える。

国語の授業では、これまで「〇〇の時の登場人物の気持ちを考えよう」などの曖昧な学習課題のもと、何のためにどのような力を付けさせたいかということをはっきりさせないままの授業実践が多いように感じる。自分自身も「国語科における教科的な力とは何か」ということに明確な答えを出せないままにこれまで実践を続けてきた。

しかし、今年度本研究会における話し合いの中で、国語科における大切な力とは「論理的に物事を考える力」だという考え方に辿りついた。論理的な思考のもとで話したり、聞いたり、書いたりすることで一人ひとりの国語の力が伸びていき、考えが深まることを期待して本実践に取り組んで、ある程度の手応えを得た。今後もこの研究をベースにして更にも上乗せできるような実践に取り組んでいきたい。

(5) 実践5 意見文を参考に、活発的なバズセッションを行う

「話題をとらえて話し合おう」 光村図書 中学校1年

1) 単元名 論点をとらえる

2) 単元の目標

○話題や議論の流れを的確にとらえて話し合うことができる。

○事実と意見の関係に注意し、相手の反応を踏まえながら話すことができる。

3) 自分の考えや意見に自信をもって、活発に意見交流し、論理的に文章化するための手だて

①「たしかに構文」を活用する。

「AもしくはB」の話し合いに対して「私の意見はAだ。なぜならば（Aの良い点）だからだ。たしかに、Bの意見も分からなくない。それは（Bの良い点）だからだ。しかしAの方がいいと考える。なぜなら（AとBを比べてAが勝る点、Bが劣る点）だからだ。結果、私はAだと考える。」

②テーマを生徒から募集し、身近なテーマでバズセッションを行う。

「中学生に携帯電話は必要？不必要？」

③バズセッションの概要を、全体でしっかりと確認する。

本番のバズセッションで無駄な時間のないように、事前にバズセッションの流れを全体で数回確認し、本番の時間を多く確保する。

バズセッションの目的と特徴を知ること、全員にグループ内での役割をもたせることができ、活発的なバズセッションを行うことができる。

④司会原稿を配る。

事前に司会原稿を配ることで、グループの誰もが司会になれるように準備する。司会者は原稿を見ることで、自信をもってバズセッションを進めることができる。

4) 単元計画

| 次 | 時 | 目標 | 学習活動 | 手だて・工夫 |
|---|---|---------------------------------------|---|---|
| 1 | 1 | ・今までの生活を振り返り、より良い話し合いについて考えることができる。 | <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">話し合いについて考え、まとめよう。</div> <p>○今までの生活から話し合い活動について考え、ワークシートにまとめる。</p> | ・話し合い活動について振り返ることで、今後のバズセッションに必要なと思うことを全体で確認する。 |
| 2 | 2 | ・バズセッションについて理解することができる。 | <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">バズセッションについてまとめよう。</div> <p>○教科書を使ってバズセッションを理解し、ワークシートにまとめる。</p> | ・ワークシートを使ってキーワードでまとめ、本番の主な流れを確認する。 |
| | 3 | ・意見文の書き方を理解し、自分の言葉でまとめることができる。 | <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">自分の言葉で意見をまとめよう。</div> <p>○意見文の型を参考に、意見文を書く練習をする。 ○バズセッションのテーマを考える。</p> | ・意見文の型に合わせて言葉を埋めることで、自信をもって自分の言葉で意見文を書くことができる。 |
| | 4 | ・前回の練習を参考に、本番用の意見文を自分の言葉で書くことができる。 | <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">テーマに沿って意見文を書こう。</div> <p>○本番のテーマ「中学生に携帯電話は必要？不必要？」について意見文を書く。</p> | ・前回の意見文の型を参考に、自分の言葉を多く書くように指示する。 |
| 3 | 5 | ・バズセッションを行い、自分の意見を伝え、相手の意見を認めることができる。 | <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">バズセッションでグループの結論を出そう。</div> <p>○バズセッションを行う。 ○振り返りを文章で書く。</p> | <p>・司会と記録を決め、生徒のみでバズセッションを行う。</p> <p>・相手の意見は批判せず、多くの意見を認める。</p> |

5) 授業記録 「話題をとらえて話し合おう」第5時

| 国語科学習指導案ライト | | |
|----------------------------|--|---|
| 平成24年12月20日(木) 第1時限 | | 第1学年2組 教室 |
| 指導者：木村 英晃 | | |
| 授業づくりの 視点 | ① 生徒の参加度は100%に近い授業であったか？ ⑥ 生徒は聴くレベル・話すレベルを意識できたか？ | |
| 響き合い 高め合う場面 | 話し合い活動を通して、グループで結論を導き出す場面 | |
| 1 単元名 | 話題をとらえて話し合おう (5/5) | |
| 2 本時の目標 | 1 自分の意見をグループで発表することができる。 2 話し合い活動を通して、グループの結論を出すことができる。 | |
| 3 学習過程 | 学 習 活 動 or 「発問の 流 れ」 | |
| 2分 | 全 | ①バズセッションの流れを確認する。 |
| 3分 | グ | ②グループ内で司会と記録を決める。 「バズセッションで、グループの結論を出そう」 |
| 35分 | グ | ③バズセッションを行う。 |
| 2分 | 全 | ④全体でのふりかえりを行う。 |
| 3分 | 個 | ⑤個人でのふりかえりを行う。 |
| ↑【形態表示 ペ;ペア, グ:グループ, 全:全体】 | | |

○バズセッションについてのプリント

バズセッションをしよう!

①全員が自分の意見をもち、参加する。
・自分の立場を明確に
・理由、根拠をはっきりと述べる


②少人数グループに分かれる。(今回は五〜六人)
グループの中で無関係な人、発表しない人をなくし、全員の意見を聞くため

③グループの中で「司会」「記録」の係りを決める。
司会がグループに対して指示を出す、司会の指示には従うこと
※記録は発言内容を簡単にまとめる(発表者の立場、理由、根拠、質問など)

④まずは司会、書記以外が自分の意見を発表。
座席を読むのではなく、グループに話すように
話すときに大切なこと、聞くときに大切なことを意識して

⑤その後発表者の意見に対して質問。
・一人ひとりがたくさん発言する(それぞれの意見の問題点や長所短所など)
・誰も発言しない場合、司会が順に指名する
・書記は質問や解答をメモする

⑥意見を整理し、結論を出す。
グループの中で、どの立場がどんな意見を出していたか
・それぞれの問題点や解決策を確認する
・意見が分かれて結論が出ない場合、どんな話し合いをしたかまとめる
司会が全体に発表(難しい場合はグループで協力して)



司会原稿

①これからバズセッションを始めます。話し合いのテーマは「○○○○」です。最初に「○○○○」のみなさんの意見を聞かせてください。では○○○○さんから順にお願いいたします。

五分

②みなさんの意見の発表が終わったので、それぞれの質問の時間に移ります。今、発表された意見に対しての質問は、自分とは違う立場の相手や問題点や解決策などを話し合います。自由に話し合ってください。話し手は、他人を否定したり、関係のない話題にうつらうつらして話を止めてはいけません。また、最初に関心したい方はいいですか。

・誰も発言しない場合は、司会者が○○○○は、相手の立場について考えてみますか。○○○○さんは相手の意見をどう質問はありますか。発言を促すことで話し合いを促進します。

十五分

③時間になりましたので意見をまとめたいと思います。このグループは「○○○○」という意見が○人、「●●●」という意見が●人いました。

「○○○○」の意見では「○○○○」や「○○○○」という良い点がありましたが、「○○○○」といった問題点もありました。しかし「○○○○」といった方法で解決できると思います。

●●●の意見では

・話し合いの結果、「このグループは「○○○○」という結論になりました。

・話し合いの結果、意見が分かれて結論を出すことができませんでした。しかし、共通の考えとして「○○○○」という意見が出ました。

・話し合いの結果、「○○○○」の意見が「□□□□」という新しい意見が出ました。なぜなら、理由が相違一だからです。

以上がこのグループの話し合いでした。

五分

十分

④全体の場で報告

活発的な話し合いができた！



第4時の授業で上記のプリントを配り、バズセッションへの意識を高めた。

全体でバズセッションの流れを確認し、全員参加が前提の授業であることを認識させ、より活発的な話し合い活動を目指した。

司会原稿を配ることで、誰もが司会者としての役割を達成できるように支援した。

○意見文（たしかに構文）

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------------|--------------------|-------------------|-------------------|------|-------------------|------------------------|-------|-------------------|-------|---------------------|-----|---------------------------|------|---|-----------------------------|-----------|-------------------------------|----------|-----------------------------|-----------|---------------------------|---------|-------------------------|-------------|---------------------|-------------|---------|-----------------------------|--------|-----------------------------|-----------|------------------------|
| 私の意見は不必要だと考えます。なぜかと | いうと、今は絶対携帯が必要だと思わな | い。今、例えば、今、携帯を持ってる | ます。そこへ迷惑メール（キエートン | メール） | などが飛んできました。それによって | 犬に誘ってしま。た。と。し。ま。し。よ。う。 | 。最近の道 | 徳でできていた意見が多か。た。もの | は「親に相 | 談する」という意見です。で。び。一。諸 | に親が | い。な。か。た。場。合。私。た。ち。は。中。学。生 | です。責 | 任 | が。と。れ。な。い。う。え。に。大。変。な。迷。惑。が | か。か。り。ま。す | な。り。で。携。帯。電。話。は。今。は。必。要。な。い。と | 思。い。ま。す。 | た。し。か。に。携。帯。電。話。は。手。軽。で。持。ち | 運。び。が。し。や | す。く。一。つ。の。も。り。に。多。く。機。能。が | あ。り。便。利 | だ。と。思。い。ま。す。し。か。し、機。能。が | 多。い。と。い。う。こ | と。は。入。り。て。い。る。情。報。が | 多。い。と。い。う。こ | と。は。そ。れ | に。対。する。リス。ク。も。増。え。る。と。い。う。こ | と。で。す。 | こ。う。い。う。た。こ。と。か。ら。中。学。生。の。う | ち。は。携。帯。電 | 話。の。必。要。な。い。と。思。い。ま。す。 |
|---------------------|--------------------|-------------------|-------------------|------|-------------------|------------------------|-------|-------------------|-------|---------------------|-----|---------------------------|------|---|-----------------------------|-----------|-------------------------------|----------|-----------------------------|-----------|---------------------------|---------|-------------------------|-------------|---------------------|-------------|---------|-----------------------------|--------|-----------------------------|-----------|------------------------|

中学生に携帯電話は必要か、不必要か

私の意見は携帯電話は中学生に必要なかと考
えます。それは親と連絡するのに必要なと考
思うからです。中学生になつた今、塾などで
帰りが遅くなつたり、グレ離れに所に出かけ
るなど、親と距離が離れたりすることがあり
ます。そういう時に、お互い心配しないうよう
にするために、携帯電話で連絡をとることに
が大切だと思ふからです。
たしかに中学生に携帯は必要ないという意
見も正しいと思ひます。今はメールなどの意
トラブルなどは子供が携帯を扱うには危ない
と思ふからです。しかし、自分が使ひ方をし
かりと守れば、メールなどのトラブルに巻
き込まれる可能性も低くなると思ひます。そ
れよりも親と連絡がとれなかつたりすると
親も心配するし、自分の身にも危険がおよぶ
と思ひます。このような理由から、私は中学
生には携帯が必要だと思ひます。

第4時に作成した本番用の意見文である。この意見文は「たしかに構文」で書いてある。これをもとに本時のバズセッションを行った。

○バズセッションの記録用紙

| 記録用紙 | |
|--|-----|
| 発表者 | 立場 |
| ■ | 不必要 |
| ■ | 不必要 |
| ■ | 不必要 |
| 意見・理由・根拠 | |
| <p>グループ交流メモ(問題点・解決策など)</p> <p>携帯電話がないと... (建子に... ともいじめがおこる。お金がかからない。 ... 元払いが... SOSを定める。 ... 連絡がない。... SOSを定める。 ... 近づくに... SOSを求める。</p> <p>解決策 ... 下でかきめる。 ... 窓口をかきめる。</p> <p>グループの結論</p> <p>携帯電話は不必要 ▽▽ ↓元払いがおこる。たろ ... 連絡したいとまは ... 近づく人に助けを求めるは ... などあるから。▽</p> <p>個人情報やいじめがおこる。↓情報か流出 自転車などでケイタイをいじめて事故をおこ り、いじめなどがおこる。↓メールで窓口を 書かせる。 ケイタイをいじめたがおこる。 ケイタイをあきらめたいこと。</p> | |

バズセッションを上記のような記録をとりながら進めた。

○バズセッションの振り返り

私は中学校に携帯は必要か不必要かのバズセッションをやった。携帯は欲しいと思っ
ていたけど、今の所あまり使わないし、必要
ないかと思いい必要の意見にしましたが、班
内での討論（バズセッション）で、だくさん
の意見が出ました。私の班では必要派が2人
不必要派が3人で、携帯を持っていないと、緊
急の連絡に便利、まいふになつたときにも
すぐ連絡がとれるから必要、という意見や
必ず家に電報はいる、自分の意志がな
くてもメールを聞いただけ、悪いサイトに
行ってしまう可能性があるから不必要、とい
う携帯のメリットとデメリットの意見をまと
め、携帯は保護者が未働きというニヤヤよ
く外出する人だけ必要、ウイルスをガードし
てくれるソフトをダウンロードするといふ新
しい結論が出ました。司会はツシ難しかつた
けど、班できちんとしてバズセッションができて
結論も出せたので良かったと思えます。

僕は不必要という意見を持っていました。
班の中では自分と同じ意見を持っていてる人
もあれば、そうでない人もいました。みんな
の意見を聞いてみるうちに必要な時もあるし
いらぬ時もあるという時が出てきました。
そうするうちに、やっぱり必要なのかなと
思えてきました。
携帯電話は便利だけでも、その反面、危な
いということを改めて知りました。
自分はどうにか、ていつとや、ばり携帯は
欲しいし、友達とのやり取りもしたけれど、
もう少し大人になってからにしようと思いま
した。
今日のバズセッションでは他人の意見もし
つかり聞くことができて、理解することができ
たので良かったです。

バズセッションが一通り終わったところで、振り返りの文章を書いた。バズセッションでの話し合いを通して意見を深めることができた生徒が多くいた。

6) 考察

バズセッションを行って、多くの生徒が積極的に発言していたように思う。普段の話し合い活動では消極的な生徒が自ら司会に立候補するなど、話し合い活動以外の場面でも積極的な生徒の活動を見ることができた。今回のバズセッションは全員参加が前提ということで意見文を作成した。「たしかに構文」を使って意見文を書くことで自分の意見に自信をもって、活発に交流することを目標とした授業だったが、目標は概ね達成できたように感じる。意見文を見ながらではあるが消極的な生徒もしっかりと自分の意見を発表し、話し合い活動でも問題点や解決策を話し合うことができていた。やはり、生徒たちの中には「意見は発表したいが、どうやって自分の意見を伝えればいいのか分からない」という考えをもっている生徒が多く、発表自体には大きな抵抗はないようだ。今回の授業で学んだ話し合いについての方法や、自分の意見をどのようにして伝えていくかということを、今後の授業や普段の生活にも活かしてもらいたい。

授業研究会では国語に関するアンケートを実施した。「①自分の考えに自信をもって発表できますか。②少人数だと発表しやすいですか。③どんな聞き方を心がけていますか。④どんな話し方を心がけていますか。⑤文章を読むことは好きですか。⑥書くことは好きですか。⑦国語の授業で思ったことを書きましょう。」といった設問で夏と冬にアンケートをとり、その結果を比較した。大きな変化が見られたのは設問②であり、冬のアンケートでは90%の生徒が「思う」「少し思う」と回答していた。全体では自分の意見に自信をもって発表することはできないが、少人数ならば自分の意見をしっかりと伝えることができると考える生徒が多く、それが今回のバズセッションにも反映されているように感じる。今後は、少人数だけではなく、全体の場でも自分の意見に自信をもって発表できるように指導をしていきたい。



グループ交流の様子



グループ交流の様子



全体での報告会の様子

(6) 実践6 仲間とともに文章を読み深め、語彙を増やすことによって、自信をもって表現することができる授業

「モアイは語るー地球の未来」 光村図書 中学校2年

1) 単元名 論理をとらえる

2) 単元の目標

○ 立場と根拠を明らかにした論理的な表現のしかたを学び、自分の文章に生かすことができる。

○ 相手の立場を尊重し、反論を予想しながら話し合いを進めることができる。

3) 自分の考えや意見に自信をもって、活発に意見交流し、論理的に文章化するための手だて

①通読の際、意味の分からない語句を出し合ってみんなで確認し、さらにチェックテストで復習するなどして使えるようにした。

②チェックテストや本時の課題の確認、グループ討論の発表などにおける司会進行を教科委員が務め、より主体的に学べるようにした。

③課題に対して学級全体で話し合う前に、2人～4人単位で、考えを広げたり深めたりする時間を設けた。(ピアタイム)

④「問題提起されている段落」と「答えが述べられている段落」に着目させ、説明文の構成を読み取る手がかりとした。

⑤全体での話し合いが終わった後、課題に対する自分なりの答えを文章で表現することによって、頭の中で整理できるようにした。

⑥毎時間における授業の振り返りを、A～Dの記号だけでなく、文章で書き残すことによって、適切に自己評価するとともに、次の目標が明確に立てられるようにした。

4) 単元計画

| 次 | 時 | 目標 | 学習活動 | 生徒が自信をもって学ぶための手立て |
|---|---|--|--|--|
| 1 | 1 | <ul style="list-style-type: none"> ・学習課題と見通しを理解することができる。 ・新出語句などの意味が分かる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○振り返りカードを使って、単元の流れをつかむ。 ○本文を通読し、分からない語句について話し合う。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;"> 本文を通読し、分からない語句が説明できるようになる。 </div> | <ul style="list-style-type: none"> ・振り返りカードに単元全体の学習課題を示し、見通しがもてるようにする。 ・難語句として挙げられたものについては、チェックテストで再度確認する。 |
| | 2 | <ul style="list-style-type: none"> ・文章全体を問題提起とその答えに分けることができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○問題提起されている文に線を引き、その答えの部分を探す。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;"> 問題提起とその答えがど </div> | <ul style="list-style-type: none"> ・線を引いた後、仲間と確認し合う時間を設ける。(ピアタイム) |

| | | | | |
|---|---|---|--|---|
| 1 | | | ここにありのを見つげよう | |
| | 3 | <ul style="list-style-type: none"> 文章の構成をとらえることができる。 筆者の主張について説明することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○前時を生かし、文章全体を序論・本論・結論に分ける。 ○結論の部分から、筆者が最も伝えたいことを抜き出す。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">文章の構成を確認し、筆者の結論を探し出そう。</div> | <ul style="list-style-type: none"> 文章構成図を用いて、視覚的にも分かりやすくする。 筆者の主張の特徴にふれてから話し合い活動を行う。 |
| | 4 | <ul style="list-style-type: none"> 説明文の説得力について、自分の言葉で文章表現することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○本文について、説得力があると感じる部分を、箇条書きにする。 ○仲間と意見交流し、説明文の説得力について文章で表す。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">説明文の説得力について自分の言葉でまとめよう</div> | <ul style="list-style-type: none"> 個人で箇条書きをした後、仲間と相談する時間を設け、考えを深めたり、語彙を増やしたりする。 <p>(ピアタイム)</p> |
| 2 | 5 | <ul style="list-style-type: none"> 社会問題について、事実を示して自分の意見を書くことができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○新聞などから興味がある問題を選び、意見文を書く。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">説得力ある意見文に挑戦しよう。</div> | <ul style="list-style-type: none"> 初めに分かりやすい意見文の書き方についてふれる。 |
| | 6 | <ul style="list-style-type: none"> 意見文を交流し、お互いに評価し合うことができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○意見文を交流し合い、説得力を焦点にして、話し合う。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">話し合いによって、意見文をさらに良いものに仕上げよう。</div> | <ul style="list-style-type: none"> 良い部分をほめ合うだけでなく、アドバイスし合って、改善をめざすよう話す。 <p>(ピアタイム)</p> |

5) 授業記録 (第1次・第4時)

| 段階 | 学びの過程と活動 | 形態 | 教師の支援 |
|----------|--|----|---|
| 導入 7分 | 1 教科委員が授業を始める。 <ul style="list-style-type: none"> チェックテスト (5問) 前時までの確認 到達目標の確認 | 個 | <ul style="list-style-type: none"> 教科委員の最初の活動がスムーズに進むよう支援する。 出題した生徒に助言と賞賛を送る。 |
| | 2 本時の課題と授業の流れを知る。 <ul style="list-style-type: none"> 学習課題と取組課題の確認 授業の流れの確認 | 全体 | <ul style="list-style-type: none"> 生徒の出題を補足し、1時間の流れを伝える。 |

| 説明文の説得力について自分の言葉でまとめよう。 | | | |
|-------------------------|-----|---|--|
| 展開 | 3 | 本文について説得力があると思う事柄を箇条書きにする。 | 個 <ul style="list-style-type: none"> ・ 今までの授業を思い出しながら書くよう話す。 ・ 1つだけでなく、できるだけたくさん探すよう指示する。 |
| | 36分 | 4 机を移動させて、まわりとかわりながら課題に取り組む。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 4人グループで話し合った結果をノートに箇条書きで記述する。 ・ 後半は他グループとも交流しながら考えを深める。 | ピア <ul style="list-style-type: none"> ・ 参加度が高まるような雰囲気をつくる。 ・ 机間支援をしながら、話し合いにあまり参加できていない生徒にアドバイスをする。 ・ 全体の話し合いの進行状況をつかみながら、時間配分について教科委員と連絡を取り合う。 ・ グループ内の全員が答えを書けるようにしておくことを確認する。 |
| | | 5 話し合った内容を発表する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 教科委員が司会を務める。 | 全体 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「聴く力の階段」を意識するよう話す。 ・ 発表者の発言が全体に伝わっているかどうかを評価し、声が小さいときは、もう一度発表するように促す。 ・ 生徒の発表を聞いて、課題が深められていない場合は、補足の発問を投げかける。 |
| まとめ | 6 | 話し合いを受け、課題に対する答えを文章でまとめる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「この文章は説得力がある。理由は・・・だからである。」という形で表現する。 | 個 <ul style="list-style-type: none"> ・ 3行～5行でまとめるよう指示する。 ・ ノートを回収し、目標に到達しているかを評価する。 |
| 7分 | 7 | 振り返りカードを使い、本時の学習を振り返り、次時の予告を聞く。 | 個 <ul style="list-style-type: none"> ・ ピアタイムの様子について感想を話し、今後の目標を話す。 ・ 次時は、実際に説得力ある意見文に挑戦するを伝える。 |

6) 考察

年度当初に2年生164名に実施したアンケートでは、文章を読むことが「好き」または「どちらかと言えば好き」と答えた生徒が、全体の63.4%であったのに対し、書くことが「好き」または「どちらかと言えば好き」と答えた生徒は57.9%に留まってしまった。この結果から、読むことに対して書くことに苦手意識をもっている生徒が多く、約半分ほどの生徒が、書くことが好きでないということが分かる。また、「自分の考えに自信をもって発表できているか」というアンケートでは、「できていない」または「あまりできていない」と答えた生徒が62.1%を占めていることから、「書くこと」が好きになることによって、自分の考えに自信をもち、積極的に交流できるようになるであろう。」という仮

説を立て、研究を行った。

子どもたちが自信をもって話したり、書いたりするために、「自分の言葉で考えた答えをもたせること」「交流の仕方を工夫すること」「振り返りで再度書かせるようにすること」の3点に重きを置いて指導を続けてきた。

「自分の言葉で答えを書く」ことについては、まずは語彙力をつけ、たくさんの人の意見に触れることをめざした。語彙力をつけるには、こまめに意味調べをすることの他に、毎時間行うチェックテストで復習をしたり、短文作りに挑戦したりして繰り返し練習するよう心がけた。

たくさんの人の意見に触れるために、話し合いの時間を多く設定するようにした。また、ただ話し合うだけでなく、交流の仕方を工夫した。具体的には、ペアで話したり、4人ずつの少人数で話したり、時には話す相手を学級の誰でも良いこととし、自分で選んで話しに行くという場も設けた。その際、単に仲の良い友達を選ぶのではなく、「誰と話せばより良い答えが得られるか」を考えて動くよう、繰り返し話した。さらに、全員が課題解決することを目標とし、困っている仲間がいたら助ける目を養うようにした。また、このような時間を「ピアタイム」と名づけ、教科・学年にとらわれず、学校全体での取り組みとして扱ってきた。

「ピアタイム」という名で取り組んできたのは、わずか半年であるため、使う場面や形態など、まだまだ試行錯誤の状態ではあるが、交流する生徒を見ていると、共によりよい意見を創りあげようと努力している姿が多く見られ、話し合いの内容にも深まりが見られるようになってきた。学級全体の中から話し相手を見つけて相談するという形も、初めはすぐ動ける生徒と、なかなか動けない生徒がいて、教師が促す場面が多かったが、くり返すうちに自然に動けるようになり、できていない仲間を見つけて共に考えようとする姿も見られるようになってきた。生徒に実施したアンケートの中で、「少人数だと発表しやすい」と答えた人が 93.3 % を占めることから、少人数で交流し合った後、全体で交流したり、自分の意見をまとめたりすることが、「自信をもって話したり書いたりすること」に繋がると考える。

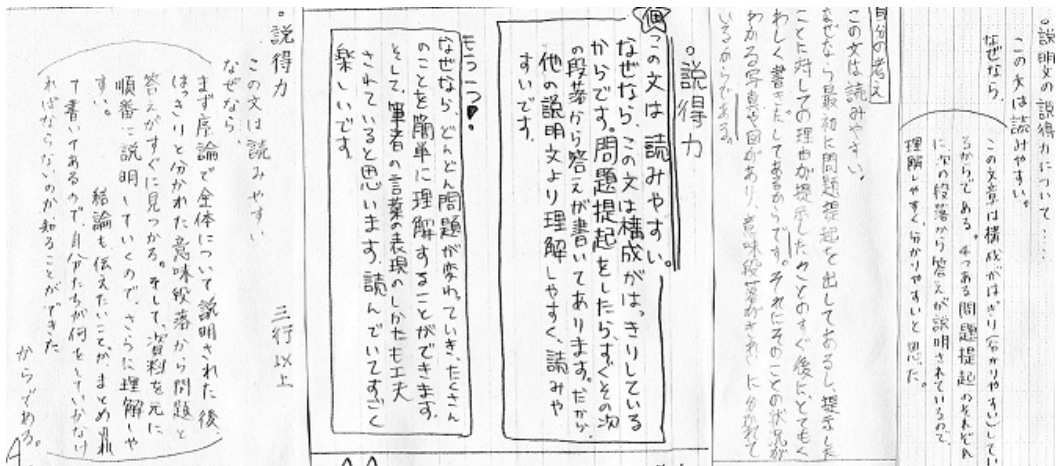


図11 生徒のノート

最後に、授業の終わりに言葉でまとめる活動については、1時間で学んだことや、まだよく分からなかったことを再確認するという意味でも、とても効果的であると考えている。これも、国語科のみならず全ての教科で行うことによって、生徒の中に定着し、書く量も自然と増えてきている。図 11 は、本時の授業でピアタイムを行った後に、個人でまとめた文章を抜粋したものである。

今回は、4名のみで紹介であるが、書くことを苦手とする子も含め、全ての子どもが3行以上の答えを、自分の力で書くことができた。また、本時はピアタイムの後に全体交流を行っているが、オープンエンドで終わる場合は、ノートを集めて教師が一人ひとりの答えをチェックしている。その中で他の見本となる答えがあった場合は、次の授業で紹介するなど、必要な学力を確実に獲得させることにも気を配っている。

生徒が、本当に書くことが好きになって、全員が自信をもって、積極的に意見交流ができるようになるまでには、まだまだ時間がかかりそうだが、確実に授業が変化してきていることに自信をもって、取り組みを続けていきたいと考えている。

(7) 実践7 多様な意見を踏まえて、説得力のある意見を書こうとする授業 「走れメロス」 光村図書 中学校2年

1) 単元名 自分を見つめる

2) 単元の目標

物語の中でのメロスの心情の変化をとらえ、意見文を書く。

3) 自分の考えや意見に自信をもって、活発に意見交流し、論理的に文章化するための手だて

①物語の要点をつかみ、それに対して意見を書く

生徒が、自分の考えに自信がもてるようになるには、まずは本文の要点をおさえることが必要であると考えている。本文を読み取っていく中で、情報を多く得た状態であれば、意見の根拠を示しやすいであろう。また、物語の印象を深めるためには、意見が分かれるであろう物語の重要な場面や発言が出てきたときに、自分がどのように考えたのかという記録を残す必要があると判断し、その折に意見を書く取り組みを行った。また、説得力のある意見となるように、考えの根拠を記すように指示をした。

②少人数での交流の時間を設ける

自分の意見に自信をもつための手だてとして次に必要なのは、小グループで交流することであると考えている。全体の場では進んで手を挙げ発言することに抵抗のある生徒も、少人数であれば話しやすいと考えられる。そこで出会った様々な考え方や見方から、自分の意見の独自性や他人との共通性を見出し、自信となっていくのではないかと考えた。そのため、4人グループでの交流など、仲間の意見を聞く機会を設けた。

③他人の意見を踏まえて、自分の意見を再構築する

全体発表の際に、自分の意見の根拠を示して発言し、交流した際に聞いた意見についても紹介し、それに対する自分の考えを述べるように指示をした。このことで、他の意見に

耳を傾け、そこから自分の中で考えに変化が生まれることを期待しての取り組みである。

こうした取り組みを、物語を読み進めながら何度か取り入れていくことで、より論理的に、多様な考えや見方を踏まえたうえでの、最終的な人物像に迫れるのではないかと考える。

4) 単元計画

| 時 | 目標 | 学習活動 |
|---|--|--|
| 1 | 分からない語句を辞書で引くことができる。 | 分からない語句を辞書で引いてワークやノートに書き込む |
| 2 | 登場人物とその人物像をつかむことができる。 | メロスが城を後にするまでの場面を読む。 登場人物と人物像・特徴となる言葉を探し出し、状況をつかむ。 |
| 3 | 王に逆らうメロスについて、考えをもつことができる。 | 王に逆らったメロスを自分はどう感じたか、根拠を示して書く。 グループで意見の交流をし、全体交流で自分の意見を発表すると同時に、交流の際に出会った考えについても紹介し、それに対する考えを述べる。 |
| 4 | メロスの行く手を阻んだ試練とその時のメロスの気持ちの変化に気付くことができる。 | メロスの前に立ちはだかる試練の場面を読む。 どのような試練があったのかを確認する。 それぞれの試練を前に、メロスはどのようなようであったかをおさえる。 メロスの行く手を阻んだ試練とその時のメロスの気持ちを表す言葉を探し出し、心情の変化をとらえる。 |
| 5 | 「胸の張り裂ける思い」で走るメロスは、どのようなことを考えていたのか、自分の考えを書くことができる。 | 再び走り出し、刑場にたどり着くまでの場面を読む。 「胸の張り裂ける思い」で走るメロスは、どのようなことを考えていたのかを書こう。 小グループで交流を行う。 |
| 6 | メロスは勇者か。そうではないか。物語全体の出来事を踏まえて、自分の考 | 物語の結末までを読む。 メロスは勇者であるか、そうではないか。立場を決め、根 |

| | |
|------------|---|
| えを述べるができる。 | <p>拠を示し意見文を書く。</p> <p>小グループで意見文を交流し、全体発表を行う。 反対の意見に対しての考えも交えて、改めて自分の意見を述べる。</p> |
|------------|---|

5) 授業記録

「走れメロス」は物語の中で、状況の移り変わりとともにメロスの心情が変化していく。それにつれて生徒たちも、物語の当初で感じた印象から、変化していくのではないかと考えた。しかしながら、物語は長文にわたるため、一度にメロスの感情の変化を捉えることは困難であると判断し、授業の展開につれて、本文も読み進める手法をとった。またそのなかで折々メロスの行動に対し意見を述べる機会を設け、ノートに記録を残していった。

まず初めは民を苦しめる王に激怒し、メロスが城へ出向く場面である。友人のセリヌンティウスを人質にして、王と約束を交わし、走り出たメロスまでの場面が出た生徒のメロスに対する印象は以下のものであった。また、多くの生徒は勇気があるという意見であった。

<生徒の意見>

教科書 P183の6行目に書かれているように、自分の命をかけてまでも町を王から救おうとしたメロスはすごいと思うし、他人思いだと思う。でも私だったら、殺されることがわかっていて王に反発しに行くことは無謀だと思うので絶対にしない。

この時点で、その場の感情に流され王城に乗り込んだメロスは愚かだという意見もでてきており、全体での発表の中で、それぞれの立場に対し、反対意見への考えを述べる機会を設けた。

この後メロスの行く手を阻む数々の試練に、メロスの決意は揺らいでいく。

メロス自身に残る故郷への未練は、王に、人の信実というものを見せてやろうと自分自身を叱咤し、乗り越えた。その後、川が氾濫し、濁流を目の当たりにしたメロスは、愛と誠の偉大な力を胸に、川を泳ぎきって乗り越える。山賊の出現にも、正義の心をもって、山賊に立ち向かい、難を逃れる。そして心身の疲労が積み重なってくるころに、メロスの気持ちは弱々しいものとなり、私は努力したのだと、自身を擁護する気持ちを持ち、正義や愛や誠などどうでもいい、自分自身を醜い裏切り者だと考えるようになる。襲い掛かる試練に、とうとうメロスはその場で臉を閉じ、投げ出してしまう。

ふと目を覚ましたメロスは、走らねばならぬと思い立ち、再び駆け出す。その心には、間に合う間に合わぬは問題ではなく、もはや人の命も問題となっではない。もっと恐ろしく大きなもののためにメロスは走り出したのである。その時のメロスの心はどのようなものであったのか。生徒の意見には以下のようなものがあつた。

<生徒の意見>

王に信じてもらえるようにすることを考えている。P192の16行目のときにフィロストラトスが自分の命が大事だと言っているのに、メロスは19行目で「信じられているから走るのだ。」と言っているのです、王にこの信用する力を分らせてやりたかつ

たから。

ここまでの間で、メロスの心の変容を確認しながら、時折、生徒にメロスの心のもちかたに対して意見を求めてきた。この考えが、物語の最終場面を知った段階でどのようなものになるのかを追ったのが、第五時の学習である。

第五時の授業展開は次のようであった。

①メロスが刑場に到着する場面を読む。

②「勇者は赤面した。」とあるが、物語を振り返ってみて、自分はメロスを勇者だと思いか、そうは思わないか。立場を決めて、その理由を根拠を示して記入する。

<生徒から出た意見>

私はメロスは勇者だと思う。「他人のためなら自分は死んでもかまわない」という思いで迷うことなく、王のもとに行き、大変な約束をした。もちろん途中であきらめそうになっていたが、自分の心に勝ち、そして王の心にも勝ったメロスは、群衆・王・セリヌンティウスにとっての勇者だったと思う。

メロスは勇者ではない。本物の勇者であれば、人(友達)を人質になんかしないし、一度あきらめるようなことなんてしない。本物の勇者であるのならば、人を人質にしているなかで、裏切り者でもよいとは思わない。

③グループで交流し、他の人の意見をノートに書き留めておく。

④全体交流を行い、それぞれの立場の意見を論じる。

⑤反対の立場の意見も踏まえて、最終的に自分はこの物語のメロスという人物をどう感じたのか意見文を書く。

<例として示した意見文の文型>

私はメロスが勇者であると思う。(思わない)

なぜなら、(意見の根拠となった理由・そこから感じたこと)からである。

～だから勇者である(勇者ではない)という(反対の)意見があったが、

(その意見に対して考えたことを述べる。)

以上のことから、やはり私はメロスを勇者であると思う。(思わない)

<生徒の意見>

●メロスは勇者である

私は勇者であると思う。なぜなら、一度はあきらめかけたけど、友のためにまた走り出して間に合ってさらに、自分が一度あきらめたことを正直に話すことは本当に凄くと思うから。友を人質にとり、一度あきらめるのは本当の勇者ではないという意見もあったが、それについて私は、人質にとったのは本気で自分に自信があるからだし、あきらめても結局は自分に勝って友を救ったから、私はメロスは勇者であると思う。

わたしはメロスは勇者であると思う。なぜなら「他人のためなら、自分は死んでもかまわない」という思いで迷うことなく王のもとへ行き、大変な約束をした。もちろ

ん途中であきらめそうにもなっていたが、自分の心に勝ち、そして王の心にも勝ち、町を平和にしたメロスはすごいと思うからです。友を殴ったから勇者ではないという意見もあったが、それについて私は友を殴ったのは友のため、メロスとセリヌンティウスの友情を確かめるものであったので、決して悪いことではないと思う。なので私はメロスは勇者であると思った。

私は、メロスは勇者であると思います。なぜなら、メロスは、約束通り帰って来て王の心を変え自分のあやまちを言いセリヌンティウスに殴ってもらったからです。友を人質にするから勇者ではないという意見があったが、それについて私は、そのとおりだと思った。自分の大切な友を人質にするのはかわいそうだと思った。だが、人質が友でなく、他人だったらこんなにもメロスはがんばらなかったと思います。そして、王の心も変えられなかったと思います。そうしたことから私はメロスは勇者だと思いました。

●メロスは勇者ではない

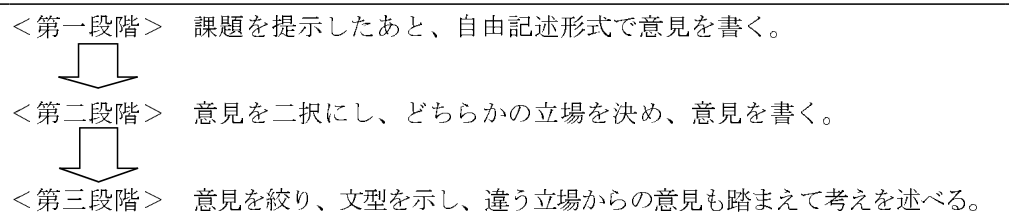
私は勇者ではないと思う。なぜなら、勇者であるのならば、親友を人質にしたりなんかしないし、途中であきらめるようなことはしないと思うからである。一度あきらめかけても走って間に合って、友達に一度あきらめかけたことを話したから、勇者であるという意見がたくさんあったが、たとえ親友であっても、一人の人間を一度怖い目に遭わせたのだから、間に合ったといってもメロスはひどい人だ。あきらめかけたこともいけないうことだ。そうしたことから、私はメロスを勇者として認めない。

6) 考察

事前にアンケート調査を行った際に、文章を書くことが苦手と感じる生徒は非常に多い結果となった。その理由として、「どのように書いてよいか分からない」「書き方が分からない」というものがあった。どのように書いたらよいか分からないから自分の意見に自信がもてない、違っていたらどうしようと感じて、人前で意見を述べることを避けてしまうのではないかと推測する。

苦手意識を短期間で克服することは難しい。まずは少しずつ段階を踏んでいくことである。まず本文の状況を理解していなければ、意見も立てられぬと考え、物語を少しずつ追うことから実践を始めた。また、時折自分の考えをノートに残していくことで、自分の考えの変容も見える形とした。更に、文章を書きそこから自信をつけていくために、文章の書き方例を黒板に提示して指示を出した。

指導の段階は以下のとおりである。



第一段階ではどのように書いたらよいか分からなかった生徒も、段階を踏んでいく

ちに、記述の量が増え、書く早さも格段に早くなっていった。

また、実践を終えてアンケートを実施したところ、少人数であれば交流しやすいという意見が8割であり、自分の考えに自信がもてるようになった生徒も、以前よりは増えていた。

<課題>

課題としては、文章を読むことに比べ、書くことを苦手と感じている生徒の数がまだまだ7割近くいることである。書くことに対しての自信にはまだ繋がっていないことから、今後論じ方に慣れるまで、当分は文型を示して記述することを継続していく必要があると感じる。また、彼らの書いた文が、より多くの交流を経て認められる必要性を感じた。しかしながら書かれた内容を見てみると、すべての生徒が十分に説得力のある文章が書けているかといわれれば、まだまだ発展途上にある。独りよがりではなく、活発に意見交流したり、説得力のある論じ方をするためには、やはり他の意見にも耳を傾け、その意見を踏まえた上で考えを述べる習慣を確立する必要がある。こうした論じ方を生徒が自分の中で獲得していくことで、相手の考えに対して論理的に思考することや、そこから生まれた自分の意見を自信をもって伝えることへの成長に繋がっていくのではないだろうか。

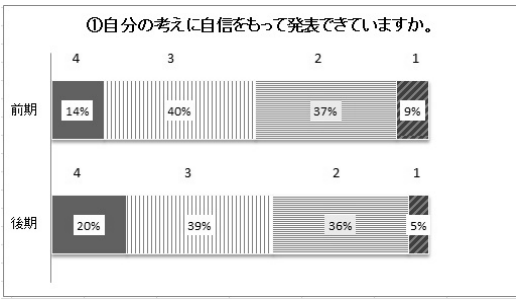
4 仮説の検証

研究の成果を見るために6月と12月にアンケートを実施した。その分析を以下に示す。アンケートの項目は以下の7項目である。

- ①自分の考えに自信をもって発表できていますか
- ②少人数（グループなど）だと発表しやすいですか
- ③どんな聞き方を心がけていますか
- ④どんな話し方を心がけていますか
- ⑤文章を読むことは好きですか
- ⑥書くことは好きですか
- ⑦国語の授業で思っていることを自由に書きましょう

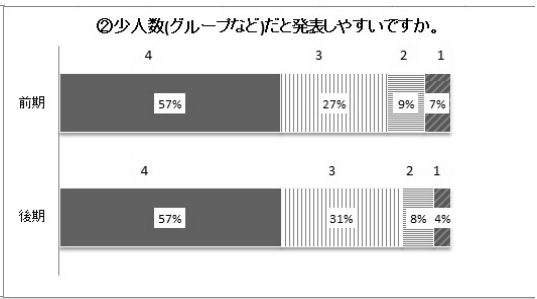
※ ①、②、⑤、⑥については4件法で、③、④、⑦については自由記述。

このうち①、②、⑤、⑥の数値で表すことのできる項目をグラフにして、その推移をみると、下記ようになる。なお、7実践の合計の数値をもとにグラフを作成した。



4：そう思う 3：少しそう思う

図12 自信をもって発表できていますか。



2：少し思わない 1：思わない

図13 少人数グループは発表しやすいですか。

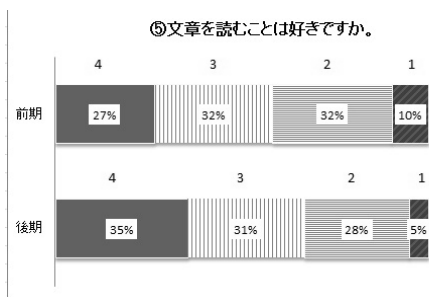


図14 文章を読むことは好きですか。

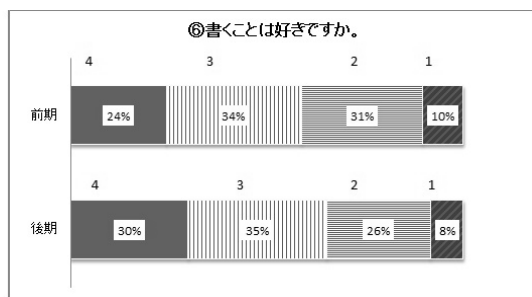


図15 書くことは好きですか。

アンケート結果をもとに仮説の検証を試みる。

仮説1 自分の言葉で考えをもつようになれば、それに自信がもてるであろう。

アンケート①の結果を見るように自信をもって発表できる子どもが増えている(図12)。自分の言葉で考えをもたせるような「マイノート」や「ワークシート」などの手だてが有効に働いた結果だといえる。

仮説2 交流の仕方を工夫すれば、活発に意見交流できるであろう。

アンケート②の結果を見ると少人数の効果が明らかなことがわかる(図13)。また、少人数の話し合いだけでなく、「討論など意見を交わす学習は楽しい。聞いているのも楽しい。」「交流がたくさんある授業がやりたい。」などとアンケート7に書いている子どももいる。「コの字型の机の配置」「ペアと全体を取り入れた話し合い」「バズセッション」など活発に意見交流するための手だてが有効だったといえる。

仮説3 振り返りで自分の考えを再度書かせるようになれば、論理的な思考力が高まる。

アンケート⑤、⑥の結果を見ると「読むこと」「書くこと」が好きな子どもが増えている(図14、15)。「たしかに構文」などの文型指導をし、何を書けばよいのかを示して書く活動に取り組めば、子どもも自分の作文に自信が付き、書くことが好きになるといえる。また、各実践に載っている作文を見れば、論理的な思考力が高まっていることもわかる。

自分の意見を持ち、それを全体で交流し、その結果を文章にするという活動が子どもにより変化をもたらしたといえる。発表することが好きで、文章を読むことが好きで、書くことが好きな子どもが増えれば、国語好きな子どもが増え、国語の力も向上することと思う。2の少人数だと話しやすいという項目も増えているが、これは充実したグループ活動が行われたことを意味している。グループから始まり、全体でもどんどん話せるような方向に向かうことができればもっと効果が上がると考える。

5 おわりに

グループ交流や全体の話し合いだけで時間がいっぱいになり、そこで終わりになってしまう授業をよく見る。言いなしの授業ではやはり力をつかない。発言力のある子だけが活躍して、その他大勢はただそこにいるだけという悪い状態に陥ってしまうことさえある。かろうじて、発言しない子もしっかり考えていたとしても、それを確認する明確な手だてはないし、頭からはその時の思考の記憶はどんどん消えてしまう。思考の論理を明確にし、

再構築することによって、思考はメタ認知化する。思考の方法もメタ認知化する。これが「国語の力」であり「生きる力」になるのではないだろうか。

犬山の実践では振り返りを大切にしてきた。しかし、1、2行感想を書くだけの振り返りに何の意味があるのかと疑問をもっている教師は多いのではないかと思う。振り返りの機能を教師が自覚し、何のために行うのかを意識し、意図的な指示によって学びをふりかえらせることが大切である。その一例として本研究が参考になればと思う。

本研究では、7つの価値ある実践を紹介することができた。毎月1回の本研究会に実践を持ち寄り、それを発表し、意見を交わす中でよい刺激を受け、それを次の日からの実践につなげていくという活動が、教師の意識を高め、結果として国語好きな子どもを育てることができたと思う。また、本研究以外に日頃の積み重ねの重要さも各実践のいたるところから読み取ることができる。よく子どもたちを鍛えているのが分かる。教師が意識を変え、授業に工夫を加えていけば、子どもたちはみるみるうちに変化し、力をつけてくる。これからも学び合い高め合う教師であり続けたいと思う。

豊かな言語力を身につける子どもの育成を目指して

上村 淑恵（犬山市立犬山南小学校）
正田 和之（犬山市立今井小学校）
猪飼 孝央（犬山市立犬山西小学校）
大澤 綾子（犬山市立東小学校）
矢萩 優子（犬山市立羽黒小学校）
小林 由佳（犬山市立池野小学校）
井口 友香（犬山市立城東小学校）

はじめに

言葉は人と人が心を通わせる架け橋といえるものである。しかし、昨今よく使われている言葉を思い浮かべてみると、感情をおおざっぱに表現したり、短絡的で思慮に欠ける言葉を用いたりするなど、まるで言葉を使い捨てるように人に投げつけているような印象を受ける。大和言葉が本来もっている意味の奥深さや響きの美しさなどが、忘れ去られているようで、現代の日本の言葉の有り様に“日本語の危機”を感じる。

小学校の低学年は、言葉の入門期ともいえる時期で、飛躍的に多くの言葉を獲得していく時期である。この時期に言葉のおもしろさや不思議さ、奥深さを、少しでも感じることができ、言葉を大切に扱おうとする心を育てることができたなら、その言葉を使って、人にきちんと思いを伝えたり、人の思いを受け止めたりすることができるようになり、豊かな言語力を身につけることができるのではないかと考えた。

1 目指す児童の学びの姿

- ①繰り返し音読して、文章になれる姿。
- ②根拠を明確にして、話す姿。
- ③大事なことを聞き落とさないように、興味をもって聞こうとする姿。
- ④受容の言葉や態度で相手の話を聞こうとする姿。

2 研究の仮説

(1) 楽しみながら言葉に親しめる授業づくりをすれば、豊かな言語力を身につける児童が増えるのではないか。

- 1) リズムよく音読したり、身体表現したりすることで、楽しみながら、言葉に親しんだり、言葉を獲得したりする授業展開をすれば、豊かな言語力を身につける児童が増えるのではないか。

2) 自分の思いが仲間に伝わったり、良いところを認めてもらったりすると嬉しいと感じるような授業展開をすれば、豊かな言語力を身につける児童が増えるのではないか。

(2) 文章を正確に読み取り、テーマにそって、文章中の言葉を使って読み取ったことをまとめることができれば、言葉を大切にしようとする気持ちを高めることができるのではないか。

3 具体的な手立て

①物語文では、動作化等を取り入れて、表現活動をして、言葉の意味や主人公の行動や気持ちを考えられるようにする。

②繰り返し音読して、リズムよく唱える。

③文章の言葉に注目して、読み取りをする。

④意見を伝えるときは、根拠をもって相手に伝えるようにする。

⑤文章中の言葉を引用しながら、読み取った内容をまとめる。

4 研究の実際

実践 1 動作化を取り入れた音読の学習を通して 小学校 1 年「ゆうだち」「くじらぐも」

(1) これまでの学級の実態について

本学級は男子 10 名、女子 16 名、合計 26 名である。素直で明るく、いろいろな活動に前向きに取り組むことができる。個人差はあるが、教師の呼びかけに応えようとする気持ちを感じられる児童が多い。1 年生はすべての学習の入門期なので学ぶ姿の土台作りをすることに重きを置いて指導を進めようと考えた。

学習の基本は話を聞くことなので、入学当初から話す・聞く力を育てることを大きなめあてとして指導を続けてきた。次に示したのが指導の流れである。

1) 「話形」を使った話す力の指導

入学後、話す力を身につけるために毎朝「スピーチタイム」で話形を使って話す訓練を継続している。テーマを決めて毎朝、班ごとに週 1 回話す機会を設けた。

はなします。
○○のなまえは○○です。好きなたべものは○○です。
よろしくおねがいます。

↓

はなします。
○○のなまえは○○です。好きなたべものは○○です。
わけは○○だからです。

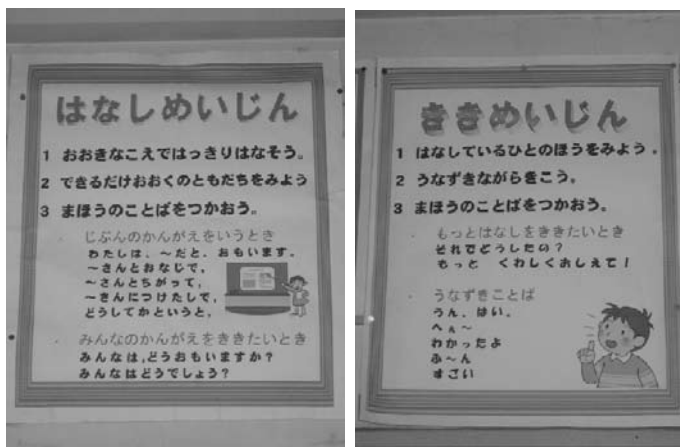
色・乗り物・花・番組・家族などテーマを毎週変えて継続したところ全員が話ができるようになり、クラスの友達の名前も覚えることができた。それ以降は水泳の目あて・運動会のめあてなど生活の中の出来事でテーマを決めて話す幅をもたせるようにしてきた。すぐに話すことができなかつたり、声が小さかつたりする児童もいるが学級みんなが静かに待っていることで安心して話すことができるようになってきた。また、理由もはじめは「おいしいからです。」「楽しいからです。」という言葉が多かつたが、続ける中で「野菜がたくさん入っていて、おいしいからです。」「みんなで走り回るのが楽しいからです。」というように、言葉を増やして話すことができるようになった。

2) 聞く力の指導

話す人に「おへそ」を向けて聞く。聞いたときに「がんばったね。」「そうなんだ。」「へえー」「ふうん。」などの反応やうなずきなど素直に自分の気持ちを表すことも呼びかけている。

3) 授業における発表の仕方のきまり

授業においても「はなしめいじん」、「ききめいじん」を掲示し、スピーチタイムで身につけた力が発揮できるように



なってきた (図 16)。話すときには「みんなの顔が見えるところ」に立つことを意識させ、聞いている子と互いに顔が向かい合うことできちんと「話す・聞く」ことができるようにしている。話す時には「説明します。」「言います。」など場面に応じた言葉が使えるように指導している。

図 16 教室に掲示してある発表のきまり

また、国語はもちろん「アニメーション」や「学活」などの授業でもコミュニケーション能力を培うための指導を重ねている。

これらの指導を継続しながら、国語での実践につなげてきた。次に二つの実践例を報告する。

実践 1 「ゆうだち」

(1) 単元について

児童はこれまでにいくつか物語を学習してきた。文章のリズムや言葉の響きを楽しみながら読むことを繰り返して経験してきた。本単元は「おはなしをたのしもう」と位置

づけられた物語である。本格的に物語を読み深めていく最初の単元となるため、大切に扱い今後の学習に繋げていきたい。

「ゆうだち」は、展開がはっきりとしており、内容をとらえやすい物語である。また、自分の体験や経験に照らし合わせることで、登場人物の行動や気持ちを考えやすい。物語に積極的に関わり楽しみながら読み深められるように、学習を進めていきたいと考える。

(2) 具体的な支援と手立て

1) 学習の足跡の掲示

場面ごとの読み取りの内容を掲示し、学習の積み上げができるようにする。足跡を残すことで、気持ちの変化をとらえやすくしたり動作化の参考にしたりできるようにする。

2) グループ作り

読み取りの前に 3~4 人のグループをつくっておく。うさぎのこ、たぬきのこ、地の文の役を交代しながら動作化し、全員が役割をもって主体的に活動に参加できるようにする。

3) 役になりきるための準備

動作化しやすくするために、それぞれの役のお面を準備する。登場人物になりきって動きの確認をしたり心情を表現したりして、読み取りの内容を理解できるようにする。

(3) 本教材の学習の流れ

- ① 「ゆうだち」を読んで、登場人物やお話の大体の内容をとらえる。
- ② 登場人物や場所など、物語の設定を理解する。
- ③~⑥ 場面ごとに登場人物の気持ちを想像したり、登場人物になりきって動いたりする。(本時⑤)
- ⑦ 読み取りを生かして、場面ごとに動作化のための簡単な台本作りを行う。
- ⑧ 全場面を通して、動作化の発表会を行う。

(4) 本時について

登場人物の気持ちの読み取りでは、自分と同じ考えをもつ友達や違う考えをもつ友達がいることに気付けるようにする。そして、考えを交流することの楽しさや、互いに学び合うことよさを感ぜられるようにしたい。また、動作化する際は、友達と関わりながらつくり上げる活動を大切にしたい。互いの発表を見合うことで、よい部分を共有したり、改善したりして、前向きな気持ちを育成していきたいと考える。

1) 目標

雷のおかげで思わず寄り添った 2 匹の気持ちを想像し、動作化することができる。

2) 学習過程

| 主な学習活動と予想される児童の反応 | 形態 | 指導・支援【学び合う姿の評価】 |
|---|-----------------------------------|---|
| <p>1 三場面を音読し、本時のめあてと流れを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> かみなりがなったあとに、にひきはぴったりよりそっていったんだね <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>「それからすこじかんがすぎました。」のときにひきのきもちをかながえて、3ばめんのようすをうごきをつけてつたえられるようにしましょう。</p> </div> | <p>一斉 3分</p> | <ul style="list-style-type: none"> 挿絵を活用し、離れて立っていた2匹が寄りそうまでの動きを確認する。 |
| <p>2 「にひきはたおれるようにじめんにふせました。」のときの2匹の気持ちを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> すごいかみなりだな。 こわいよう、たすけて。 | <p>全体 5分</p> | <ul style="list-style-type: none"> 2匹がかみなりにおびえていることを確認する。 |
| <p>3 「それからすこじかんがすぎました。」のときの2匹の気持ちを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> こんなかみなりのときにひとりはいやだな。 けんかなんかしなければよかった。 ごめんねっていつてなかなかおもしろいかな。 | <p>グループ 10分</p> | <ul style="list-style-type: none"> 吹き出しに書いた気持ちを本文が書かれたシートに貼り、本文に沿って気持ちを想像できるようにする。 練習や交流を互いに高め合う有意義な活動にするため |
| <p>4 読みとった内容を動作化する。</p> <ul style="list-style-type: none"> はじめのうちはけんかしているから、よこをむいておこう。 「ぴったりとよりそって」だからしっかりとくっつくう。 | <p>グループ 10分 加減 9分</p> | <ul style="list-style-type: none"> 練習や交流を互いに高め合う有意義な活動にするために、動作化のポイントを明確にし、掲示しておく。 |
| <p>5 発表で見つけたよいところを交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 〇〇さんが、たぬきのこになりきってうごいているところがじょうずだなとおもいました。 はなれているところから、すこじずつくったところがいいなとおもいました。 「たたきつけるような」のぶんのよみかたがじょうずだったのでまねしたいなとおもいました。 | <p>全体 5分</p> | <ul style="list-style-type: none"> 上手に動作化していたグループを全体で確認することで、よさを共有できるようにする。 【グループで協力して動作化の仕方を考えたり友達の発表のよいところをみつけたりすることができたか。】 |
| <p>6 本時の振り返りを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> にひきがだんだんくっついていくところで、じょうずにうごくことができました。 ぴったりとよりそうときのにひきのきもちがよくわかりました。 | <p>全体 3分</p> | <ul style="list-style-type: none"> 四場面の「またしばらくたちました」という文に触れ、次時への意欲をもてるようにする。 |

3) 評価

雷のおかげで思わず寄り添った2匹の様子を表現することができたか。

4) 板書計画

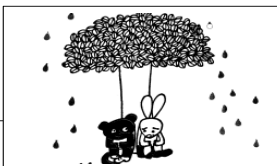
ゆうだち
めあて

「それからすこしじかんがすぎました。」のときにひきのきもちをかんがえて3ばめのようすをうごきをつけてつたえられるようにしよう。

そのとき、
にひきのあたまのうえで、
たたきつけるようなおとがなりわりました。
かみなりです。にひきは、たおれるように
じめんにふせました。

それからすこし
じかんがすぎました。

きがつくと、
にひきはびつたり
よりそっていました。



・きをつけて、だんたんくつつきました。
・びつたりくついたらあんしんしました。

5) 授業を終えて

登場人物の行動や心情を読み取りやすい物語であったため、動作化に意欲的に取り組むことができた。動作化することで、楽しみながら物語の世界に入り込むことができたのはとてもよかった。また、動作化することで場面の様子がとてもよくわかった。

しかし、動作化することに夢中になり、気持ちの変化について考えを深めていく点がやや不十分だったように感じられた。次に取り組むときは、登場人物の気持ちも読み深められるように学習を進めていきたい。

実践2 「くじらぐも」

(1) 単元について

本単元は「こえにだしてよもう」と位置づけられた物語である。児童はこれまでに、文章のリズムや言葉の響きを感じながら読んだり、動作化を通して登場人物の気持ちを考えたりしながら物語の学習をしてきた。本教材「くじらぐも」は、体育の授業時間という身近な場面から空想の世界に入り、想像の世界で存分に遊んだ後、また現実に戻るという物語である。自分たちと同じ1年生が大空で活躍する内容に、共感する部分も大きいと考える。本文をもとに想像を膨らますことや声に出して読み、想像を深める活動を大切にして、心と体を解放させ、物語の世界を読み進めていきたい。

(2) 具体的な支援と手立て

1) 挿絵の活用

黒板いっぱい拡大したくじらぐもの挿絵を提示することで、場面の中の子どもたちになりきって想像を広げやすくする。そして、多様な考えを引き出せるようにする。

2) ワークシートの活用

一人一人が吹き出しに書き込めるワークシートを用意する。自分なりに想像を膨らませ、考えをもつことを大切にしたい。そしてそれをもとにペアや全体で交流することで、活発な意見交流ができるようにする。

(3) 本教材の学習の流れ

① 学習の見通しをもつ。

②③子どもたちとくじらぐもの出会いの様子を、音読や動作化を通して読み取る。

④⑤子どもたちとくじらぐもの様子を想像を広げて読み、それを生かして音読する。

(本時 4/10)

⑥⑦好きな場面や友達といっしょに読みたいところを工夫して音読する。

⑧ 会話文の書き方を理解する。

⑨⑩くじらぐもに手紙を書き、友達が書いたもの読んで感想を伝える。

(4) 本時について

本時は、場面の中の子どもたちになりきって、本文にないせりふを想像していく。空想の世界を豊かに想像し、場面の様子を思い描いてほしい。そこで、考えをペアや全体で交流する活動を大切に、一人では考え付かないせりふや気持ちに気付けるようにする。様々な考えに触れることで、場面の様子をより豊かに想像することができ、協力して高め合うことにつながると考える。また、物語の中には、くじらぐもと子どもたちのやりとりが多くでてくる。全員で一緒に読んだり役割を分担して読んだり、友達とかかわりながら音読する場面を多く取り入れる。仲間と声を揃えることの楽しさや、友達の音読のよさを大切にしながら進めていきたい。

1) 目標

四場面の様子を想像し、その様子が表れるように声に出して読むことができる。

2) 学習過程

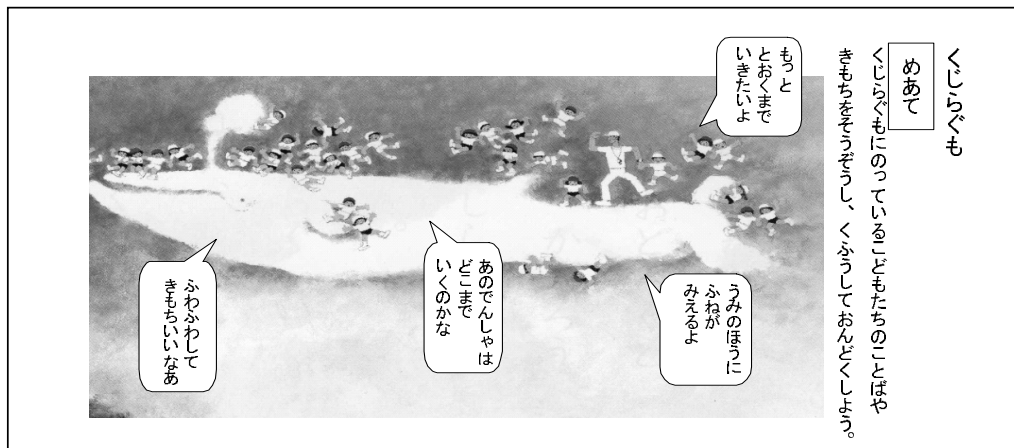
| 主な学習活動と予想される児童の反応 | 形態 | 指導・支援【学び合う姿の評価】 |
|---|----------|--|
| 1 前時までの学習を確認し、四場面を音読して本時の課題をつかむ。 | 一斉 5分 | ・やっとかくじらぐもに乗れた喜びを想起させる。 |
| くじらぐもにのっているこどもたちのきもちやことばをそうぞうし、くふうしておんどくしよう | | |
| 2 くじらぐもに乗ったつもりで、子どもたちのせりふや気持ちを想像し、吹き出しに書く。 ・ふわふわしてきもちいいなあ。 ・もっともっととおくまでいきたいよ。 | 個別 5分 | ・挿絵の子どもたちの表情や景色に着目し、想像を広げるように声をかける。 ・ペアで1枚の吹き出しに気 |

| | | |
|--|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・うみのほうにふねがみえるよ。 ・あのでんしゃはどこまでいくのかな。 ・つかまっていなくておちちやいそだよ。 <p>3 吹き出しに書いた言葉を伝え合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・くじらぐものしたにつかまっているこのきもちをか んがえたんだね。 ・よくみるとこんなけしきもあつたんだね。 ・なるほど、そのことばもいいね。 ・わたしがかんがえたことばとよくにているよ。 <p>4 色々な方法で四場面を音読する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなでいっしょによむとたのしいね。 ・ほんとうにくじらぐものにつかまっているみたいだね。 ・〇〇さんのよみかたがじょうずだね。 ・くりかえすところはだんだんおおきなこえにしてよんで みよう。 | <p>ペア 10分</p> <p>全体 10分</p> <p>個別ペ ア グル ブ 全体 10分</p> | <p>持ちやせりふを書き、黒板に張ることで全体交流につなげられるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挿絵の前に台を準備し、くじらぐもに乗っている子どもたちになりきって発表できるようにする。 ・様々な考えを知るためには、聞く姿勢が大切であることを伝える。 ・吹き出しの内容を行間に入れながら音読し、空の旅を楽しむ様子を表現できるようにする。 <p>【友達との交流を通して、四場面の様子の想像を広げることができたか。】</p> |
| <p>5 本時の振り返りを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ほんとうにくじらぐもに乗っているつもりでことばを考えることができました。 ・楽しい気持ちで音読することができました。 | <p>個別 3分</p> <p>全体 2分</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・自分の音読がどうであったか振り返りができるように観点を示し、次時へつなげられるようにする。 |

3) 評価

四場面の様子を想像し、その様子が表れるように声に出して読むことができたか。

4) 板書計画



5) 授業を終えて

「ゆうだち」の単元で動作化に取り組んでいたのも、場面の中の子どもになりきって考える活動にスムーズに取り組むことができた。雲に乗った気分になったり、雲の上から下界の景色をながめる自分を想像したりして、楽しみながら読み取りを進めることができた。自分たちと同じ1年生の子どもたちが登場人物であることから、感情移入がしやすく、気持ちも想像しやすかったと考えられる。

体育の授業をしていたとき、空に浮かぶ雲を見て、“くじらぐもみたい”とみんなでみとれ、物語の中で子どもたちがくじら雲に乗るときの言葉を唱えながら、全員でジャンプする場面があった。その様子をそばで見ていると、とてもほほえましく感じた。子どもたちにとって、「くじらぐも」の学習がとても印象的だったことが伝わってきてうれしく思った。また、学習後にくじらぐもにあてて書いた手紙も気持ちのこもったものが多く、学習の効果を実感することができた。今後も楽しみながら物語の世界に親しんでいく学習を展開していきたい。

実践3 「くじらぐも」「ことばであそぼう」

(1) 児童の実態

本学級は男子11名、女子11名で構成されている。元気いっぱいであまじい児童が多く、長放課はどの児童も外で元気に遊ぶことができる。夏休み前は、集団で遊ぶ姿はあまり見られなかったが、最近では友達同士誘い合っていて、集団で遊ぶことが多くなってきた。授業に関しては、前向きで意欲的な児童が多く、ペアやグループなど友達と関わる活動は楽しんで行うことができる。しかし、自分の思いを上手に伝えることができなかつたり、受け取れなかつたりする児童もいる。

本教材「くじらぐも」は、体育の授業時間という、児童にとっては身近な現実の場面から始まっている。そして、ふいと空想の世界に入ってくじらぐもと楽しく遊んだ後、また、現実の空間にもどる。青く広がる空に、大きく真っ白いくじらぐもが遊びに来るという設定は、児童に夢や希望を持たせ、読んだ後に温かい気持ちにさせてくれる。そのくじらぐもに乗って、どこまでも続く青空の中を海、村、町の方へと旅をする。そして、雲の上から見える風景を楽しむ場面では、物語の子どもたちになりきって自由に想像を広げることができると考えられる。児童にとっては、まだ慣れない長文の物語であるが、自分たちと同じ1年生が、大空を舞台にして活躍する内容は、共感しながら楽しく学習に取り組めるであろう。

この教材の特徴として、会話文が多いこと、挿し絵が美しいということが挙げられる。会話文の中でもくじらぐもと子どもたちの掛け合いの言葉が多く、登場人物が生き生きと描かれている。また、掛け合いの言葉によって文章にリズム感が生まれ、どの子も声に出して楽しく音読ができる教材である。言葉や挿し絵を見ながら動作化をしたり、声に出して読んだりすることでさらにイメージをふくらませ、読み深めることができるであろう。この教材では、いっしょに楽しく読んだり、役割読みをしたりして、いろいろな音読の方

法を楽しませたい。

実践① 動作化を取り入れた役割音読 「くじらぐも」

(1) 本単元で目指す子ども像

- ①想像を広げて物語を楽しむ子ども。
- ②物語の中の1年2組の子どもになりきって、気持ちを想像する子ども。
- ③役割を分担し、音読を工夫する子ども。

(2) 具体的な支援と手だて

1) 動作化をする

くじらぐもが1年生の体操のまねをしたり、1年生が手をつないで輪になるなど、動作化しやすい場面が多い。そのいずれもが集団での動作になる為、どんな動作をするか考えることは、自然に児童にとってかかわりの場となる。特に、1年生が手をつないでくじらぐもに飛び乗ろうとする場面は、みんなで力を合わせて何度も挑戦するため、自然に音読に力が入ると思われる。本単元では、綿で作ったくじらくもの模型を準備し、教師がくじらぐも役と地の文、全児童が1年2組のこども役になり、動作化を行った。

2) ワークシートの工夫

登場人物の気持ちや様子について、自分なりの考えをもつことができるようにするために、課題に対して自分の思いや考えを書き込めるワークシートを準備した。楽しく書いて、くじらぐもにお話したのかが目で見てすぐに分かるようにするために、場面絵に吹き出しをつけたワークシートにし、一冊の本のようにして、児童がいつでも前の場面の書き込みを振り返られるようにした。

3) 役割読み

自分の思いや想像したことを表現できる場を設定することで、意欲的にグループで取り組むのではないかと考えた。本時では、グループで役割を分担して音読の練習をし、くじらぐもの模型を用いながら音読発表をした。

(3) 本教材の学習の流れ

- ① 「くじらぐも」を読んで、学習の見通しをもつ。
- ②～⑤くじらぐもと子どもたちの様子を動作化を通して読み取り、それを生かして音読する。(本時⑤／⑩)
- ⑥～⑦好きな場面や友達と一緒に読みたいところを工夫して音読する。
- ⑧ 会話文の書き方(「 」の使い方)を理解する。
- ⑨～⑩くじらぐもに手紙を書き、友達が書いたものを読んで感想を伝える。

(4) 本時について

1) 目標

子どもたちが一緒に空の旅をした「くじらぐも」とお別れする様子を、動作化を通して読み取り、それを生かし工夫して音読をすることができる。

2) 準備

- ・教師・・・ワークシート（拡大）、くじらぐもの模型
- ・児童・・・ワークシート

3) 学習過程

| 児 童 の 活 動 | 学習 形態 | ○ 教師の支援・留意点 |
|--|--|--|
| 1 前時までの復習をする。 | 一斉 (3分) | ○ 物語の流れをワークシートを見ながら思い出す。 |
| くじらぐもとおわかれするところをそうぞうして、おんどくしよう。 | | |
| 3 教科書P.12～13を読み、くじらぐもに飛び乗ろうとする子どもたちと、それを応援するくじらぐもの様子を読み取る。 (1) 音読をする。 (2) 先生は何に驚いたのかを確認する。 ・ もうきゅうしょくのじこくになっていたから。 ・ あっという間に時間が過ぎて、四時間目が終わっていたから。 (3) 子どもたちの動きを動作化する。 | 一斉 (10分) 個 (5分) 一斉 (10分) グループ (10分) 一斉 (5分) | ○ 教師の支援・留意点 ○ 自分の音読の速さで各自で音読をさせる。 ○ 子どもたちやくじらぐもがどのようなことをしたのかを見つけながら音読させる。 ○ 先生が驚いたことのお昼になったこと自体ではなく、あっという間に楽しい時間が過ぎたこと、そして時間を忘れるほどに楽しんでたことへの驚きであることに気付けるよう、助言する。 ○ 教師が地の文、先生、くじらぐも役となり児童は1年2組の子どもたち役となる。 ○ 教師はくじらぐもの模型を使用し、子どもたちが場面をより想像できるようにする。 |

| | | |
|---|--------------------|---|
| <p>(4) くじらぐもと別れることになった子供たちの気持ちを想像してふきだし(ワークシート)に書き、交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ くじらぐもさん、ありがとう。 ・ またあおうね。 ・ げんきでね。ぼくたちのこと、わすれないでね。 <p>3 音読の発表をする。</p> <p>(1) 子どもたち役、くじらぐも役、地の文と先生役に分かれて音読の練習をする。</p> <p>(2) 音読の発表をする。</p> | | <p>○ ジャングルジムに降ろしてもらった子どもたちは、くじらぐもに何と言っているのか、自分だったら何と言いたいかをふきだしに書くよう助言する。</p> <p>○ 子どもたち役は「さようなら。」の後に吹き出しに書いた文を入れて音読をするようにする。</p> <p>○ 自分の役が音読をするところでなくても、動作ができればやるよう促す。</p> |
| <p>4 本時の振り返りをする。</p> | <p>一斉 (2分)</p> | <p>○ ワークシートの振り返りの欄に自己評価をする。</p> |

5) 評価

- ・ くじらぐもや子どもたちの様子や気持ちを想像し、それを生かして音読している。(活動・発表)

(5) 成果と変容

1) 動作化をする

動作化をすることにより、児童は非常に楽しんで授業に取り組んだ。教師が特に声をかけなくても、児童の中から教科書以外の「子どもたち」の言葉や動きが自然と出てきた。

動作化は、今回の単元でどの場面でも行った。最初はなかなか動けなかった児童も他の児童が楽しそうに動いている姿を見て真似をし徐々に自分なりの動作ができるようになっていった。



図 17 児童の書いたワークシート

2) ワークシートの工夫

動作化後の、ワークシートの記入はスムーズに行い、児童が記入することができた。普

段は自分の考えを書くことが苦手な児童も、「さっき言ったことを書けばいいんだよ。」と声をかけると思い出しながら書くことができた。吹き出しに書いた数には個人差があったが、たくさん書ける児童は、自ら吹き出しを増やして書いていっていた(図17)。書く時間が終わると、「〇個も書けた。」や「今日は昨日よりもたくさん書けた。」と喜ぶ姿があった。毎回、ワークシートに記入した後で全体で交流したのだが、前回の他児童の発表を聞いてワークシートに同じ言葉を記入する児童もいた。

3) 役割読み

発表に向けての音読の練習は、児童は非常に意欲的に取り組んだ。各グループの練習では、それぞれの役の立ち位置を考えたり動きを合わせる練習をしたりする姿がみられた。また、同じ子ども役の児童が同じ台詞を言わないように、何を言うか事前に打ち合わせをしたりお互いにアドバイスをしあったりする姿もみられた。役割に分かれて音読をすることで、より感情がこもり、声の大きさの変化や間が生まれた。

(6) 考察

動作化を行うことにより、自然と「子どもたち」の言葉や動きを引き出すことができた。それにより、物語の世界へより入り込むことができ、その後のワークシートの記入をスムーズに行うことができた。他の児童の発表を聞くことにより、他の児童の意見を取り入れる姿もあった。

また、動作化を行うことにより、教科書に書いてあった文章の意味を児童が理解しているのか教師側が確認できるという利点もあった。同じ動作や台詞でも繰り返しのところでは、声や動きの大きさが異なることを全員で確認することもできた。

役割読みについても、意欲的に取り組みお互いにアドバイスをし合って工夫する姿が多くみられたことから、児童にとってはとても楽しく取り組めたと考えられる。

以上の二つの点から、動作化や役割読みは低学年において非常に有効な手段であると考えられる。

しかし、ワークシートの記入時に、本文の台詞をそのまま書くのみにとどまってしまった児童もいた。想像をさらに膨らませられるような、多様な手だてを考える必要があるといえる。

実践② 他児童とかかわりながら言葉に親しむ活動 小学校1年「ことばで あそぼう」

(1) 本時で目指す子ども像

- ①文字を組み合わせると意味のある言葉になることに気付く子ども。
- ②文の中に隠れた言葉を捕いながら、言葉遊びの文を読むことができる子ども。
- ③他の児童と積極的に関わりながら、他の児童のよさに気付く子ども。

(2) 具体的な支援と手だて

- ①自分で言葉遊びの文を考える。
- ②自分で作った言葉遊びの文を問題にし、他の児童と解きあう。

(3) 本教材の学習の流れ

- ①教科書の問題を解き、言葉遊びの文を楽しむ。
- ②教科書を参考に、自分で問題を作り他の児童と交流する。(本時2/2)

(4) 本時について

1) 目標

言葉遊びを通して、文字を組み合わせると意味のある言葉になることに気づくことができる。

2) 準備

- ・教師…教科書(拡大)
- ・児童…ワークシート

3) 学習過程

| 児童の活動 | 学習形態 | ○ 教師の支援・留意点 ○ 評価 |
|---|-------------|---|
| 1 前時までの復習をする。 | 一斉 (3分) | ○ 教科書の言葉遊びの文を音読し、前時の学習を振り返る。 |
| もんだいをつくって、おともだちどうしときあいましょう。 | | |
| 3 「□がいる」「□がある」の言葉遊びの文を作る。 ・ やさいの中には、□がいる。 ・ うさぎの中には、□がいる。 ・ アイスの中には、□がある。 ・ キリンの中には、□がある。 | 個 (15分) | ○ 教師がいくつか例文を作って見せる。 ○ 「いる」と「ある」では意味が違うことをおさえておく。 ○ 後で友達と問題を出し合うことを伝えておく。 ○ 「□がいる」、「□がある」どちらも作るように促す。 |
| 4 作った言葉遊びの文を、友達と出し合う。 (1) 交流の仕方の見本を見せる。 ① あいさつをする ② ジャンケンをする ③ 勝ったから先に問題を出 | ペア (15分) | ○ 後で、どの児童の問題がよかったのか聞くことを事前に伝えておく。 ○ たくさん作った児童は、どれかを選んで |

| | | |
|--------------------------------------|------------|---|
| し合う ④ あいさつをして分かれる (2) 友達と交流する。 | | 出すようにする。 |
| 5 よいと思った言葉遊びの文を作った児童を紹介する。 | 一斉 (2分) | ○ なかなかでない場合は、おもしろいと思ったものや難しかったものを紹介するよう促す。 ○ 紹介された児童には、その文章を音読させる。 |

4) 評価

言葉遊びの文を作り、積極的に交流することができたか。(行動・発言)

(5) 成果と変容

1) 自分で言葉遊びの文を考える。

第一時で、「いる」と「ある」の違いを話し合い確認しておいたため、本時では全員の児童が二つの言葉を間違えることなく用いることができた。

学習の能力差が大きいという学級の実態があるのだが、どの児童も「友達に問題を出して解きあう」という目的のために、真剣に言葉遊びの文を考えていた。語彙力のある児童は、いろいろな種類の問題や難しい問題を出すために思考し、語彙力の少ない児童は、一つつくることを目標に言葉遊びの文を作った。能力差が大きくても、それぞれがそれぞれの目標に向かって取り組むことができた。

2) 自分で作った言葉遊びの文を問題にし、他の児童と解きあう。

本学級では、平素よりフリーペアの交流を積極的に取り入れている。また、友達の記事を読みあうなどの交流では、読んだものを返すときによいところを言ってから返すようにしている。

今回のフリーペアの交流でも、相手を次々とかえ積極的に関わっていく児童の姿が非常に多くみられた。自分が思いつかない問題を出された後には、「〇〇くんの問題おもしろいね。」や「全然思いつかなかったよ。」と声をかける姿もみられた。

全体の場で、よいと思った児童の言葉遊びの文が紹介されると、「すごいね。」や「なるほど。」とつぶやく児童が多くいた。また、紹介された児童は嬉しそうにしていた。

(6) 考察

他の児童との交流を活発に行うことができるという学級の実態から、ペア交流を取り入れた授業を行うことにより、楽しみながら言葉に親しむことができた。言葉遊びの文を考えることについては、「友達に問題を出す」という目的があったため、意欲的に取り組むことができたと考えられる。語彙力の少ない児童は「とにかく言葉遊びの文を作ること」、語

彙力の多い児童は「たくさんの文を作ること」や「難しい文を作ること」が自然と目標になり、一人一人がそれぞれに文を作ることにも励んだと考えられる。

今回の実践により、学級の実態を考慮した上で他の児童と関わりながら授業を行うことは有効だと考えられる。

実践3 動作化を取り入れた音読劇 小学校1年「くじらぐも」

(1) 子どもの実態

本学級の児童は、明るく、元気があり様々な活動に対して、前向きに取り組むことができている。物語の読み取りも楽しく行い、登場人物の気持ちを考える活動が大好きな児童が多い。しかし、語彙が非常に少ないため、読み取りが深まることなく終わってしまうことが多い。

本文の表現や描写をふまえたうえで、登場人物の気持ちを考え、それを友達同士で伝え合い、深めていき、また、音読で表現することによって微妙な表現の違いも意識できるようにしていきたい。教科書の様々な表現に親しみをもち、教科書の本文を意識した読み取りを行っていき、豊かな言語力を身につけていきたい。

(2) 本単元でめざす子ども像

- ①登場人物の気持ちを想像しながら音読する子ども。
- ② 自分の考えを伝えるための根拠を本文から探し、友達に伝える子ども。

(3) 具体的な支援の手だて

①動作化を交えた音読劇を単元の最後に行う

気持ちの高まりや変化を体で感じていくために、登場人物の気持ちを考えたあとに、動作化を交えた音読劇を取り入れる。

②話し合いがスムーズに進むような話形を提示する

ア「はい、…です。わけは…です。どうですか。」

イ「〇〇さんと同じで…です。」

「〇〇さんと反対で…です。」

「〇〇さんに付け足しで…です。」

自分の考えに自信をもてず、自分の考えを伝えないまま授業が終わってしまうことがないように、自分の考えを伝える場として、グループの時間を設定した。自分の考えと比べて友達の考えを聞けるような話形にし、考えを深められるようにしていく。

③登場人物の気持ちを書き込めるワークシートの活用

本文を意識し、自分の考えの根拠となる言葉や文を探すことができるようにするため教科書の本文もめがねをかけた。また、同じセリフでも表現の仕方が違うということが意識でき、表現に変化をつけられるようにするため、本文の中の気持ちが変わる前後に気持ちを書き込める吹き出しを入れた。

(4) 本時について

1) 目標

- ・くじらぐもや子どもたちの気持ちを想像しながら音読をすることができる。
- ・進んで自分の考えを友達に伝えることができる。

2) 学習過程

| 段階 | 児童の活動 | 学習形態 | ○ 教師の支援・留意点 ○ 評価 |
|--|---------------------------------------|-------------|---|
| 1 | 前時の学習を振り返る。 | 全体 | <input type="checkbox"/> 2場面でくじらぐもが雲の上に乗るように誘い、子どもたちが雲の上に乗ろうとはりきっている様子を確認する。 |
| 2 | 本時のめあてを確認する。 | 全体 | <input type="checkbox"/> 本時の学習活動を確認するために単元の流れを示し確認する。 |
| <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;"> こどもたちをおうえんするくじらぐものきもちをかんがえておんどくしよう </div> | | | |
| 3 | 3場面を音読する。 | 個 | <input type="checkbox"/> くじらぐもや子どもたちがどんなことをしているか、考えながら音読するよう指 |
| <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;"> 発問：くじらぐもと子どもたちがしたことを見つけよう。 指示：子どもたちがしたことは棒線で、くじらぐもは波線で引こう。 </div> | | | |
| 4 | くじらぐもや子どもたちがしたことに線を引く。 | ペア | ○ 困っている児童には、挿絵をヒントにして考えるように伝え、そばで読むようにする。 <input type="checkbox"/> ペアの子が線を引き終わった児童は、線を引いたところ確認するよう声を掛ける。 |
| <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;"> 発問：くじらぐもは、三十センチのジャンプと五十センチのジャンプを見て、心の中で、子どもたちにどんな応援をしているでしょう。 指示：三十センチのジャンプの後の吹き出しに気持ちを書こう。書けた子は五十センチの後の気持ちも書こう。2回の応援は同じか考えて書きましよう。 </div> | | | |
| 5 | くじらぐもの気持ちを読み取る。 ・ まだまだ。もっとこえをそろえて。 | 個 グル | <input type="checkbox"/> 子どもたちがくじらぐもにのろうとが んばっていて、くじらぐももそれを応援しようとしていることを確認する。 <input type="checkbox"/> 自分が書いた吹き出しが本文のどこから考えたか確認するよう伝え、気持ちを書き込んだ根拠の文を赤線で引くように伝える。 |

| | | | |
|---|--|-----------------------|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・ そのちょうし。あとひといきだよ。 ・ さっきよりとべたね。 | <p>ープ</p> <p>全体</p> | <p>○ 何を書いていいのかわからない児童には、1回目と2回目は乗れていないこと、くじらぐもは応援していることを一緒に確認する。</p> <p>□ 友達の考えを聞いて、なるほどと思った意見は、書き加えても良いことを確認する。</p> <p>【自分が考えた気持ちを根拠とともに友達に伝えることができていたか（交流の様子）】</p> |
| <p>発問：くじらぐも、子ども、ナレーターに分かれて音読をしよう。</p> <p>指示：くじらぐもや子どもになりきって、動作をしながら音読をしていきましょう。</p> | | | |
| | <p>6 グループで役割分担をし、くじらぐも、子ども、ナレーターに分かれて動作を交えて音読する。</p> | <p>グループ</p> <p>全体</p> | <p>□ 音読の仕方をどのように工夫したかをワークシートにメモをするように伝える。</p> <p>□ 役割を交代して音読をするように伝える。</p> <p>【自分の考えた気持ちをもとに、本文を工夫して音読することができたか（音読の様子）】</p> |
| <p>振り返る5分</p> | <p>8 本時の活動を振り返る。</p> | <p>個</p> | <p>□ 本時の学習で気持ちを考えながら工夫して音読ができたかを自己評価する時間を作る。</p> |

5) 成果と課題

同じパターンで読み取りの活動を進めたので次の活動に移るまでが早くなり、交流の時間が多くとれたように感じた。動作を交えた音読劇を取り入れジャンプをしたり手をつないだりすることで、登場人物の気持ちの高まりを実感し、グループで相談しながら声の大きさ、速さなどに変化をつけることができていた。また、自分が考えた気持ちをふまえ、さらに本文の表現に着目し、音読ができていたように感じる。楽しそうにグループで活動ができたので、子どもたちも満足し、次時の活動も楽しみにしている様子が見られた。ワークシートには、本文中の会話文の後に気持ちを書く吹き出しを入れたことでその本文前後から根拠を考え気持ちを書き込むことができていた。「やっ」と「こんどは」など、細かい表現に目をつけていた子どもから全体に広げることができた。

最後は、教師が意図的に指名した友達グループの音読劇を確認し、そのグループの劇から学んだことを全体で確認し、全体で音読劇を行った。しかし、音読劇からわかったことをふまえて自分が書いた気持ちを書き直すところまでにはいたらなかった。全体で確認し

たことを最後に、個々で振り返って付け加えたり訂正したりする時間の確保を十分に行っていきたいと考える。

実践4 仲間と関わりあいながら言葉に親しむ学習 小学校1年「くじらぐも」「ことばであそぼう」

子どもの実態

本学級は、男子15名、女子16名、合計31名の明るく元気で意欲的に取り組める児童が多い。しかし、自信がないために意見が言えない児童や、興味をもって参加できない児童もいる。また、普段の生活の中でトラブルがあったときに、言葉が出ずに、手が出てしまう児童もいる。また、話を集中して聞くことに課題があり、興味をもって話を聞くことが難しい児童も多い。

集団生活の中で友好的な人間関係をつくるときに、言葉はとても重要である。自分の気持ちを相手に伝える手段としてだけでなく、相手の考えや気持ちも言葉にして聞くことで、理解することができる。また物語文から、登場人物の気持ちを読み取ったり、仲間と伝え合ったりする中で、いろいろな考え方を知ることができる。言葉の楽しさや面白さを授業や日常生活の中で実感させていく中で、言葉を大切にし、自分の言葉で表現する児童を育てていきたいと考えた。

話を聞く力・話す力を育てるために、児童同士が興味をもって関わり合える場を多く設定した。「話すこと」に関して、9月から朝のスピーチを継続して行っている。最初は、テーマを「好きな○○」として、話をすることが苦手な児童にも、負荷が大きくなりすぎないように配慮した。また、「私の好きな○○は、・・・です。理由は、～です。」という話形を示すことで、安心して取り組めるようにした。2文で話すことで簡単に話をすることができ、話すことに抵抗がないように心掛けた。スピーチでは、話し方名人と聞き方名人として、それぞれ3つのめあてをもって取り組むようにした。また、自分の意見を発表するときには、必ず理由も言えるように言葉かけをした。文章題や説明文などで、どうしてそう考えたのか、自分の考えを振り返って説明できるようにした。その中で、相手の意見に耳を傾け、受け入れたり、取り入れたりできるようにしていきたいと考えた。

「聞くこと」に関しては、聞きたいという気持ちを高めていくことを大切にしたい。朝のスピーチでも、児童が興味をもって聞くことができる話題を選んで提示したり、児童からどんな話題がいいのかを聞き取り入れた。

国語の授業では、繰り返し音読を行う中で、登場人物の気持ちを考える場面などでは、多様な考えを認め、それぞれの考え方を受け止めていく中で、自分の考えを話したいという気持ちや友達の話を知りたいという気持ちを高めていけるようにした。

実践① 小学校1年「くじらぐも」

(1) 本単元で目指す子ども像

- ①登場人物になりきって、気持ちを想像することができる子ども
- ②友達の意見に耳を傾けて多様な考えを聞きたいと感じられる子ども
- ③自分の考えを進んで仲間に伝え、理由を言える子ども
- ④言葉の意味に注目して、言葉を大切にして物語を読もうとする子ども

(2) 具体的な支援と手立て

1) 伝い合う場の設定

自分の思いが、仲間に伝わったり、よいところを認めてもらったりすると嬉しいと感じるような授業展開が豊かな言語力が身につくと考えられる。自分の思いを大切にしてもらう経験を繰り返すことで、仲間の思いも大切に扱う気持ちをもつことができ、自分とは違う考えにも興味をもって耳を傾けることができ、より深く物語を読むことができると考えられる。そのために、ペア交流の後に全体で交流するなど、少しずつ話し合いの構成人数を増やすことで、発表が苦手な児童にも安心して伝えあえるようにした。

2) 掲示物の工夫

この物語は、小学一年生の児童がくじらの形をした雲に飛び乗って、みんなでいろいろなところに旅する楽しさがある。児童には具体的なイメージを膨らませて考えられるように、黒板いっぱいになるくじらぐもの掲示物を作成し授業の度に掲示した。また、実際にくじらぐもに乗る自分の姿を画用紙に好きなポーズで作ることにし、より意欲的に学習に取り組めるようにした。また、くじらぐもの好きな位置に、好きな体勢で乗れるように磁石で動かせるようにした。自分の画用紙を自由に思い通り動かす作業をする時間を十分にとることで自然とくじらぐもに、自分が乗ったときの会話が考えられるように配慮した。

(3) 本教材の学習の流れ

- ①「くじらぐも」を読み、あらすじをとらえる。
- ②～⑧くじらぐもや子どもたちの様子や気持ちを想像しながら読みとり、音読を楽しむ。
(本時6/8)
- ⑨⑩くじらぐもに手紙を書く。

(4) 本時について

本時に学習する場面の音読をしたあと、児童は、くじらぐもの自分の好きな場所に自分の画用紙を乗せていった。他の友達が置く様子を見ながら、乗せる位置を変更する児童もいた(図18)。その後、全員が黒板のくじらぐもに乗せたところで、黒板前に集まり、くじらぐもの「どの場所で」、「どのような姿」で乗っているかを全体で確認する時間を設けた。教師は1人ひとりのポーズや、乗っている場所に注目しながら、どんな気持ちでいるのかを問いかけた。その後、自分や



図18 活動の様子

友達がくじらぐもに乗ったらどんなことをしゃべっているのだろう、どこにいこうとしているのだろうと投げかけ、会話の内容をノートにまとめた。その後、隣の席の児童との交流、班での交流全体での交流をして、クラス全員が楽しくくじらぐもにのった雰囲気を味わって、授業を終えた。

(5) 成果と変容

くじらぐもにのって楽しく会話する場面をどの児童も想像することができた。くじらぐもの掲示物を用いたことで、隣の友達の様子や、くもをさわった感じ、高いところからの景色など、教科書の本文には載っていないことまで想像して考えることができた(図 19)。

また、自分では思いつかなかった表現や場面の様子を、友達との交流を通して、学びあうことができた。どの児童も、自分の考えた言葉を仲間に伝えたい思いと同時に、仲間の考えた言葉を知りたいという気持ちをもつことができた。

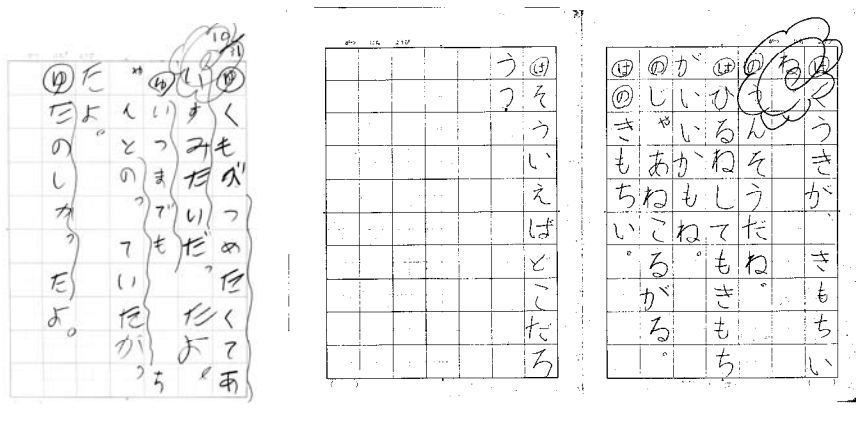


図 19 児童が書いたノート

実践② 小学校1年「ことばであそぼう」

(1) 本単元で目指す子ども像

- ①言葉に興味をもち、いろいろな言葉を進んで使おうとする子ども。
- ②言葉のまとまりを意識しながら、声に出して読む子ども。
- ③友達と関わりながら学習し、互いに認め合い進んで学習に取り組もうとする子ども。

(2) 具体的な支援と手立て

- ①自分で作った言葉遊びの文を友達と交流することにより、自分と違う意見を知る楽しさを実感したり、互いの意見を認め合ったりすることができるようにする。
- ②教科書に載っている文や、自分たちが作った言葉遊びの文を声に出して読むことで、言葉のリズムや響きを味わうことができるようにする。
- ③グループでの活動がスムーズに行われるように、順番や役割を明確にする。

(3) 本教材の学習の流れ

- ①教科書の文の中に隠れている言葉を補い、おむすび言葉遊びの文を声に出して読む。
- ②おむすび言葉遊びの文を作るために、具になる言葉を探し、友達と交流し問題を作る。

(本時)

- ③自分の作ったおむすび言葉遊びの問題を出したり、友達の作った文を声に出して読みだりする。

(4) 本時について

1) 目標

- ・自分の見つけたおむすびの具になる言葉を、友達と伝え合い、たくさんの言葉を集めることができる。
(関心・意欲・態度)
- ・集めたおむすびの具の言葉を使って、おむすび言葉問題をつくることができる。
(書く能力)

2) 学習過程

| 段階 | 学習活動 | 教師の支援と留意点 | 評価(評価方法) |
|-------|--|--|---|
| つかむ5 | 1 本時の学習課題と流れをつかむ。 [齊] | ○おむすび言葉の問題を作るために、みんなで協力しておむすびの具になる言葉をたくさん集めることを伝える。 | ○本時の学習課題をつかみ、学習意欲をもつことができたか。 (表情) |
| | おむすびのぐになることばをたくさんみつけて、ともだちにおしえてあげよう。あつめたことばで、おむすびことばもんだいをつくろう。 | | |
| とむく35 | 2 教科書の言葉遊びの文を音読する。 [個] 3 言葉の意味で仲間分けしながら、おむすびの具になる言葉を考える。 [個] ・動物・虫 ・魚 ・果物 4 自分が集めたおむすびの具になる言葉を紹介する。 [グ]→[全] 【伝え合う力】 | ○言葉のまとまりを意識しながら、リズムよく音読するように指示する。 ○おむすびの具になる言葉をグループごとに担当することを確認する。 ○具になる言葉は、2～3 文字程度がよいことを説明する。 ○グループで集まった具になる言葉を、ホワイトボードに記入し、黒板に貼るように指示する。 ○みんなで協力したことで、たくさんの言葉が集まったことを確認 | ○具になる言葉を意欲的に集めることができたか。 (ワークシート) ○友達との交流で、自分のおむすびの具になる言葉を増やすことができたか |

| | | | |
|-------|---|--|--------------------------------|
| | 5 自分や友達との交流で集めたおむすびの具になる言葉を使って、問題をつくる。 個 | する。 ○誰もが、意欲的に問題作りに取り組めるように、目標の問題数を示す。 | (ワークシート) |
| まとめる5 | 6 本時の学習を確認し、次時の予告をする。 斉 | ○次時では、自分で作った問題で友達とおむすび言葉遊びのクイズ大会をすることを確認し、意欲をもたせる。 | ○学習をふりかえるとともに、次時への意欲がもてたか。(表情) |

3) 評価

- ・自分が集めたおむすびの具になる言葉を友達に紹介することができたか。
- ・自分たちで集めたおむすびの具になる言葉を使って、おむすび言葉の問題作りができたか。

4) 板書計画

ことばであそぼう

おむすびの具になることばをたくさんみつけて、ともだちにおしえてあげよう。あつめたことばで、おむすびことばもんだいをつくろう。

① かぼんのなかには、なにがいます。
 ② かぼんのなかには、かばがいます。

おむすびの具になることば

① どうぶつ ② さかな

・さる・うし・りす ・たい・いか・たこ
 ・とら・さい・かば ・えい・さば・ふぐ
 ・くたもの ③ そのた
 ・くり・もも・なし ・いす・べん・のり
 ・びわ・かき ・ふで・くつ

◎ みんなでみつけたおむすびの具になることばで、もんだいをつくろう。

れい(トラック)のなかには、(トラ)がいる。

おむすび

もんだいのかず

五もんいじよ
 三もんいじよ
 一もん

😊
 😊
 😞

(5) 考察と今後の課題

①自分で作った言葉遊びの文を友達と交流することにより、自分と違う意見を知る楽しさを実感したり、互いの意見を認め合ったりすることができるようにする。

どの児童も「友達に問題を出して解きあう」という目的のために、積極的に言葉遊びの文を考えることができた。目標を段階的に設定したことで、どの児童も自分で決めた目標にむけて活動することができた。

②教科書に載っている文や、自分たちが作った言葉遊びの文を声に出して読むことで、言葉のリズムや響きを味わうことができるようにする。

教科書に載っている問題を、タンブリンを使ってリズムよく音読することを繰り返し行った。読む速さや声の大きさなど意図的にかえるようにすることで、児童も楽しく言葉に親しむことができた。言葉のまとまりを意識して読むことができた。

③グループでの活動がスムーズに行われるように、順番や役割を明確にする。

低学年での、グループ活動では、まだ児童同士の関わりあいは十分でない。また、学習の能力差によって、学習意欲をもてない児童もいる。そのため、ひとりひとりの学習の力が、学級全体のためになることを押さえて、全員で学習に臨むことができるようにした。

「仲間のため」という意識をもつことで、主体的に取り組む姿もみられた。実際に問題を作るときには、1人では問題を作ることができない児童も、黒板に掲示された言葉を使って作成することができた。

(6) 考察

一年生の児童にとって、楽しく学習することは大切な要素になると実感した。今回の実践では、児童が楽しみながら、友達と積極的に関わり学習に取り組む姿が多く見られるようになった。しかし、語彙を増やしていくことも含め、言葉を扱う学習は、繰り返しかえし設定していかななくては、力が付きにくいことも感じた。

今後も、日常生活を含め、国語の学習の中で繰り返し言葉を大切に扱っていくことが必要だと考える。朝の会で、継続的にスピーチ活動をすることで、友達に話す楽しさを感じる児童が増えてきている。一週間に1回話をするので、声も少しずつ大きくなり、相手を意識できるようになってきている。また、話の内容も増えてきて、テーマに沿って話をする中に、自分の経験や知っていることなどを取り入れ、より詳しく楽しい話をしたいと思う児童が増えてきた。話すことが苦手な児童も、話す経験を重ねていくことで慣れてきている姿もみられ、児童にとって反復練習は大切な学習だと分かった。

物語文では、積極的に音読や動作化を取り入れ、一つ一つの言葉に注目して読み取っていく力を身に付けさせたい。自分で考える楽しさと友達に意見が伝わる喜びを感じる活動を通して、交流の中で他者の意見をもっと知りたいという気持ちを高め、互いを認め合う気持ちを育てていきたい。

実践5 小学校2年「スイミー」

(1) 子どもの実態

本学級は児童数2名の少人数の単式学級である。子どもは、本を読むことを好み、朝の活動での読書や図書室の本の貸し出しを楽しみにして、自分の好きな本を読んだりたくさん本を借りたりしている。特に、教科書の学習で出会ったレオ＝レオニやアーノルド＝ローベルの作品を読むことを好んでいる。

「声に出して読むこと」については、1年生で語や文のまとまりごとに読む練習を重ねており、2年生教材「ふきのとう」で動作化を取り入れた役割読みを体験した。子どもは、はっきりとした発音で文章を読むことができています。

「読むこと」については、「ふきのとう」や「たんぼぼのちえ」の教材で、場面ごとに課題を立てて、課題に対して個人で解決し、みんなで考えを出して学び合う学習を体験し、自分の考えをもつ喜びとそれをみんなに話したいという意欲が高まってきている。

(2) 本単元で目指す子ども像

- ①登場人物の様子をとらえ、気持ちを想像しながら音読をすることができる子ども。
- ②自分の考えを表現したり、仲間の意見を聞いたりする学び合いの活動を通して、自分の読み取りと仲間の考えを比べながら自分の読みを深めることができる子ども。
- ③場面の様子や登場人物の行動を読み取り、人物の気持ちを想像して、吹き出しに書くことができる子ども。

(3) 具体的な支援と手立て

1) 音読指導の形態の確立

スイミーは、体言止め、倒置法や比喻といった多様な表現方法によって、海の中の情景描写や主人公の気持ちが生き生きと描き出されている。よって、叙述にそって場面ごとの様子や気持ちを豊かに想像し、読み取っていくのに適した教材である。

本教材は、スイミーの悲しみから喜びに至るまでの気持ちの推移が、周囲の情景と共に詩的な「言葉」で簡潔に表現されており、常体で書かれた引き締まった本文はリズムカルで音読にも適している。

そこで、スイミーの単元に入った段階で、子どもたちと読み方を確認しながら、初読の形態を確立した。さらに、様々な音読指導を取り入れることで、子どもたちが楽しさを実感しながら繰り返して音読をするように工夫した。

2) 言葉を大切にしたい学び合い

自分の思いが、仲間に伝わったり、よいところを認めてもらったりすると嬉しいと感じるような授業展開が豊かな言語力が身につくと考えられる。そのためには、本文の「言葉」を用いて、自分の考えの理由を明確に表現する必要がある。読み取りの観点をもとにして、自分の意見を述べるのであるが、一人で考え続けても読み取りは決して深まらない。そこで、「言葉」を大切にしたい学び合いを行うことで、自分とは違う考えに触れたり、様々な考えに触れたりして、「新たな言葉」に注目しながら読みを深めることができると考えた。

自分の考えの理由を具体的に表現することで、聞き手は発言の内容の理解を深め、話し手を認めていくのである。話し手は、認められたことで成就感を味わうのである。この「言葉」を大切にしたい学び合いを、読み取りの中核に位置づけた。

3) 読み取った内容のまとめの指導

文章中の言葉を引用しながら、本時の学習をまとめる活動を行った。学び合いで獲得した本文の「言葉」を意識しながら、吹き出しに登場人物の台詞を書くことで、「言葉」にこだわり「言葉」を大切にしようとする気持ちを高めるようにした。

本時の終末では、本文の「言葉」をもとにした吹き出しに動作を加えて発表し、動作化と言語化の連携を図った。

(4) 本单元について

1) 単元

本と友だちになろう 教材：スイミー（文学的文章）

2) 単元目標

話す・聞く……書いたものを読み合い、よいところを見つけて感想を伝え合うことができる。

書く……様子を表す言葉を使って感想を書くことができる。

3) 学習の流れ

- ①スイミーを読んで初発の感想を交流しよう。
- ②視点（登場人物・中心人物・時・場所・出来事）にそって物語のあらすじをとらえよう。
- ③楽しく暮らすスイミーの様子や特徴を読み取ろう。
- ④まぐろとスイミーの様子を読み取ろう
- ⑤元気を取り戻していくスイミーの様子を読み取ろう。
- ⑥赤い魚たちと出会ったスイミーの様子を読み取ろう。
- ⑦大きな魚を追い出したスイミーたちの様子を読み取ろう。

(5) 本時について

1) 目標

- ・ひとりぼっちになったスイミーの様子を挿絵や文からとらえ、気持ちを想像しながら発表することができる。（話す・聞く）
- ・場面の様子やスイミーの行動を読み取り、人物の気持ちを想像して、吹き出しに書くことができる。（書く）

2) 準備

- ・教師…挿絵
- ・児童…学習プリント

3) 学習過程

| 時間 | 学 習 活 動 | 教 師 の 支 援 と 評 価 |
|------------|------------------------------|--|
| 導入 (5分) | 1 登場人物の確認をする。 2 学習課題をつかむ。 | ○本時の学習場面を確認する。 ○学習課題を読み、まぐろやスイミーの様子が分かる言葉に着目しながら読み取っていくことを確かめる。 |
| | まぐろがきたとき、スイミーは何といったのだろう。 | |

| | | |
|---------------------|---|---|
| <p>展開 (35分)</p> | <p>3 課題解決の見通しをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> 音読をする。(一斉読み、一人読み) <p>4 まぐろの様子を読み取り、二人で意見を伝え合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> どんなまぐろがきたのかを考える。 その理由を、文章の表現をもとに考える。 まぐろのおそろしい様子を伝え合う。 <p>5 スイミーの様子を読み取り、二人で意見を伝え合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> まぐろがきたとき、赤い魚とスイミーはどうなったかを考える。 スイミーの様子分かる言葉を見つける。 見つけた言葉を全体場で発表する。 仲間と交流してスイミーの様子分かる言葉に注目し思考を深める。 ひとりで泳いでいるスイミーはどんなことを言いたのかを吹き出しに書く。 | <p>○場面の様子を捉えることができるように声の大きさや読む速さなどの音読の視点を示す。</p> <p>○まぐろやスイミーの様子が分かる言葉を強調しながら範読する。</p> <p>○まぐろの様子分かる言葉を的確に捉えることができるための手立てとして、分かりやすい例を挙げる。</p> <p>○まぐろのおそろしさが分かる言葉に基づいて、スイミーがどんな気持ちだったのかを想像できるように授業を進めていく。</p> <p>○スイミーの様子分かる言葉を見つけた児童に対して、「その言葉から、スイミーは、どうしてそのように思ったのか。」と、切り返しの発問を行い、スイミーの心情の考察を深めていく。</p> <p>※スイミーの様子分かる言葉をもとに仲間に伝えているか。(話す・聞く)</p> <p>※スイミーの様子を想像して吹き出しに書いているか。(書く)</p> |
| <p>まとめ (5分)</p> | <p>6 本時の学習をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> スイミーになりきり、ひとりぼっちで泳いでいるスイミーの様子を伝え合う。(動作化) <p>7 今日の学習について振り返る。</p> | <p>○スイミーの気持ちに迫るために、動作化を意図的に仕組む。</p> <p>○表現できた児童を賞賛し価値づける。</p> |

4) 評価

- 登場人物の様子を挿絵や文からとらえ、豊かに想像して発表し感想を伝え合うことができる。(話す・聞く)
- 様子を表す言葉を使ったり、大事な文を抜き出したりして、吹き出しに登場人物の気持ちを書くことができる。(書く)

(6) 成果と変容

1) 音読指導の形態の確立

本単元ではスイミーの単元に入った時に「読み方を確認させる初読の形態」を導入した。

- ① CDを聞かせる。
- ② 教師が全文を範読する。
- ③ 文節ごとの追いかけて読みをする。
- ④ 一文ずつの追いかけて読みをする。
- ⑤ 段落ごとの追いかけて読みをする。

この音読の方法は、CDや教師の範読が、子どもにとって大変効果的で抵抗感なく音読に取り組むことができたと言える。文節ごとや一文ずつの音読をすることも、その変化を楽しみながら行うことができた。ただし、音読をする上で、子供達が楽しさを実感しながら繰り返して音読をするために、マンネリに陥らないように工夫した。その工夫とは、音読に新たな変化をもたらすことであった。以下が、実践した主な音読の形態である。

- ①一斉読み・・・全員で声を揃えて読む。
共読み・・・教師と子どもたちが共に（一緒に）に読む。語句の読み・アクセント・速さ・抑揚・間を教えるのに有効である。
- ③追いかけて読み・・・教師が一文、または、一節を区切って読み、子どもたちがそれに倣って読む。
- ④一文読み・・・一人一文のリレー読み。長い文と短い文があるが、リレーの継ぎ目のところに段差ができないように練習することが集中した読みにつながる。
- ⑤段落読み・・・一人一段落のリレー読み。
- ⑥役割読み・・・会話文と地の文、また、登場人物を担当して読む。日本語力の差、声の高さや話し方の速さ等に配慮して適所を各人に割り振ることによって、誰にも成就感を味あわせることができる。
- ⑦唇読み・・・唇だけを動かして読む。黙読では、難しい語を飛ばして読んだり、誤読に気づかなかつたりする。ほとんど聞こえないくらいの声量だが、唇を動かすことでそれらが防げる。ほかの人が読むのを聞いているときは、これをさせる。

こうした変化のある音読をすることで、楽しみながら言葉に親しんだり、言葉を獲得したりすることができるようになった。つまり、変化のある音読を楽しみながら行ったことで、本文の内容の理解を深め、気持ちをこめた読み方ができるようになった。楽しみながら音読をすることが、文章内容の理解の深まりにつながり、豊かな言語力が身につくと考えられる。

2) 言葉を大切にしたい学び合い

自分の思いが、仲間に伝わったり、良いところを認めてもらったりすることが、子どもたちにとっての「嬉しさ」である。そして、これが、国語の「楽しさ」なのである。

単元の初めでは、自分の思いを分かってもらえなかった。自分が思ったことを、ただただ言うだけだったからである。自分の思いを仲間に理解してもらうためには、具体的な「言葉」が必要なのである。主体的な読み取りの中で、本文の「言葉」を意識することで、その言葉を引用しながら自分の思を伝達することができるのである。

そこで、主体的な読み取りをするために、読み取りの観点を教え、どこでも、どの作品でも通用する読み取りの手段・方法として児童に獲得させ、文章の内容全体を把握し、大切なポイントは何かということを押めるようにした。

〈 読みの観点 〉

- ・登場人物はだれか？
- ・中心人物はだれか？
- ・場所は？ ・いつのことか？
- ・どんなことが起こったか？
- ・スイミーの気持ちがわかる言葉は？

表層的な解釈や恣意的な思いつきではなく、「この言葉・表現から、自分はこう考えた」という発言を互いに交流できるのが授業の本質であると考えた。そのため、適度に精読を行い、考えの根拠となる「言葉」にこだわり続けることを大切にしたい。

さらに、気持ちや様子を深く想像するために、「言葉」を大切にしたい「学び合い」を位置づけた。叙述の中から「言葉・表現」を根拠にして、自分の考えや思いを仲間に伝え、課題に対する読み取りを深める「学び合い」を行った。この活動を行っていくと、徐々に自分の思いや考えが、仲間に理解してもらえるようになった。この瞬間が、子ども達にとって、ものすごく楽しいと感じた時であった（図 20）。学び合いによって、新しい言葉に気付くことができ、仲間との交流が深まっていった（図 21）。



図 20 学び合いの様子

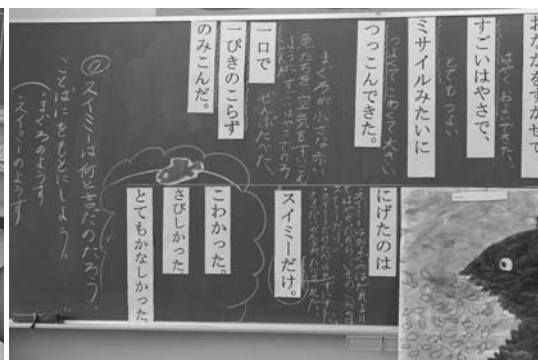


図 21 学び合いによって深まった考え

3) 読み取った内容のまとめの指導

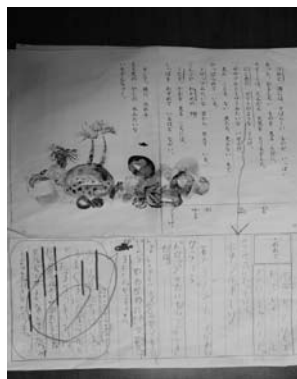
読解は表現と表裏一体をなすものである。読解力を高めるためには、表現力を高める必要があると考えた。

そのために、本単元では児童の実態や学習内容に合わせ、1時間ごとの学習のまとめとして、様々な「書く活動」を取り入れた。中でも、スイミーになりきって、気持ちを発表する動作化の活動は、「言葉」を大切にできたかを振り返る貴重な場となった(図22)。これにより、児童は読み取ったことを更に自由を膨らませながら、自分の考えや思いを十分に表現することができた。「書くこと」の活動で重要な



図22 動作化の様子

は、本文の言葉を根拠にして、自分の思いを表現することであると考えた。そこで、スイミーの気持ちを吹き出しに書く活動では、本文の言葉をどのくらい取り入れているのかを意識しながら、気持ちを書き込んだ(図23)。この活動を行った当初は、わずか3つほどしか本文の言葉を用いることができず、発言の内容に具体性が欠如していた。しかし、学習に慣れてくると、本文の言葉を多く取り入れて、まとめの内容に具体性をもたせるようになった。一つ一つの言葉に注目しながら語彙の数を増やし、言葉を大切にしていける姿が見られるようになった。



8つの言葉を引用



5つの言葉を引用



8つの言葉を引用

図23 本文の言葉を根拠にした吹き出し

(6) 考察

今回の実践では、変化のある音読指導が大変効果的であった。子どもたちは、リズムの変化を楽しみ、何度も音読に挑戦する姿が見られた。様々な音読の形態を工夫したことで、子どもたちは飽きることなく楽しんで取り組むことができた。音読をすることで、本文の内容を深く理解し、新しい「言葉」と出会うことができた。この音読指導は、子どもたちが豊かな言語力を身につけていける方法の一つであろう。

「言葉」を大切にしたい学び合いの場面では、登場人物の心情に迫る言葉に注目しながら、自分の意見を発表することができるようになった。しかし、互いが似たような意見のときに、学びの深まりが感じられない場面があった。注目した「言葉」が同じ場合、新しい「言

葉」の発見につながらず、思いが深まっていくことがなかった。このように、学級2名での「学び合い」には難しさを感じている。わずか2名だけの学び合いで、互いの考えを深めていくために、「切り返しの発問」や「深めの発問」の質を高めていくことが課題である。

一方で、文章を正確に読み取り、本時の課題にそって、文章中の言葉を使って読み取ったことを吹き出しにまとめることができるようになった。さらに、その吹き出しを動作化し、気持ちを表現することが、「言葉」を大切にする意識を高めることにつながった。子どもたちは、吹き出しの動作化を楽しみにしていた。「言葉」に注目してまとめた吹き出しの動作化は、見る側にとって分かりやすく、本時の課題につながるものであった。この活動を、「お手紙」や「スーホの白い馬」でも取り入れ、豊かな言語力を身につける手段として位置づけた。今後も、豊かな言語力を身につける子の育成を図っていきたい。

実践6 小学校2年「お手紙」

(1) 子どもの実態

本学級には、男子17名、女子17名、計34人の児童が在籍している。クラス全体が明るく素直で、授業中でも休み時間でも、協力して物事に取り組んでいく姿勢が見られる。しかし、クラス全体で見ると大きな声で発言することに抵抗のある児童がいたり、自分自身の意見をうまく伝えられない児童がいたりする。子どもたちは、本を読むことや物語に親しむことに興味を持っており、朝の読書タイムや読み聞かせの活動を楽しみにしており、物語にいそしんでいる。

「動作化」に関しては、「ふきのとう」「スイミー」で、様々な登場人物を演じて、場面ごとの様子や登場人物の心情を理解したり、情景を学習する経験を積んでおり、それらの活動に対する意識が高い。そこで、本単元では「動作化」に重点を置き、登場人物の心情に迫る活動を行うことに重点を置いた。

(2) 本単元で目指す子ども像

場面の様子や登場人物の行動を読み取り、人物の気持ちを想像して、吹き出しに書いたり、登場人物に対して言葉をかけることができる子ども。

(3) 具体的な支援と手立て

文章中の場面に対し、「動作化」を交えて音読したり、場面を表現したりすることにより、登場人物の心情を読み取る活動を行った。会話のやり取りを軸に据え、それぞれの立場を視覚的、聴覚的な活動だけでなく、身体的に場面を表現しながら文章を読解することで内容に迫る活動を行った。そのためにお面などの小道具や、場面を表現するための踏み台などを用意し、より具体的にイメージに迫れるように支援を行った。

本時の終末では、吹き出しに登場人物の立場になって心情や意見を書き入れたり、登場人物に自分自身の言葉で言葉がけを考えてワークシートに書き入れたりする活動を行い、登場人物の意識を深める活動と、それを自分自身の感情に戻すことができる学習を意識し、

登場人物の心情を寄り深く理解できるように配慮した。

(4) 本教材の学習の流れ

- ①「お手紙」を読み、面白いと思ったところを発表しよう。
- ②誰の会話文であるかに注意しながら、全文を読もう。
- ③1の場面を読み手紙をもらえないがまくんの気持ちを考えよう。
- ④2の場面について、かえるくんの行動を順序良く読み取ろう。
- ⑤3の場面について、2人の言動を比べながら読み取ろう。
- ⑥⑦3の場面を読み、手紙を待つ二人の気持ちを考えよう。 (本時2 / 2)
- ⑧気持ちが表れるように音読しよう。
- ⑨役割を決めて音読げきをしよう。

(5) 本時について

1) 目標

- ・自分が手紙を出したことをがまくんに告白したかえるくんのきもちや、そのことを知ったがまくんの気持ちを挿絵や文からとらえ、気持ちを想像しながら発表することができる。(話す・聞く)
- ・場面の様子や登場人物の行動を読み取り、人物の気持ちを想像して、吹き出しに書くことができる。(書く)

2) 準備

- ・教師…挿絵、お面
- ・児童…学習プリント

3) 学習過程

| 時間 | 学 習 活 動 | 教 師 の 支 援 と 評 価 |
|-------------|--|---|
| 導入 (5分) | 1 登場人物の確認をする。 2 学習課題をつかむ。 | ○ 本時の学習場面を確認する。 ○ 学習課題を読み、かえるくんとがまくんの気持ちの変化を学習することを確認する。 |
| | かえるくんが手紙を出してくれたことを、がまくんが知ったあとの二人の気持ちを読みとって、つたえ合おう。 | |
| 展開 (35分) | 3 課題解決の見通しをもつ。 ・ 音読をする。(一斉読み、一人読み) | ○ 第一場面と本場面の挿絵を提示し、おなじようにお手紙をまっているかえるくん、がまくんの表情や手の様子が、違うことを確認する。 |

| | | |
|---------------------|---|---|
| | <p>4 2枚の挿絵がどのように違っているかを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挿絵を指し示し、違いを発表する。 <p>5 かえるくん、がまくんの心情の変化を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二人の会話を隣同士でペアになり、実際に役割読みをする。 ・代表者が前に出てきて二人でやり取りを演じて、様子を確認し、どの言葉から二人の態度が大きく変わったかを考える。 <p>6 がまくん、かえるくんの心情を、二人の気持ちになりきってワークシートに書く。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○二人が笑っていて楽しそうな様子をしていることに気づかせる。 ○ペアで読むときには、お互いの気持ちを考えながら読むように伝える。 ○最初のがまくんの投げやりな様子、後半の投げやりな様子、かえるくんに告白を受けてから感動している様子に気づかせる。 ○がまくんの様子を見てかえるくんが耐えられなくなって告白してしまったところを意識させる。 ○代表者が演じるときには、実際にかまくんは台に座り、かえるくんは上から話しかけるようにし、より場面に近づけた感覚で動作化できるようにする。 ○「とても、いいお手紙だ。」というがまくんの言葉に着目し、どうしてその言葉が出たのかを考えるようにして考察を深める。 ○挿絵に立ち返り、二人の様子をもう一度確かめる。 |
| <p>まとめ (5分)</p> | <p>6 本時の学習をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二人にかける言葉を自分の立場から書く。 <p>7 今日の学習について振り返る。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○来るとわかっているお手紙が来ることがなぜうれしいかについて問いかけ、考えを深める。 |

4) 評価

- ・登場人物の様子を挿絵や文からとらえ、その心情の変化を読み取ることができる。
(話す・聞く)
- ・様子を表す言葉を使ったり、大事な文を抜き出したりして、吹き出しに登場人物の気持ちを書くことができる。(書く)

(6) 成果と変容

「動作化」を中心にした指導

2年生になった当初は、なかなか主体的に本文を捉えることができずに、登場人物の心

情の読み取りを行っても、発言の内容がずれていたり、本文に即していない考え方が多かった。しかし、「動作化」を中心とした読み取りの活動を通じて学習を進め、その経験を蓄積していったところ、本文に即した登場人物の心情に迫れるようになった。「動作化」を授業に取り入れることにより、場面の転換となる言葉にも気づけるようになってきている。この後も「わたしはおねえさん」「スーホーの白い馬」の学習を通じて、より深い物語の読み取りに迫っていく。

(7) 考 察

場面を主体的に一つ一つ取り上げ、客観に戻すという学習を繰り返すことにより、以前よりも、感想にまとめたときにそれぞれの読み取りがよくきているように感じられた。また、読解を行う際に場面を端的にあらわす重要な表現を中心発問に据えることで、「動作化を行う際に、より具体的にその場面を表現することができ、ワークシートにもその言葉を中心に据えた意見や感想を述べることができた。しかし、中心に据えた言葉ばかりに目がいきがちになってしまい、肝心のまとめの部分で、児童が大きく読み違いをしてしまうということもあった。「動作化」や「役割読み」を取り入れることで、より、主体的に物語を考えることができるということがわかった。しかし、それらをどの場面で効果的に行うのか、どういう意図で行うのかを明確にして採り入れる必要がある。

実践7 小学校3年「すがたをかえる大豆」「食べ物のひみつを教えます」

(1) 子どもの実態

本学級の児童は、男子6名、女子10名の合計16名で、明るく元気な児童である。クラスの中で困っている友達がいたら、進んで手助けをする思いやりのある児童も多い。また、何事も前向きな姿勢で、最後まで根気よく頑張る姿も見られる。

毎週火曜日の朝の読書タイム(10分間)では、全員が集中して読書をしている。しかし、図書館に足を運ぶことが少ない児童もいる。

国語の授業の様子やテストを見ていると、読む力は、1・2年生でしっかり身につけてきていることが分かる。しかし、書く力となると差が出てくる。感想文を書かせると、書ける児童は、語彙も豊富で、何が言いたいのか、何を一番伝えたいのかが分かりやすく、まとまりのある文を書くことができる。しかし、書けない児童となると、「楽しかった」のような短い言葉がバラバラと書かれており、何が言いたいのか、何を一番伝えたいのかが分かりづらく、まとまりがない文を書いてしまう。

最近では、毎週水曜日の朝のドリルタイム(10分間)に論理トレーニングを行い、文の構成を学んでいる。そのため、少しずつではあるが、書く力が身につけてきたと感じる。

話し言葉の面では、授業中に説明する場面で、相手に上手く気持ちが伝えられないことがある。ハンドサインを活用しながら、クラス全体で意見を補って深め合い、学び合うことはできているが、児童がもう少し多く言葉を知っていたら、より深め合うことができると感じる場面がある。

(2) 本単元で目指す子ども像

- ①「すがたをかえる大豆」を読み、教科書と同じような文章構成で説明文を書く子ども。
- ②分からない言葉を国語辞典で調べ、接続詞を適切に使って分かりやすい文を書く子ども。
- ③自分の書いた文と友達の書いた文を比べ、友達の文の中から上手に説明しているところを見つけ、自分の文の中に取り入れることができる子ども。

(3) 具体的な支援と手立て

児童は、文章全体の組み立て方、段落ごとの書き方、文の書き方に注意して「すがたをかえる大豆」を読み、説明のしかたを学んでいく。その後、その学びを生かして「食べ物のひみつを教えます」で説明する文章を書いていく。

「すがたをかえる大豆」で学んだことが身につについて、「食べ物のひみつを教えます」につながるようにする。児童が文章をきちんと読み取り、文章全体の組み立て方や段落ごとの書き方、文の書き方に注意して読めるように、中心となる文や大事な言葉に気をつけて音読するように支援する。また、「はじめ・中・おわり」の構成に注意し、「中」に書かれた具体例を整理しながら読めるように支援する。

(4) 本単元について

1) 単元

せつめいのしかたを考えよう～すがたをかえる大豆～

2) 単元の目標

関心・意欲・態度…文章の内容に関心をもち、文章構成を理解しながら読もうとしている。

話す・聞く能力 …話の大事なところに気をつけて、話し方や聞き方を工夫する。

読む能力 …中心となる文や大事な言葉に気をつけて音読している。
…「問い」の形をとらない話題提示があることを理解し、中心文を確かめながら説明されていることを整理している。
…「はじめ・中・終わり」の構成に注意し、「中」に書かれた具体例を整理しながら読んでいる。

書く能力 …書く目的によって必要になる事項と観点を理解し、取材している。
…「中」の部分で、内容のまとまりごとに段落を分け、文章を構成している。
…必要に応じて理由や事項を挙げて書いている。
…自分の書き方と人の書き方を比べ、上手に説明しているところに気づくことができる。

言語事項 …文章中の表現や言葉に着目し、辞書を使って調べている。

3) 本教材の学習の流れ

- ①② 普段の食事を調べ、学習の見通しをもつ。
- ③～⑤ 文章構成を把握し、説明のしかたの工夫を知る。(本時 2 / 3)
- ③ 文章中の言葉に注目し、国語辞典で調べることができる。
- ④ 食べ物について説明した本を読む。

(5) 本時について

1) 目標

- ・「中」の段落の内容を正しく読み取り、説明のしかたの工夫を見つける。
- ・発表の場面で、見つけた工夫を分かりやすく伝え、学び合う。

2) 準備・資料

教師：課題を書いた短冊、本文を拡大コピーしたもの 児童：ワークシート

3) 学習過程

◆：評価（ゴシック文字）

| 段階 | 児童の活動 | 形態 | 教師の支援・留意点 |
|--------------------------|---|--|---|
| つかむ (5) | 1 前時までの学習を振り返る。 2 本時の学習課題をつかむ。 | 一斉 | ○ 前時までの内容を確認する。 |
| 「中」の書き方のくふうを見つけよう | | | |
| 追 究 す る (30) | 3 説明の工夫を見つけ、ワークシートに自分の考えを書く。 ・ 写真がついていて分かりやすい。 ・ 「一つ目」や「二つ目」ではなく、「いちばん分かりやすいのは」や「次に」を使っている。 ・ 食べ物を段落ごとに分けている。 ・ すがたをかえる様子が分かりやすい簡単なものから説明されている。 | 一斉 個人 グル ープ | ○ 段落の初めにある言葉を囲み、「次に」「また」「さらに」というつながりの言葉が使われていることに気づかせる。 ○ 食品の名前を見つけ、線を引くように指示する。 ○ 説明するための工夫を見つけれない児童には、写真のない本文を見せ、違いに気づかせるようにする。 ◆ 内容を理解し、自分の考えを書くことができたか。（評価①ワークシート） ○ 友達のよい考えをワークシートに書き足すように促す。 ◆ 話し合いに参加し、進んでワーク |

| | | | |
|----------------------------|---|-----------------------|--|
| | <p>4 グループで考えを発表し合う。</p> <p>5 グループで話し合ったことを発表する。</p> | <p>一斉</p> | <p>シートに書き足し、自分の考えを深めたり広げたりすることができたか。</p> <p>(評価①ワークシート)</p> <p>○ 他のグループの発表を自分のグループの答えと比較して聞くように指示する。</p> |
| <p>まとめ める (10)</p> | <p>6 本時の学習で学んだことをもとに、自分の説明文に取り入れたい工夫とその理由を書く。</p> <p>7 発表する。</p> <p>8 次時の学習を知る。</p> | <p>個人 一斉</p> | <p>○ 本時で学んだ分かりやすく説明するための工夫の中で特に自分が取り入れたいものを2つ書くよう指示する。</p> <p>○ 数名の児童に発表させ、次の単元の「食べ物のひみつ教えます」につながるようにする。</p> <p>◆ 書き方の工夫を自分の説明文に生かす意欲をもてたか。(評価②ワークシート)</p> |

4) 評価

- ・写真や段落、接続語の役割などの説明の工夫を理解することができたか。
- ・話し合いに進んで参加し、ワークシートに友達の意見を書き足すことで、考えを深め学び合うことができたか。

※板書計画

せつめい文を書くときに取り入れたい工夫。

- ・ つなぎの言葉を使っている。
- ・ 段落ごとに食べ物の例があげられている。
- ・ 写真がついている。

いり豆・豆腐・しょうゆ

分かりやすいものから説明している。

せつめいのくふう

教科書の本文拡大コピー

めあて

「次」「また」「さらに」

言葉だけよりよく分かる

すがたをかえる大豆

「中」のせつめいのくふうを見つけよう。

(6) 成果と変容

本時の授業を通して、繰り返し音読し、言葉に着目する中で、説明文の「中」に書かれた説明のしかたの工夫を見つける活動に意欲的に取り組むことができた。分かりやすく説明するために、接続詞が大切な働きをすることを学び、自分も説明文を書くときに学んだことを生かして分かりやすい文章を書きたいという意欲をもった児童が多くいた。また、「すがたをかえる大豆」のように、例をあげる場合は、分かりやすいものから書くなど、段落の構成に目を向け、書いた文章を見直し、並べ替えることよいくことに気づく児童もいた。

この授業のあと、「食べ物のひみつを教えます」の授業に入り、説明文を書く活動を行った。

はじめに、説明文を書くための材料集めを行った。できるだけ多くの材料を集めることができるように、ノートにウェブ図を書かせ、調べたことや思いつくことをどんどん書くようにさせた(図 24)。

次に、「はじめ」と「おわり」の言葉を考え、「はじめ」「なか」「おわり」を大きくとらえた構成を考えさせた。

次に、中の部分を分かりやすく書く手立てとして、調べたことを1つずつ紙に書き、食べ物がすがたを変える様子がよく分かるように順番を考えて並べる活動を行った(図 25)。その時に、段落と段落をつなぐ接続の言葉を教科書の「すがたをかえる大豆」を参考にして考えるように指示した。

最後に、ノートを見ながら、「食べ物のひみつを教えます」の説明文を書く活動を行った(図 3)。下書きを友達と読み合い、友達のよいところを取り入れたり、友達にアドバイスをしてもらったりする活動を取り入れた後で清書をした。説明文を書くことには慣れていない子どもたちだが、分かりやすくまとまりのある文章が書けていた子が多かった。

以上のことから、「すがたをかえる大豆」の

学習で、文章全体の組み立て方や段落の関係、説明文を書くときの工夫について学んだことを生かせば、「食べ物のひみつを教えます」で

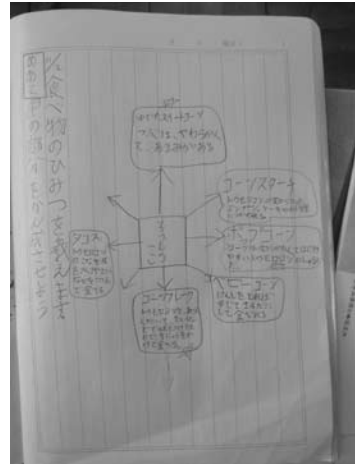


図 24 材料集めノート



図 25 紙を使って並び替え



図 26 ノートを見ながら下書きする

説明文を書くときに教科書で学んだ「すがたをかえる大豆」のように分かりやすく書くことができるようになった。

「食べ物のひみつを教えます」の授業からは、自分の思いが仲間に伝わったり、よいところを認めてもらったりすると嬉しいと感じ、さらに分かりやすく詳しく書きたいという意欲が感じられた。

(7) 考 察

今回の実践を通して、改めて読むことの大切さを実感し、読むことができこそ、書くことができるということを理解することができた。

読み取り学習を通して、言葉の意味を考えたり、調べたり、味わったりし、様々な言葉を正確に読み取ることが、言語力を育て、豊かな文章を書くことにつながると感じた。

本校では、毎週水曜日の朝 10 分を使って論理トレーニングを行っている。児童は、論理トレーニングで文章構成を学び、文と文のつながりや、前後とのつながりを考えながら、文章を論理的に書く練習をしている。そのため、書く力も少しずつではあるが、伸びていると感じる。ただ、子どもたちの書いた文章を見ると、言葉をまだまだ知らないということがあげられる。3 年生は、国語辞典の使い方も学習しているので、国語辞典をもつと活用し、多くの言語を学ぶ必要があると感じた。楽しみながら言葉に親しめる授業づくりをすれば、豊かな言語力を身につける児童が増えることや、文章を正確に読み取り、テーマにそって、読み取ったことをまとめたり、自分の思いを豊かに表現したりすることができる児童が増えると考えられる。

5 全体の考察

国語 1 部会では、「豊かな言語力を身につける子どもの育成を目指して」研究を進めてきた。1 年生では、実践で示されたように、リズムの良い文章を繰り返し音読して覚えてしまったり、動作化しながら音読を楽しんだりすることで、たくさんの言葉を覚えたり文章に書かれている様子や気持ちを読み取ったりすることができるようになってきた。言葉に興味を示し、多くの言葉を獲得できるようになったのは、大きな成果だといえる。

2 年生では、文章を正確に読み取ることには重きを置いて、授業を進めてきた。実践に示されているように、文章中の言葉を使ってまとめる学習を通して一つ一つの言葉を注意深く読み、大切に扱おうとする気持ちが高められた。また、学び合いで獲得した言葉をまとめに引用し動作化を行った。動作化で自分の思いや考えに具体性を持たせることによって、仲間に理解してもらい認められる場面が増えた。豊かな言語力を身につけると同時に、国語の楽しさを実感できたといえる。

3 年生では、最初は教科書から文章構成を学び、その土台の上に、自分が選択した事柄について、学んだ文章構成を生かして、自分なりの文章をまとめる学習を進めた。友達との関わりを通して、文章を磨き合う学習に取り組めた。互いに読み合うことで、文章を付け足したり、よりよく練り上げたりすることができた。友達の書いた文章を大切に扱おう

とする気持ちや自分の書いた文章をより良くしていこうとする気持ちが高められた。

おわりに

国語1部会では、楽しみながら豊かな言語力を身につけることを目指し、1年間研究を積み上げてきた。みんなで同じ教材について話し合ったり、実践内容を交流したりした。常に研究テーマを念頭に置き、効果的な指導方法について考え、実践を重ねてきた。

低学年では、どの子も楽しんで国語の学習に取り組むことができた。この子どもの姿は、研究の成果の一つの表れだと思われる。

今後も、楽しみながら言葉に親しみ、言葉を大切に扱おうとする心をさらに育てていきたい。大切なことは、日常の言葉に学習の成果が現われ、心地よく響く言葉、人に思いの伝わる言葉が使えるようになることではないかと思う。国語の学習の柱として、日常の言葉にも学んだことが生かせるよう働きかけを続けていきたいと思う。

日本の文化としての言語が、よりよい形で受け継がれていくことを願っている。

自分の考えを深める子どもの育成

—伝え合う活動を通して—

渡辺 孝春（犬山市立東小学校）
杉山 結生（犬山市立羽黒小学校）
河内沙智絵（犬山市立楽田小学校）
堀部 美咲（犬山市立犬山西小学校）
西部 舞（犬山市立城東小学校）
澤木 佑太（犬山市立東小学校）
横山 結（犬山市立犬山南小学校）

はじめに

このグループは全員が小学校1、2年の担任で、毎月の授業研究会では、学級の悩みや授業の進め方などを話し合ってきた。その中で、どの学級も、自分の意見を発表したいという意欲的な児童は多いが、意見を言うだけで満足し、他の意見を聞いても理解していない児童が多く、伝え合いになっていないのではないかという問題点が指摘された。また、声が小さく、意見を上手くクラス全体に伝えられない子どもが、どの学級にもいることがわかった。児童の間で言い合いやけんかが絶えないのは、自分の気持ちを上手く伝えられず、相手の言うことを正しく理解できていないからではないかとも考えた。そこで、学習指導要領「A 話すこと・聞くこと」（2）内容①指導事項にある、声の大きさに注意してはっきりした発音で話すこと、興味を持って聞くこと、互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合うことの指導に力を入れることとし、国語の物語単元1年「ずうっと、ずっと、大好きだよ」、2年「わたしはおねえさん」での指導を中核に据え、次のように主題を設定して、実践に取り組んだ。

1 テーマ

「自分の考えを深める子どもの育成～伝え合う活動を通して～」

考えを深めるとは、他の子の意見を聞いて自分の意見を振り返り、より良い考えをもととすること。

2 研究の仮説と手立て

仮説 話す・聞く活動を繰り返し機会を多くしていけば、他の子の意見を聞いて自分の考えを振り返り、より良い考えをもつことができるだろう。

手だて① スピーチ活動を朝の会や帰りの会に行い、自分が伝えたいことを声の大きさに注意して全員に伝わるように話させる。スピーチ後には質問の時間を設定し、わからなかったことやもっと知りたいことを質問できるようにし、興味をもって聞かせる。

手だて② ハンドサイン・話形（「〇〇さんと同じで…」、「〇〇さんに付け足しで…」など）を教え、自分の考えを発表するときには、前の人の意見と自分の意見を比べてから挙手・発言させる。

手だて③ 毎回授業の終わりに、黒板に書かれた意見を見返して、振り返り用紙を書かせる。その授業で思ったことやわかったこと、自分が誰のどの意見を取り入れたいと思ったかなどを書か

せる。

3 実践

(1) 1年生での実践

単元名 ずうっと、ずっと、大すきだよ

指導計画 (全7時間完了)

- ①物語を読んで、思ったことや分かったことを書く・・・・・・・・・・ 1時間
- ②新しい漢字や言葉の意味が分かる・・・・・・・・・・ 1時間
- ③「ぼく」の気持ちを読み取る・・・・・・・・・・ 4時間 (本時2/4)
- ④「ぼく」へ手紙を書く・・・・・・・・・・ 1時間

学習過程

| 段階 | 学習活動 | 形態 | ○支援・□留意点・【評価(方法)】 |
|---------|--|----|--|
| つかむ5分 | 1 前時の学習を振り返り、本時の流れと課題を確認する。 | 全体 | <input type="checkbox"/> 前時で学習した場面を見ながら僕の気持ちを振り返る。 <input type="checkbox"/> 本時の場面はどんなことが書かれているか児童に確認しながら課題を提示する。 |
| | 年をとっていくエルフへの「ぼく」の気持ちをかんがえよう。 | | |
| 取り組む33分 | 2 本時の場面を音読する。 | 個 | <input type="checkbox"/> エルフの様子や「ぼく」の気持ちに注目しながら読むように助言する。 <input type="checkbox"/> 音読が苦手な児童には傍について一緒に読む。 |
| | 3 エルフの様子を読み取る。 | 個 | |
| | 発問：エルフの様子は前の場面までとどのようにかわりましたか。 | | |
| | 発問：エルフの様子が前の場面から変わったと分かるところに線を引きましょう。 | | |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・ エルフが前の場面までと変わったところに線を引く。 ・ ペアで確認する。 | ペア | <input type="checkbox"/> エルフは前の場面からどのように変わったか全体で確認し、エルフの「年をとってきた」という様子に気付けるようにする。 <input type="checkbox"/> ワークシートの本時の場面に線を引いていくよう指示する。 <input type="checkbox"/> 書くのが苦手な児童には傍について一緒に探していく。 <input type="checkbox"/> ペア交流が苦手なところには支援に入り自分が線を引いたところはどこか、どのように伝え合うか助言しながら交流をすすめていく。 |

| | | |
|--|--------------------|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 全体で確認する <p>4 「ぼく」の気持ちを読み取る。</p> | <p>全体</p> <p>個</p> | <p><input type="checkbox"/> 黒板の本文を書いた紙に、児童の発言から線を引き、全体で確認ができるようにする。</p> |
| <p>発問：「ぼく」がエルフのことが好きだと分かる文や言葉はどこですか。</p> | | |
| <p>指示：「ぼく」がエルフのことが好きだと分かる文や言葉に波線を引きましょう。</p> | | |
| <ul style="list-style-type: none"> 「ぼく」がエルフのことが好きだと分かるところに線を引く。 全体で確認する。 | <p>全体</p> | <p><input type="radio"/> 探するのが苦手な児童には傍について順に読みながら支援していく。</p> <p><input type="checkbox"/> 本文を書いた紙に、児童の発言から線を引き、全体で確認できるようにする。</p> <p>【「ぼく」がエルフのことが好きだとわかる部分を見つけ、線を引くことができたか（ワークシート）】</p> |
| <p>発問：線を引いた中で、「ぼく」がエルフのことが一番好きだと分かるところをきめましょう。</p> | | |
| <p>指示：自分にとって「ぼく」がエルフのことが好きと一番伝わる場所を選んで赤線で囲みましょう。</p> | | |
| <ul style="list-style-type: none"> 線を引いた中から好きな気持ちが一番伝わる場所を選ぶ。 | <p>個</p> | <p><input type="checkbox"/> 好きな気持ちが一番伝わる場所を一つだけ選ぶように指示する。</p> |
| <p>発問：赤線で囲んだ部分から年をとっていくエルフへの気持ちを考えましょう。</p> | | |
| <p>指示：赤線で囲んだ部分から「ぼく」の気持ちをワークシートに書きましょう。</p> | | |
| <ul style="list-style-type: none"> 選んだところから「ぼく」の気持ちを想像して書く。 「ぼく」の気持ちを交流する。 グループで交流する。 | <p>グループ</p> | <p><input type="checkbox"/> 選んだ文の言葉に注目して書けるとよいことを伝える。</p> <p><input type="radio"/> 書くのが苦手な児童には傍について支援する。</p> <p><input type="checkbox"/> グループの中で話す順番を指示する。</p> <p><input type="checkbox"/> 相手の話をよく聞いて反応しながら活動を進めるよう伝える。</p> <p><input type="checkbox"/> 友だちの考えを聞いて、いいなと思ったところは吹き出しに書き足すよう伝える。</p> <p><input type="radio"/> グループ交流が苦手なグループには支援に入って、自分の考えを相手に伝えられるよ</p> |

| | | | |
|------|--|--------------------|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> 全体で交流する。 自分で読み返す。 | <p>全体</p> <p>個</p> | <p>うにすすめていく。</p> <p><input type="checkbox"/> いろいろな部分から考えた気持ちが出るように、意図的に指名する。</p> <p><input type="checkbox"/> 児童の発言から本文を書いた紙に書き、全体で確認できるようにする。</p> <p><input type="checkbox"/> どこを選んでも、エルフを大事だと思いう気持ちがあることを一緒に確認する。</p> <p><input type="checkbox"/> 読み返して、付け足したいことがあれば書いてもよいことを伝える。</p> <p>【エルフが年をとっていく場面の様子を読み取り、「ぼく」の気持ちを想像して書くことができたか。(ワークシート)】</p> |
| 振り返る | 5 本時の振り返りをする。 | 個人 | <p><input type="checkbox"/> 振り返りの観点を伝えながら、振り返りカードに記入するよう指示する。</p> <p><input type="checkbox"/> お互いの活動を認め合うことができるように相互評価を行う。</p> |
| 7分 | 6 次時の内容を知る | 全体 | |

(2) 実践①

1) 繰り返しの活動の中で、話し方・聞き方の定着を図る

スピーチは、毎日の朝の会や国語の授業の中で取り入れている。朝の会でのスピーチは5月から取り入れ、日直が話をするようにしている。最初の頃は、テーマを決めてそれに合った話をしていた。一言でもとにかく人前で話す練習として取り組んでいた。1年生の児童は人前できちんと話す という経験が少なく、一言話だけでもすごく緊張していた。事前にきちんと考える時間を与えて話すことで安心して話ができる。慣れてきた6月頃から、テーマは与えず自由にスピーチができる ようにした。昨日あったこと、最近楽しかったこと、みんなに伝えたいこと、楽しみにしていることなど何でもよいとした。最初は悩んでいたが、自分なりに考えて話していた。また、同時に質問タイムを取り入れた。「質問したい!」と挙手する児童は多く、1月現在も意欲的に取り組んでいる。

取り組んでいくうちに、いくつか課題が出てきた。1つ目は、話し手の話の内容である。何回もスピーチを繰り返すうちに友だちと似たような内容の話ばかりになっていった。テーマも自由で、友だちと同じことをしたり思ったりしたこともあるだろうが、全く同じでは自分のスピーチにならない。スピーチの約束として、「本当に自分がしたことや思ったことを話す」ということを伝えた。児童も、自分が本当にしたことではないと質問に答えられない、ということに気付き、自分の話が出来るようになってきた。2つ目は、聞き手の質問である。例えば、「私は昨日友達となわとびをしました」という内容の話で聞き手が、「楽しかったですか」という質問をするということがあった。話し手の子は「はい」と答えていた。質問して答えるという練習でもあったので、「質問する人は、はい・いいえで答えられる質問はしない」という約束も伝えた。

この約束を決めてから、自分でよく考えて質問できるようになった。スピーチの話の内容も広がっていった。しかし、質問の仕方が分からなかったり自信がもてなかったりして、最初と比べて挙手が減っていった。少しずつ慣れてきたものの、まだ自信がもてない児童にはこれからの課題になっていくと思う。

2) 意見を比べて聞く・分かりやすく伝える

まず、伝え合い活動をより良く行うために「聞き方の基本」「話し方の基本」を教室の前面に示している(図26)。授業の前にはできる限り確認をしてから行うようにしている。始めは授業中にも何回か確認していたが、11月頃からは全体に浸透してきているように見える。特に、「聞き方の基本」は、よくできている児童の姿がお手本になり、学級の8割程度の児童たちに定着している。発表者もみな目の線が自分に集まるまで話すのを待ったり、聞く姿勢ができていない児童に注意したりするなど、こちらで指示しなくても児童自身にこの2つの基本が定着してきている。

実践としては、話形を示し伝え合い活動を行った(図27)。「〇〇さんと同じで～です」「〇〇さんと違って～です」「〇〇さんにつけたしで～です」という話形を教室の前面に示し、発言をつなげられるようにしている。のみこみが早い児童はすぐに習得し、友だちの発言を聞いてからつなげることができている。どういふときにこの話形を使ったらいいのかわからない児童はあまり積極的には使っていないが、他の児童が「それは、〇〇さんにつけたしでって言うんだよ」と言い、友だち同士で教え合っている姿が見られた。

しかし、この話形を使うことはできても言っていることが矛盾していたり、言っていることが話形に合っていないことも多々あり、正しく使えていない児童も多くいる。現段階では、教師が「それはつけたしではなくて、違う意見だね」など訂正しながら進めることが多い。児童たちの中で正しい言い方が定着するには、一人ひとりがみんなの前で話す活動を多く経験して身に付けたり、生活や学習を通して語彙を広げたりしていくことが必要だと感じた。こういった時間を今後2年生になっても継続して行い、定着していくように務めていきたい。

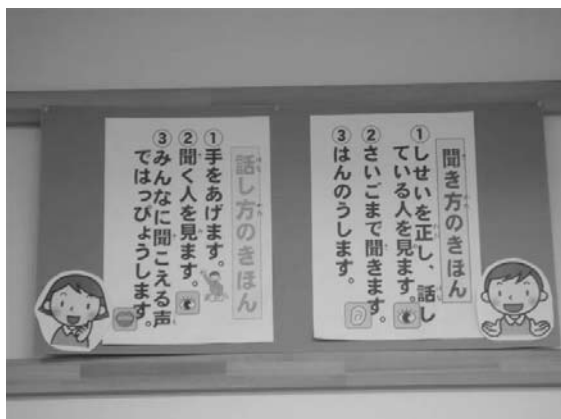


図26 話し方のきほん、聞き方のきほん

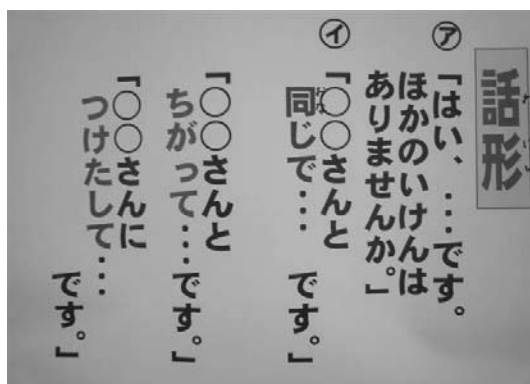


図27 話形

3) 他の意見を取り入れ自分の意見をまとめ直す

国語の学習を中心に振り返り活動を行っている。始めの頃は、授業の終わりに口頭で課題に沿った振り返りを行っていた。9月に行った「ゆうだち」という単元から振り返りカードに自分自身で振り返られるようにした(図28)。振り返りを行う際に、課題に沿

った振り返りができるように振り返りの観点を伝えるようにしている。また、授業の中で良い意見を言っていた人や頑張っていた人を「きらりさん」として記入する欄も設けている。記入し終わった後に、全体できらりさんの紹介も行うようにしている。その際に、なぜその人を選んだのかという理由も言うようにしている。そうすることで、授業全体を振り返ることができている。同じ形式で振り返り活動を取り入れてきたのでやり方は定着している。次へのステップアップとして振り返る観点項目を増やしていくと、より詳しく振り返られるのではないかと感じた。

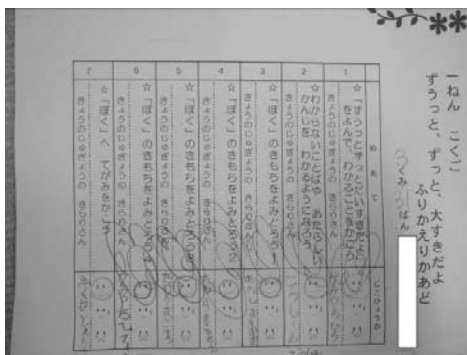


図 28 振り返りカード

今回実践した授業では、自分の意見を考えた後にグループや全体交流をして友だちの意見を聞き、最後に自分の意見に戻って考え直すという活動を取り入れた。グループの子の意見を聞いた後、もう一度自分の意見を見直し自分の書いた意見に付け足して書いたり友だちの意見として自分の意見の隣に書いたりする姿が見られた。どの児童も最後は自分の意見をきちんと振り返って終えることができた。この実践を通して、全体やグループで交流をして最後に自分の考えに戻って振り返ることはとても大切だと感じた。いろいろな意見を聞いて自分の考えが変わったり同じだと感じたりすることがあるが、それをきちんと自分のものにするには最後に自分で振り返ることが有効だと実感した。今後もこの形の振り返り活動を有効的に取り入れた授業づくりをしていきたい。

(3) 実践②

1) 繰り返しの活動の中で、話し方・聞き方の定着を図る

話し方・聞き方の基本を身につけさせるために、毎日の帰りの会でスピーチを取り入れた。日直が、以下のポスターにある「わくわく」「うきうき」「やったー」「なんでかな」などの言葉の中から自分と同じ気持ちを選び、「わたしは～という気持ちです」「どうしてかという、～だからです」という話形を使って話をさせた(図 29)。聞いている児童たちは、スピーチをした後に質問をするという内容で行った。このポスターは2つ用意し、1つはいつでも見ることができるように教室に掲示し、もう1つは帰りの会のときに見ながら話ができるようにした(図 30)。話す側には、全員に聞こえる声で話すこと、ゆっくり話すことを指導した。聞く側には、話す人のほうへおへそを向け、目を見て話を聞くことを繰り返し指導してきた。始めのころは、いつも小さな声でしか発表できない児童が、スピーチのときは大きな声で発表し、話を聞く場面で私語がもれてしまう児童が、スピーチを聞くときは、興味を持って静かに聞いていた。ところが慣れてくると、友達を真似て言う児童が増え、スピーチの内容や質問が同じになってきた。そこで、教師がスピーチをして手本を見せ、今の気持ちだけでなく、昨日の気持ちなどでもよいこと、1日の生活の中でもいろいろな気持ちがあることを知らせた。また、質問にも、「なぜ」だけでなく、「いつ」「だれと」「何を」などの質問があることを話した。これを繰り返していくことで、家族と出かけたこと、友達と遊んだこと、自分の疑問、兄弟げんかのことなど、内容が徐々に広がっていった。

考察

児童たちは、意欲的にスピーチ活動をしており、前日に内容を考えてスピーチをし、授業ではあまり

発表しない児童のスピーチは、クラス全員が集中して聞いていた。注意をしなくても、自発的にこのようなことができたのは、自分のことを友達に伝えたい、友達の話を聞きたいという気持ちになったからだと思う。繰り返し指導していく中で、徐々に話し方や聞き方を身につけ、スピーチ以外でも相手を意識して話したり聞いたりできるようになった。低学年では、クラスの児童全員に向けて一人で話すことに慣れていないので、このような活動を繰り返し指導していくことが、話す・聞く基本を身につけるために必要だと感じた。



図 29 スピーチに使用したポスター



図 30 帰りの会のスピーチの様子

2) 意見を比べて聞く・分かりやすく伝える

最初は、友達に意見を伝える、意見を聞く態度を育てるために、「・・・です。どうですか。」「いいです。/ちがいます。」という話形を使っていた。同じ意見や似ている意見だったときは、「同じです。」「似ています。」と言うように話してはいたが、何度注意しても「いいです。」で終わらせてしまうことが多かった。「いいです」というのは、何がいいのか分からず、何も考えずにとりあえず「いいです。」と言っている児童が多かった。これでは、友達の意見を聞いて考える態度が育たないと思い、「いいです。」という話形をやめることにした。児童たちが「いいです。」と言わなくなったところで、「同じです。」「似ています。」と自分の意見と比較をさせて言うように指導した。始めは、同じと発言していても、意見が同じではないなど、友達と自分の意見を比較せずに話している児童が多かったが、次第に本当に同じなのか、似ているのか考えて発言できるようになってきた。そして、「〇〇さんと～が似ているけど…」と発言する児童がでてきた。しかし、まだこのように発言する児童は少ない。これから、どの児童も自分の意見を言うときに、先に友達の意見との相違点を述べてから自分の意見を発言できるようにしていきたい。

考察

未だ形式的ではあるが、話形があることで、友達の意見を聞いて、自分の意見と比べて考えることができたと思う。低学年の児童は、大勢の人前で話す経験が少なく、話し方の基本が身につけていないので、話形は必要であると感じた。話形がどの児童にも身についたところで、話形にとらわれず、自由に自分の思ったことを言えるようにしていきたい。

3) 他の意見を取り入れ、自分の意見をまとめ直す

振り返りは、よい意見だと思った児童の名前を書き、その意見を選んだ理由や、友達の意見から分かったことを書かせた。授業では、意見を板書し、誰の意見か分かるように黒板にネームプレートを貼った。中心発問を考え、なるべくたくさんの意見が出るようにした。始めの頃は、「〇〇さんの意見が良かった。」など、抽象的な意見が多かった。そこで、毎回授業の最後に振り返りがうまく書けている児童を意図的に指名して、発表させた。振り返りを書く前にも、どこがよいのか、友達の意見の相違点などを書くなど、具体的に書くように指導した。すると、A児は単元の始め頃は2行しか書けなかったが、単元の終わりには4行も書けるようになった(図31)。B児は、「(エルフが)死んじやっても、が似ていて、その続きがすごいね。」と書いており、友達と自分の意見の相違点に気付き、自分とは違う意見のよさを感じることができた(図32)。C児は、始めの頃は、振り返りを書くことができず、個別に支援しても、1行しか書けなかった。しかし、第4場面の振り返りでは、「〇〇さんの言葉が、思い浮かばなかったから、すごかった。」と書き、どうしてすごいと感じたのかを具体的に書くことができたようになった(図33)。A児やC児のように、多くの児童が授業を重ねるごとに書く量が増えていった。

考察

ネームプレートで誰が発表しているのかが分かることや、友達に振り返りを書いてもらうとうれしいからなのか、挙手をする児童が多くなった。振り返りを見ても、友達のようなよい意見を書きたい、友達の意見を聞きたいなど、学び合うことで、授業に対する意欲が高まった。また、徐々に自分の考えとの相違点を見つけ、自分の考えと比べて考えることができるようになった。他の意見の良さを知り、取り入れることはできるようになってきたが、自分の考えをまとめ直すことはまだあまりできていないので、これから指導していきたい。

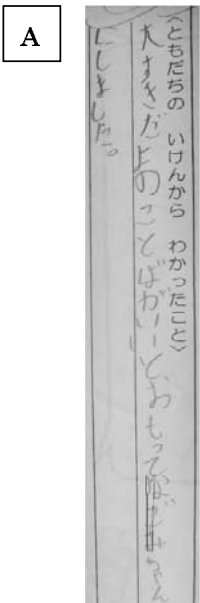


図31 A児の振り返りの変容

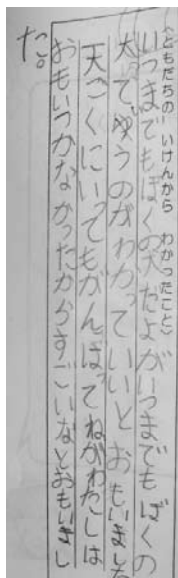


図32 B児の振り返り

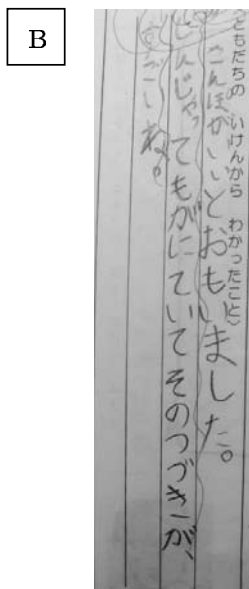
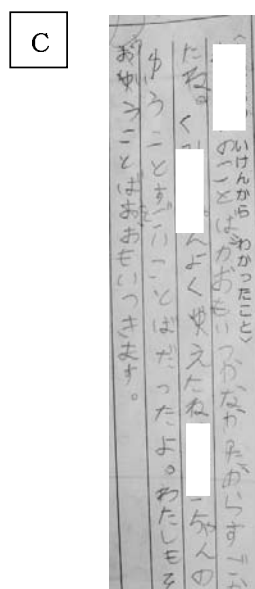


図33 C児の振り返り



(4) 実践③

1) 繰り返しの活動の中で、話し方・聞き方の定着を図る

国語科に「おはなしきいて」という、経験したことを報告したり、聞いて感想を述べたりする単元がある。国語科と連動してスピーチ原稿を書かせて、話し方、聞き方を指導しながらスピーチ活動を行うことにした。テーマを「ぼく・わたしのたからもの」に設定し、後期から、朝の会の時間を使ってスピーチ活動を行った。

ア 実践ースピーチ活動ー

①教師によるモデルスピーチ

児童たちに「たからものスピーチ」を行うことを伝え、まず始めに教師がモデルスピーチを行った。モデルスピーチの内容を、「はじめ・なか・おわり」で構成し、児童たちがスピーチ原稿を書く際の例にも使用できるようにした。また、話す速さ、声の大きさ、目線、間の取り方、スピーチの始め方と終わり方や「たからもの」の見せ方まで、児童たちがスピーチを行っていく際のお手本になるようにスピーチをした。

②「話す・聞く」ルールをみんなで考える

意欲をもって児童たちがスピーチ活動を行えるように、「よい話し方」「よい聞き方」とはどういうものか、これまでの経験や教師のモデルスピーチを参考にして考えさせた。モデルスピーチを見る前に「声の大きさ」「姿勢」「態度」「目線」等に注目して見るよう観点を伝えるようにした。児童たちからは、「紙を見ないで、みんなの方を見て話す」「後ろまで聞こえる声で話す」等の意見が出た。児童たちが意見を出したよい「話し方」「聞き方」を「にこにこスピーチのルール」として学級全体で共通確認した。この「話し方・聞き方のルール」に気を付けながらスピーチ活動を行えるように、スピーチが始まる前にルールを書いた画用紙を毎回掲示し、繰り返し意識をさせていった。(図 34)

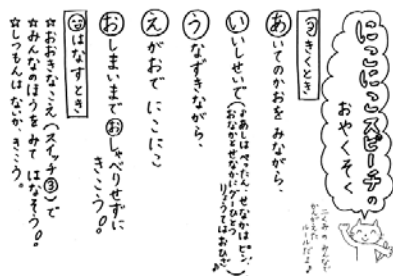


図 34 学級で考えたスピーチのルール

③相手に分かりやすく伝える構成で原稿を書く

論理的構成で分かりやすく話す力は、書く力と関連させてこそ身につけることができる。相手に自分の伝えたいことを伝えるためには、話す態度だけでなく、聞き手に分かりやすい内容の構成が大切であると考えた。そこで、「はじめ・中・おわり」の論理的な構成の書き方を示したスピーチ原稿を作成した(図 35)。文章を書くことが苦手な児童も1時間の授業でスピーチ原稿を書くことができた。

④「聞き方」を意識させるスピーチカード

「スピーチカード」を作り、仲間のスピーチで一番伝えなかったこと(話題の中心)をメモさせた。また「スピーチカード」には、自分のスピーチの話し方、聞き方を振り返ることができる自己評価の欄や、話し手の話し方を評価する欄を設け、「話す・聞く」の意識づけも同時に行っていた。毎朝のスピーチで話し方・聞き方の観点を意識させることで、「話し方・聞き方」を定着させていった。

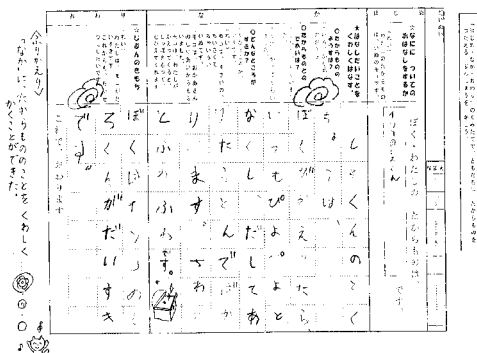


図 35 スピーチ原稿

イ 実践の考察

「たからものスピーチ」の感想を聞くと、「わたしの話を、みんながいっしょうけんめい聞いてくれてうれしかった」「たくさんの方が質問をしてくれて、楽しかった」「ぼくの宝物を知ってもらえてよかった」等、自分の話を聞いてもらえる喜びや、仲間の前で話すことの楽しさに気づくことができている感想が出た。また、スピーチ中に、「〇〇さんの宝物っていいな」「〇〇くと、たからものがいっしょだ!」と嬉しそうにつぶやく児童の姿も見られ、仲間の話を聞くことの楽しさに気付いている児童もいた(図36)。

たからものスピーチ後の授業では、誰かが話している時に自然と体をその児童の方に向けて開いたり、周りの児童に「聞こうよ」と呼びかけたり、「今どういう姿勢で聞けばいいの?」と声かけをするとさつと話を聞く姿勢を作ったりする児童の姿が見られるようになった。

今回の実践では、スピーチ活動を通して、話す・聞く時のルールを徹底的に意識させるようにした。仲間の話を聞く楽しさ、話を聞いてもらえる楽しさを味わうことができると、そこから児童の姿勢は変わってきて、声かけをしなくても自然に仲間の発言に耳を傾ける児童が増えていくのだと思う。始めは、多少形式的でも、話す・聞く時のルールを徹底的に意識させることが大切であると感じた。



図36 実際のスピーチ活動の様子

2) 意見を比べて聞く・分かりやすく伝える

発言をする際に、相手に分かりやすく伝える「まほうのことば」として、いくつか話形を示した。自分の考えと似ているな、同じだな、と思ったら、「～さんに似ていて…です」「～さんと同じで…です」、相手の意見に付け足す時は、「～さんの意見に付け足しで…」、発言する時の根拠を述べる時は、「どうしてかという…」等、黒板前面に掲示して、声かけをするようにした。自分の意見に似ているかどうか考えるのは、少し難しかったようだ。しかし、根拠の伝え方は、定着してきた。国語だけでなく、算数の時間や生活科の時間にも、考えたことの根拠を「どうしてかという…」という話形を使って話せる児童が増えてきた。

3) 他の意見を取り入れ自分の意見をまとめ直す

「くじらぐも」と「ずうっと、ずっと、大すきだよ」という二つの物語教材で、自分の考えを学習シートに書き、書いた考えを仲間に伝え合うという活動を行った。自分の考えがはっきりしないまま伝え合い活動を行っても、児童たちは話を聞こうとしない。しっかり自分の考えを持てるよう、ポイントを小発問によりつかまさせてから書く活動に入るよう心がけた。話形の指導やスピーチ活動を始める前に行った授業「くじらぐも」と実践後の授業「ずうっと、ずっと、大すきだよ」を比較して、児童たちの伝え合い活動の深まりを検証したい。

ア 実践「ずうっと、ずっと、大すきだよ」(光村1年国語下)

生まれたときから一緒だった愛犬エルフが、老衰で死んでしまうまでを、「ぼく」の語りによって描いた話である。学習シートを使い、場面ごとに「ぼく」とエルフの状況や様子の変化を丁寧に押さえ、「ぼく」の気持ちを考えさせた。それにより、全員が「ぼく」の気持ちを学習シートに書くことがで

きた。(図 37)

全員が意見を持つことができたので、伝え合い活動では、指名なし発言で意見を出し合うことにした。普段自分から手を挙げない児童も、意欲的に立ち、発言することができた。指名なし発言の約束として確認したことは、①スピーチ活動で身につけた聞かるときのルールを守ること②前発表した子に似ていると思った意見から発表すること③同時に何人か立ったら、ゆずり合うこと、ゆずってもらった児童は「ありがとう」を言うこと、の3つである。意見は、誰が発言したのか分かるように、ネームプレートを貼って板書していった。

(図 38)

イ 実践の考察

全員が意見をもって伝え合い活動に臨んだので一人ひとりが「仲間の意見も聞くぞ」と意欲をもって参加することができた。「くじらぐも」の授業の振り返りでは、分かったことしか書いていなかった子どもたちだったが、「ずっと、ずっと、大すきだよ」では、自分になかった考えを書いたり、「〇〇さんがいったから、わかりました」「〜と〇〇さんがいっていて、すごとおもいました」など、仲間の意見のよさに気付き、仲間の意見を聞いて読みを深めることができたことが分かる振り返りを書いている児童が多くいた(図 39、40)。

話形を用いて、考えを相手に分かりやすく伝えることができるようになったこと、毎日のスピーチ活動を通して「話し方」「聞き方」が意識できるようになったこと、全員が自分の考えをもって伝え合い活動に臨んだことで、仲間の考えをしっかりと聞いてよさに気付き、考えることができたのだと思う。



図 37 状況や様子の変化を押さえる学習シート



図 38 意見にはネームプレートを貼って板書した。



図 39 シートの中に振り返りの記述欄をもうけた。

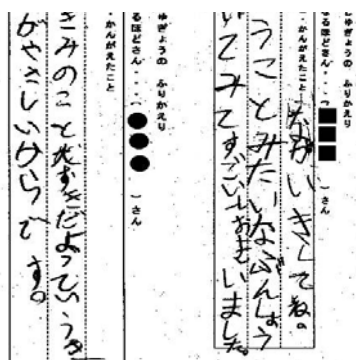


図 40 授業の振り返り「きょうのなるほどさん」

(5) 実践④

1) 繰り返しの活動の中で、話し方・聞き方の定着を図る

朝の会では、毎日一班ずつ前に出て、一人ずつスピーチを行った。テーマを発表した後、初めに教師が見本を見せ、話す内容を考えさせた。

初めは、「私の宝物」というテーマで行った。話す側は、宝物を手にとってみんなに見せながら、聞く人の方を見て話すようにした。聞く側は、話す人の方を見て、話の後にわからないことを質問ができるように考えながら聞くようにした。聞いている児童たちは、話していることを全部聞き取ろうと、一生懸命聞いていた。そして、声が小さいと、「聞こえません」「もう少し大きい声で言ってください」と言い、声が小さいと伝わらなくて困るということを実感していた。質問では、いつ買ってもらったのか、誰に買ってもらったのかなどをたずねていたが、手を挙げる児童はクラスの半分くらいに限られていた。全員の前に出て一人で話をするという機会が、それまであまりなかったため、緊張して大きい声が出ない児童もたくさんいた。大きい声で話せず、「もう少し大きい声で話して」という聞いている児童からの声を聞いて、途中で泣き出してしまいう子もいた。

そこで、大きい声を出す練習のために、朝の会の中で詩を読む時間を作った(図41)。初めは全員で声を合わせて読み、慣れてきたら、行ごとに男女別、班ごと、一人ずつなど、読み方を変えていった。毎日読む中で、「口を大きく開けよう」「息をいっぱい吸って声を出そう」などと読むポイントを伝えた。



図41 背面黒板を見て詩を読む児童

2回目のスピーチでは、「私の好きな遊び」というテーマで行った。初めに見本を見せたときに、児童からたくさん質問をさせ、遊ぶ時間・場所・人などいろいろな質問ができることを伝えた。話すときには、いつどこで誰と遊ぶのかなど詳しく話す児童もおり、初めと比べて、話す量も増えた。また、2回目は泣いてしまう児童もおらず、全員が最後まで話をする事ができた。聞く側は、初めに例を挙げたため、ほとんどの児童が質問をすることができた。話したことを質問してしまうということもほとんどなく、しっかりと理解して聞いていることがわかった。

児童たちは、スピーチの時間を楽しみにしており、話すことを考えて何度も家で練習して臨んでいる児童も多く、とても意欲的に取り組むことができた。そして、スピーチ以外でも、大きなはっきりした声で話せる児童が増えてきた。しかし、国語の授業での音読や、自信のある問題の答えの発表は大きな声が出るが、自信のない問題や周りの反応がよくないときには、声が小さくなって聞こえないということがまだある。話し方や聞く姿勢だけでなく、聞いている子の、うなずき、表情などの反応の仕方についても指導し、話す児童が安心して話せるような雰囲気を作っていかなければいけないと感じた。

2) 意見を比べて聞く・分かりやすく伝える

前期から、発表者は発言後に「どうですか」とたずね、聞いている児童は、発表者の意見と同じときには「賛成」と言い、指名されたときにも、「〇〇さんと同じで、・・・です」と言うようにしてきた。また、似ているが別の考えというときには「〇〇さんとは少し違って、・・・です」、明らかに違う考えの時にはグーの手を挙げて「〇〇さんとは違って、・・・です」と言うようにしてきた。この話形を使っていないときには、教師が「〇〇さんの意見と似ているね」「〇〇さんの意見とは少し違うね」などと言うようにし、この言い方ができた時には友達の見解をよく聞いていたことをほめるようにした。そ

して、国語の授業の中では「〇〇さんと同じで、・・・です」という発言が特によく使われるようになった。

A 児は、国語の授業では自分が考えたことを発表することはできるが、友達の見解と比べて発表することはほとんどなく、自分の考えを書くのに時間がかかり、なかなか思ったことを全て書けなかった。しかし、この題材の中では、友達の見解と自分の見解を比べて発言する姿が見られた。男の子の気持ちがわかる場所に線を引く、それを発表する場面で、A 児は、B 児の発表を聞き、男の子の気持ちがわからないところが入っていることに気づき、それを指摘することができた (図 42)。なぜそう思ったかの理由までは言えなかったが、個人思考の場面で、B 児が発表した部分には線が引けていなかった A 児が、B 児の見解をよく聞いて、B 児の見解が正しいのかその時にしっかり考えることができたことがわかった。このほかに、この題材を学習しているときの算数の授業でも、A 児が友達の見解を聞いて疑問に思ったことを「それは違うのではないか」と指摘することがあった。このことから、A 児が自分の見解と友達の見解とを比べ、それをみんなの前で発表することができるようになってきたと感じた。

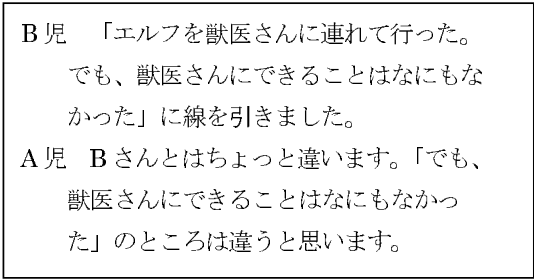


図 42 B 児の発言を聞いて間違いを指摘する A 児

3) 他の見解を取り入れ自分の見解をまとめ直す

授業の中で男の子の気持ちについて個人で考えてプリントに書き込み、その後、全体でそれぞれの考えを発表し合った。振り返り用紙には、良いと思った友達の見解や友達の見解を聞いて思ったことを書き込み、友達の見解を聞いて自分の考えが変わったときには、新しく考えたことも書き込むようにした。また、「きょうのなるほど!」として、よいと思う見解を言った友達の名前も用紙に書くようにした。

前単元の物語「くじらぐも」でも同じような振り返り用紙を使い、友達の見解を聞いて自分の見解をまとめ直すようにしてきたが、児童たちの授業の終わりで考えを十分全体に伝えることができなかった。そこで、本単元では、振り返り用紙に書かれた児童たちの見解のうち、多かったものや、よく読んでいるなと思ったもの、友達の見解を聞いてどのように考えが変わったかが書けているものをいくつか選んでプリントにまとめ、それを次の時間の始めに配って、前時を振り返るのに使った (図 43)。そうすることで、振り返り用紙の書き方にもすぐに慣れ、友達の見解を取り入れることは良いことだと伝えることができた。

第 3 場面の個人思考では、A 児は、男の子は「エルフ、ずっと大好きだよって



図 43 3、5 場面のまとめプリント

言われたらいい気持ちになるよね。エルフはどんどん太っていったので、ちょっと心配だなという気持ちだと書いていた。この授業中には発言することはできなかったが、振り返りには、「Cさんの、エルフがこれからどうなるか心配とはちょっと違って、エルフがこれからも生きていければ良いなという気持ちだと思います」と書き、今日のなるほど!には、C児の名前を書いていた(図44)。いろいろな友達の考えを聞く中で、ただ心配なのではなく、これからも生きてほしいという新たな考えをもつことができた。

第5場面の個人思考では、A児は男の子の気持ちを書く欄に、「ぼくが、どうして子犬をもらわないでエルフのバスケットをあげるの」と書いており、なぜ男の子のが子犬をもらわずにバスケットをあげたのかの理由がわからず、男の子の気持ちを書くことができなかった。しかし、全体交流で友達の意見を聞くことで、振り返りには、「男の子がなんでもらわなかったか」というと、隣の子の犬をもらうと、この子がかわいそうだからじゃないかなと思います」と、自分の考えを書くことができた。

このほかにも、第4場面では、D児は個人思考で「ぼくはエルフが一番好きだけど、気持ちが少し楽だった。それは、毎日お世話をしていたから。でも、すごくすごく悲しかった」と書き、振り返りには、「Eさんのもう一度遊びたいという気持ちがよくわかりました。だって、一番楽しかったのは、エルフと遊べたことだから」と書いた。F児も、個人思考では「世界で一番の宝物のエルフが死んじゃったから悲しいな」と書き、振り返りには、「ぼくは、Eさんのもう一度遊びたいが良いと思いました。なぜかという、ぼくも大好きな人が死んじゃったら、もう一度遊びたいと思うからです」と書いた(図45)。エルフが死んでしまって悲しい、庭に埋めても忘れられないなどという意見が多く出る中で、1、2場面のエルフと楽しく遊んだ頃を振り返って考えたE児の意見についても、良い考えとして振り返りに書き留める児童も何人かいた。自分の考えに固執せず、友達の考えにも耳を傾けることができているなど感じた。

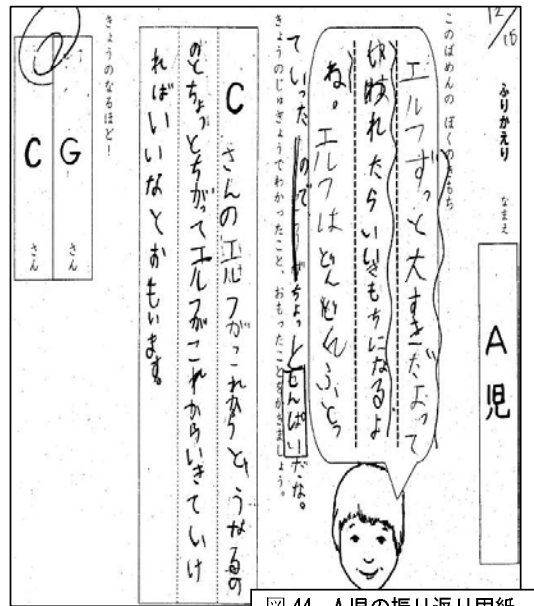


図44 A児の振り返り用紙

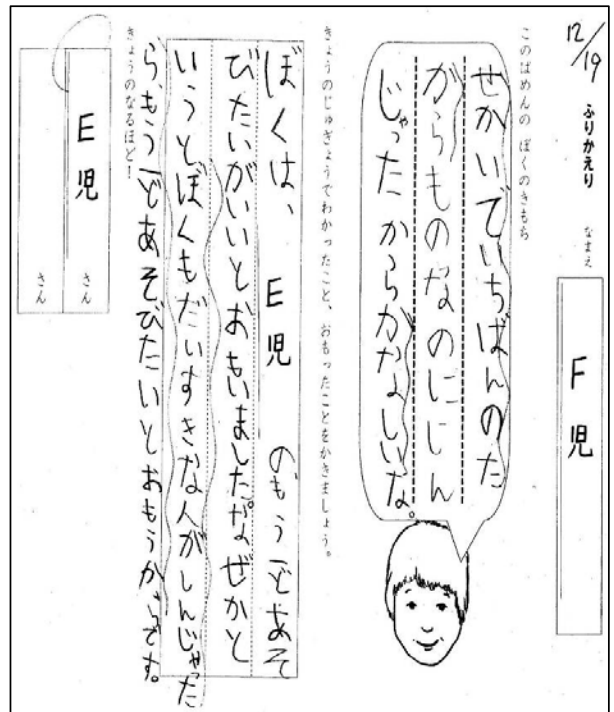


図45 F児のふりかえり用紙

2 2年生での実践

(1) 実践⑤

2年生は「わたしはおねえさん」の単元での実践を行った。指導目標は登場人物の行動や場面の様子から想像を広げながら読み、自分の経験と結び付けて、感想を持つことができること、また今の自分と過去の自分とを比べて、文章を書くことができることである。登場人物のすみれちゃんの行動から、その時の気持ちを想像し、意見を交流しあう活動をする。その中で、お互いの意見を聞き、自分の意見と比べて、自分の考えを深めさせることができればと考える。

1) 繰り返しの活動の中で、話し方・聞き方を定着を図る

スピーチ活動については、朝の会と帰りの会で実践していった。朝の会では日直が今日どんなことをがんばりたいか、帰りの会では今日のよかったことを話していった。その中で拍手や質問を行い、話を聞く姿勢を意識させていった。

2) 意見を比べて聞く・分かりやすく伝える

ハンドサインや話形は、おもに読み取りの活動の場面で用いる(図46、47)。すみれちゃんはどんな子か?という発問に対して、このような子であると発言するとともに、何ページのどこからわかるかを発言させる。そのときにハンドサインを用いてお互いの意見をしっかりと聞く意識を持たせること。話形を意識させて、発言をしやすく、また聞き取りやすい発言になることをねらいをした。

ハンドサインは発表する人の意見について、質問・つけたし・反対・賛成・意見を示すものである。



図46 ハンドサイン掲示



図47 ハンドサインを用いている児童

3) 他の意見を取り入れ自分の意見をまとめ直す

振り返りについては、意見交流をきいて、本時の中で一番なるほどと思った意見を言った人を振り返り、その意見のいいなと思ったことを書かせていった。そのことによって他の児童の意見と自分の意見を比べて、自分とどこが違うのかを意識させることをねらいとした。

毎時間、ワークシートを用いて授業を進めた(図48)。ワークシートにすみれちゃんの気持ちを想像させ、書き込ませていった。その想像した気持ちを交流させて、他の意見に触れさせることで自分の考

えを深める活動を繰り返し行った。

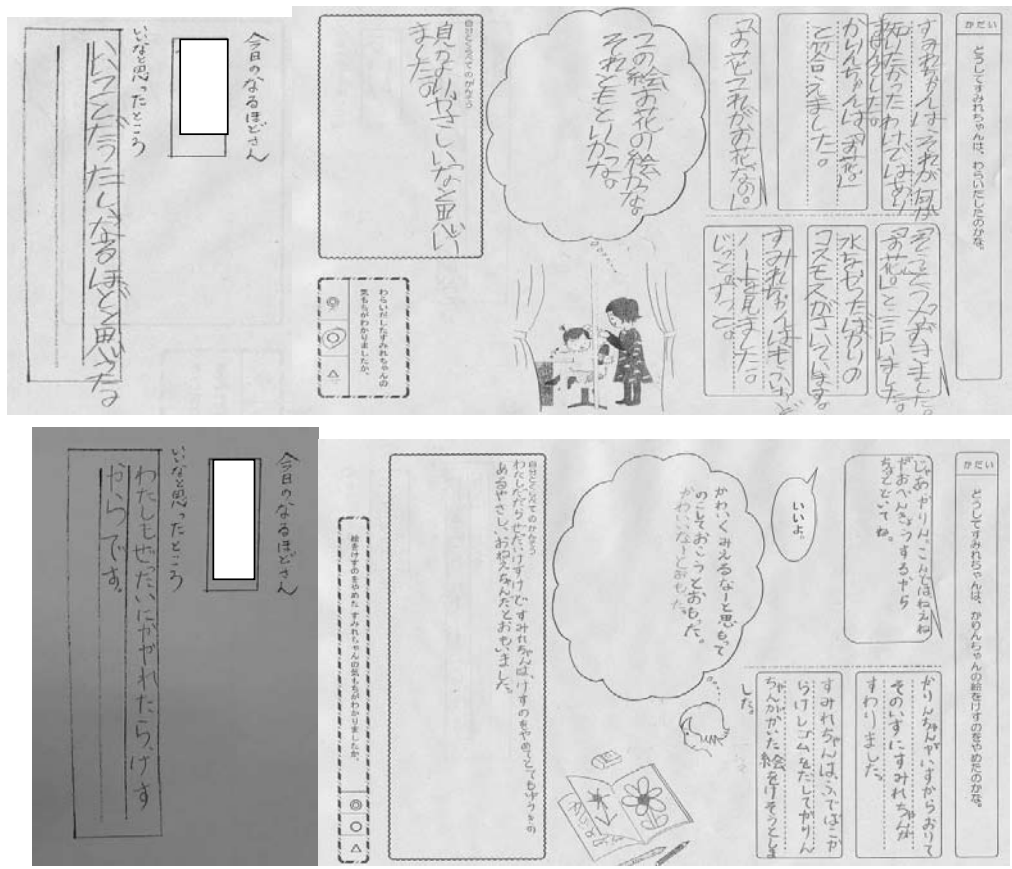


図 48 児童のワークシート

児童の振り返りでは自分と同じ意見であったや、なるほどとおもったなど、他の意見を聞いて自分の考えを深めている様子を見ることができた。

考察

授業の流れの中で振り返りの時間が短くなってしまうことがあった。またどのようなことを振り返ったか数名に発言させると良いと感じた。ハンドサインは自分の意見と比べて、つけたしをする児童もいたが、考えずに賛成をしている子もいるように感じた。活用する場を考えて行くと良いと感じた。

成果

他の児童の意見を振り返らせることは、他の意見をしっかりと聞こうとする意識を高めることができたように感じる。自分とは違う意見でなるほどなどと思ったり、同じ意見で考えを確認している児童を多く見ることができた。

(2) 実践⑥

1) 繰り返しの活動の中で、話し方・聞き方の定着を図る

昨年度、「好きな食べ物」「好きな色」などのテーマを決めて、好きなものとそれが好きな理由の二文

程度のスピーチは毎朝やっていたと聞いた。今年は、テーマの指定はせずに話したいことを話すということにし、話を聞いたあとに質問タイムを設けて進めてきた。

自分でテーマを設定するというで、子どもたちの話題はさまざまであった。先週の週末に楽しかったことを話す児童が多かったが、ほかにも、楽しみなことや頑張っていること、習い事のことや最近びっくりしたことなど、その子らしいと思う話題がたくさんあった。最初は、30秒にも満たないような短いスピーチしかできない児童や、家で原稿を書いてこないと話せない児童が多かった。しかし、今ではその場で考えながら詳しく話せる児童が増え、聞いている人が面白いような話題を選ぶ児童も出てきた。聞いている児童も、「えー！」と驚いたり、「いいなあ」とつぶやいたりして、友達のスピーチをよく聞いていることがうかがえるようになってきた。

スピーチの最後の質問タイムにも多くの児童が手を挙げる。もっと詳しく知りたいことを質問するのは話を聞いていた証拠、ということ話を話してきた。質問でよく尋ねられるようなことはあらかじめ話しておこうとする児童もいた。本学級には、自分の気持ちを言葉で伝えることが得意ではなく、算数などではよく発言をするが国語ではなかなか話せない児童、A児がいる。A児は、4月当初、みんなの前でスピーチをすることができなかった。何を話していいかわからない様子だったので、次の日直の時にはA児が話しやすそうな話題を提案したが、話すことはできなかった。その次の日直の時にも話せない様子だったので質問タイムにしたところ、A児に質問をしたい児童がたくさんいた。「好きなものはなんですか？」と聞かれて、自分の好きな車についてもすらすらと話した。その日以降、A児はスピーチの時間に話せるようになり、A児が困った顔をするとう「質問しようか？」と声をかけてくれるようにもなった。

どの児童にも話す機会が与えられることは良いトレーニングになった。学習とは違う身近な話題であることも聞く意欲へ繋がり、素直な反応に表れたと感じた。また、A児の成長からも、スピーチで児童たちが話せるようになってきたのは、質問タイムに多くの児童が手を挙げることも一つの要因であると考えている。2ヶ月ほどの間で、約7割の児童がスピーチタイムに質問をした。中にはスピーチで話していた内容を質問する児童もいるが、そういう質問が出ると、「それさっき〇〇だって言ってたよ！」と児童たちの中から反応がある。みんなが聞いてくれているという反応が目に見えるということが、児童たちに力を与えていると考えられた(図49)。

2) 意見を比べて聞く・分かりやすく伝える

発言する時に、自分の意見は前に発言した児童の意見に対してどのような内容なのかを表すという方法で使った。

国語の授業のなかでは、質問やつけたしがよく使われ、道徳や算数では反対も頻繁に使う姿が見られた。意見が対立して討論のような時は、反対のサインもたくさん使っていた。ハンドサインを使うと「それって、さっきの意見につけたしじゃない?」「質問する時は一本指だよ」といった声が、児童たち同士の間で聞かれるようになった。

ハンドサインをすることで、自分の意見が前の意見と比べてどのような内容になるのかということを考えることができたので、友達の考えの内容を意識して聞くということに有効であったと思う(図50)。しかし、特に反対のサインは、相手をけなすような言い方・雰囲気にならないように十分注意しなければならない(図51)。これからも継続して、もっといろんなシーンで、自然に使えるものになっていくように声を掛けていきたいと思う。



図49 掲示



図 50 話し合いでハンドサインを使う



図 51 反対意見を表す子どもたち

3) 他の意見を取り入れ自分の意見をまとめなおす

2年生国語「わたしはおねえさん」で実践を行った。本教材の主人公は2年生で、小さな妹がいる「すみれちゃん」という女の子である。すみれちゃんは、「2年生になったから宿題も早くやろう」と張り切るが、ほかのことが気になって後回しにしてしまう。その間に妹にノートに落書きをされ、怒りたいのか泣きたいのか分からなくなってそれを消そうとするが、最後は妹の絵をかわいく思い、消すのをやめて二人でわらうという話である。主人公の、おねえさんとして張り切っている心情、それなのにほかのことに気を取られてしまう幼い行動は、妹や弟がいる・いないに関わらず、学校生活においても子どもたち自身が経験したことがあると思ひ、非常に共感しやすいと考えた。そこで、主人公と自分を比べながら読み取りをしていき、最後の場面でのすみれちゃんの成長に気づいてほしいと願って進めていった。

授業では、図52のようなワークシートを使用した。今までに、教科書の本文だけを印刷したワークシートは使用したことがあり、そのときは本文の横に書き込んでいった。しかし今回は罫線の部分に書いていくということで少し戸惑っている児童もいたが、ほとんどの子が、自分の考えは黒で友達の考えは赤で書くというルールも覚えていてスムーズに使うことができた。

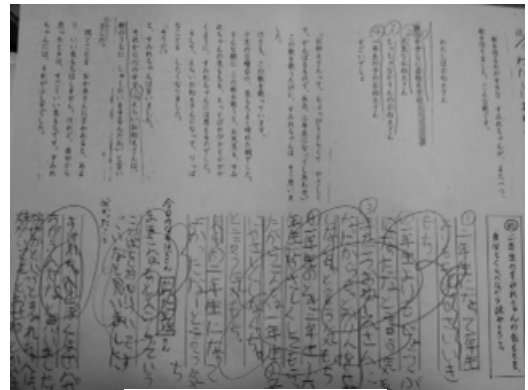


図 52 ワークシート

ワークシートのふりかえりに、なるほどさんという欄を設け、今日の授業の中で「なるほど」と思った児童の名前と、理由を書くようにしたところ、下のような記述が見られた (図 53)。

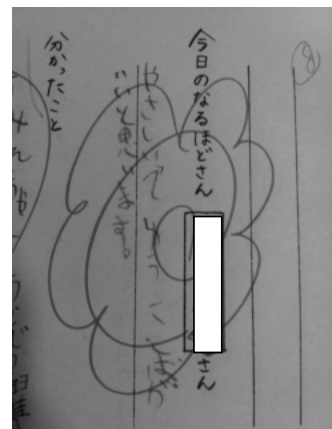
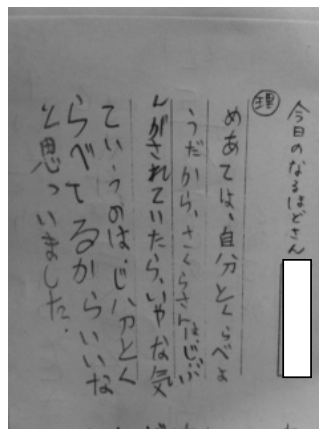
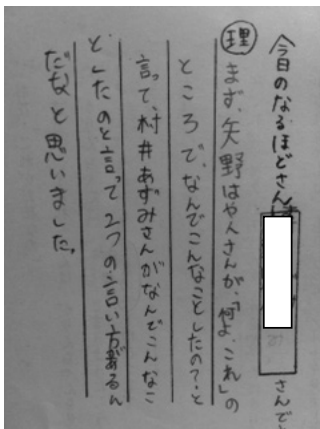


図 53 振り返り

児童一人一人の書く力やふりかえりを書く時間の長さ、内容の充実度が左右されるところが大きかったこと、教師が最後に取り上げた児童の名前が挙がることが多いことが分かった。しかし、友達の発言の些細な言葉遣いについて書いている児童もいて、授業の中で友達の発言を丁寧に聞いている事が感じられたし、自分の意見と比べて違ったところを取り上げる児童も多かったので比べて聞いている児童も多いということが分かった。ただ、やはり能力差による内容の充実度の差は大きくなる。能力の高い児童はすらすらと書いていたが、能力が低めの児童は慣れるのに時間がかかった。それぞれのレベルの中ではあるが、赤でメモする量が増えていたり、黒板を見たり自分のワークシートを見たりして友達の発言を基に授業の内容を振り返るようになってきた姿を見て、なるほどさんを書こうとする意欲が聞く意欲にも通じている部分があると感じられた。

4 考察

1) 繰り返しの活動の中で、話し方・聞き方の定着を図る

今回の実践ではスピーチ活動を通して、話す・聞く時のルールを徹底的に意識させるようにした。他の児童の話を書く楽しさ、話を聞いてもらえる嬉しさを味わうことができると、そこから児童の姿勢は変わってきて、声かけをしなくても自然に発表者の発言に耳を傾ける児童が増えていく姿が見られた。また低学年では、クラスの子全員に向けて一人で話すことに慣れていないので、スピーチ活動を繰り返し行い、指導していくことが、話す・聞く基本を身につけるために必要だと感じた。

スピーチ活動において、話し方・聞き方の定着を図ることにより、スピーチ以外でも大きな声で発言することが多くなったが、自信のない問題や周りの反応によって声が小さくなってしまふ姿が見られた。そのため話し方・聞き方が定着した後は、聞いている子の、うなずき、表情などの反応の仕方についても指導し、話す児童が安心して話せるような雰囲気を作っていくとよいと感じた。

2) 意見を比べて聞く・分かりやすく伝える

話形を用いることによって、友達の意見を聴いて、自分の意見と比べて考える姿が見られた。低学年は、大勢の人の前で話す経験が少なく、話し方の基本が身につけていないので、話形により、話しやすく、聞き取りやすくする必要があったと感じた。児童たちが話し方・聞き方が定着してきたら、話形にこだわらず自由に話をしていけるとよいと感じた。

ハンドサインを用いることによって、自分の意見が前の意見と比べてどういう内容になるのかということを考えることができたので、友達の考えの内容を意識して聞くということに有効であった。

またハンドサインの使う時、反対のサインでは、相手をけなすような言い方・雰囲気にならないように十分注意しなければならない。

国語の「気持ちを考え、発表する」ときなど、賛成・反対をさせない場面もあるので、ハンドサインをさせる時を見極めて取り入れていく必要があると感じた。

3) 他の意見を取り入れ自分の意見をまとめ直す

今回の国語の物語単元1年「ずうっと、ずっと、大すきだよ」、2年「わたしはおねえさん」では、他の意見を取り入れて自分の意見をまとめなおすことをねらいとして、ふりかえり活動を行ってきた。

ふりかえり活動において、なるほどと思った意見を書かせることにより、徐々に自分の考えとの相違点を見つけ、自分の考えと比べることができるようになった姿が見られた。

しかし他の意見と自分の意見を比べ、友だちの良いところを見つけることはできるようになってきたが、自分の考えをまとめ直すまでに至っている児童は多くはなかった。

自分の意見を深め、まとめなおすことができた児童を紹介するなど、自分の考えを深めることを促していきたいと感じる。

また児童一人一人の書く力やふりかえりを書く時間の長さに、内容の充実度が左右されるところが大きかったこと、教師が最後に取り上げた児童の名前が挙がるが多かった。

ふりかえり活動を継続して行うことで、徐々にその活動に慣れて、よい意見を見つけようとする意識を高めること、ふりかえり活動の時間をしっかりと確保することが課題であると感じた。

既習事項を基に自分の考えをもって、 よりよい解法を導き出せる子どもの育成

| | |
|-------|------------|
| 三輪 芳久 | 犬山市立犬山西小学校 |
| 高橋 伸 | 犬山市立楽田小学校 |
| 波多野泰平 | 犬山市立犬山南小学校 |
| 溝口 修平 | 犬山市立城東小学校 |
| 三輪 裕樹 | 犬山市立犬山中学校 |
| 伊藤 孝行 | 犬山市立南部中学校 |
| 石山 雄太 | 犬山市立南部中学校 |
| 田中 寛之 | 犬山市立南部中学校 |

はじめに

興味関心をもって算数・数学の授業に向かうことができ、課題に対して、自分の考えをもって取り組むことができる児童生徒を増やすことを考えて、この1年間研究してきた。小学校教諭3名と中学校教諭4名が、それぞれ異なる学年の異なる単元の中で、全員が”既習事項を基に自分の考えをもって、よりよい解法を導き出せる子どもの育成”という共通のテーマをもって研究し、各々の授業で実践した。

1 テーマ設定の理由

算数・数学部会では、まず小学校と中学校との連携を高めるために、それぞれの実態について把握した後、この1年間、どのようなテーマについて研究し深めていくのかについて話し合った。異なる学年の中のどこに共通のテーマをもって取り組んでいくかを考えた。学習内容が大きく異なるのでなかなか共通点を見つけることは難しかったのだが、どの学年でも必ず取り組む、授業の導入について研究していくことにした。それぞれの学校や学年でどんな単元でどのような授業の導入の仕方をしているのか資料を持ち寄った。それぞれの学校・学年・単元・学習内容によって取り組み方に違いがあることが分かった。他学年の取り組みでも自分の学年に取り入れることができるものが多くあった。しかし、話し合いを進めていくうちに1年間取り組んでいく研究としては、広がりはあるけれども深まっていくものにはならないということが分かってきた。もっと研究を深めていくためのテーマを考え直すことになった。そこで、子どもの思考力について着目し、研究を進めていくことにした。課題を解決するために必要な思考力を1時間の学習の中でどのように育てていくのかということについて話し合った。そして、その中でも、どの学年にも当てはまる、既習事項を基に思考することを研究の中心において実践をし、自分たちで考え追究していく姿を目指していくことにした。『既習事項を基に自分の考えをもって、よりよい解法を導き出せる子どもの育成』をテーマとし、研究を進めていくことにした。

2 研究仮説

算数・数学科の「数学的思考」の指導を中心とした学習活動において、既習事項を想起させるための復習を行ったり既習事項を本時の学習内容につなげることができるような手だてをもったりすれば、それを基に子どもたちは多様な考えを引き出してよりよい解法を導き出せるだろう。

3 研究の手立て

本研究では、「よりよく解く力」や「答えまでの多面的な見方ができる力」、「じっくりと考える力」を付けさせたい力とし、次のような5つの工夫をしていくこととした。

- ① 課題提示と学習内容の順序
- ② 既習事項を活かす
- ③ 1つ以上自分の考えをもつことができるようにする
- ④ 解き方を複数あることに気づかせる
- ⑤ より良い解法はどれかの判断をする

4 実践例

実践1 小学校1年

(1) 児童（生徒）の実態

本学級は、男子16名、女子15名、計31名が在籍している。小学校に入学して数ヶ月が経ち、基本的な生活習慣や学習のルールなどが定着してきた。授業の様子を見ている、と学習に取り組む意欲をしっかりとつことができているように感じる。算数の授業では、挙手をする児童は多く、自分の答えを発表することに抵抗のない児童が多くいる。発表する相手の方を見て聞く姿も良くなってきており、授業の中での成長を日々感じている。一方で、自由な思考で課題について自分の考えをもつような場面を設定すると、なかなか手が進まなかったり、どのように表現していいか分からなくなってしまったりすることがあった。もちろんこれは、1年生にとって慣れない活動であり、このような活動の方法を学び教えていかなければいけない。今回の実践の中で、単元を通して計算問題を解くだけでなく、どのように解くのか考えていくことで思考力を育てていきたい。そして、今まで習ったことを基に自分なりの考えをもつことができ、他の人と違う方法でも自分の考えに自信をもって取り組むことができるようになってほしい。そのためにいくつかの手だてをもって実践に取り組むことにした。

(2) 実践の具体的な手立て

1) 単元を通した手立て

- ① 単元の見直しをもてるように、第1時限目の授業でガイダンスを行い、授業の始めに示した学習の流れに沿って、毎時間同じ流れで繰り返し学習していくようにする。
- ② 個人思考の時間を確保し、自分の考えをもって話し合いに参加できるようにする。
- ③ 合言葉カードを用いて考えを整理し、繰り下がりのある減法の説明の仕方を学ばせる。
- ④ 様々なペア交流やグループ交流、全体交流の場を繰り返し設定する。

- ⑤ 毎時間の始めに計算問題を解く時間を設けることで自分の成長に気づけるようにする。
- ⑥ 練習問題を用意し、伝え合いの成果を別の問題で活用できるようにする。
- ⑦ IT の特性を活かし、効果的な学習活動になるようにする。

2) 本時の手立て

- ① 算数ブロックを用いて具体的に操作させることで、繰り下がりのある減法の数の動きを理解させ、多様な考え方を引き出すことで思考力を養うようにする。
- ② 数図ブロックの丸が書かれたプリントに書き込んで消していくことで思考の記録を作り、自分の考えに自信をもてるようにする。

(3) 実践の内容

1) 単元名 ひきざん2

2) 本単元の指導構想

本単元では、13時間完了の繰り下がりのある減法を学習する単元である。本単元では、計算の習熟と思考の定着という2つのねらいをもって授業を展開していく。1つ目の計算の習熟では、授業の始めに3分間計算チャレンジカードという技能を高めるための活動を取り入れ、計算力の向上を目指す。2つ目の思考の定着では、合言葉シートという繰り下がりのひき算をどのような考えで解くのかをまとめたもので、これを使って相手に説明することを繰り返すことで、繰り下がりのひき算の考え方の理解を深めていく。また、今回の実践では、学年で少しずつ進度をずらしながら学習を進めていくことにした。毎時間の学習について学年で検討し合いながら進めることで、研究がより深まっていくと考えたからである。

3) 本時の指導構想

本時で学習する第2時は、繰り下がりのひき算の仕方をいろいろな方法で考える内容である。第1時で学習した数え引きという方法以外に、もっと簡単にできる良い方法を数図ブロックを使ってみつけていく。この時間に学習したことが、この後の授業で取り組む、相手に説明するために用いる合言葉シートの基となっていく。これまで10以下のひき算や20までの数を使った繰り下がりのないひき算についての学習を進めてきた。この既習内容を活かして、子どもたちにどうやっていろいろな考え方をさせられるかが大きな問題だった。そこで、いろいろな考え方をさせるために、数図ブロックを用いて考える時間を十分に確保すること、数図ブロックの丸が書かれた学習プリントを準備して、そのブロックの丸を消して考えを書き込むことで子どもの思考の足跡を確認できるようにするようにした。こうした2つの手だてをもって、実践をスタートした。

4) 本時の目標




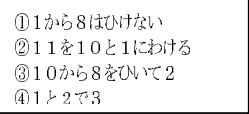
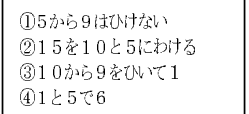
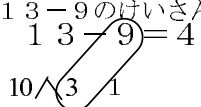

(十何) - (1位数)で繰り下がりのあるひき算について、数図ブロックを操作し、計算方法を見つけることができる。

5) 学習過程

…本時の目標 学習形態：-個別 -グループ -一斉

| | | |
|----|---------|-----------------|
| 段階 | 学 習 活 動 | 教 師 の 活 動 と 支 援 |
|----|---------|-----------------|

| 階 分 | | T 1 | T 2 |
|---|---|--|---|
| つ か む 10 | <p>1 計算チャレンジプリントに取り組む。 個</p> <p>2 本時の学習内容と流れをつかむ。 斉</p> | <p>○ 消し法(数え引き)で行うことを伝える。</p> <p>○ 時間を区切り、能率良く活動するよう促す。</p> <p>○ 黒板に問題を提示し、児童に立式させ板書する。</p> <p>○ 学び時計を用い、学習の流れを説明する。</p> | <p>○ 答え合わせやチャレンジカードの記入に戸惑っている児童の支援をする。</p> <p>○ 問題場面を把握させるため学習コーナーに柿の木を提示する。</p> <p>○ 学習内容と流れを黒板に提示する。</p> |
| <p>評1 本時の課題をつかみ、学習意欲をもつことができたか。(表情)</p> | | | |
| <p>13-9のけいさんのしかたをかんがえ、ともだちにつたえよう。</p> | | | |
| と り く む 30 | <p>3 数図ブロックを動かして、13-9の計算の仕方を考え、プリントに書く。 個</p> <p>4 速くて簡単で正しくできる方法はどれか話し合う。 斉</p> <p>5 まとめる ① 減加法の考え方をブロックを動かして確認する。 個 ② さくらんぼ計算のやり方を合い言</p> | <p>○ 棒にブロックを置かせ、10のまとまりと、はしたの3で13と表すよう指示する。</p> <p>○ ブロックで解決できたら、どこから、どのように取ったのかプリントに記録するように伝える。</p> <p>○ どの考え方も答えが同じであることを確認する。</p> <p>○ 速く、簡単、正確の3観点から、本時は減加法が手際がよいことに気付かせる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>A 【数え引き】 13から1ずつひいて残りを数える。 ○○○○● ●●● 9 321 ●●●●● 67854</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>B 【数え引き】 10のまとまりから1ずつひいて残りを数える。 ●●●●● ○○○ 12345 ●●●●○ 6789</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>C 【減加法】(ひきたし算) 10のまとまりから9をひく。 ●●●●● ○○○ ●●●●○ →</p> </div> | <p>○ 円滑に取り組めるように、机間指導をする。</p> <p>○ 13個の中からどこの9個を取ったらよいのか、ブロックを動かして考えさせるようにする。</p> <p>○ 机間指導をして発表させる児童を選出し準備させる。</p> <p>○ 発表した考え方について、ブロックで方法を確認する。</p> <p>○ それぞれの13-9の計算の仕方を分類する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>D 【減々法】(ひきひき算) 9を3と6に分ける。 ●●●●● ●●● 6 3 ●○○○○</p> </div> <p>○ 戸惑っている児童に助言しながら活動を見守る。</p> |

| | | |
|---|--|---|
| <p>葉カードをヒントに考える。 </p> <p>③ ペアで減加法の合い言葉を唱えて考え方を確認する。  【伝え合う力】</p> <p>6 練習問題を解く。</p> <p>① 11 - 8 </p> <p>② 15 - 9 </p> | <p>あいことば：10からひいて、のこりたす。</p> <p>① 3から9はひけない。 ② 13を10と3にわけ。 ③ 10から9をひいて1。 ④ 1と3で4。</p> <p>13-9のけいさんのしかた </p> | <p>○ 合い言葉カードを掲示し、説明に合わせて板書する。</p> <p>○ 説明できたら相手の振り返りカードにサインするように指示する。</p> <p>○ 早く終わってしまった児童は、プリントの裏の練習問題に取り組むよう促す。</p> <p>○ 時間を区切り、意欲的に活動するよう促す。</p> <p>○ 数図ブロックを動かしながら、合い言葉カードの言葉を押しさえる。</p> <p>○ うまく交流できないペアを中心に声かけをする。</p> <p>○ 数図ブロックを操作しながら動かし方と着眼点を示して合い言葉カードの答え合わせをする。</p> |
| <p>7 本時を振り返り、学習の姿についてまとめる。 </p> <p>まとめる5</p> | <p>評2 繰り返し下がりのあるひき算の方法を友達に説明することができたか。(プリント) (活動・発言)</p> | <p>○ 必ずさくらんぼで数を分けて計算を進めることを指示する。</p> <p>○ 終わった児童は、数図ブロックを操作し、合い言葉カードの記述が正しいかどうか確認するように促す。</p> <p>○ 理解できていない児童にブロック操作をさせながら合い言葉カードの記入をし進めていくなど個別に細かな支援し学習内容の確実な定着を図る。</p> <p>○ 早く終わった児童には、練習問題の計算の仕方が説明できるように指示する。</p> |
| | <p>評3 繰り返し下がりのあるひき算を計算することができる。(プリント)</p> | <p>○ 振り返りの視点と基準を示して学習の到達度と学び合いの取り組みを客観的に振り返れるようにする。</p> <p>○ 振り返りカードの記録に戸惑っている児童を支援する。</p> |

6) 考察1

13-9の計算の仕方を考える場面で、ワークシートの数図ブロックの丸を消して自分の考えを記録するという形で、個人思考の時間を設定した。いろいろな考え方が出てくることを期待した時間だったが、ここでは数え引きの考えばかりが出てきた。チャレンジ問題を第1時に続いて数え引きで取り組ませたことで、児童に数え引きの考え方を刷り込んでしまったのかもしれない。「他の考え方はない?」「ブロックの動かし方を工夫してみよう。」といった教師からの追加の発問・助言もあったのだが、減加法や減減法の発想に辿り着くことはできなかった。減加法の10からまとめて引く方法を思いつく児童は1人だけだった。ワークシートの数図ブロックを消すことで多様な考えを引き出させようと考えていたが、かえって

子どもの思考を狭めていたように感じた。授業の最後には、合言葉シートをペアで読み合う活動を予定していたのだが、時間がきたので打ち止めとなってしまった。この授業で、どの活動に重点をおいて児童のどんな力を育てるのかさらに明確にした上で、活動の精選が必要であることに気づいた。学年で研究協議を行い、いくつかの改善するべき点が分かってきた。一つ目は、ワークシートを用いるのではなく、数図ブロックを動かすことだけで多様な思考を引き出すということである（図 53）。



図 53 ブロックを使って考える児

せつかく数図ブロックで構築した思考がワークシートに書き込むところで失われてしまい、多様な考えを引き出せていないのではないかとということである。そこで、数図ブロックを使って考えることだけに児童の思考を集中させることで、自分なりの考え方をしっかりもつことができるのではないかと考えた。二つ目は、第2時では計算チャレンジの活動を行わないことである。三つ目は、この第2時では合言葉シートには触れず、数図ブロックで確認したブロックの動きを計算の中でさくらんぼ計算として子どもにしっかり理解させるというものだった。二つ目と三つ目については、どちらも本時の学習内容として何を大切にすべきかをもう一度考え直していく中で出てきた改善点である。この授業では、自分なりの考え方をよりよい解法を見つけ出すことに重点を置いた活動をするべきと考え、それ以外の活動は極力減らすことにした。こうして、先行実践を基に、学年で話し合い、改善した以下の指導案を完成した。

7) 学習過程2

□ …本時の目標 学習形態： 個別 グループ 一斉

| 段階分 | 学 習 活 動 | 教 師 の 活 動 と 支 援 | |
|---|---|--|--|
| | | T 1 | T 2 |
| つかむ 1 0 | 1 本時の学習内容と流れをつかむ。 <input type="checkbox"/> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 黒板に問題を提示し、児童に立式させ板書する。 ○ 学び時計を用い、学習の流れを説明する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 問題場面を把握させるため学習コーナーに柿の木を提示する。 ○ 学習内容と流れを黒板に提示する。 |
| <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 評1 本時の課題をつかみ、学習意欲をもつことができたか。(表情) </div> | | | |
| <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 13-9のいろいろなけいさんのしかたをかんがえよう。 </div> | | | |
| と | 3 数図ブロックを動かして、13-9の計算の仕方を考え、プリントに書く。 <input type="checkbox"/> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 鉄板の枠に自分のブロックを置かせ、10のまとまりと、はしたの3で13と表すように指示する。 ○ どの方法で考えているか1グループ～4グループをチェックし、T2と確認する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 13個の中からどこの9個を取ったらよいか、ブロックを動かして考えさせるようにする。 ○ どの方法で考えているか1グループ～4グループをチェックし、T1と確認する。 |
| り | 4 いろいろな方法について発表し合 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 発表させる児童を選出し準備させる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 発表させる児童を選出し準備させる。 |

| | | | |
|--------------|--|--|---|
| く む 30 | い、どの方法でも答えが出ることを確認する。 斉 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 発表する児童と黒板で一緒にブロックを動かして手助けをする。 ○ どの考え方も答えが同じであることを確認する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 発表した考え方についてブロックで方法を確認する。 ○ それぞれの13-9の計算の仕方を分類する。 |
| | | <p>A 【数えひき】 13から1ずつひいて残りを数える。 ○○○○● ●●●● ●●●●● 9 321 67854</p> | <p>B 【数えひき】 10のまとまりから1ずつひいて残りを数える。 ●●●●● ●●●● ○○○ ●●●●● 12345 ●●●●● 6789</p> |
| | | <p>C 【減加法】(ひきたし算) 10のまとまりから9をひく。 ●●●●● ○○○ ●●●●● →</p> | <p>D 【減々法】(ひきひき算) 9を3と6に分ける。 ●●●●● ●●●● 6 3 ●○○○○</p> |
| | 5 減加法の考え方をブロックを動かして確認する。 個 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 速く、簡単、正確の3観点から本時は減加法が手際がよいことに気付かせる。 ○ 黒板で見本を見せてから児童に机上のブロックで動かすように指示する。 ○ できた児童にはどうやって動かしたのか話しながら動かすように指示する。 ○ ブロックを使ってさくらんぼで数を必ず分けて計算を進めることを指示する | <ul style="list-style-type: none"> ○ 戸惑っている児童に助言しながら机間指導する。 ○ まとめてとることを意識して動かすように支援する。 ○ 数え引きと区別できていない児童を中心に支援する。 ○ 早く終わって多くたらの問題に取り組むことができるようにプリントを準備しておく。 |
| | 7 ブロックを使って減加法で練習問題を解く。 個 ① 11-8 ② 15-9 | <p>評2 繰り下がりのあるひき算をブロックを用いて減加法で計算することができる。(プリント)</p> | |
| | 6 減加方の考えからさくらんぼ計算のやり方を知る。 全 | <ul style="list-style-type: none"> ○ さくらんぼ計算のやり方を説明しながら黒板に板書する。 ○ 板書のみでさくらんぼ計算することを指示する。 ○ 早く終わってしまった児童は、プリントの裏の練習問題をさくらんぼ計算を用いて取り組むよう促す。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 数図ブロックを動かしながら、さくらんぼ計算のブロックの動きを確認する。 ○ 理解できていない児童にはブロック操作をさせながら、さくらんぼ計算の記入を進めていくなど個別に細かな支援し、学習内容の確実な定着を図る。 |

さくらんぼ計算
13-9のけいさんのしかた

評2 繰り下がりのあるひき算の方法を理解することができたか。
(プリント) (活動・発言)

| | | | |
|----------|----------------------------|---|-----------------------------|
| まとめ 5 | 7 本時を振り返り、学習の姿についてまとめ 個 | ○ 振り返りの視点と基準を示して、学習の到達度と学び合いの取組を客観的に振り返れるようにする。 | ○ 振り返りカードの記録に戸惑っている児童を支援する。 |
|----------|----------------------------|---|-----------------------------|

8) 考察2

① 成果

前回の実践の反省点を活かして臨んだ第2時の授業だった。児童に多様な考えをもたせたいという思いをもっていたために、ついついいろいろな手だてを準備してしまっていたが、本当に必要な手だてなのかをじっくり検討することが必要であると感じた。1年生の子ども達にとって本当に必要な手だては数図ブロックを何度も繰り返し動かすことだった。第1時に数え引きの方法を学習していたので、その方法を基にもっと簡単な方法はないかとブロックをいろいろな方法で動かして考えていた。数図ブロックで考えた後、全体発表の場面を迎えたのだが、児童はブロックを使ってじっくり自分の考えを何度も思考を繰り返していたから、黒板でブロックを動かしながら友達に考えを伝えることができた。また、前回の実践ではあまり出てこなかった多様な考え方が、今回の実践では4つとも出てきた。ワークシートを使うのをやめて、数図ブロックを動かすだけで児童の思考は確実に構築されていることが感じた。児童の思考を表現するために、1年生にとって数図ブロックを使うことがより効果的であるということがよく分かった。話し合ったところをしっかりと改善して授業につなげることができたことを実感した。

② 課題

今回の実践の中で、主題の中で迫ることができなかったことがあった。それは、よりよい解法を導き出せるというところである。本時の中で児童は多様な考えをもつことができた。しかし、その中でどの方法が、自分にとってよりよい解法なのかを考える時間をもつことができなかった。その部分は、教師主導の授業となってしまう。自分の考えと他の人の考えを比較することができなかったのである。また、よりよい解法というのがどのような視点で判断すればいいのか、まだ1年生には分からないようである。これは、発達段階に応じて成長していく力であると思うが、1年生なりに考え方を比較し、判断するような活動を取り入れていくことも必要であると感じた。

実践II 小学校 4年生

(1) 児童（生徒）の実態

本校は、明るく活発な児童が多く、積極的に授業に取り組むことができる。しかし、思いつきの回答が多く、根拠をもって答えを導き出すことができない児童が多い。回答に対して説明を求めると、とたんに自分の考えに自身がもてなくなってしまう。学習したことを理解できたように見えるものの、新しい考えを生み出す基となる知識・技能として定着していないため、活用することができない状況ともみてとることができる。このような状況を改善するため、内容や意味を整理させ、単元全体に目を向けさせながら、指導を続けている状況である。

(2) 実践の具体的な手立て(単元への思い)

本単元では、直線と直線の結びつきや図形の形などから根拠をもって考えることができるよう、既習事項に立ち返ることができる指導をしようという思いで学習に取り組んだ。単元の初めに、今までの知識に加えてどんな新しいことを知ることか興味・関心を引き立てるため、既習事項を書き出した上で身につけたい内容を書き出すことから行った。毎回の授業においても、既習事項を確認したうえで解決の基になりそうな考えを書き出すようにした。授業の最後には、既習事項との共通点と相違点を考えさせ、解決すべきことを明確にしてまとめを行った。ふりかえりにおいても、既習事項との関連に目を向けさせ、相互関係を捉えさせるといった流れを大切にしている。

(3) 実践の内容

1) 単元名 垂直・平行と四角形

2) 本時の目標

四角形の対角線による合成と分解をもとに、四角形の概念や図形の見方の理解を深める。

3) 学習過程

| 主な学習活動と予想される児童の反応 | 形態 | 指導・支援【学び合う姿の評価】 |
|--|--------------------------------------|---|
| <p>1 前時の復習と本時の課題をつかむ。 平行四辺形、長方形、ひし形の定義と性質を思いだす。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 平行四辺形やひし形の性質を使って問題を解こう。 </div> | <p>一斉 5分</p> | <p>・復習から本時の課題へとつなげて興味づけ、課題を提示する。</p> |
| <p>2 形の同じ2つの三角形を組み合わせて四角形を作る。</p> <p>(1) 四角形が何種類できるかを調べる。</p> <p>(2) 平行四辺形が何種類できるかを調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これははみ出してしまっているから、四角形ではない。 ・これは2組とも平行だから平行四辺形だ。 | <p>グループ 10分</p> | <p>・四角形のつくり方を確認する。</p> <p>・見落としや重複が出ないように、ホワイトボードにできた形を貼り付けるよう指示する。</p> <p>【グループで協力して、平行四辺形を導き出すことができたか】</p> |
| <p>3 P35⑤の問題に取り組む。</p> <p>(1) 長方形を対角線で切ったときにできた三角形について調べ、そのわけを説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1本で切ると、直角三角形が2つできる。 ・2本で切ると、2種類の二等辺三角形が2つずつできる。 <p>(2) 長方形の対角線で切った三角形を使ってひ</p> | <p>個別 全体 10分 個別</p> | <p>・長方形を切ったときどんな三角形になるかを予想を促す。</p> <p>・すでに対角線をひいた長方形の紙を児童に配布する。</p> <p>・2種類の二等辺三角形が4つできることを確認する。</p> <p>・長方形の対角線の性質から切っ</p> |

| | | |
|---|----------------|--|
| し形を作り、ひし形になっているわけを説明する。 | 7分 | てできた三角形の特徴を考えるよう助言する。 |
| 4 ひし形を対角線で切ったときにできる三角形について調べ、そのわけを説明する。 | 個別 8分 | 【既習事項を使って問題を解決することができたか】 |
| 5 学習の振り返りを発表し、ノートに書く。 | 全体 個別 5分 | ・自分の意見を発表したり、友達の意見を聞くことで、自分の考えを確認できるようにする。 |

(4) 考察

1) 成果

問いに対する解答をすぐに答えようとするのではなく、理由を考えてから解答しようとする姿勢がついてきた。分からずにただ見ているだけのような児童も、教科書やノートを見返すようになってきた。既習事項を意識して学習を進めてきた結果と考えられる。今後も、既習事項を意識しながら学習ができるようにしていきたい。

2) 課題

本時は作業が多く、そこに時間を費やしてしまった。三角形を組み合わせてできる四角形を調べるために、重複や見落としが無いように印をつけると良いことを気づかせたいという思いから、印をつけると良いことに気づかせ、印をつけさせることにした。しかし、どこに時間をかけたいかを考えると、こうしたところに時間をかけないようにしていきたい。新しい知識として覚えるべきところは、授業で何度も唱えたり、既習事項に立ち返って思い返したりしてはいるが、この単元で習ったことがまだまだ定着していない児童はまだまだ多い。さらに繰り返し唱えたり、何度も既習事項に立ち返ったりして、定着を図っていきたい。

実践Ⅲ 小学校 5年生

(1) 児童(生徒)の実態

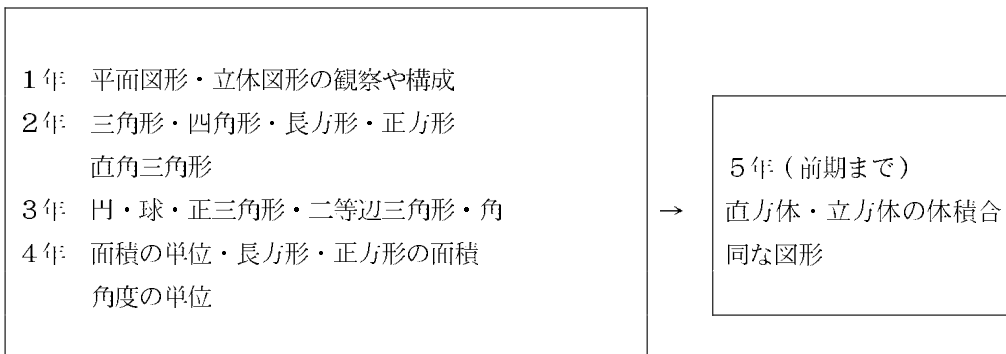
本校の少人数教室でのこれまでの子どもの状況は、課題に対する理解力が高く、計算力も学級での百ます計算などの取り組みから優れている子どもが多いと感じる。また、塾など学校外で予習的な学習を進めている子どももあり、学習意欲も高い。反面、黒板を写すことが遅かったり、既習事項が十分に理解できていない子どもも少なからずおり、能力差があるとも感じている。そこで、既習事項を確認する活動を授業の前に取り入れることで、授業で取り組む学び合いの活動に共通の基盤で臨むことができるようにさせたいと考え本研究に取り組んだ。

(2) 実践の具体的な手立て(単元への思い)

算数科では、繰り返して既習事項が出てくる。教科書も既習事項の積み重ねの後、新しい学習内容を学習する構成になっている。今回の「面積」の単元では三角形、平行四辺形、台形など様々な図形の面積の求め方を考える学習活動から面積の意味を理解させたい。4年生の長方形の面積の求め方を基礎とし、三角形の面積を求めたり、三角形の面積の求め方を発展させて他の面積を求めたりと関連性がより強い単元であると思う。そこで、1時間1時間の学習内容

を確実におさえることができるよう、既習事項を基に、グループ学習の中で関わり合いを大切に授業に取り組むたい。

「面積」の単元までに関連した既習事項



(3) 実践の内容

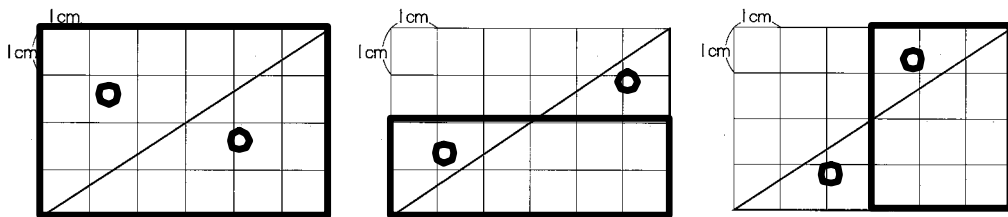
1)単元名 「面 積」

2)本時の目標 直角三角形の面積の求め方を考えることができる。

3)学習過程

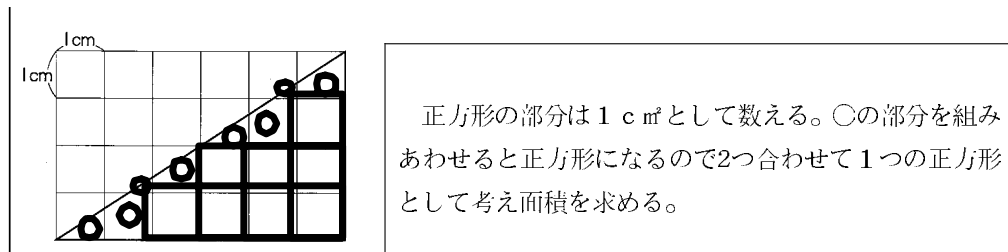
| 学 習 活 動 | 指 導 上 の 留 意 点 |
|--|--|
| 1 既習事項を確認する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・例題から長方形・正方形の面積の求め方（計算の仕方・面積の単位）を確認する。 ・直角三角形の図を示し、これまでの学習からこの面積を求める問題に取り組むことを示す。 |
| 2 本時の課題を知る。 | |
| 直角三角形の面積の求め方を考えよう | |
| 3 題意をつかみ、問題1をとく。 長方形の面積を半分にする <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; margin: 5px 0;"> $4 \times 6 \div 2 = 12$ <u>12 cm²</u> たて2 cmよこ6 cmの長方形に変形 $4 \div 2 = 2$ $2 \times 6 = 12$ <u>12 cm²</u> </div> | <ul style="list-style-type: none"> ・「個人」→「グループ内説明」→「全体確認」の流れですすめ、全員ができるよう習得させる。 ・直角三角形を方眼紙に記入した用紙を準備し、具体的な操作を通して答えが確認できるようにする。 |
| 4 問題2をとく。 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 方法1 $8 \times 8 \div 2 = 32$ <u>32 cm²</u> 方法2 $8 \div 2 = 4$ $4 \times 8 = 32$ <u>32 cm²</u> </div> | |
| 5 あゆみカードにふりかえりを記入する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・個人で取り組んだ後、グループ内で確かめあうい、2通りの考え方のどちらでも説明できるようにする。 ・本時の学習内容を振り返らせ、学習の価値付けをすすめる。 |

本時は最初に池のイラストを示し、池の広さ比べをすることで導入としている。さらに、イラストを図形化した図を示し個々の図形を確認した。長方形、正方形、直角三角形の3つをおさえた。他の立体についても確認したが、一般的な三角形や四角形を二等辺三角形や台形などと誤答する場面もみられたので、その特徴と併せて確認していった。その後、長方形、正方形の面積を求めていった。面積を求める場面では、式と面積の単位について確認した。次に、直角三角形を示し、この図形の求め方を最初に個人で考え、後にグループで個々の考えを発表した。



基本的な考え方

発表は概ね上図のようなものが多かった。これは教科書にもあげられており、後に長方形の面積から三角形の面積を求める事柄に関連していく。個人の意見の中には、下図のような考え方で求めるものもあった。(グループの発表ではあがってこなかった。)



最後に発表で長方形になおして求める方法が3種類、発表されたのでそれにあわせ、練習問題に取り組んだ。

(4) 考察

1) 成果

図形の特徴などの既習事項を確認することで、簡単な取組ではあるが個々の図形に対する認識が高まり、後の学び合い活動の手助けになっていたように思う。後の三角形の学習においても既習事項を活かし、さらに発展的な考え方をもち発表することができた(図54)。また、ひし形の面積の求め方を考える学習では、「対角線が直交すること」や「辺の長さが等しいこと」「平行四辺形の仲間であること」などが三角形(直角三角形)やひし形の対角線を基にして面積を考えるとときの着想につながっていった。また、今回学習した三角形の面積も他の図形の面積を求める時、頻繁に用いるため繰り返し確認していった。

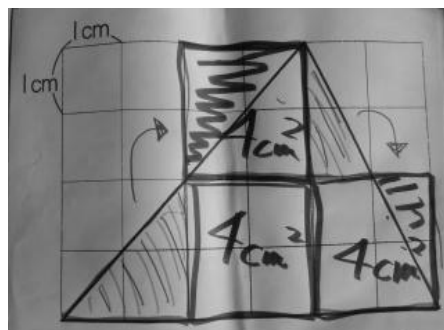


図54 考え方を広げて

2) 課題

既習事項を確認することで、面積の求め方を考える糸口になっていたが「台形」の面積の求め方を考える授業で次のようなことがあった。授業は既習事項から台形の面積を求め方を考え、それが公式につながることを確認する流れであった。しかし、予習で面積を求める公式を学習し、思考がとらわれてしまい、多様な考え方ができなくなってしまった。「公式を使わずに面積を求める方法を考えてみよう」と発問を変えたが公式を覚えたことでなかなか別の考えに気づくことができなくなってしまった。最終的に公式を用いて問題を解くことができることは重要ではあるが知識直結のスタイルで学習することで公式を導き出す楽しさが失われてしまう場合もあると痛感した。今後はさらに導入場面を工夫し、そのような学習をしてきた子どもにも意欲をもって課題に取り組めるような授業展開を工夫していきたいと思う。

実践Ⅳ 中学校 2年生

実践Ⅰ

(1) 児童(生徒)の実態

1年生では比例と反比例、2年生では一次関数について学習してきた。直線や曲線、双曲線等、x軸y軸のグラフにおいて様々な表現方法に触れてきたが、実際に使用する場面は少なかった。自分の考えを伝えるために適切な表現方法を選択する場面を作ることで、選んだ表現方法に自信を深めていくことができると思う。また、その中で今まで表現できなかったものを表すことができることを理解させ、物事をより一層深く考察し、処理できる能力を伸ばしていきたいと思ひ手立てを設定した。

(2) 実践の具体的な手立て

- ① 1, 2年生時に学習した関数のグラフについて、特徴と表現方法について振り返る。
- ② 振り返った内容を軸にして、 $y = ax^2$ のグラフがどのような形になるのかを予想し説明させる。
- ③ 予想からでてきた複数の考えの中で、振り返った内容と比較しながら相違点を明らかにしていく。
- ④ 生徒同士の交流で、気づきあったことを意見交換させる。

(3) 実践の内容

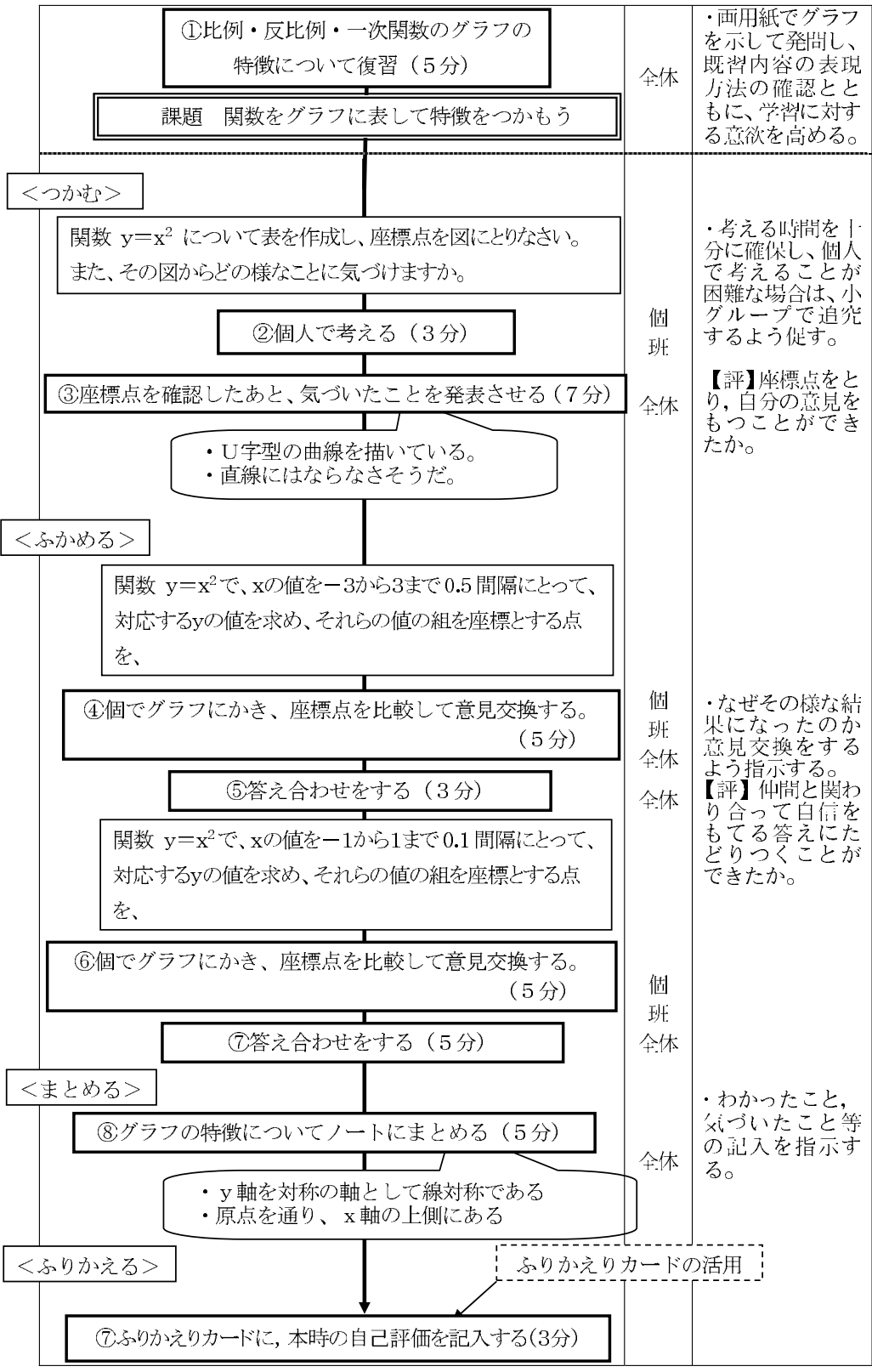
1) 単元名 関数 $y = ax^2$

2) 本時の目標

- ① 正確に $y = ax^2$ の座標点をとることができるようになる。
- ② 座標点からできあがるグラフの形を理解し、特徴をつかむことができる。

3) 学習過程

| | | |
|---------|---------|-------------|
| 学習課題 | 学習活動・内容 | 手だて |
| 学習活動・内容 | | 形態 教師の支援・評価 |



(4) 考察

1) 成果

多くの点をとることで、グラフが初めにイメージしたグラフと違う形をとることに気づくことのできた生徒が複数おり、今までに学習したグラフとの違いにも気づかせることができた。事前に復習した言葉を軸にして、絶対値等の復習していない言葉も引き出すことができた。線対称という表現の使用や、なめらかな曲線のグラフをかくことができた等、数学としての美しさを感じさせることができた。本時では $a > 0$ のときの場合を取り扱ったが、違う場合はどうなんだろうと考え興味をもつかたちで、次回以降の授業に興味を繋げることができた。

2) 課題

用語の確認が教師主体で行っていたので、もっと生徒から発信されるように復習ができると、授業に対する意欲を高められたのではないか。復習の段階から、もっと生徒の口から発言をさせなければならない。また、既習事項を基に今までのどの場合と類似しているだろうかという程度の考えをもたせることは、多くの生徒においてできたと思う。しかし、その先にある、より良い解法（表現方法）まで導き出せる育成はできていなかったのではないか。複数の解決方法が存在する授業構成をいかに上手く作れるかが今後の課題である。1回目で気付いた課題をもとに、反省点を生かして他の単元で再度実践を行った。

実践II

(1) 児童（生徒）の実態

小学校において、拡大・縮小については学んでおり、コピーや写真の拡大・縮小は生徒たちにとっても身近な相似の例として理解している。しかし、まだ相似と今まで学習したこととの繋がりについてはほとんど把握しておらず、一つひとつではあるが、関わりのあることとの繋がりを理解して、相似への理解を深めていく段階である。

(2) 実践の具体的な手立て

- ① 相似な図形の性質の復習と共に「比」という言葉が使われている言葉と意味を復習する。
- ② 対応する辺の比はどのような解法で求めることができるのかを考える。
- ③ 2通りある解法のうち、どちらの解法がより良い解法であるかを考える。
- ④ 解法的一方を利用して、問題を解くことで考え方の定着を図る。

(3) 実践の内容

1) 単元名 図形と相似

2) 本時の目標

- ① 比の考え方が、身の周りにも使われていることに興味をもつことができる。
- ② 相似な2つの図形から、比の性質を使って対応する辺の長さを求めることができるようになる。

3) 学習過程

学習課題

学習活動・内容

手だて

問題

| 学習活動・内容 | 形態 | 教師の支援・評価 |
|---|---|---|
| <p><みつける></p> <p>①相似な図形の性質，相似を表す記号を復習（3分）</p> <p>← キーワードカード提示</p> <p>課題 比の性質を使って長さを求められるようになる</p> <p>②比がつく言葉を考え発表してから相似比の表し方を知る（3分）</p> <p>← 例1を板書</p> <p>相似比，比例式，比の値…</p> <p>③相似比の問題に取り組む（13分）</p> <p>△ABC\sim△DEFであり，AB=6cm，DE=15cmであるとき，</p> <p>④比例式の問題に取り組む（10分）</p> <p>例1で，BC=5cmのとき，FGの長さを求めなさい。</p> <p>①相似比を利用するパターン ②比例式を利用するパターン どちらが簡単に解けるだろう？</p> <p>例1で，GH=4.5cmのとき，CDの長さを求めなさい。 また，∠D=120° のとき，∠Hの大きさを求めなさい</p> <p>どの辺とどの辺が対応しているの？</p> | <p>全体</p> <p>全体</p> <p>個</p> <p>一斉 個</p> <p>個</p> | <p>・キーワードカードを用いて，何度も用いる性質だと印象づける。</p> <p>・比のつく言葉を生徒に考えさせ，発言させることで，学習意欲を高める。</p> <p>・比の値と比例式においては復習も兼ねて求め方を確認する。</p> <p>・相似比の表し方はできるだけ小さい数を使って○：○と表すことを確認する。</p> <p>・答えは7.5cmになることを予想させ全体で確認をして，求め方を考えることに焦点を絞らせる。</p> <p>・どこどこを比で表しているか色を使って把握しやすいようにする。</p> <p>【評】問題解決意識をもって，相似比の課題に取り組むことができたか。</p> |
| <p><高め合う></p> <p>⑤相似比・比例式の問題に取り組む（15分）</p> <p>AD=5cm，EH=3cmの四角形ABCD\sim四角形EFGHであるとき， (1)対応し合う頂点をいいなさい。(2)相似比を求めなさい。</p> <p>⑥本時の学習のポイントを確認する（3分）</p> | <p>個 班 全体</p> <p>全体</p> | <p>・考える時間を十分に確保し，個人で考えることが困難な場合は，班で追究するよう促す。</p> <p>【評】相似比・比例式の使い方を理解できたか。</p> |
| <p><ふりかえる></p> <p>⑦ふりかえりカードに，本時の自己評価を記入する(3分)</p> <p>← ふりかえりカードの活用</p> | <p>全体</p> | <p>・わかったこと，気づいたこと等の記入を指示する。</p> |

(4) 考察

1) 成果

比のつく言葉を思い出すことで復習する場面で、生徒発信形式で復習ができた。解法を生徒自信で複数気づかせることができ、どちらがより良い解法であるか考えることができた。

2) 課題

計算力が弱く、比例式を今日の復習だけでは計算の仕方を思い出しきれない生徒が少数おり、全員が本時の目標に到達できなかった。計算力の底上げをいかにできるかが今後の課題である。

実践Ⅴ 中学校 1年生

(1) 生徒の実態

本校では、数学の授業は少人数学級で行われており、生徒の授業への参加度は高いといえる。少人数学級は、各学級で能力差が出ないように均等に分けられており、生徒同士でかかわりながら学習を進めることができている。数学の得意な生徒は、課題に意欲的に取り組み、グループ活動などでも中心的な役割を果たしている。数学の苦手な生徒でも、教師に質問したり、他の生徒に教えてもらったりしながら、粘り強く学習に取り組んでいる。一方で、授業の中で他の生徒とかかわることができる時間が設定されていることから、課題に対して自分の考えをもつことなく、「教えてもらって答えさえ分かればいい」と考えてしまう場面も少なくない。また、自分の力で課題を解決できたときに、他の解法には関心を示さずに、自分なりの解法にこだわってしまい、深く考えることをやめてしまうこともある。このような実態の改善を目指し、本研究のテーマに沿って実践に取り組んだ。

(2) 単元への思い

今回、実践を行った単元は、「中学校1年生 4章 変化と対応」である。本単元では、具体的な事象の中にあるともなって変わる2つの数量に着目して、比例や反比例の関係を見出し、その変化や対応のようすを考察することを通して、理解を深め、利用できるようにすることが目標である。また、本単元の学習内容は、中学校3年間の関数領域における学習の基礎となるものである。ここでは、ともなって変わる2つの数量をどのように見つけるとよいか、変化や対応のようすをどのように調べるとよいかについて学習するとともに、学んだことをいろいろな事象の考察に活用しようとする態度を身につけさせたい。

(3) 実践の具体的なたて

- ① チェックテストを活用して、課題解決に必要な既習事項を授業の始めに確認する。
- ② 多様な考え方をすることができ、よりよい解法を追求できる課題を設定する。
- ③ 課題に対して個人で考える時間を確保する。その際、生徒一人一人が自分の考えをもてるように、教師は生徒の能力に合わせて適切な支援を行う。
- ④ 他の生徒とかかわり、多様な考え方を共有できる場面を設定する。
- ⑤ よりよい解法を習得できたことを実感できるようにするために演習問題を解く時間を確保する。

(4) 実践の内容

1) 単元名 変化と対応 (21 時間完了)

| | |
|-------------|-------------|
| ① ガイダンス | 1時間 |
| ② 関数 | 3時間 |
| ③ 比例の式 | 3時間 |
| ④ 座標 | 1時間 |
| ⑤ 比例のグラフ | 3時間 (本時2/3) |
| ⑥ 反比例の式 | 2時間 |
| ⑦ 反比例のグラフ | 2時間 |
| ⑧ 比例・反比例の利用 | 2時間 |
| ⑨ 問題・まとめ | 4時間 |

2) 本時の目標

原点ともう1つの点を取り、それらの点を通る直線をひいて、比例の関係のグラフをか
くことができる。

3) 学習過程

| 段階 | 学びの過程と活動 | 形態 | 教師の支援 |
|--|--|------|---|
| 導入 10分 | 1 教科委員が授業を始める。 ・ チェックテスト ・ 到達度の確認 | 個 | ・ 本時の学習につながる問題が出題されるように、事前に教科委員と打ち合わせを行う。 ・ 教科委員の活動がスムーズに進むように支援する。 |
| | 2 本時の課題と授業の流れを知る。 ・ 前時に学習した、比例のグラフのかき方を確認する。 | 全体 | ・ 比例のグラフは原点を通る直線であることから、比例のグラフを簡単にかく方法があることを伝え、本時の課題を提示する。 ・ 本時の授業の流れを伝える。 |
| みんなで、比例のグラフを簡単にかく方法を見つけよう | | | |
| 展開 35分 | 3 個人で課題に取り組む。 ・ エラー! 参照元が見つかりません。のグラフを簡単にかく方法を考える。 | 個 | ・ 直線にかくには、点がいくつあれば良いかを考えるように助言する。 |
| | 4 グループで話し合いながら、課題に取り組む。 ・ グラフを簡単にかけるかを話し合い、発表用紙にまとめる。 | グループ | ・ グループ内の話し合いの様子や進行状況を観察し、参加度が低い生徒、進行状況が遅いグループを支援する。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ たくさん点をとらなくても、2つ通る点がかれば、直線はかける。 ・ 原点は必ず通るので、1つの点はすぐ決まる。 ・ 2つの点は離れているほうが、直線をかきやすい。 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・ 言葉だけでなく、表や式、グラフを用いてわかりやすく説明できるよう助言する。 ・ 全体交流時の発表者を決めるよう指示する。 |

| | | | |
|-----------------------|--|---------------------------------|---|
| | <p>5 全体交流をして、課題を解決する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 発表者の方を向き、自分の考え方と対比させながら聴く。 <p>6 比例定数が分数、小数の場合のグラフをかく問題に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 原点ともう一つ点を取り、グラフをかく。 | <p>全 体 ピ ア</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 課題を解決する際に出てきた生徒の考えを生かして、グラフを簡単にかくポイントをおさえる。 ・ 答え合わせが自由にできるように、黒板に解答を掲示しておく。 ・ 一人一人の進行度を観察し、全員が目標を達成できるようにかかわりを促す。 |
| ま と め 5 分 | <p>7 比例のグラフをかくポイントを、学習プリントにまとめる。</p> <p>8 自己評価カードを使い、本時の学習を振り返る。</p> | 個 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒に発言させ、理解度を確認しながらまとめを板書していく。 ・ 本時の理解度や、仲間とかかわり合えたかを振り返るよう促す。 |

(5) 考察

「比例のグラフを簡単にかく方法を見つけよう」という課題を設定して授業を行ったが、教師が期待したような考えを生徒から引き出すことができなかった。その原因の1つとして、課題解決のために生徒に与えられた、考える材料が不十分だったと考えられる。今回は、「比例のグラフは原点を通る直線である」「直線をかくには点はいくつあれば良いか考える」というヒントを与えて、課題に取り組ませた。しかしこれだけでは、「どうなれば簡単な方法なのか」が見えこないために、思考が進まなかったと考えられる。

2つ目に、課題解決の題材として与えたグラフは、前時の学習内容を使えばかくことができる問題であった。しかも前時に学習したかき方は、点を多くとらなければいけないために作業量こそ多いが、一つ一つの作業は単純なため、生徒にとってはやりやすい方法であったのかもしれない。そのため、既にかくことができるグラフを、わざわざ新しいかき方を考えてかくという課題は、生徒にとってあまり必要性を感じず、課題に取り組む意欲もわいてこなかったように思える。

さらに、比例定数が分数や小数の場合のグラフについても、理解度がよくなかった。生徒の自己評価カードには次のようなことが書かれており、どこでつまづいているのかが見えてくる。

- ・ 今日は、エラー！参照元が見つかりません。のグラフがかけませんでした。xが3になるのはわかるけど、yが5になるのがわかりません。
- ・ 簡単にかく方法はわかるのですが、原点と(○, ○)を通るの、○がわからない。

上記のことから、「x, yが整数になるように、xの値を決め、yの値を求める」という思考過程ができていないことがわかる。

以上の点を踏まえ、次の3つの改良点を加えた指導案を作成し、再度実践を行うことにした。

- ① 考える材料を十分与えられた上で、課題に取り組むことができるようにする。
- ② 生徒が意欲的に課題に取り組めるように、適切な難易度の課題を設定する。
- ③ 課題解決の中で、生徒がつまづきやすい部分を解消できるようにする。その上で、演習

問題を解き知識の定着を図る。

| 段階 | 学びの過程と活動 | 形態 | 教師の支援 |
|---|---|--|---|
| 導入 15分 | <p>1 教科委員が授業を始める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ チェックテスト ・ 到達度の確認 <p>2 エラー！参照元が見つかりません。 のグラフを簡単にかく方法を考える。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ 通る点が2つ分かれば、直線はかける。 ・ 原点は必ず通るので、1つの点はすぐ決まる。 ・ 2つの点は離れているほうが、直線をかきやすい。 </div> <p>3 本時の課題と授業の流れを知る。</p> | 個 全体 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の学習につながる問題が出題されるように、事前に教科委員と打ち合わせを行う。 ・ 教科委員の活動がスムーズに進むように支援する。 ・ 前時に学習した、比例のグラフのかき方を確認する。 ・ 比例のグラフは原点を通る直線であることから、比例のグラフを簡単にかく方法があることを伝える。 ・ 生徒が気付けるように発問をしながら、グラフを簡単にかくポイントをおさえていく。 ・ 本時の課題と授業の流れを伝える。 |
| みんなで、比例定数が分数、小数の場合のグラフをかけるようになろう | | | |
| 展開 32分 | <p>4 個人で課題に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ $\frac{1}{2}$ のグラフをかく。 <p>5 仲間とかかわりながら、課題に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 選ばれた生徒は、発表用紙に自分の考え方をまとめる。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ x, y が整数になる点をとる。 ・ 分数の場合は、分母の数を x として y を求めればよい。 </div> <p>6 全体交流をして、課題を解決する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 発表者の方を向き、自分の考え方と対比させながら聴く。 <p>7 練習問題に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ エラー！参照元が見つかりません。、エラー！参照元が見つかりません。 のグラフをかく。 | 個 ピア 全体 個 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 導入で学んだ考え方を使得ってかけることに気付かせる。 ・ かかわりの参加度が低い生徒、進行状況が遅い生徒を支援する。 ・ グラフをかくことができた生徒を2名程度選び、後で考え方を発表するように伝える。 ・ 課題を解決する際に出てきた生徒の考えを生かして、グラフをかくポイントをまとめ、板書をする。 ・ 机間巡視をして丸付けを行い、早く終わった生徒は席を離れて、つまづいている生徒の手助けをするように指示する。 |
| まとめ 3 | <p>8 自己評価カードを使い、本時の学習を振り返る。</p> | 個 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 振り返りの前に、必要に応じて本時のまとめをする。 ・ 本時の理解度や、仲間とかかわり合えたかを振り返るよう促す。 |

(6) 成果

「比例定数が分数、小数の場合のグラフをかけるようになろう」という課題を設定して授業を行った結果、改善前よりも生徒の考えを引き出すことができた。導入の段階で、「原点ともう1つの点を取り、それらの点を通る直線をひくことでグラフがかける」ことを知ってから課題に取り組んだことで、どの生徒も「原点ともう1つの点に分かればグラフがかける」ことまでは、個人思考の段階で考えることができたようである。能力のある生徒は、「 x, y が整数になる点を選べばよい」ということまで気付くことができていた。全体の前で、発表を行った生徒は「エラー！参照元が見つかりません。のグラフは、整数にするためにエラー！参照元が見つかりません。の分母の3を x にして、 y を5にする（図55参照）」「エラー！参照元が見つかりません。のグラフは x が0のときから順番に考えていくと、 x が5のとき y が2になって整数になる（図56参照）」というように、もう一つの点のとり方を考え、式や表を使って分かりやすく説明することができていた。発表後に、他の考え方はないかきいてみると、「分母の倍数を x にすれば、原点から遠い点をとれる」ところまで考えることができた生徒もいた。

また、課題解決の過程で比例定数が分数や小数の場合のグラフのかき方についてじっくり考えることができたので、その理解度もよくなった。生徒の自己評価カードには次のように書かれており、本時の目標を達成できていることがわかる。

- ・ 一番原点に近い点に点をうつと簡単だった。
- ・ 比例のグラフは、原点ともうひとつの点（計2つ）をむすべば、簡単にできる。
- ・ 今日は、2つの点があれば、グラフがかけると知った。
- ・ 小数と分数は考えこむと難しいけれど、コツをつかむと簡単にできました。
- ・ 分数のときは、 x になにかを入れて、整数になおすことが大切である。

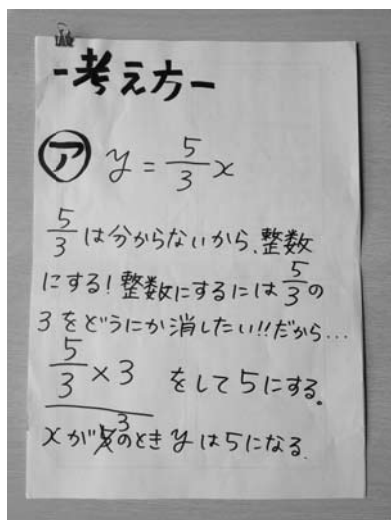


図55 発表用紙1

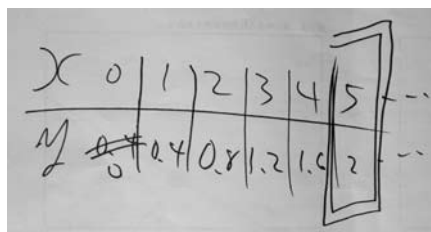


図56 発表用紙2

(7) 課題

今回の実践を通して、本研究のテーマを達成するためには、生徒の実態に合った適切な課題設定をすることが大切だと実感した。また、すべての授業で「既習事項を基に自分の考えを持って、よりよい解法を導き出す」ことはできないので、単元を通して育てていく必要があると考えられる。「知識を教える」授業があって、それを既習事項として生かすことができ、「よりよい解法を教える」授業があって、よりよい解法を追求する態度が育つのである。よって、単元全体を見通して目指す生徒像に近づいていけるように、体系的な指導計画を立てた上で授業に望めるようにしていきたい。

実践VI 中学校 2年生

(1) 生徒の実態

本校では、数学は少人数で行っており、生徒の授業への参加度は高いといえる。少人数の授業では、各学級で能力差が出ないように均等に分けられており、生徒同士でかわりながら学習を進めることができている。数学の得意な生徒は、課題に意欲的に取り組み、グループ活動でも中心的な役割を果たしている。数学が苦手な生徒は、教師に質問したり、他の生徒に教えてもらったりしながら、粘り強く学習に取り組むことができている。

一方で、授業の中で他の生徒とかかわり問題解決をする時間が設けられているため、課題に対して深く考えることなく、教えてもらって答えを出せばいいと考えてしまう場面も少なくない。また、自分の力で問題解決できたときに、答えを出すための方法を知っているものの、なぜ、そうなるのかという理由についてきちんと理解していない生徒もいる。既習事項を利用して考えていくことで、より便利に解ける解法ができていることに目を向けさせ、なぜその解法になるのかを確認させたいと思い、本研究のテーマを設定した。

(2) 実践の具体的な手立て(単元への思い)

本研究のテーマを実現するために、次の手立てを設定して実践に取り組んだ。

- ①既習事項を確認する。
- ②既習事項を生かして取り組める発展的な課題を提示する。
- ③課題に対して既習事項を利用し、問題解決をする。
- ④問題解決の場面では、ピアタイム（グループの枠を超えて、問題解決できる仲間を見つけ、学び合いながら助けあふ時間）を設定する。
- ⑤全体交流で確認し、よりよい解法を押しさえる。
- ⑥練習問題で定着を図る。

(3) 実践の内容

1) 単元名 「方程式」

2) 本時の目標

- ・ 等式の性質を見だし、それを利用して式を変形することで、方程式を解くことがで

きる。

- ・ 移項の意味を理解することができる。

3) 学習過程

| 段階 | 学びの過程の活動 | 形態 | 教師の支援 |
|------------------------|---|--|---|
| 導入 10分 | 1. 等式の性質の確認をする。 2. 本時の学習を知る。 | 全体 全体 | ・教科書やノートを参考にするように指示する。 ・カードを提示し考えやすいようにする。 |
| $7x - 2 = 6 + 3x$ を解こう | | | |
| 展開 35分 | 3. 解き方を考える。 ・等式の性質を利用する ・xに数を代入する。 4. 解き方の確認をする <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> $7x - 2 = 6 + 3x$ $7x - 2 + 2 = 6 + 3x + 2 \dots ①$ $7x - 2 + 2 = 8 + 3x$ $7x - 3x = 8 + 3x - 3x \dots ②$ $4x = 8 \dots ④$ $x = 2$ </div> 5. 練習問題に取り組む ・教科書P80問1とP81問2・ 3を行う ・等式の性質を使う(移項する) 有用性に気づく | 個 or グ 全体 個 or グ | ・みんなで目標が達成できるように声かけをする。 ・等式の性質を使うと必ずできることを伝える。 ・どの約束を使って解くか明確にするように伝える。 ・アドバイスは友達から受けることを伝える。 ・机間指導をして、等式の性質を使って考えているか確認をする。 ・計算の中で、どの性質を使って考えているか確認をする。 ・『移項』の語句とその意味を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0; text-align: center;"> $7x - 2 = 6 + 3x$ $7x - 3x = 6 + 2$ </div> ・代入法は面倒であると気づかせる。 ・机間指導をし、困っている生徒には、等式の性質を使うことを助言する。 ・全員が正解できるように、学びあうよう声をかける。 ・答えあわせをそれぞれのグループで行う |
| まとめ 5分 | 6. 本時を振り返り、学習内容についてまとめる ・等式の性質を利用すると解ける ・左辺から右辺, 右辺から左辺に項を移動させることを移項という | 全体 | ・すべての基本は等式の性質であることを伝える。 ・『移項』の語句と意味をおさえる。 |

・振り返りカードに記入する

個

(4) 考察

1) 成果

① 既習事項を確認する。

授業の開始と共に、教科委員（数学係）によるチェックテストで、前回の授業で行った『等式の性質』で学習した4つの場合についての計算問題を復習しました。さらに、今回は『等式の性質』を利用して、問題解決を図ることがねらいなので、4つの性質を1つずつ板書したため、生徒に『等式の性質』を使うことを意識付けることができた(図57)。

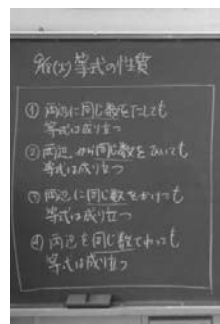


図57 板書

② 既習事項を生かして取り組める発展的な課題を提示する。

今回の授業は方程式の解き方の第1時にあたるが、第2時で学習する課題『文字の項と数字の項の両方の移項から方程式を解く $7x - 2 = 6 + 3x$ を解こう』を提示した。本来ならば、移項を理解した上で、数字の項の移項、文字の項の移項と順に学習して行く課題であるが、今回は前時に利用した『等式の性質』を生かして授業を進めたいと考え、上記の問題を提示することにした。発展的な問題の提示により、答えを求めるために、『等式の性質』を利用していこうとする姿勢が見られた。

③ 既習事項を利用して問題を解決する。

今回の授業では、「文字の項を計算の中で扱うこと」と「等式の性質を複数回利用しなければいけないこと」、「文字の項は左辺、数字の項は右辺に集め、 $ax = b$ の形にすること」であるので、それに気づかせることが必要だった。そのために方程式の解は、 $x = (\text{数字})$ という形になることを授業の中で確認した。

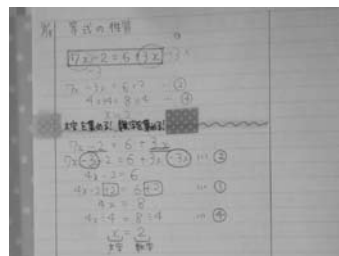


図58 生徒のノート

『等式の性質』を複数回使用しなければいけないので、初めは戸惑っていた生徒もいたが、徐々に正解する生徒が増え、互いにアドバイスしながら進めていた。ちょっと難しい問題にチャレンジしたため、できた時には嬉しそうだった。正解した生徒が出てくると、自分も求めたいという気持ちが強まり、より意欲的に取り組む姿につながった。また、等式の性質を利用した所には、どの性質を利用したのかを書かせ、一つ一つの式変形の理由を確認させました。利用した性質を書かせることで、適切に性質を使うことを意識させることができた(図58)。

④ 問題解決の場面では、ピアタイム(グループを越えて、問題解決できる仲間を見つけ、学び合いながら活動する時間)を設定する。

問題解決にはピアタイムを設定し、生徒たちの学び合いをサポートした(図59)。ピアタイムでは個人で考えたい生徒には、個人で考える時間を、はじめからどうしてよいか分からない生徒には、アドバイスをくれる生徒のところへ、聞きに行くようにした。友達とともに問題解決を



図59 ピアタイム

図るので、質問しやすく、また、アドバイスをしやすいようだった。

⑤ 全体交流で確認をし、よりよい解法を押しさえる。

ピアタイムを行った後、『等式の性質』を使って問題解決できた生徒に板書させ、説明をさせた(図 60)。一つ一つの式の変形で、どの種類の性質を利用したのかを説明するように指示をした。

また、両辺に同じ数を足したり、引いたりする計算では、項の符号を変えて、左辺から右辺に、右辺から左辺に移動しているように考えることができるので、符号を変えて、項を移動させる計算方法を移項ということを押しさえた。



図 60 生徒による説明

⑥ 練習問題で、定着を図る。

問題解決と全体交流の時間がかかってしまい、練習問題に十分な時間をあてることができず、3問ほどにとどまってしまった。その解き方も『等式の性質』を使っているものも多くみられた。『等式の性質』を中心に授業を行ってきたので、練習問題でも移項の考え方よりも、『等式の性質』を利用した解法が目立ったのではないかと考える。

2) 課題

全体交流の場面で、等式の性質を一つ一つ使って解いていくのは面倒であると感じてはいるものの、より機能的に考えられている移項を学習した後であっても、演習問題では、今までと同じように等式の性質を利用して解いている生徒が多いように感じました。移項の有用性をあまり感じなかったからではないかと思われる。また、演習問題にかける時間も少なくなってしまうこともその要因であると考えられる。

問題解決の時間や、全体交流の時間をうまく使い、練習問題にかける時間を十分に確保することが大切であると感じた。また、学び合いを行っていく中で、時間配分をきちんとして、内容の定着を図る問題演習の時間を確保することが今後の課題である。

実践Ⅶ 中学校 2 年生

(1) 生徒の実態

本実践は中学2年生が対象である。本学年の生徒は、他の生徒と関わりながら課題を解決することのできる生徒が多い。わからない生徒が質問したり、教えてもらったりするために動き、分かっている生徒が他の解法を考えたり、他の生徒に自ら教えに動いたりすることのできる生徒たちである。また、あまり理解の早くない生徒でも、粘り強く課題に挑戦し続けることができており、数学に対する意欲も比較的高い生徒が多くいる。しかし、理解が早い生徒の中には、問題を解決することができていない生徒が他にいるにも関わらず、仲の良い生徒が解き終わると、教えることよりも他の解法を求めることを優先してしまったり、他の問題を解き始めてしまったりしている。さらに、仲の良い生徒同士で関わるができることから、課題を与えられたときに、自分でどのように解くのかを考えた上で、自分なりの答えや見通しをもつという過程がほとんどないまま、すぐに「教えてもらえばいい」と考えてしまっている。しかし、今

年5月に行ったアンケートから考えると、数学を学ぶ上での仲間の存在は欠かせないものであ

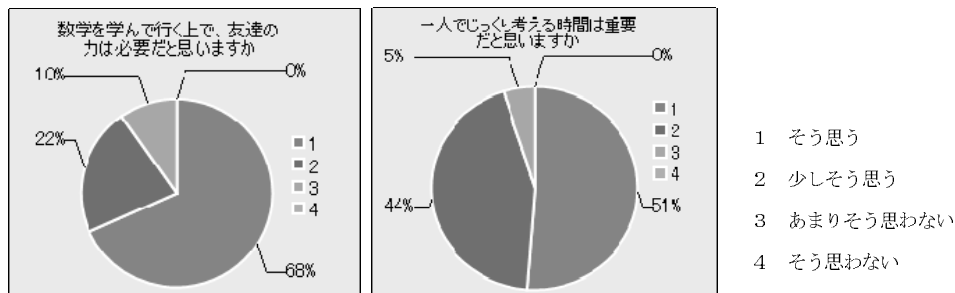


図 61 アンケートの結果

(2) 単元への思い・実践の具体的な手立て

本単元では、図形の性質を調べる上で基礎となる見方・考え方や基本的性質を明らかにし、論証の意義と推論の進め方について理解することが目標となる。本実践で扱う第1節「平行と合同」では角度を求めるような問題が多く、既習事項である基本的性質のどの考え方をを使うのかという観点からの発想が必要となる。図形の分野は、小学校4・5年生で垂直や平行のような直線の位置関係、三角形・四角形の角の和を求める学習をしている。ここでは、実際に角度を測ることで対頂角や平行線の同位角、平行線の錯角が等しくなることを導き出す。また、全く同じ三角形を書くときの条件に着目することで三角形の合同条件を明らかにし、その合同条件を基とした簡単な証明を通して、証明の進め方とその意義について理解することを目指す。

本実践では、求め方が何種類もある角度の問題に取り組む。そして問題に取り組むとき、初めに個人で考える時間を明確に区切り、他の人と関わらないようにする。もちろんこれまでは関わることを中心に解決をしてきているので、個人で考える時間の後に席が近い生徒と関わっても良い時間も取り入れる。次に、数名の生徒に解き方を発表用の紙に書いてもらい、黒板に貼る。クラス内で解き方が出揃った時点で時間を区切り、全員がその発表用の紙に書いてある解き方を見て、どのように考えているのかを考える時間をまた1・2分確保する。いきなり説明を聞くのではなく、自分の力で考え方を理解するためである。その後、それでも納得できなかった考え方について、紙に書いた人とは違う人に解説をしてもらう。すべての解き方がわかったところで、「どの解き方が一番すばやく、正確に答えを求めることができるか」という発問をして、学級での共通理解を行う。

(3) 実践の内容

1) 単元名 中学校2年生 図形の調べ方 第3時 (19時間完了)

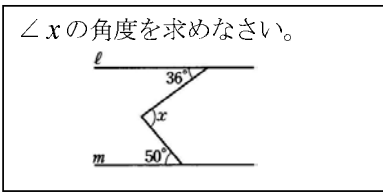
| | | | | |
|--------|-------|------------------|-------------|------|
| 図形の調べ方 | ガイダンス | | 1時間 | 19時間 |
| | 平行と合同 | 1 角と平行線 | 3時間 (本時3/3) | |
| | | 2 多角形の角 | 4時間 | |
| | | 3 三角形の合同 | 3時間 | |
| | 証明 | 1 証明とそのしくみ | 2時間 | |
| | | 2 合同条件を使った証明の進め方 | 2時間 | |

| | | |
|-----------|-----|--|
| まとめ、単元テスト | 4時間 | |
|-----------|-----|--|

2)本時の目標

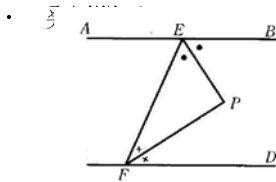
- ア 対頂角の性質，平行線の性質を利用して，角の大きさを求めることができる。
- イ 角の大きさをどのように求めたのか，計算過程を明確に示すことができる。
- ウ 様々な考え方の中から，効率の良い解法を選び，利用することができる。

3)学習過程

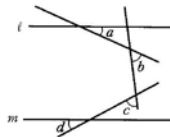
| 段階 | 学びの過程と活動 | 形態 | 教師の支援 |
|--|--|------|---|
| 導入 8分 | 1 教科委員が授業を始める。 ・ チェックテスト ・ 到達度の確認 | 個 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 教科委員の活動がスムーズに進むように支援する。 ・ 既習事項の理解度を把握する。 ・ 本時の課題を板書し，1時間の流れ |
| | 2 本時の課題と授業の流れを知る。 | 全体 | |
| 対頂角・平行線の性質を利用して，みんなで角の大きさを求めることができる | | | |
| 展開 34分 | 3 個人で課題に取り組む。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> $\angle x$の角度を求めなさい。  </div> | 個 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の考えをもってかかわり合えるように，個人で考える時間を確保する。 ・ これまでに学んできた対頂角の性質，平行線の性質を用いることで角度を導き出せることを示唆する。 ・ 補助線を引くことで，対頂角の性質，平行線の性質を用いることができるようになることを助言する。 ・ 仲間とかかわりながら課題に取り組むように指示する。 ・ 角度が求められた生徒は，どのように求めたのかを説明する方法を考えたり，他の方法で求めることはできないかを考えたりするように指示する。 ・ 角度を求めることができた生徒に補助線の引き方や，求め方のヒントを紙に書き，黒板に貼るように指示する。 ・ 発表用の紙を見ながら，より簡単に求められる解法はどれなのか考えるように指示する。 ・ 補助線の引き方を含め，どのように考えたのかをスムーズに発表できる |
| | 4 周りとかかわりながら課題に取り組む。 | グループ | |
| | <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;"> l, mに平行な線を引き，錯角を使う。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;"> 延長線を引き，錯角と三角形の内角の和を使う。 </div> </div> | | |
| | <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;"> 垂線を引いて五角形を作り，その内角の和を使う。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;"> 垂線を引いて直角三角形を2つ作り，その内角の和を使う。 </div> </div> | | |
| 5 全体交流をして，課題を解決す | 全体 | | |

- る。
- ・ 発表者の方を向いたり、メモを取ったりする。
- ・ 考え方を対比させて聴く。

6 練習問題・発展問題に取り組む。



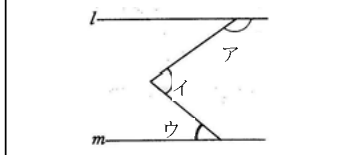
上の図で、 $AB \parallel FD$ である。 $\angle BEF$ 、 $\angle DFE$ のそれぞれの二等分線の交点をPとすると、 $\angle EPF$ は何度ですか。



上の図で、 $l \parallel m$ の時 $\angle a$ 、 $\angle b$ 、 $\angle c$ 、 $\angle d$ の和を求めなさい。

7 確認問題を解く。

$\angle x$ の角度を求めなさい。



8 答え合わせをする。

- ・ 教科委員は、答えを発表し、達成度の確認をした後、自己評価カードへの記入を指示する。

9 自己評価カードを使い、本時の学習を振り返る。

よう支援する。

- ・ 生徒の説明が、他の生徒が理解するのに充分でない場合は、補説する。
- ・ 最初に個人で考える時間を確保する。
- ・ クラス全員が角度を求めることができるように、仲間とかかわるよう指示する。
- ・ 解法の根拠となる補助線の引き方も含めて考えるように指示する。
- ・ 教卓に解答を置いておき、自分で角度を求めてみてから答え合わせをしたり、一度答えを見て方法を考えたりして、最後の問題を自分の力で解くことができるようにするよう指示する。
- ・ 仲間支援をしながら、話し合いに参加できていない生徒に参加するように促す。それでも参加できない生徒には、助言をする。
- ・ 課題を解決するために、積極的に動いている生徒を褒め、全員が積極的に課題解決するために動くように促す

ピア
タイム

個

- ・ 角度が未記入の図を用意し、アが 145° 、イが 75° 、ウが x° と各自で書き込むように指示する。
- ・ 補助線を引いて、角度を求めるように指示する。

全体

- ・ 答え合わせと、自己評価カードへの記入がスムーズに行うことができるように支援する。

個

- ・ 自己評価カードを用いることで、本時の理解度や、どの程度仲間とかかわれたのかを振り返る機会とする。

ま
と
め
8
分

(4) 考察

1) 成果

個人で考える時間を確保したことで、角度を求めることができたり、補助線だけ引くことができたり、平行な線や垂直な線などの補助線の重要な条件が抜けてしまっていたりはしたが、ほとんどの生徒は自分で何らかの考えをもって、その後の関わりに移れたように思う。個人で考える時間を作ったことで、理解の早い生徒は他の考え方をより多く見つけることができていることも、良かった点として挙げられる。これまで周州の生徒にすぐに教えに動いていた生徒が、じっくり考える時間を与えられたことで幅のある考え方をすることができた。より良い解法を見つけるためには、比較する対象がないとできない。多様な考えをもちながら、その中でより良いものを選択していくという力もこの個人思考の時間を設定することで、伸ばしていくことができるのではないかと考えられる。また、発表用の紙が出揃ったところで、質問が出たのは少し難しい考えをしている解き方だけであった。折れ曲がっているところに平行線を引く考え方や、延長線を引く考え方の2つの基本的な考え方は、その後の練習問題への取組から見ても全員が自分の力で理解できているようであった。このことからチェックテストで行った既習事項である平行線の性質の考え方や、三角形の内角の和を用いて求める方法を利用して、本時の課題に取り組むことができたと考えられる。平行線を引く考え方が、今回の問題では効率良く、正確に解くことができる上、応用もしやすい解き方であることも生徒全員が納得していた。

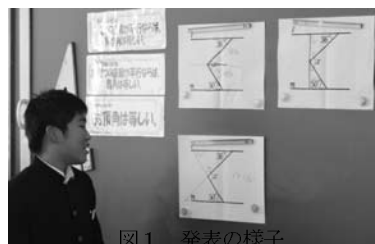


図 62 発表の様子

2) 課題

既習事項を基に自分の考えをもつということを意識して、主に授業の前半の展開を工夫しようと考えたが、感覚で補助線を引いてしまい、それをどのように既習事項と結びつけるかということが自分の力で考えられていない生徒がいたことも事実である。自分の考えをもつということは、その考えの根拠を明らかにすることも必要ではないかと考える。実際にその問題に使うことができていなかったとしても、「平行線の錯角は等しくなるから平行線を引いてみた」や「三角形の内角の和は 180° になるから三角形を作ってみた」というようなことまで意識できる授業展開を考えなければならないと感じた。また、今回の問題は比較的難易度も低く、解き方も何種類も考えられるものであった。しかし、例えば方程式の文章問題のような問題に取り組むとき、一つの問題を解くのに多くの時間がかかってしまう。今回のように個人思考の時間を確保し、関わる時間を設定し、さらに考えを比較するためにいくつかの方法を挙げさせ、それを個人で吟味する時間を作るとなると、かなりの時間が必要になる。特に理解に時間のかかる生徒にとっては、いくつかの解き方を見比べようとするだけで1時間必要になることもあるだろう。だからと言って、一つの方法だけではそれがより良い解法だとは分からない。自分の考えをもつこと、他の人の考えを理解すること、方法の吟味の3点を効率よく行うことができるように、課題の設定や、展開の方法を確立できるように今後も実践を積み重ねていきたい。

5 全体の考察

(1) 研究の成果

本研究では、子どもの多様な考えを引き出し、よりよい解法を導き出すことを目的に、既習事項を想起させる復習問題を行ったり、既習事項を本時の学習内容につなげることができるような手だてをとったりする手法を取り入れて実践を行ってきた。具体的には、まず授業の始めに、本時の学習課題と関連のある既習内容の復習問題を解く時間を設定した。そして、解法が複数考えられる課題や子どもが自ら考えてみたいと思える課題、発展的な課題など、それぞれの実践で課題の精選を行った。

結果として、それぞれの実践で子どもの思考の活性化や授業に対する意欲の増進が見られた。まず既習事項の復習を毎時間行うことで関連する学習内容を想起させ、意識付けすることができた。さらに授業の流れがある程度統一したことで子どもが課題に取り組みやすくなった。系統的な学問である数学を学ぶためには、単元や学年を越えたつながりが必要である。既習事項の復習は、多様な考えを生むための基盤を構築するために有効な手段であったと考えられる。次に課題の精選をすることで、子どもそれぞれの理解度に応じて思考を深めたり、解くことに対する意欲を高めたりすることができた。答えでなくとも自分の考えをもつことを意識させることで、理解度の高い子どもも考える。多様な考えができる課題であれば、理解度の高い子どもも思考を止めることなく課題に取り組むことができる。さらに、より多様な考え方ができることで比較対象ができ、よりよい解法がなぜ「よい」解法なのかを実感することができる。課題の精選をすることによって、子どもの思考を深めるとともに、よりよい解法を子どもが導き出し納得することができるようになるのではないだろうか。

(2) 研究の課題

本研究の中で行ってきた実践や研究協議を通して、大きく分けて2つの課題が見えてきた。一つ目は、授業の始めに行う既習事項の確認や復習を、短時間でできるようにしていくことである。本研究の中で、既習事項の確認や復習に時間がかかったという実践がいくつかあった。そうすると、本時の課題に取り組む時間が削られてしまうので問題である。このようなことは、日常の授業でも起こりうることである。そこで、どうすれば既習事項の確認や復習を短時間でできるかを考えていかなければならない。まずは、その授業で子どもにつけさせたい力を、1時間の中でしっかりと定着させることが必要だと考えられる。学習過程が思考活動や学び合い活動だけで終わってしまう授業では、子どもにどれだけ力がついたのか、教師も子ども自身も分からない部分が多い。やはり授業の後半部分では、自分の力で問題を繰り返し解いたり、小テストを行ったりして、どれだけ力がついたかを試す時間をつくる必要があるのではないだろうか。そうすることで、学習内容の定着度は上がっていくと考える。また、子ども自身が残したノートを見返すことも有効だと考えられる。過去の授業内容がわかりやすくノートにまとめられていれば、それを見るだけでも既習事項が想起されるのではないだろうか。しかし小中学校ともに、ノートをとるのが苦手な子どもが少なくないことが、本研究を進めていくうちに明らかになった。よって、授業の中で書く時間を確保し、教科でノートのとり方を統一するなど

して、小中学校で一貫してノート指導を行っていく必要があると考えられる。

二つ目は、単元全体を通して、目指す子ども像を実現できるように、指導計画をつくり上げていくことである。本研究では、「既習事項を基に自分の考えをもつ」「答えまでの多面的な見方ができ、よりよい解法を導く」といった活動を、一つの授業の中に盛り込み実践を行った。しかし、全ての授業でこういった活動を取り入れることは難しい。また、目指す子ども像は1時間の授業の中で実現させるものではない。よって、「知識」「表現力」「思考力」を育成する授業を、単元の中でそれぞれ明確に位置付け、段階を踏んで目指す子ども像に近づけていくことが必要であるとする。市内の学校の中には、数学科で単元の指導構想を練り上げてから実践を行っている学校も既に存在する。その指導構想は、単元を通して子どもに身につけてほしい力と、それを実現するための具体的な手だてを明確にしたものである。このような取り組みを研究授業だけでなく、日々の授業にも取り入れることが必要なのではないだろうか。

最後に、本研究を通して市内の他校の独自の取り組みや、子どもたちの現状を知ることとても有意義であった。また、他校の実践の中で有効な学習課題や手だても知ることができ、それらは積極的に取り入れていくべきだと感じた。こういった情報共有ができる場合は、非常に貴重である。本授業研究会のように、市内の小中学校で連携して実践を重ねていくことが、目指す子ども像の早期実現につながると信じている。

おわりに

本グループは、算数・数学という教科の中で『既習事項を基に自分の考えをもって、よりよい解法を導き出せる子どもの育成』という研究テーマをもって実践を進めてきた。既習事項を振り返るという活動はどの学年のどの授業でも必ず必要な活動であり、それを活かして自分の考えを作り上げていくという力は、どの発達段階の子どもにとっても必要な能力である。その力を高めるために小学校と中学校の異学年を担当する教師が、それぞれの現場で実践に取り組んできたからこそ見えてきたものがあると感じた。実践した授業について議論することでよりよい方法や授業案が見つかったり、自分の学校でも取り入れてみようと思えたりして、互いの刺激になることが多々あった。また、学習内容や指導法を小中学校の教師が互いに伝えることで、指導の連続性を図ることができた。小学校で習った既習事項を中学校での授業に活かして、自分の考えをもつことができる児童の育成こそ、本部会が取り組んだテーマの最終的なゴールとなるのではないかと思う。今後さらに小中の連携を盛んに行っていくことで、双方にとって大きな成果を得ることができる。この実践での経験を活かし、さらなる効果的な指導ができるように今後も取り組んでいきたい。

道徳実践につながる授業をめざして 自分を見つめ高めるための資料の活用

五味 公人（犬山市立城東小学校）
浅野 増美（犬山市立犬山南小学校）
西 沙織（犬山市立城東小学校）
小山 晃範（犬山市立城東小学校）
立田 美樹（犬山市立城東小学校）
後藤眞之介（犬山市立城東小学校）
西川 学（犬山市立羽黒小学校）
松島慎一郎（犬山市立城東中学校）

はじめに

犬山市では、学び合いを通して豊かな人間関係と確かな学力作りに努めている。一昨年の2011年3月11日は大震災があり、日本人にとって忘れられない日となった。自然の驚異を改めて思い知らされるとともに、記憶に残るのは人々の助け合い、協力する姿であった。食料が不足する被災地でおにぎりを分け合う人々。自分自身も被災して苦しい状況なのにもかかわらず暖かい部屋をと見ず知らずの人を家に招く人々、ボランティアで駆けつけて様々な活動をする人々、人と人の繋がりを強く感じた年となった。かと思えば、テレビで毎日のように報道される悲しいニュース、教育現場ではいじめや登校拒否、暴力や自己中心的な行いが以前にも増して目につく状況に陥っているのも確かである。

この先、様々な環境に身を置く子どもたちに身につけて欲しいと願うのは、確固たる信念をもった心と、様々な状況に対応していく柔軟性をもった心である。その素養作りとして道徳の時間に求められているのは、道徳的価値の自覚と自分の生き方について考えを深めること、いわば内面的な体験活動を通して自己を振り返り、人間としての生き方について考え、それを広げていくことである。

しかし、実際道徳の授業をしてみると、思ったような手ごたえが感じられない、ましてその後の道徳的実践につなげることは難しいというのが本音である。そこで、子どもたちの問題意識を引き出し、その問題についてより主体的に考えることができるようにするにはどうすればよいのかを考え、資料の活用について追究することとした。資料選びから、それを授業で取り扱う時期、提示方法などを工夫することで、子どもたちは自らの内面を見つめ、自らの力で道徳的価値を高めていくことにより、道徳的実践力も身につけていくのではないかと考える。

1 研究仮説

本グループでは、会を進めるにあたり、互いの日々の実践を持ち寄って話し合いをした。

その中で、いかにして子どもたちの本当の気持ちを引き出すかといったことや、子どもたちの心に残る授業をすれば、道徳的心情を高めることができるのではないかなどを話題とした。

道徳的实践力は一時間の授業だけで身に付くものではないが、授業を通して道徳的心情を高め、それが日常の实践力につながっていくのではないかと思う。そのためには、子どもたちに考えさせたい主題に沿った資料・旬な話題の資料など、提示する資料を考えると、その資料を提示する時期、また提示する方法を工夫することで、道徳的心情を高めることのできる授業ができるのではないかと考え、次のような仮説を設定した。

仮説 子どもの実態に応じて資料を選び、その提示方法を工夫すれば、自分の内面を見つめることができ、道徳的实践につながるだろう

この仮説をもとに、本グループのそれぞれのメンバーが研究実践を行うことにした。

2 研究主題

道徳的实践につながる授業実践をめざして
－自分を見つめ高めるための資料の活用－

3 研究主題に迫るために

本グループでは、研究仮説にもあるように、子どもが自分の内面を見つめ道徳的实践につながられるように、資料の内容を吟味し、その提示時期、提示方法を工夫していく。

道徳の資料には、副教材「明るい心」をはじめ、教師が開発したものなど、様々なものがある。そこで、子どもの実態に合わせて資料選びや資料作成をし、それをどのように活用していくかがカギとなることから、ねらいに迫るための具体的な手だてとして、以下の二点について、本グループの各々が工夫していくこととした。

- ①資料選び・・・高めたい道徳的価値に沿う効果的な資料を探し、選択する、作成するなどの資料内容と、教師が子どもの実態を把握し、必要と思われる時期に授業を行うといった実施時期の検討。
- ②提示方法・・・資料を一度に提示する、区切って提示するなどの資料の扱い方や、プリント配布、拡大提示、読み聞かせなどの資料の見せ方、机の配置、発表、役割演技などの授業形態の工夫。

子どもの心に迫る効果的な資料を選び、道徳授業を行う時期を検討し、資料の扱い方、授業の進め方を工夫すれば、道徳的価値について、より深く考えさせることにつながるだろう。しかし1時間の道徳の授業のなかで、子どもの道徳的実践力が高まるのは難しい。知ることとできることの間には大きな壁があるためである。道徳の授業で高まった道徳的心情を、その後の学校生活の中で機会を見つけて取り上げ、話題にしていくことや道徳的

実践の機会にしていくことの手立ても必要だと考える。

そこで、ある一定の期間をおいた後の子どもの様子を捉え、道徳的实践につながったか否かを判断することにした。その際、必要ならば、抽出児童・生徒を詳しく分析することで、どのような手立てや工夫がきっかけとなり、道徳的实践につながったのかを明らかにしたい。そのことが今後の道徳の授業や、学校生活の中で子どもたちへのアプローチにつながっていくものと期待する。

4 研究の実際

実践1 小学4年生

(1) 主題 本当の友情（相手を思いやる心情を育てる）

資料名 「ないた赤おに」（出典「明るい心」小学4年生）

内容項目 信頼・友情 2－（3）

(2) 主題・資料への思い

1) ねらいと価値

「信頼・友情」は、学級の人間関係を豊かにしていく上で重要な内容項目である。自分中心の考えで行動するのではなく、相手の立場を理解し、互いに助け合う心情を育てていきたいと考える。道徳の時間の話し合いを通して、日頃の自分を振り返り自分や他人のもっている優しさに気付くことで、友達の良さを実感できると考え、本主題を設定した。

2) 資料について

本資料は、人間と仲良くなりたい赤おにを助けるために、自分が悪者になった青おにと、手紙を読んで初めて青おにの深い友情に気づき、自分のことしか考えていなかったと心から後悔する赤おにの物語である。赤おにと青おにのお互いを思う気持ちから、真の友情を考えさせるのに適した資料であると考えた。

青おにを失ってしまったときの赤おにの気持ちを考えることで、今までの自分を振り返り、相手を思いやり相手の立場に立って考えることの大切さを感じさせていきたい。

3) 児童の実態

本学級の子どもは、明るく素直な子が多い。男子は活発な子が多く集団で楽しく遊ぶ姿をよく見かける。女子は恥ずかしがり屋が多く、発表もなかなか進んでできないが、泣いている子がいると声をかける優しい子が多い。しかし、友達関係は固定化してきており、特に自分の気の合う仲間でない子や特定の子に対して、間違いや失敗を非難するような言葉や態度が見られる。中には自分勝手に友達の言い分を素直に聞くことのできない子、自分の都合ばかり言ってけんかの多い子もいる。

そこで、相手の気持ちを考える機会を設け、自分中心の考えで行動するのではなく、相手の立場を理解し、互いに助け合おうとする心情を育てていきたいと考えた。

4) 関連教材

道徳 「ドッジボール」「まち合わせ」(3年)

「泣いた赤おに」「プレゼント」「ひそひそ話」(4年)

「ナイス・シュート」「一まいの色紙」(5年)

(3) ねらいにせまるための具体的な手立てと工夫

1) 資料選び

「友達」は、子どもたちにとって学校生活を左右するほどの重要な存在である。特に中学年からは仲間意識がさらに高まり、一緒にできた達成感や楽しさを存分に味わえるとともに友達に対する悩みや葛藤も大きくなっていく。人とかかわり方を深く学ぶ大事な時期である。視野が広くなり、思考の幅も広がっていくこの時期にこそ、友達のことを知り、互いに前向きに助け合おうとする態度を育てたいと考えた。

「ないた赤おに」は、文部省資料として示されて以来、多くの学校で活用されている。青おにの赤おにに対する献身が深く心を打つ物語で、「心から友達を思い、行動する」という視点からも、友達とかかわり方を考えさせるためにふさわしい資料である。そこで、あえて名作「ないた赤おに」を使用することにした。

本時では、問題場面を精選し、資料での話し合いの時間を多くとる。また、子どもたちの距離がある資料なので、登場人物を自分自身と重ね合わせて考えられるように配慮した。具体的には「親友に手をあげてしまった赤おに」に着目することで、葛藤する赤おにに共感できるように考えた。

2) 提示方法

子どもが共感しやすいように、絵本の挿絵をデジタル化した自作資料を作成し、大型テレビを使って資料を提示した(図 63)。原作は長いため、「明るい心」の本文をテレビ画面に合わせて教師が読み聞かせ、内容把握に時間をかけないように心掛けた。また、場面絵を黒板に貼ったり、立て札や手紙を掲示したりしながら、資料内容を確認できるようにした。また、ワークシートの中に心情に迫る手助けとして場面絵を加えたり、中心発問に対して、書く活動を取り入れたりして、ねらいとする価値に迫ることができるようにした。



図 63 テレビ画面を見る子ども

(4) 本時の学習

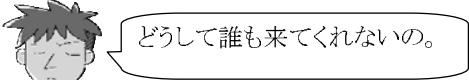
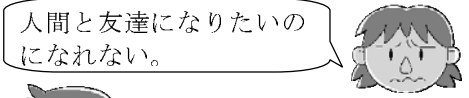
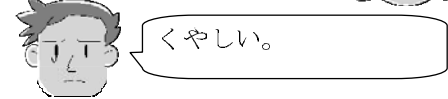
1) 目標

- ・ 本当の友達について考え、友達を思いやる気持ちをもつことができる。

2) 準備

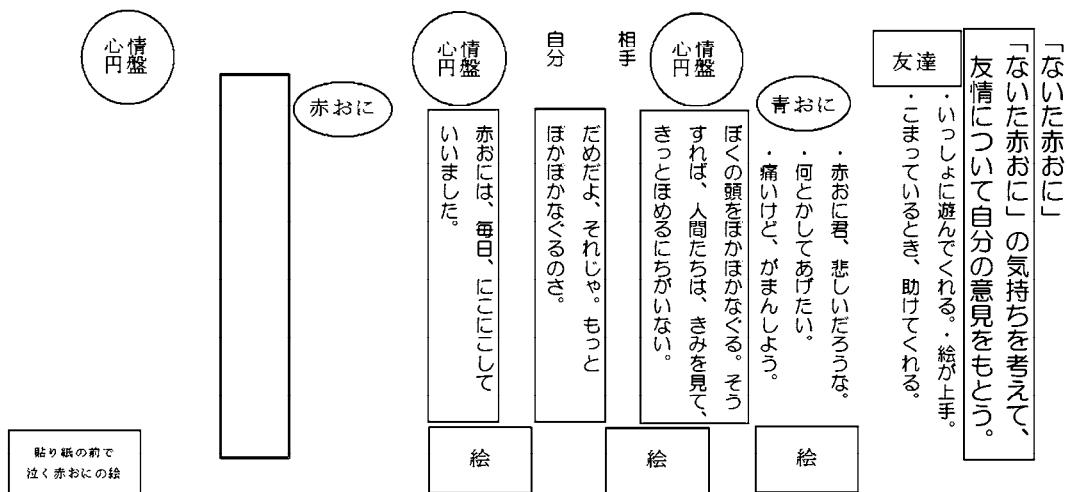
教師・・・大型テレビ、PC、黒板用掲示物、ワークシート、資料、心情円盤
児童・・・筆記用具

3) 学習過程

| 主な学習活動と予想される児童の反応 | 形態 | 指導・支援【学び合う姿の評価】 |
|---|---|---|
| <p>1 自分の友達について発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いっしょに遊んでくれる。 ・絵が上手。 | 一斉5分 | <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの子の考えている友達について聞き合いながら、資料へとつなげる。 |
| <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">「ないた赤おに」の気持ちを考えて、友情について自分の考えをもとう。</div> | | |
| <p>2 資料「ないた赤おに」の話を読み、赤おにと青おにの気持ちについて、話し合う。</p> <p>① 立て札を壊してしまった赤おにの心情を考える。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">  </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">  </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">  </div> <p>② 青おにをなぐる赤おにと、赤おにになぐられる青おにの気持ちを考える。</p> <p>(赤おに)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これは演技だからね。 ・こんなことしていいのかな。 <p>(青おに)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・赤おに君に人間の友達をつくってあげたい。 ・痛いけれど、今は赤おに君のためにがんばろう。 <p>③ 青おにの書いた手紙を読んだときの赤おにの気持ちを考え、青おにに手紙を書き、発表し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・青おに君がいなくてさみしいよ。もどってきてほしい。 ・青おに君ごめんなさい。ぼくは自分のことばかり考えていたよ。青おに君に悪いことをした。 | <p>全体8分</p> <p>全体5分</p> <p>個別 ↓ 全体16分</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・立て札や手紙を使い、子どもたちがイメージを膨らませて考えやすくする。 ・話に集中できるように座る席に配慮する。 ・大型テレビで資料を提示し、赤おにや青おにの気持ちに寄り添いやすいようにする。 ・立て札を立てる前から、人間たちと仲良く暮らしたいという気持ちを赤おにがもっていたことに気付くように支援する。 ・紙芝居の中から場面絵を抜き出して黒板に張り、資料の内容が確認しやすいようにする。 ・自分にとって大切な友人赤おにの願いを何とかかなえてあげたいと思う青おにの気持ちを確認する。 ・心情円盤を使うことにより、自分のことと相手を思う気持ちの割合を視覚的に分かりやすくする。 ・赤おにの悲しい気持ちを感じ取り、心情を深めやすくするため青おにのはり紙を提示し視覚に訴える。 ・ワークシートになかなか書けない子には、言葉がけをする。 ・手紙を読み合うときは、友達の |

| | | |
|--|---------------|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・青おに君がこんなにもぼくのことを思ってくれていたなんて知らなかった。 ・青おに君は本当にいい友達だ。君こそ本当の友達だよ。 ・ぼくは、自分のことばかり考えていたよ。本当にごめんなさい。自分の身近に、こんなに自分のことを思ってくれるすばらしい友達がいたことに、はじめて気付いたよ。君はぼくの本当の友達だよ。君が戻ってくるのを待っているよ。 <p>3 自分たちの生活を振り返り、「友達っていいな。」と思ったときや「友達にどんなことをしてあげたいか。」を発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人ぼっちのときに、誘ってもらって安心した。元気が出た。 ・〇〇さんがわたしが困っているときに相談にのってくれた。とても嬉しかった。 ・けがをしたとき、「大丈夫？」と声をかけてくれ、保健室まで連れて行ってくれた。 | <p>全体 8 分</p> | <p>方を見たり、教室の前面に移動したりするよう指示する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はり紙を読んだ赤おにの気持ちの変化や二人の関係について考えを深めるために、心情円盤を利用する。 <p>【赤おにの気持ちを考える活動とおして、相手を思いやることの大切さを感じることができたか。】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちも、友達のことを思って行動していることに気付かせる。 ・大勢の児童の発表を聞き合えるように、時間を確保する。 <p>【日頃の友達への接し方を振り返ることができたか。】</p> |
| <p>4 教師の話聞く。</p> | <p>一斉 3 分</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・友達についての詩を紹介する。 |

3) 板書計画



4) 評価

- ・ 赤おにの気持ちを考えて、友達を大切にしていこうとする心情を高めることができたか。

(5) 考察

1) 本時の授業について

① 資料選び

相手の気持ちを考える機会を設け、自分中心の考えで行動するのではなく、相手の立場を理解し、互いに助け合おうとする心情を育てていきたいと考え、本授業を行った。

② 提示方法

今回の授業で、絵本を大画面で児童に見せたことは、場面を把握しやすくなり、効果的であった。どの子も集中して画面を見ながら話を聞いていたので、資料提示後すぐに発問しても内容が理解できていた。前半部分には時間をかけないようにしたことで、青おにの手紙を読んだあと、赤おにの気持ちの変化を考える場面で時間をとることができた。

テレビを教室の斜め前に固定し、青おにのはり紙を大画面に映したまま手紙を書くことができるようにした。児童が自分の意見をしっかりとっていたので、手紙を書くときの取りかかりが早く、赤おにの気持ちを考え、手紙を書くことができた(図 64)。大画面に映された青おにの手紙を何度も読み返す子もおり、大型テレビを使うことは、考えの支援となっていた。

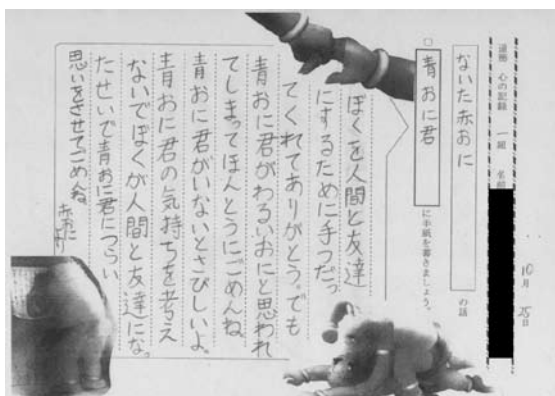


図 64 ワークシート (ないた赤おに)

また、大画面と板書に必要な情報があるため、あえて資料を配布しなかった。そのため、集中して書くことができ、短時間でもしっかりと書いている児童が多かった。ここから、必要なものだけを配り、必要なことだけを書かせることが大切であることがわかった。発表場面では、自分の意見をしっかりとつことができ、学級の半数が発言をすることができた。大画面の映像が、赤おにの悲しい気持ちを感じ取り、心情を深める手助けとなった(図 65)。



図 65 手紙を発表する児童

しかし、意見を板書し続けたために、児童の顔を見る余裕がなかった。児童から出た意見をまとめて板書をすっきりさせていたら、一人一人の意見をうけとめる余裕ができ、児童の言葉から追究が深まったのではないかと感じられた。また、今回は、赤おにの気持

ちを考え青おにに手紙を書いた。一般化をするために、青おにではなく身近な友達に置き換えて手紙を書いていたら、さらに価値の深化につながったのではないかと考えられた。

〈手紙の主な内容〉

- ・ぼくたちは、親友だよ。(12)
- ・青おにくんの気持ちに気が付かなくてごめんね。(12)
- ・青おにくんをなぐってごめんね。(9)
- ・ありがとう。(8)
- ・青おにくんにもどってきてほしい。(7)
- ・青おにくんが悪いおにだと思われてしまっでごめんね。(5)
- ・青おにくんがなくて、つらい、さみしい。青おにくんと友達の方がよかった(5)
- ・どうして何も言わずに旅に出て行ったの。(4)
- ・いつまでも待っているよ。(3)
- ・君のこと忘れないよ。(2)
- ・君に恩返しをしたい。(1)

2) 児童の変容

授業後、「友情に気づかせてくれた。」と話す児童がいた。青おにを思う赤おにの気持ちに共感することで、友情について考えることができたようだ。児童が登場人物を自分自身と重ね合わせて考えられるように、絵本を電子化し資料の内容把握を助けたり、登場人物の心情を心情円盤で分かりやすく示したりした結果だろう。困っている友達に声をかけて手伝ったり、勉強を途中でやめて遊ぼうとする友達に「○○ちゃん、やらないかんよ。」と優しく注意したり、相手を思いやる言動が見られるようになった。また、学芸会や犬山市小学校音楽会に向けて、声を掛け合って合唱練習する姿も見られた。

その反面、まだまだ友達関係は固定化しており、時間がたつに従って、特に女子児童のグループ化が目立ち始めてきた。仲間に入りたくても入れない児童がいるのが現実で、赤おにを通して、友情について考えたが、また元の状態に戻りつつあるのが分かった。

本授業を行った約1カ月後、12月の人権週間の折に、人権擁護委員の方を講師として招き『人権教室』を本校で実施した。人権啓発ビデオ「プレゼント」は、いじめを見て何もしないでいることは、いじめと同じであるということに気づいてもらうことをねらったアニメだ。このビデオ「プレゼント」を活用し、「思いやり」「勇気」「やさしさ」、そして、

「真の友情」について考えてみた。映像が与える影響は大きく、どの子

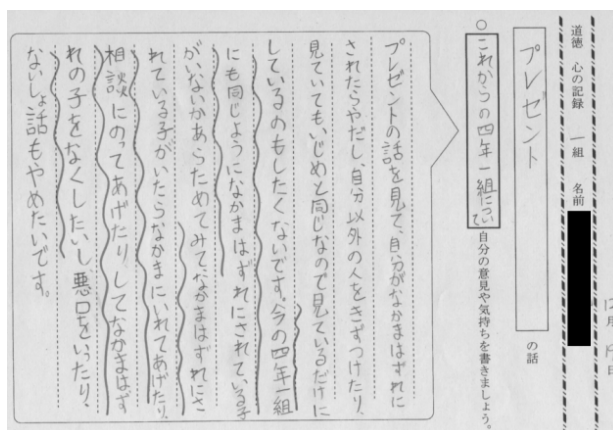


図 66 ワークシート（プレゼント～4年1組）

も真剣に見入っていた。また、登場人物が、自分たちと同じような子どもであることや、題材が身の回りで起こる身近なものであったことで、本学級に置きかえて考えやすかったようだ。

人権週間の1カ月後、本時の実践から2カ月後、人権啓発ビデオ「プレゼント」を思い出し、今の4年1組についての思いをワークシートに書いた(図66)。「級訓『みんなが助け合い 笑顔かがやく4年1組』のように、みんなが笑顔になるクラスにしたい。」と書いたA子。「一人でいる子がいたら、誘って遊びたい。」と書いたB子。その直後に席替えを行った。すると、席替えをすることで、固定化していたグループに変化が見られ、いつも一人ぼっちだったC子と「一人でいる子がいたら、誘って遊びたい。」と書いたB子の楽しそうに遊ぶ姿が見られるようになった。

3) まとめ

大型テレビを使って資料を提示し、場面絵を黒板に張ったり、立て札や手紙を掲示したりしながら、資料内容を確認できるようにした。資料の内容把握に、絵本の電子化は効果的であることが分かったので、積極的に取り入れたい。

道徳の学習は、人それぞれの考え方や感じ方の違いを認めながら、よりよい価値は何なのかを学ぶ場である。一人一人が自分のこととして真剣に向き合うためには、個人思考の時間を十分に確保することが大切である。その上で相手の意見をよく聞き、自分の意見を発表することにより、様々な考え方があることに気付くことができる。価値に迫る手立てを考え発表時間や交流する場を増やし、児童の意見をじっくりと聞きながら、道徳的価値を深化させていきたい。

道徳的実践力は、1回の道徳の授業だけで変わるものではなく、子どもの実態を把握し資料や時期を考え、継続して道徳の学習を行うことが大切であることが分かった。これからも週1回の道徳の授業を大切にしていき、子どもたちの道徳的実践力を高めていきたい。

資料



図 67 絵本「ないた赤おに」



図 68 人権啓発ビデオ「プレゼント」

実践2 小学6年生

(1) 主題 家族愛を感じ、生命を尊重しようとする心情を育てる

資料名 「希望の木」 ー資料名『希望の木』(出典「希望の木」新井 満 著 参考)
内容項目 生命尊重・家族愛 4ー(2)

(2) 主題・資料への思い

1) わらいと価値

6年生も後期に入り、中学への進学を目前とするころは、仲間との交友関係が複雑化し、自分と他との差を強く感じ、自分の存在価値を見出そうとする気持ちが芽生え始める時期である。児童は、「信頼できる友達を作りたい」などの心の成長に伴い、自分の居場所を見つけることで、心の安定を保とうとしている。

本授業では、東日本大震災の津波により被害を受けた太平洋岸に位置する岩手県陸前高田市にそびえ立つ、たった一本だけ生き残った松の木を題材とした。その一本の木が今どういう気持ちで立っているかという心情に迫り、命の尊さや仲間の大切さを知る。また、生命は親から子へと受け継がれていくものであるが、それぞれかけがえのないものであり、他にかえることのできない存在であるという生命の尊厳を気づかせていく。そして、それらを自分自身に置き換え、「自分はこれからどう生きていくのか」という自分の存在価値を個々に感じさせながら、児童の発達段階に沿って進めていきたい。

2) 資料について

本資料は、七万本もあった松の木から、たった一本だけ生き残ったという松の木が主人公である。父母や仲間たちが亡くなり、ひとりぼっちになった一本の松の木は生きていく力をなくしてしまう。そんな時、家族や仲間が、恐ろしい津波から命を懸けて自分を守ろうとしていたことを知る。皆の愛情で今生きていることを知った一本の松の木は、すべての命のための「希望」になろうと決め、強く生きていこうと決心する、という資料である。自分の生命を支えている家族をはじめ、周囲の人々に感謝の念をもつとともに、他の人や全てのものへの生命の大切さを認識し、生きとし生けるものの生命の尊さの意義についても考えを広げていきたい。人間としてどう生きればいいのかについての自覚を深めさせるとともに、自他の生命を尊重する態度を身につけさせていきたいと考える。

3) 児童の実態

6年生の後期に入り、学級の仲間と良好な人間関係を築いていこうとする雰囲気はできつつある。また、善悪の判断は自分でできるようになっている児童も多い。一方、正しいことを言えずに、その場の集団の雰囲気に合わせていこうとする風潮も少なくない。互いに高め合うよりよい人間関係を築いていくためにも、自他共に生命尊重の立場に立って、家族や仲間からの愛情を感じた上で、自分はどうかあるべきかを考える機会としたい。また、卒業に向け、あらゆる学校生活の中で自ら目標をもって取り組むことに喜びを感じられる学級集団へと育てていくことを願っている。

4) 関連教材

道徳 「母からの手紙」、「クラスの宝物」（５年）

「おばあちゃんの探し物」、「いちばん高い値段の絵」（６年）

（３）ねらいにせまるための具体的な手だてと工夫

１）資料選び

本学級は６年生である。後期に入り、中学進学を間近にひかえ、小学校生活のまとめの時期を迎えている。そんな児童の中には、善悪の判断は十分にできているものの、なかなか行動が伴わず、問題行動を起こしてしまうという児童が見受けられるようになった。この道徳の授業を通して、自分は家族にどれだけ愛されているのかを感じるとともに、自分の行動をじっくりと見つめ、誇りと自信に満ちた学校生活を送りたいと道徳的価値を自覚する機会になってほしいと考えた。

そこで、児童の心に残る資料を選びたいと思い、実際に起こった出来事を題材として選び、実際の映像や写真を見せる中で、より身近に感じさせ、児童の心に深く印象付けたいと考えたのである。この「希望の木」は一本だけ生き残った「奇跡の木」として、陸前高田市に今も残されている木である。木そのものに感情はないが、大震災の一部始終を見てきたということに偽りはない。その木の目線に立った資料であるがゆえに、児童が自ら体験したことがないことであっても、木の周辺に起こるあらゆる出来事は写真と照らし合わせながら考えることで、より鮮明に想像することができると考えた。

２）提示方法

ア ICT 機器の活用

震災後の一本の松の木を映し出し、教師の読み聞かせを行った。提示されている各場面の写真を見て、一本の松の木が置かれている環境や、一本になるまでの出来事、それぞれの場面で木はどんな心情なのかを捉えやすくしたいと考えた。また、児童に資料を配付せずに、読み聞かせを行ったのは、映像を見ながら、主人公の木の気持ちになってより主体的に学ばせたいと考えたからである。

イ 授業後の教室掲示

授業では、「〇〇の木」と、資料の題名を隠し、自分ならどんな木になるのかを考え、自由に名前を付けて短冊に書かせた。授業後も、児童の中に芽生えた道徳的価値がより継続して意識付けできるように、教室にその短冊を掲示した。少しでも長く、自覚した道徳的価値が継続することで、より、具体的な道徳的実践に繋がるのではないかと考えた。

（４）本時の学習

１）目標

生命の大切さを認識し、自他の生命を尊重する態度を身につけさせ、自分の生命を支えている家族をはじめ、周囲の人々に感謝の念をもつ。

２）学習課程

○ 木の説明。どういう木なのか。題名を隠して表紙の写真を見せる。（TV）

発問１：なぜこの木だけが助かったのでしょうか。

- ・発表：たまたま建物が近くにあったから。水の流れが、そこだけ弱かったから。
(この一本の木は、どんな気持ちでここに立っているのでしょうか。)
(この木の気持ちになって考えてみましょう。)

○ 写真を TV で写す。資料を読む。

「私ひとりだけが、生き残ったということ…。このことがわかった時、わたしは気を失いそうになりました。」までを読む。

発問 2：自分だけが生き残ったと知った私は、どんな気持ちだったのでしょうか。

- ・発表：さみしくて辛い。もう生きていけない。どうしよう。

なぜ私だけ生き残ったのか。こんなことなら仲間と一緒に流されたかった。

○ 絵を TV で写す。続きの資料を読む。

「私にはもう、生きていく力がありません。」

語り：「生きていく力がない。」どういうことでしょうか。想像してみましょう。

この一本の木の家族、大好きなお父さん、おいしいご飯を作ってくれたお母さん、楽しく笑いあった兄弟。たくさんいたのですね。でも、もうここにはいません。自分だけです。

○ 続きの資料を読む。

「どうして！」わたしは叫びました。

発問 3：「それはできない」と、家族はどんな気持ちで言ったのでしょうか。

- ・発表：自分たちの分まで生きてほしい。辛いと思うけど、連れていけないよ。
一人じゃないよ。

○ 続きの資料を読む。

「あの娘だけは、津波から守れ！」

「父さんが流されていきます。母さんが流されていきます。」

☆中心発問 4：家族や仲間たちが、私を守ろうとしたことを知って、私はどんな気持ちだったのでしょうか。

- ・発表：皆が私を守ってくれたのだから、皆の分まで生きよう。

家族が死を覚悟した時、私だけという思いで助けてくれたのだから、生きなければいけない。

○ 続きから読む。

発問 5：この一本の木には名前が付いています。自分ならどんな名前を付けますか。

- ・発表：友情の木 家族の木 たくされた木 仲間の木 守られた木…。

○ 題名「希望の木」と伝える。

発問 6：自分の家族との経験や体験とも重ねながら、今日の授業で感じたことや考えたことを素直な気持ちで書きましょう。

- ・ワークシートに感想を書く。

○ 最後まで読む。

発問 7：みなさんはどんな木になっていきますか。

(5) 考察

1) 本時の授業について

① 資料選び

授業の導入では、TVに一本の松の木を映し、なぜこの一本だけが残ったのかという発問から入った。写真を見せ、視覚的にとらえさせたことで、松の木がどういう状態で立っているのか、また、どんな環境なのかがより明確に把握することができた。そうすることで



図 69 児童の様子

で「この木がどんな気持ちで立っているのかを考えていこう」という本時のめあてと、児童の思考がよりスムーズに繋がったのではないかと考える。本時では、児童に資料は配付せず、読み聞かせを行った。全員が各場面の写真を見ながら話を聞くことで、視線が一つになり、資料の内容に真剣に耳を傾ける様子が見られた(図 69)。また、児童の表情の変化も観察しやすく、資料がもつ、道徳的価値により主体的に近づくことができた。

実際にあった出来事を資料とした今回の実践では、児童にとって、より身近なこととして主体的な学びができたように思う。自分が家族にどれだけ愛されているのかということをつくり考えたので、ワークシートには親への感謝の気持ちがたくさん書かれていた。と同時に、自分の行動を振り返り、胸を張って正しいと思える行動をしているのかどうか自分に問かけ、考えている姿も見られた。したがって、今回、実際に起こった出来事を題材として選び、映像や写真を見せることで、より身近に感じさせたことは、児童が主体的に学ぶ手だてとして有効であったと考える。

② 掲示方法

TVを活用して読み聞かせを行ったことで、資料の各場面の周りの様子や登場人物などが捉えやすく、「何について考えればよいのか」というめあても明確になった。めあてが明確になったからこそ、児童は、より自分のこととして受け止め、一本の松の木の心情に共感し、自分と重ねて考えることができたのである。さらに、実際にあった出来事を資料とし、写真を一枚一枚、場面に合わせて掲示したことで、児童に強く印象付けることができたと考える。このように、TVを通して実際の写真を掲示しながら資料を掲示したことは、

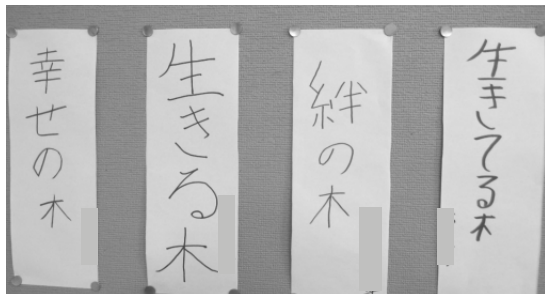


図 70 児童の短冊

資料自体がもつ道徳的価値を十分に引き出す上でも、効果があったように思う。

授業後、児童に「〇〇の木」と、自由に置き換えて木の名前を自由に記述させた。本授業から学んだ感謝の念や、生命の尊厳の価値を短冊に表しているのので、これを教室に掲示した(図 70)。授業後

も児童は自分や友達が書いた短冊を目にすることで、道徳的価値を継続して保つことができ、より具体的な道徳的实践に繋がっていったのではないかと考える。

2) 児童の変容

授業前と、授業3週間後にアンケートを実施した。このアンケートでは、家族に対する自分の態度や、学校生活にどれだけ真剣に取り組んでいるのかということを中心に行った。

児童 A は、授業前のアンケートに、「家の手伝いはほとんどできていない」と答えていた。また、家族への言葉遣いがよくなく、なかなか感謝の気持ちを表すことができていないようであった。しかし、3週間たった授業後のアンケートでは、積極的に家の手伝いをするように心がけ、素直に「ありがとう」と感謝の言葉を家族に伝えることができるようになったと答えていた。

また、児童 B は、授業前アンケートで、家族への言葉遣いがよくないのに加え、あいさつもしないという状態であると答えた。しかし、3週間後のアンケートでは、朝の「おはよう」感謝の「ありがとう」という言葉を進んで伝えるようになり、手伝いも積極的に行うようになったと答えている。さらに、その学級での行動観察からは、クラスの仲間のために自分にできることはないかと積極的に動く姿も見られた。誰も見ていなくても、トイレのスリッパの整頓をすることはもちろん、友達と自分との言動の差異にも寛容な心で認め、受け入れることができるようになってきた。

学級全体では、それぞれが目標をもって生活していきたいという意識が強くなっていった。学習面では、自主学習に挑戦し、自分が決めた目標に頑張る姿が見られた。

さらに、授業から1カ月後に、もう一度、教室に掲示している自分が書いた「〇〇の木」について改めて触れる機会をもつと、親や学校に感謝の気持ちを伝えたいとの思いから、合唱の歌声にも変化が見られた。

授業後の感想から、支えてくれている家族への感謝の念が芽生えてきたことが伺えたが、好ましい道徳的価値を見出すことができたのは、この実践の効果であるとともに、改めて、資料がもつ力の大きさを痛感した。加えて、その道徳的価値を継続して自覚させるためには、児童の目に付くところに、その時、自分が何を感じたのかを掲示することが、より確かな実践に繋がっていくものであると感じた。

3) まとめ

今回の実践を経て、資料の提示の仕方を工夫することによって、こちらが意図する道徳的価値をより児童に印象深く残していけるということがわかった。アンケートの結果から見ても、自分で考えて得た道徳的価値を短冊に表して教室に掲示をしたことは、道徳的価値の継続に大きく影響していることがわかる。これらのことから、道徳的实践に結び付けていく上で必要なことは、児童の実情に合う資料を選ぶとともに、児童に印象付ける資料の提示の仕方が鍵となると言えよう。

今後も児童の道徳的価値を広げていく手だてを考え、その具体的な道徳的实践につながる手立てを考えていきたい。

資料

海辺に、一本だけ生えている松の木です。

でも、ついこの間までは、たくさんの仲間たちと一緒にでした。

日本の東北地方、岩手県陸前高田市。太平洋に面した海岸には、それは見事な緑の松林が、弓形に続いていました。その名も、「高田松原」。松の木の本数は、七万本。

植林が始まったのは、今から三百五十年も昔。江戸時代の初期のことでした。

そんな大きな松林が、今では、どこにも見当たらないのです。

この世から跡形もなく消えてしまったのです。わたしひとりだけを残して。

「 お——い ！ 」

「 だれかいませんか—— ！ 」

「 父さ——ん ！ 」

「 母さ——ん ！ 」

兄さんや姉さんたち…。多くの友人や知人たち…。あなたたちはいったいどこへ行ってしまったのですか？声が嘎れるまで叫び続けました。でも、どこからも返事はないのです。

わたしは松の木です。海辺に、一本だけ生えている松の木です。

わたしは、ひとりぼっちです。とても淋しいです。泣かない日は、一日もありません。

あの日のことは、一生忘れることはないでしょう。 「怖い！」

どれほどの時代が過ぎたことでしょうか。世界は一変していました。

海辺にあったはずの大きな松林は、魔法のように消えていました。信じられない光景でした。しばらくするとわたしたちは、もっと信じられないことに気がついて愕然としました。

高田松原に生えていた七万本の松の木のすべてが死にたえて、わたしひとりだけが生き残っていたということ…。そのことがわかったとき、わたしは気を失いそうでした。

いやです。たったひとりで生きてゆくなんで、そんなの絶対にいやです。

どうしてあの時、父さんや母さんたちと一緒に、津波にさらわれなかったのか…。

もし、あの時、家族たちと一緒に死んでいたならば、こんなに淋しく辛い思いをしなくても済んだらうに…。

ああ、神さま、なんと非常なんですか！ どうかお願いします。

わたしを、父さんや母さんたちがいるところへ行かせてください。

どうかわたしを死なせてください。

時間が流れていきます。季節が流れてゆきます。ゆっくりと、しかも確実に。

でも、だめ。わたしにはもう生きる力がありません。生きていく自信もないのです。

早くわたしを、家族たちが待つところへ行かせてくれませんか。だれか…。死にそこなったわたしをいつそひと思いに切りたおしてくれませんか。どうか、一刻も早くわたしを、家族たちが待つところへ行かせてくれませんか。

ある晩 夢を見ました。家族たちの夢でした。

「元気…？」とわたし。「ええ…とても元気よ」と母さん。

津波にさらわれた母さんは、今は風になっていました。意外にもわたしのすぐ傍にいてくれたのです。父さんは、星になっていました。いつもわたしを見守ってくれていたのです。やがて、別れのときが来ました。わたしは家族たちに向かって、わたしは言いました。

「待って！」わたしも連れてって、もうこれ以上わたしをひとりぼっちにさせないで。

「それはできないのだよ。」「どうして！」わたしは叫びました。

あの日。あの大きな津波が襲いかかってきたあの時、父さんはわたしをかばうように仁王立ちにはだかりました。

「くるな——！」「くるな——！」「この娘のところだけにはくるな——！」

両手を大きく広げ、枝という枝、葉という葉を広げながら、わたしのことを守ろうとしてくれたのです。

母さんも必死でした。襲いかかってくる津波をほんの少しでも阻止するために、その太い幹を左右に激しく揺さぶりながら母さんは叫び続けました。

「助けてあげて！」「この娘だけは、助けてあげて！」「わたしはどうなってもかまわない。」

兄さん、姉さんたちも必死でした。高田松原に生えていた七万本の木たちは、ひとり残らず身をよじり、両腕をいっぱい広げて、わたしを津波から守ろうとしてくれたのです。

「あの娘を、守れ——！」「あの娘だけは、津波から守れ——！」

図 71 『希望の木』抜粋

実践3 小学5年生

(1) 主題 勇気を持ち、いじめに立ち向かおうとする心情を高める

資料名 「わたしのいもうと」(松谷みよ子著)

内容項目 公正・公平、正義 4- (2)

(2) 主題・資料への思い

1) ねらいと価値

平成 23 年 10 月、滋賀県大津市の中学二年生生徒が自殺した事件は、世間を大きく騒がせた。その原因は「いじめ」である。児童・生徒にとって、学級集団に認められず、いじめや嫌がらせを受けるということは、大きなプレッシャーである。一度いじめの対象となれば、その子どもは、逃げ場がなく、その解決方法を“死”に求めるしかなくなるほどに、肉体的・精神的に追い詰められる危険性をはらんでいる。

悲惨ないじめを学級で発生させたくない。担任ならば、誰しもそう思うことである。そのためには、学級集団を良い方向へ伸ばしていくことと、悪い方向へ行かないようにプレーキをかけることの両面が必要だろう。特に後者は予防的側面からも、4月の学級開き後、早い時期に行うと効果が大きいと考える。

本授業では、いじめの悲惨さを伝えること、いじめに関わる人間がどうなるかを知らせ

ること、いじめを憎み立ち向かう勇気をもたせることの3点をねらいとした。

2) 資料について

本資料「わたしのいもうと」は、いじめがテーマの絵本である。作者である松谷みよ子氏の元に届けられた手紙に書かれていた実話が元になっている。いじめを受けた生徒が学校へ行けなくなり、最終的には亡くなってしまう、という悲しい話である。学校でのいじめという身近な問題がテーマであること、悲しい結末であること、実話が元になっていることなど、本資料は子どもの心を揺さぶる効果的な資料である。これにより、いじめを受ける側の悲惨さを伝え、子どもにいじめを憎む気持ちをもたせたいと考えた。

また、いじめに関する新聞記事を用意した。すべて実際の記事をスキャンしたもので、内容は、「いじめられた子の自殺」、「いじめた子に対する学校措置や訴訟」、「いじめた子の家族の自殺」などショッキングなものばかりであり、子どもの心に、深く印象づけられることが予想できる。いじめた子もその家族も、悲惨な結末になることを伝え、いじめは、いじめる子、いじめられる子双方にとって悪影響を及ぼすものと感じさせることを意図した。

更には、いじめにはいじめる子、いじめられる子以外にも、はやし立てる子、無関心な子がいるという四層構造になっていることを伝え、いじめをしていなくても、それを見て、はやし立てたり無関心な態度をとったりしたことはなかっただろうか、これまでの自分の経験を想起させ、そのような態度をとることが、いじめの増長につながることを押さえ、自分自身の問題として捉えさせたいと考えた。

最後に、友人にいじめから助けられた子どもの作文を紹介する。これまでのいじめの指導は、「いじめは駄目だ」という、いじめを止める視点のみのものが多かった。そこで終わるのではなく、いじめやその手前の「いじわる」の段階に陥った時に、「どうしたら良い」、「どうすることが正しい」という視点を与えることと希望ももたせることをしたいと考えた。

3) 児童の実態

本学級は5年生で男子15名、女子15名、計30名のクラスである。犬山市の東部に位置し、田園風景が広がる地域にある学校で、素直で穏やかな性格の児童が多く、友人とのけんかやいさかかもほとんど起こらない。例えトラブルが起きたとしても、すぐに仲直りができる児童ばかりである。反面、他者とぶつかり合うことを恐れ、自分の意見を主張せず、抑えて我慢してしまうという消極的な面も見られる。

「トラブルを避ける」ということは、他人に無関心であることにつながる可能性を秘めている。正義を貫くため、誰かを守るためには、時として自分の意見を主張することも大事なので、優しさとともに、心の強さももってほしいと考える。

4) 関連教材

| |
|------------------|
| 道徳 「アンパイアの心」(5年) |
| 「ぼくはこうかいしない」(6年) |

(3) ねらいにせまるための具体的な手立てと工夫

1) 資料選び

子どもに、「いじめは絶対にダメだ」と印象づけるためには、効果的な資料が必要である。「わたしのいもうと」は、これまで様々な学校の道徳の授業で扱われており、主体的な価値の自覚につながると、その効果は実証済みである。また子どもたちにとって、創作ではなく実話というのは、より心を動かすものとなる。「わたしのいもうと」は実話を元に作られたことを伝えるとともに、いじめに関する実際の新聞記事や児童の作文を紹介することで、自分たちの現実に起こりうる問題として捉えさせたい。

本授業はいじめを予防する観点から、4月の学級開き後できるだけ早い時期に実施したいと考えた（本実践は4月25日に実施）。また4月は、児童にとって新学年となり、新しい学級でより良い友人関係を築いていきたいと意欲に燃えている時期でもあり効果が高い。

時期が遅れると、友人関係も固定化し、最悪の場合、いじめが発生してからでは、生徒指導となり、逆効果となる可能性もある。

更には、学年当初にいじめを取り上げて道徳授業を行うことは、教師の「いじめはゆるさない」という姿勢を児童に示し、新学年、新学級に対する安心感をもたせる効果も期待できる。

2) 提示方法

「わたしのいもうと」は絵本であり、挿絵の部分を見せながらイメージを膨らませる効果を期待できる。授業では、iPadに挿絵を画像として取り込み、それをモニター投影して拡大提示する。こうすることで、挿絵を全児童が見やすくなる。また挿絵に集中してイメージを上げやすくするため文の部分は提示せず、教師の読み聞かせとして行う。

また、物語の途中で話を中断し、児童にその後の展開を予想させることも手立てとして考えた。いじめを受け、部屋に引きこもり学校へ行けなくなった“いもうと”は、その後どうなったのか、という発問である。ハッピーエンドの物語や話に慣れている多くの児童は、「学校に行けるようになった」などプラスの展開を予想するだろう。しかし物語の展開は、予想に反し「学校へ行けず、その後、亡くなってしまった。」との結末である。意外な展開に、児童は大きく心を揺さぶられるであろう。

その後、物語で終わらず、新聞記事やいじめられた児童の作文を紹介することで、いじめは空想の世界ではなく、自分たちの身の周りにあること、悲惨なこと、自分たちの手で解決に結び付けられることを伝え、自分たちの問題として考えられるようにしたい。

(4) 本時の学習

1) 目標

- ・ いじめの悲惨さを知り、いじめられる子の気持ちに気付く。
- ・ いじめを憎み、勇気をもって立ち向かおうとする心情を高める。

2) 準備

教師・・・iPad、AppleTV、無線LANルーター、モニター

資料：書籍「わたしのいもうと」（松谷みよ子著、偕成社）、

いじめに関する新聞記事、児童の作文

3) 学習過程

□・・・本時の目標 学習形態：個—個別 斉—一斉 ペア—ペア

| 段階 | 学習活動 | 教師の支援と留意点 | 評価（評価方法） |
|-------------|--|---|------------------------------|
| つかむ 5分 | 1 友達にされて嫌だったことを想起する。 <input checked="" type="checkbox"/> 2 本時の学習課題を知る。 <input checked="" type="checkbox"/> □ いじめに関わる友達の気持ちを考えて、行動しよう。 | ○想起させることを目的とし、無理に発表させない。 ○相手が嫌がることは「いじめ」につながることをおさえる。 | |
| とりくむ 35分 | 3 「わたしのいもうと」前半部分を聴き、登場人物の気持ちを考える。 <input checked="" type="checkbox"/> 4 「わたしのいもうと」後半部分を聴き、登場人物の気持ちを考える。 <input checked="" type="checkbox"/> □→ <input checked="" type="checkbox"/> 5 いじめに関する新聞記事から、いじめに関わる子の悲惨さを知る。 <input checked="" type="checkbox"/> 6 いじめの構造を知る。 <input checked="" type="checkbox"/> ○加害者・被害者・傍観者・はやし立てる者の四層構造について知る。 | ○イメージがわかりやすいよう挿絵をモニタで拡大表示する。 ○ゆっくりとした語り口調で読み聴かせるとともに真剣な眼差しを児童に向け真剣に話を聴くよう促す。 ○登場人物の気持ちを問う。 ○この後、いじめにあい、自宅にひきこもった妹がどうなるのかを予想させ、発表させる。 ○亡くなった妹について感想を伝え合うよう指示をする。 ○いじめをした子どもについての感想を伝え合う指示をする。 ○現実世界でのいじめに視点を向けるよう意図し、実話を元に作られた話であることを伝える。 ○いじめに関わることの悲惨さを伝えるため、いじめをされた子、いじめをした子、双方の保護者についての新聞記事を紹介する。 | ○いじめられる子の気持ちを想像できたか。 （発表） |

| | | | |
|-------------------------------------|---|---|--------------------------------|
| と り く む 3 5 分 | 7 いじめられた子の作文から、助けてくれる子の存在を知る。 [斉] 8 感想を交流する。 個→ペア→斉 | ○いじめから助けてもらった児童の作文を紹介し、いじめが起きても解決する、という視点と勇気をもつようにする。 ○感想を書く時間を確保し、自分の意見をもった上で感想と伝え合うよう指示する。 ○いじめに対する他の児童の考えを伝えるため、発表できなかった感想は、後日学級通信を通じて紹介する旨を伝える。 | ○いじめを憎み友達との接し方を考えることができたか。(発表) |
| ま と め る 5 分 | 9 教師のいじめに関する経験談を聴く。 [斉] | ○身近な教師の話伝えることにより、児童にとって、より身近な存在であることを伝える。 | |

4) 評価

- いじめの被害と悲しさを知り、友達を大切に、勇気をもって守ろうとする気持ちになれたか。

(5) 考察

1) 本時の授業について

本授業における児童の様子を観察すると、真剣な表情で臨んでいる者ばかりであった。テーマが「いじめ」という児童にとって重いものであり、資料で扱われた内容も悲しいものが多かったためであろう。授業の後半では、いじめから助けられた児童の作文を紹介し、明るい希望をもつようにしたが、全体的には暗い、考えさせるような1時間であった。

道徳の授業の感想で、多くの児童がいじめの悲惨さを知り、いじめはしないと書いていた。また、何人かの児童が、いじめられている子を助けたい、と書いていた(図72、73)。まずは本授業を行うことで、児童の心の中に、「いじめはダメだ」という気持ちをもたせることができたと考える。

この人かどんな気持ちかそしてどんなにつらかったのか私には分からないけど、でも私はせつないに声をかけて友達になりました相手も相手で、どうしてそんなことをするのか、私は本当に本当にきんを感じました。
私は引いてきた時男子から「みんなの〜バカじゃないの」と言われて本当に言われて、
だけど友達かあいつらなんか気にしないでいいよあいつらの方がバカだし、と言われて私は城東小学校が好きになりました。

図 72 A児の感想

いじめについての話を話してもらったり、新聞を見たりしてやっぱりいじめは本当におそろしいなと思いました。いじめをうけても助けてくれる友だちがいたら、いいなと思いました。いじめをうけてる子がいたら助けてあげないといけないと思いました。信用できる友だちも大事だと思います。

図 73 B児の感想

本授業は、資料の内容や提示時期、提示方法を工夫した授業であった。それぞれについて考察をしていく。

① 資料選び

絵本「わたしのいもうと」の読み聞かせを聴く児童の表情から、物語に引き込まれていた様子が分かり、資料の効果を実感した。話の内容も挿絵も、児童を十分に惹きつけるものだったと推測する。

いじめに関する新聞記事に対しては、絵本という物語から、新聞という現実の話になったこともあり、より真剣に聴いていた。児童の感想から、「こんなにひどいことをする人がいるのだ」「いじめる側もいじめられる側もその家族も、悲惨な運命をたどるのだ」という驚きの様子と、「いじめはしない」という決意が読み取れた。いじめから助けられた児童の作文に希望をもち、感想で「いじめられている子がいたら私も助けてあげたい」と書いている児童が何人もいた。絵本、新聞記事、作文と3種類の資料を扱ったが、十分に効果を発揮したものとする。

本授業は児童の人間関係が固定しない、学級開き後早めに行いたいと考え、学年当初の4月25日に行ったが、それは適当であったと考える。

それまでの児童の様子を観察していると、いじめやからかいの様子は見られなかったし、まだ遠慮や気遣いをしている面も見られた。いじめやからかいがある状況でいじめを取り上げて授業を行うことは、いじめに関わる子たちへの直接的指導ととられ、下手をすれば、いじめがより見えづらくなり、複雑化、深刻化する可能性もある。そこで、児童の人間関係が固定していないこの時期に本授業を行い、よかったと考える。

② 提示方法

資料はiPadに取り込んだ絵本や新聞記事、作文をモニターに映し出す、という方法で提示した(図74)。実物では小さいが、それをモニターで拡大提示できたのでより見やすかったものとする。しかしモニターのサイズに限りがあるため、後ろの方の席の児童には見にくかったとも考えられる。プロジェクタとスクリーンで提示する方法や、資料を配布する方法の方がよかったのかも知れない。



図74 iPadとモニターの連携

iPadでは、手元で資料を自由に拡大縮小できるので、特に見せたい箇所(新聞記事の見出しなど)を拡大して見せた。教師がどの箇所を読んでいるのかが十分に伝わったと考える。

絵本「わたしのいもうと」は、途中一カ所、読み聞かせを中断し、その後の展開を予想させた。いじめにあい、家に引きこもった児童のその後を考えさせたのである。「学校へ行くようになった。」と明るい展開を大半の子が予想したが、実際は「亡くなってしまった。」という悲惨な結末であった。児童の予想を裏切り、悲しい結末を迎えたことを伝えることで、いじめの悲惨さをより伝えられたと考える。

2) 児童の変容

11月頃、学級内の女子児童間で人間関係を巡るトラブルが起きた。一人の児童が3人グループの女子に陰口を言われるというトラブルである。陰口を言われた子は中々学級に馴染めず、一人でいる事も多い児童であった。これまでも周囲の児童が声をかけてきたが、その児童は上手く接する方法が分からないようであった。

陰口が分かったのは、他の女子児童2名が教えてくれたからである。担任として、そのことを発見できなかつたことは情けない限りであるが、担任を頼り、陰口のことを教えてくれた児童に感謝したい。その後、女子児童2名は、同じ係活動のメンバーにしたり、休み時間に遊んだり、陰口を言われた児童を誘ってくれた。2名の中に、気配りをする優しさが元々あったのだろうが、道徳の授業で伝えた、「いじめから助ける」という視点と、その方法が彼女たちの心の中に残っていたのかもしれない。

その後女子児童3名と個別に話をした。その後何度か陰口を続けていることを聞いたが、その都度、直接話をするなどしていくうちに、陰口はなくなっていった。

3) まとめ

振り返って考えると、陰口事件が起きたときは学校行事などで忙しく、子どもたちにも様々なプレッシャーがかかっていた時期だった。そこで、暗い雰囲気無くそうと、休み時間に外で一緒に鬼ごっこをしたり、おしゃべりをしたりして、3人グループの児童と他の児童との関係を築くことを意識して取り組んだ。そのことも児童の陰口解消につながったのではないかと考える。

道徳の1時間の授業で子どもの道徳的心情は高まる。しかし日が経つにつれ、高まった道徳的価値も元に戻ってしまう。そこで、継続的にその価値を取り上げることや、子どもと教師との信頼関係を築くこと、子供同士の仲間意識を高めることが必要であると考えます。

資料



図 75 絵本「わたしのいもうと」

暴行認定し 賠償命じる

石川のいじめ訴訟

石川県河北郡七塚町立七塚小学校の児童が、無断でいじめも暴行を受けてけがをし、不登校になったとして、同町といじめた児童八人の親を相手取り、慰謝料など三百三十万円の損害賠償を求めていた訴訟の判決が二十五日、金沢地裁であった。

市村陽典裁判長は「児童

遺書でいじめ、名指しされ 生徒の父親自殺

鹿兒島・知覧

鹿兒島県知覧町の男子中学生が、いじめられたことについて、遺書でいじめた生徒の名を指し、自殺した。遺書には「いじめた生徒の名を指し、自殺した」とある。遺書は、いじめた生徒の名を指し、自殺した。遺書は、いじめた生徒の名を指し、自殺した。

農薬を飲み重体

鹿兒島県知覧町の町知事、農薬を飲み、重体になった。農薬を飲み、重体になった。農薬を飲み、重体になった。農薬を飲み、重体になった。

双方児童、法廷陳述へ

小学校のいじめ訴訟

石川県河北郡七塚町立七塚小学校の児童が、無断でいじめも暴行を受けてけがをし、不登校になったとして、同町といじめた児童八人の親を相手取り、慰謝料など三百三十万円の損害賠償を求めていた訴訟の判決が二十五日、金沢地裁であった。

訴訟で児童尋問

大阪地裁

「いじめられ金取られた」

中2 遺書残し自殺 計10万円 殴られ川に顔

遺書には「いじめた生徒の名を指し、自殺した」とある。遺書は、いじめた生徒の名を指し、自殺した。遺書は、いじめた生徒の名を指し、自殺した。



西 尾

図 76 いじめに関する新聞記事

ぼくは4年生の時いじめられていました。教室に入ると、理由もなく殴られたり蹴られたり……。毎日毎日、顔や腕や背中にあざができていました。

もうがまんできなくなってしばらく学校を休みました。

ようやく学校に行けるようになりました。でも、教室には怖くて入れませんでした。また、殴られるかもしれないからです。

ぼくは、毎日保健室で過ごしました。保健室なら殴られることもないからです。給食も保健室で一人で食べました。一人で食べる給食はつまらないです。だれとも話さないで食べる給食はさみしかったです。

ある日、同じクラスのO君が給食を持って保健室に食べにきてくれました。ぼくは何ヶ月ぶりに友だちと話をしました。いろいろO君と話をしました。

次の日は、Y君がきてくれました。うれしくてたまりませんでした。次の日はS君、次の日はMさん、次の日はK君、H君……。

でも、教室へは行けませんでした。また、いじめられるかもしれないからです。また、殴られるかもしれないからです。まだ、恐ろしかったのです。

でも、給食を食べにきてくれた友だちが、いじめた子に強く話してくれたそうです。「もう、あいつをいじめな。いじめんなら、おれたちが力を合わせて許さんぞ」と。そして、ぼくは、おそろおそろ教室へ行きました。いじめた子がこっちを見ていました。恐ろしかったです。でも、みんなが守ってくれていたの、何もされませんでした。

ぼくは、みんなのおかげでようやく教室に行けるようになりました。

やっぱり、教室は楽しいです。みんなと食べる給食はおいしいです。

もしも、いじめられている子がいたら、ぼくは、絶対に助けてあげます。

ぼくも、助けてもらったんだから……。

図 77 いじめに関する作文

実践4 小学6年生

(1) 主題 うそ偽りのない行動をして、誠実に生活をしようとする。

資料名 「手品師」(出典「明るいい心」)

内容項目 正直・誠実、明朗 1－(4)

(2) 主題・資料への思い

1) ねらいと価値

本主題では、自分が不利になった場合でも、相手との約束を守ることや、利益を考えずに人のために誠実に生きようとすることは、大切である。6年生にとって、相手との約束を守ることの大切さは周知しているはずである。約束を破ってしまって嫌な思いをさせた経験のある児童、また約束を破られてしまい嫌な思いを経験した児童もいる。しかし、自分の利益・不利益を考えた際には、誠実に行動できない場合もある。特に自分にとって不利な場面においては、自分の利益を考えてしまい、相手のことを考えて誠実に行動できないことが多々ある。そこで、自分の損得に関わらず、誠実に明朗に行動できる児童を育て

たい。また、自分の大切だと思えることに明朗かつ誠実に行動できる児童を育てたい。

人はひたむきに生きている姿を見たとき、自分もそうでありたいと思うであろう。誠実であってこそ、信頼関係で結ばれた望ましい人間関係を築くことができる。本資料では、一人一人の誠実な生き方を大切に、みんなで楽しく生活しようとする気持ちを育てたい。

2) 資料について

本資料は、大劇場への出演を夢見る売れない手品師が、小さな男の子と交わした「約束」が現実性をおびてきた「夢」との間で葛藤する。自分の夢を大切に想いながらも、悩みに悩んだ末、小さな男の子との約束を選択する内容である。自己の利益や名声よりも男の子との約束を選んだ手品師から、真の誠実さとは何かを深く考えさせる資料である。本主題では、一人の手品師の心情を通して、自分の夢を大切に思う気持ちやうそ偽りのない行動をして、誠実に生活をしようとする心情を高めたい。

3) 児童の実態

本学級は、男子 17 名、女子 14 名の 32 名のクラスである。現在は、最高学年としての自覚が育ち、積極的に物事に取り組む姿や自分の夢も明確になり、何事にも前向きに取り組む姿も見られるようになってきた。特に男子の中には、自分の夢をしっかりもち、その夢に向かって練習に励んだり前向きに取り組んだりしている児童が多い。しかしその反面、損得にとらわれて責任を人に転嫁したり、人の目が届かないところでは楽をしようとしたりする態度が見られる。また好きな友達には誠実にふるまい、そうでないとうそをついたり、約束を破ってしまったりすることもある。

そこで、このような時期の児童に、かげりのない心で誠意をもって行動しようとする意欲を高めることが必要であると考えた。

4) 関連

| |
|--|
| 道徳 「ダブルブッキング」(自作資料集)(6年) 「祭りの日の拾い物」(5年) |
|--|

(3) わらいにせまるための具体的な手立て

1) 資料選び

本資料は、児童の実態に合わせ、自分の損得がかかった時に、誠実な行動ができるかを考えてほしいと願い、実施することにした。6年生であるため、約束を守る大切さは、十分承知している。そのため、児童の中で葛藤するものは何かと考えた。そこで選んだのが、「夢」と「約束」の間で葛藤する、本資料「手品師」である。夢をもつことの大切さは、常日頃学級で話をしている。そのため、自分の夢は大切であるという児童が多い中、自分の果たした大切な「約束」との間で葛藤し十分に考えてほしい、また、友達とふれ合いながら、誠実に行動できる態度を身に付けてほしいと考えた。そして、6年生が始まった早い時期に行うことで、これからの行動を考えるきっかけとしてほしいと考えた。

2) 提示方法

資料は表面(図 78)と裏面(図 79)に分けて提示する。資料表面には主発問である「夢か小さな男の子どっちをとるか」について、各々の意見を考えられるようにした。資料表

面は、主発問までの資料とし資料裏面にはその後の主人公の行動を考える資料である。資料表面で主発問である「夢か小さな男の子か」を考え、葛藤した後、資料裏面を提示し、小さな男の子との約束をとり、誠実な行動をとった態度について考え、うそ偽りのない誠実な態度で接しようとする気持ちを高めるものとする。

また、児童の変容を見るため、そして道徳的実践力を高めるために、5月・12月に同じ資料で行った。資料提示は同じ形態で行った。

(4) 本時の学習

1) ねらい

- ・ うそ偽りのない行動をして、誠実に生活しようとする気持ちを高める。

2) 準備

教師・・・黒板用掲示物、資料、ワークシート

3) 学習過程

学習形態：…一斉 …全体交流 …ペア …個別

| 過程 | 学 習 活 動 (主な発問と予想される児童の発言) | 教師の活動と支援 | 評価 (評価方法) |
|------|--|---|--|
| つかむ | 1 学習の見通しをもつ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">あなたが手品師なら、夢をとる？小さな男の子をとる？</div> | ○ 学習の見通しがもてるように活動の流れを示す。 | |
| とりくむ | 2 資料を読み、キーワードを押さえる。 <input checked="" type="checkbox"/> 3 自分の考えをまとめる。 <input checked="" type="checkbox"/> ・ワークシートに記入する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">夢をとる</div> ・自分が願っていたことがかなえられるチャンスだから。 ・チャンスがもう二度とないかもしれないから。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">小さな男の子のところに行く</div> ・小さな男の子と約束したから。 ・小さな男の子を元気にさせたいから。 4 友達と意見交流する。 <input checked="" type="checkbox"/> → <input checked="" type="checkbox"/> [伝え合う力] | ○ 全体でキーワードとなる言葉をまとめることで、考えを整理しやすくする。 ○ 友達と意見交流ができるように、自分の考えを、根拠をもって書くように促す。 ○ 登場人物の手品師は、どのような夢をもっているか触れ、手品師と男の子の状況をしっかりとらえさせる。 ○ 同じ立場の友達と交流することで、より意見を深めたり、自信をもてるようにしたりする。 | ○ 根拠をもとに自分の立場をはっきりさせた意見を持つことができたか。 (ワークシート) |

| | | | |
|------------------|---|--|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・自分と同じ立場の友達と伝え合う。 ・全体で意見を交流する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 全体交流では、多様な考えがあることに気付くことをねらいとしているので、違う立場の意見にも耳を傾けるように促す。 ○ 意見があまりにも偏る場合は、揺さぶりをかける発問をし、考えを深められるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 多様な考えに触れることで、公正な態度についての自分の価値観を見つめることができたか（話し合い） |
| | <p>5 資料2を提示して、話の結末を伝え、再び全員で手品師のとした行動を考える。</p> <p style="text-align: center;">個・斉</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 続きの話(資料2)を提示し、話し合うことで偽りなく誠実に行動するというこについて考えを深める。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 公正な態度を高めようと思意欲を高められたか。(ワークシート) |
| ま と め る | <p>6 本授業の感想を書く。</p> <p style="text-align: center;">個</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 今後の活動に生かされるように、自分が本授業で考えたことを書くように指示する。 ○ 方向性をもったオープンエンドのための教師の意図が見えるものにする。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 誠実に接していこうとする気持ちが高められたか。(ワークシート) |
| | <p>7 教師の話聞く。</p> <p style="text-align: center;">斉</p> | | |

4) 評価

- ・ 偽りなく誠実に生活しようとする気持ちを高めることができたか。

(5) 結果・考察

1) 本授業について

① 資料選び

本授業では、「夢をとる」か「約束をとる」かの間で葛藤し、その後の主人公の行動を考え、誠実に行動することの大切さを感じてほしいと思い、資料を提示した。2回の授業では、この二つの価値の間で葛藤し、自分が同じ立場に立った際には、どうするか悩むと答える児童が大多数を占めた。授業中も、「これが夢じゃなかったらあまり迷わないんだけどな…」「約束したしな…」とつぶやく声が多くあり、自分のこととして真剣に考えている姿を見ることができた。

② 資料提示

資料を表面と裏面に分けて提示をした。資料表面では、主発問の「夢をとるか小さな男の子のところに行くか、どちらをとりますか。」を手品師のように「夢」か「約束をとるか」と葛藤し、考えを深めることができた。また、子どもたち同士が意見交流をしながら、お互いの意見を聞き合い、新しい考えや意見をもつことができた。授業後の感想にも「とて

も悩んだ。友達のたくさんの意見を聞いて、いろいろな考えを知ることができてよかった」というものもあった。その後の資料裏面では、手品師のとった行動について考えを深めることができた。悩んだ末に“夢”を選んだ児童は「自分の夢も大切だけど、約束は破ってはいけないと思ったから、手品師はこういう行動をとったと思う」という意見を持ち、誠実に行動することの大切さについても考えることができた。また資料表面の時点では「小さな男の子との約束は大切だけど、夢にいった方が、お金ももらえるし、裕福な暮らしができるから、夢にいく」という児童がいた。友達と交流したり、資料裏面の手品師のとった行動を考えたりした結果、その児童の授業後の感想は、「自分のことばかり考えてはいけないと思った。お金とか自分のことだけではなく、相手のことを考えて行動しなければいけないと思った。」と変化した。資料を分け、もう一度主人公の誠実に行動した資料を読み直し、考えたことで、考えてほしい主題について深めることができた。こういったことから、資料を分けて提示した結果、考えるきっかけを作ることができたと考える。また、友達と交流し、手品師のとった行動を考えることで、より主題に迫ることができたと考える。

2) 児童の変容

本資料で5月、12月と2回の授業行った。実際の場合でどちらを選ぶことが正しいとは言い難いのは事実である。5月、12月の両時期とも、二つの選択の間でどちらにするのか迷う児童がほとんどであったが、5月と12月では意見が変わっている児童や、選択は変わっていないが、選んだ理由が変わった児童も多くいた。5月は、“夢をとる”と答えた児童が9人、“小さな男の子のところに行く”と答えた児童が22人で、12月は“夢をとる”と答えた児童が7人、“小さな男の子のところに行く”と答えた児童が24人であった。数字に大きな差はないが、“夢をとる”といった児童が5月と12月では変わっていた。5月の時点では「自分の夢は自分が幸せになるために必要。かなえることがとても大切である」と言っていた児童が、12月には「小さい男の子のところに行く。約束は守らなければいけない。自分の夢は、自分でもう一度チャンスがくるように努力する」という意見になった。また逆に5月は、小さな男の子のところに行くと書いていた児童が、12月には、夢をとるに変容した。5月時の理由は、「もし大劇場にいて、失敗したら落ちこんでしまうので、男の子のところに行ったほうがいい」であったが、12月は「自分が必死にかなえようとしてきた夢だから、実現できるように努力したい。男の子には悪いが、大切にしてきた夢を実現させたい」と書いていた。またある児童は、同じ小さな男の子のところに行くを選んだものの、「男の子が一人になるとかわいそうだから」（5月）という理由が「男の子と約束したのだから、いきなり裏切ってはいけない。男の子が元気になるように、力になりたい。」（12月）に変わった。2回同じ資料を提示することで、より考えを深めるきっかけにもなり、また印象に残ったのではないかと思う。実際に2回目の前にこの資料を覚えているかどうか聞いたところ、全員の児童が覚えていると手を挙げた。授業後の感想には、「2回目であったが、とても迷った。どちらにしても、しっかりと考えて自分に正直に行動することが大切だと思った」や「自分は1回目と違う方を選んだ。迷いに迷った結果であったけれど、この2回の授業で、自分のことだけでなく相手のことを大切に思い行動することが大切だと思った」という感想があった。こういったことから、同じ資料で時期をずら

して行うことで、主題に迫ることもできると考えた。

これらの結果から、資料を子どもの実態に即して選び、その提示の仕方を工夫することや、友達と話し合いながら、自分を見つめることで道徳的心情が高まったのではないかと考える。

これらが道徳的実践に今すぐつながることは難しいことだが、小さなことで変化がみられた児童もいる。テスト返しで採点が間違っていた時、今までなら、自分にとって損になると考えていて、言いにこなかった児童が、正直に言いくる姿がみられた。また、自分が悪いことをしてしまったときに、正直に「私がやりました」と言いくるることができた児童もいた。今回の夢との葛藤とは異なるが、自分の損得に関わらず誠実に行動ができたのではないかと思う。

3) まとめ

本研究は、児童の実態に即した資料を選び、また提示方法を工夫すれば、道徳的心情が高まり、道徳的に実践につながるだろうと考え実践した。

本授業を実践し、感情移入できるように葛藤をおこすこと、また、その葛藤をおこすように場面を区切って資料提示をすることで、より自分のこととして考え、深めることができた。また、同じ価値項目を進めることも有効な手立てだと感じた。道徳的心情を高めるためには、児童の実態に即した資料選び、提示方法を工夫することが有効である。また、これからも子どもたちの道徳的実践力を高めていくために、今回の授業だけでなく、継続的に資料を厳選し子どもたちの印象に残る授業をしていくことが大切だと考える。

資料

手品師

あるところに、うではいいのですが、あまり売れない手品師がいました。もちろん、くらし向きは楽ではなく、その日のパンを買うのも、やっとというありさまでした。

(大きな劇場で、はなやかに手品をやりたいな)

いつもそう思うのですが、今のかれにとっては、それは夢でしかありません。それでも、手品師は、いつかは大劇場のステージに立てる日の来るのを願って、うでをみがいていました。

ある日のこと、手品師が町を歩いていますと、小さな男の子が、しょんぼり道にしゃがみこんでいるのに出会いました。

「どうしたんだい。」

手品師は、思わず声をかけました。男の子は、さびしそうな顔で、お父さんが死んだ後、お母さんが働きに出て、ずっと帰って来ないのだと答えました。

「そうかい。それは、かわいそうに。それじゃあおじさんがおもしろいものを見せてあげよう。だから元気を出すんだよ。」

と言って、手品師は、ぼうしの中から色とりどりの美しい花を取り出したり、さらに、ハンカチの中から白いハトを飛び立たせたりしました。男の子の顔は、明るさを取りもどし、すっかり元気になりました。

「おじさん、明日も来てくれる？」

男の子は、大きな目をかがやかせて言いました。

「ああ。来るともさ。」

手品師が答えました。

「きっとだね。きっと来てくれるね。」

「きっとさ。きっと来るよ。」

どうせ、ひまな体、明日も来てやろう。手品師は、そんな気持ちでした。

その日の夜、少しはなれた大きな町に住む仲のよい友人から、手品師に電話がかかってきました。

「おい、いい話があるんだ。今夜すぐ、そっちをたって、ぼくの家に来い。」

「いったい、急にどうしたというんだ。」

「どうしたもこうしたもない。大劇場に出られるチャンスだぞ。」

「えっ、大劇場に？」

「そうとも、二度とないチャンスだ。これをのがしたら、もうチャンスは来ないかもしれないぞ。」

「もう少し、くわしく話してくれないか。」

友人の話によると、今、評判のマジックショーに出演している手品師が急病でたおれ、手術をしなければならなくなっただけで、その人の代わりをさがしているのだということです。

「そこで、ぼくは、きみをすいせんしたというわけさ。」

「あおう、一日のばすわけにはいかないのかい。」

「それはだめだ。手術は今夜なんだ。明日のステージに、あなをあけるわけにはいかない。」

「そうか……。」

手品師は頭の中では、大劇場のはなやかなステージに、スポットライトを浴びて立つ自分のすがたと、さっき会った男の子の顔が、代わる代わる、うかんで消え、消えてはうかんでいきました。

(このチャンスをのがしたら、もう二度と大劇場のステージには立てないかもしれない。しかし、明日は、あの男の子が、ぼくを待っている。)

手品師は、迷いに迷っていました。

図 78 資料表面

「いいね。そっちを今夜たてば、明日の朝には、こっちに着く。待っているよ。」

友人は、もうすっかり決めこんでいるようです。手品師は、受話器を持ちかえると、きっぱり言いました。

「せっかくだけど、明日は行けない。」

「えっどうしてだ。君が、ずっと待ち望んでいた大劇場に出られるというのだ。これをきっかけに、きみの力がみとめられれば、手品師として、売れっ子になれるんだぞ。」

「ぼくには、明日約束したことがあるんだ。」

「そんなに、大切な約束なのか。」

「そうだ。ぼくにとっては、大切な約束なんだ。せっかくの、きみの友情に対して、すまない」と

思うが…。」

「きみが、そんなに言うなら、きっと大切な約束なんだろう。じゃ残念だが……。また会おう。」

翌日、小さな町のかたすみで、たった一人のお客様を前にして、あまり売れない手品師が、次々とすばらしい手品を演じていました。

図 79 資料裏面

実践5 小学3年生

(1) 主題 友情かきまりか

資料名 「おすれもの」

(『モラルジレンマ資料と授業展開 小学校編』荒木紀幸 編著 参考)

内容項目 友情・規則の尊重 2－(3)、4－(1)

(2) 主題・資料への思い

1) ねらいと価値

人は生きていく上で、数多くの様々な選択に迫られる。その選択は、今後の人生に深く影響をおよぼすような大きなものから、日常の何気ない生活の中で生まれる小さいものである。

選択を迫られたとき、どうすればよいのか悩むことも多ければ、後になって、ああしておけばよかった、こうしておけばよかったと思うこともある。考え、悩む時間の長さや、選択の大小の感じ方は、人それぞれではあると思うが、人はそのような経験を積んで成長していくものである。

そして、選択を迫られるのは大人に限ったことではなく、子どもたちも同様である。例えば、友達と放課後に遊ぶ約束をしたが、家でお母さんの手伝いをする約束をしていたことを思い出し、どうしようか悩んだり、あるいは、自分一人しかいない学校の教室で、花瓶を割ってしまい、正直に言おうか言わないかで悩んだりすることである。どうすることが一番よいのか、答えが明確な時もあるが、なかなか思うようにはいかないことも多い。

本授業では、大切にすべき存在である友だちと、守らなければならない学校のルールの間で起こる、学校で毎日過ごしている子どもたちが、今にも直面しそうな心の葛藤を扱う。

2) 資料について

本資料は、主人公であるまさるさんが、友だちのさとしさんと約束と学校のルールの間で悩む姿が描かれている。運動が苦手なまさるさんは、運動が得意なさとしさんから逆上がりなどを教えてもらい、できるようになるなど、まさるさんにとって、さとしさんは大切な友だちである。ある日、次の図工の授業で使いたい道具がないと困っているさとしさんに、「ぼくが持っているから、持ってきてあげるよ。」とまさるさんは約束をする。しかし、図工の授業がある日の登校中、まさるさんは、さとしさんと約束したものを持ってくるのを忘れたことを思い出す。

取りに帰ろうとするが、学校の決まりで忘れ物を取りに帰ってはいけないことになって

おり、先日も担任の先生が、真剣な顔をしてその決まりの話をしたばかりである。そこで、まさるさんは、取りに帰ろうかどうしようか悩むという内容である。この資料を通して、ルールを守ることや、友達同士の欲求を満たすことの難しさに気付いて欲しいと考えた。

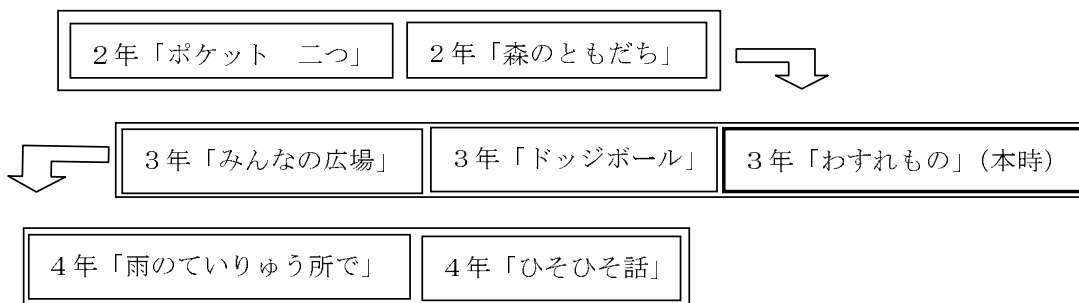
3) 児童の実態

4月当初に考えた本学級の目標は、「友だちたくさん なかよし3の○」である。自分一人ではなく友達と共に生活しているということや、その友達と何事も協力していこうと常日ごろから声をかけて、他とのつながりを意識させている。さらに、より強く他とのつながりを意識し、お互いに認め合っていけるようにと、構成的グループエンカウンターを日ごろから取り入れている。

しかし、本学級の児童の様子を見てみると、些細なことでの言い争いや、自分のわがままを突き通そうとする姿が、時々見られる。それは、友達に対してもルールに対しても同様である。

ある日の給食の準備中にこんなことがあった。配膳をしようと列に並んでいた一人の女の子が、列から抜けて他の仕事を手伝った。それを見ていた別の女の子が、「ここに入っていいよ。」と列に入れてあげたが、並んでいた他の子が、「横入りはするいぞ。」といい、喧嘩になってしまったのである。手伝いをしていて列を抜けた子を入れてあげたい気持ちも分かるし、横入りはだめだという気持ちも分かる。このことから、本授業を通して、友達を大切にすることやルールを守ることの大切さについて考えて欲しいと考えた。

4) 関連教材



(3) ねらいにせまるための具体的な手立てと工夫

1) 資料選び

上記の児童の実態であげたように、友達のことを思って行動するのか、またはルールを守るのかで意見が対立し、喧嘩になることがある。その他にも、状況やその行動に伴う理由は様々だが、お腹が痛くてトイレに行っていて授業開始時間より遅れて教室に入ってきた子に対して、「お腹が痛くてトイレに行っていたのならしょうがない。大丈夫？」という子や、「遅れてくるなんてだめだぞ。早めにトイレに行っておけよ。」という子がいた。こういった場面が、日ごろ多々ある。状況は様々であり、例にあげたトイレに行っていた子のようにお腹が痛かったなど、理由も様々である。理由をしっかり聞けば「早めにトイレに行っておけよ。」と言った子たちの考えも変わったのかもしれないが、理由を聞こうとしない子もいる。また、理由があればルールなんて守らなくて良いと考えることも危険であ

るということを踏まえて、資料選びをした。実際に児童に普段の生活の中で起こりうる身近な内容の資料を扱うことで、より自分のこととして考えていけるのではないかと考える。

また、授業の実施時期については、4月からある程度の時間がたったころを、本資料を扱うベストな時期だと考えた。4月の段階では、いくら1・2年の2年間を同じ学年で過ごしてきたとはいえ、互いに名前しか知らない、あるいは名前さえうろ覚えの児童もいる。それよりも、ある程度互いのことを知り、特に仲の良い友達が増え、つながりがより強くなったころ、また学級や学校のルールがしっかり頭に入ってきたころの方が、友達のことを考えて行動するのか、ルールを第一として行動するのか、より葛藤が大きくなると考えたからである。

その大きな葛藤の末に出した互いの考えを聞き合うことで、自分の考えを見直し、より深めていくことができるのではないだろうか。

2) 提示方法

資料を提示する際、児童を一カ所に集めて、紙芝居方式で資料を提示する。紙芝居といっても、昔話などでよくあるものではなく、ホワイトボードを使用し、そのホワイトボードに登場人物やものを、貼ったりはがしたりを繰り返すことで、場面を変えていく方法である。また、そこで使用した登場人物やものは、後に黒板に貼ったり、役割演技の際の小道具としても使える。

これから何が始まるのだろうかとか児童の興味をひいたり、視覚的に見ることができるようにしたりすることで、児童の関心を引きつけ、思っていることや考えを引き出していけるのではないかと考えた。

(4) 本時の学習

| | |
|--|---|
| 子どもに身につけてほしい力や態度（子どものすがたをとらえて） | |
| ○ 友達を思いやり、協力して生活しようとする態度。 ○ 自分の考えや思いを言葉にして相手に伝える力。 ○ 仲間とのコミュニケーションを大切にし、互いに高め合おうとする態度。 | |
| 主題の目標 | ○ 友達を大切にすることや、ルールを守ることの大切さについて考える。 ○ ルールを守ることの限界や、仲間同士の欲求を満たすことの困難さに気付くことができる。 |

1) 目標

- ・ 友達を大切にし、協力して生活しようとする気持ちをもつことができる。
- ・ 自分の考えをもとに、友達と役割演技をすることによって様々な考えにふれることができる。

2) 準備

教師・・・学び時計、ワークシート、ホワイトボード、イラスト

児童・・・筆記用具、赤白帽子

3) 学習過程

| 段階 分 | 学習活動 | 教師の支援と留意点 | 評価（評価方法） |
|------------|--|---|---|
| つかむ 5 | 1 忘れ物をして困ったことを発表する。 <input type="checkbox"/> | ○ 学校生活を振り返り、忘れ物について考えることを知らせる。 | |
| | 2 「わすれもの」の紙芝居を見る。 <input type="checkbox"/> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">自分がまさるさんならどうするでしょう</div> | ○ より近くに友達存在を感じ、また紙芝居が見やすくなるよう子どもたちを一 | |
| | 3 まさるさんの立場になって考えワークシートに記入する。 <input type="checkbox"/> | ○ 後に、自分の考えをもとに役割演技をすることを伝え、理由までしっかり書くように促す。 | |
| とりくむ 35 | 4 ペアでまさるさん役と友達役になって役割演技をする。 <input type="checkbox"/> → <input type="checkbox"/> 【伝え合う力】 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">赤白帽 取りに偏る（赤）偏らない（白） 決められない（なし）</div> | ○ それぞれの考えに応じて赤白帽をかぶるように伝える。 ○ 教師が見本を見せることで、取り組みやすいようにする。 ○ 隣り同士のペア活動をした後、自由にペアをつかって活動することと帽子の色を見て、自分と違う考えの人とも交流するよう伝える。 ○ 考えの変わった人は、帽子の色を変えるように伝える。 ○ 帽子の色を見て、考えに偏りのないよう指名する。 | ○ 自分の思いを理由もつけて友達に伝えることができたか。 (活動の様子) |
| | 5 再び考え、ワークシートに記入する。 <input type="checkbox"/> | ○ 考えの変わった人は、帽子の色を変えるように伝える。 | |
| | 6 自分の考えを理由もつけて発表する。 <input type="checkbox"/> | ○ 帽子の色を見て、考えに偏りのないよう指名する。 | |
| まとめる 5 | 7 感想を書く。 <input type="checkbox"/> | ○ 友達の多様な考えを聞いて感じたことや、自分の考えの変化について書くように伝える。 | ○ 感想が書けたか。 (ワークシート) |

5) 評価

- ・ まさるさんの気持ちを考えて、友達と協力して生活しようとする心情を高めることができたか。

(5) 考察

1) 本時の授業について

本時では、資料「わすれもの」を通して、子どもたちにルールを守ることや、友達同士の欲求を満たすことの難しさに気づき、今後の考えや行動について考えるきっかけとなっ

てほしいと願った。そのための手立てとして、「(3)ねらいにせまるための具体的な手立てとその工夫」であげた3つのポイントについて考察をしていく。

① 資料選び

資料「わすれもの」の内容は、子どもたちが今にも体験しそうな、あるいはすでに経験したことがあるようなものである。また、学級の生活の中でも、友達を思って行動するルールをしっかりと守るのか実際に悩む場面があったことでもあり、より身近なこととして考えることができたようだ。それにより、子どもたちは、物語の主人公に自分自身を投影しやすかったのではないかと考える。

② 提示方法

児童を一カ所に集めて、紙芝居方式で資料を提示した。見慣れた紙芝居とは違い、ホワイトボードに登場人物やもののイラストを貼ったりはがしたりを繰り返して、場面を変えながら話を進めることで、児童は、「次に何がでてくのだろうか?」、「どうなっていくのだろうか?」と興味津々に見ていた。また、そこで使用したイラストは、常に黒板に掲示し、視覚的に物語の内容を思い返すことができるようにし、役割演技をする際には、登場人物のイラストをお面の代わりに使用した。友達と近い距離で話を聞くことで、ともに友達との関わりについて考えていくのだという意識をもった。また、イラストで視覚的に捉えたり、お面として使用したりすることで、役割演技の際、児童は役になりきって演技していた。そこから、児童の興味を引くことで、思っていることや考えていることを引き出したのではないかと考える。また、導入で、忘れ物をしたことがあるかないか、また忘れ物をして困ったことがないかを児童に聞いたところ、多くの意見が出た。その多くが、授業で使用するもの、例えば体操服やコンパスなどを忘れてしまい困ったというものだった。中には、今回使用した資料と同じように、図工の授業で使用する材料を忘れてしまい、困ったという意見も出た。自分の経験を思い出すことも、資料を身近に感じ、より自分のこととして考えるきっかけとなったのではないかと考える。

2) 児童の変容

学級が始まった4月の段階ではなく、ある程度時間が経ち、児童同士が互いのことを知り、特に仲のよい友達が増え、つながりが強くなったところがよいと判断し、今回の授業を11月に行った。

資料「わすれもの」に登場する主人公まさるさんとその友達のさとしさんは、それぞれに得意なものがあり、それを相手に教えてあげるなどして、互いに大切な友達だと思っている。本学級の児童も、まさるさんを自分に置きかえて考えたとき、「仲の良い友達である、同じ学級のあの子と約束をしていたらどうしよう。」と考えていた。それに加え、4月当初よりもルールについてももしっかり理解し、守らなくてははいけないという思いが強いため、子どもたちは、友だちとルールの間で大きく葛藤した。

授業の中で、ワークシートを活用し、自分の考えを書くよう指示した。資料の内容を聞いた直後の自分の考えを書くことと、考えを学級の友達と交流し合った後にもう一度自分の考えを書くことによって、授業内での自分の考えの変容が分かりやすいようにした。さらに、選択した答えだけではなく、その選択をした理由も書くよう指示した。

ワークシートを見ると、児童はしっかり理由を書いており、再度考え直した際には、最初に考えた意見を変える子もいた。子どもたちなりに葛藤し、一生懸命考えた結果なのではないだろうか。

そして、そのワークシートを詳しく見てみると、「自分がまさるさんだったらどうしますか？」という問いに対して、「忘れものを取りに帰る」と答えた子が11人、「取りに帰らない」と答えた子が19人いた。(本学級30名)「取りに帰る」「取りに帰らない」と答えた子の理由は、以下の表にあるものであった。(一部の理由)

| 選んだ答え | 理由 |
|---------|-------------------------------------|
| 取りに帰る | 大切な友だちとの約束はやぶれないから。 |
| | 自分も約束をやぶられたらいやだから。 |
| | 約束したことだし、さとしくんをがっかりさせたくないから。 |
| | さとしくんが困るし、守れないものもあるけど、親友だから。 |
| | 友だちじゃなくなるのも遊んでもらえなくなるのがいやだから。 |
| | 自分が先生に怒られたとしても、さとしくんは図工で楽しくできるから。 |
| 取りに帰らない | さとしくんは悲しむだろうけど、ちゃんと謝れば分かってくれると思うから。 |
| | 学校のルールは守らなくてはいけないから。 |
| | 自分がルールをやぶってしまうと、もしかしたらさとしくんも怒られるから。 |
| | もし取りに帰って車にでもひかれたら困るから。 |
| | さとしさんが自分で集めないのが悪いから。 |
| | また次の時に持ってきてあげればいから。 |

表から分かるように、理由は様々である。「取りに帰る」と答えた子の理由の中には、「友達ではなくなるから」や「遊んでもらえなくなるのが嫌だから」と自分のことを主に考えたものだが、「さとしくんが困るから」や「自分は先生に怒られても、さとしくんを悲しませたくないから」、「親友だから」などと、自分のことだけではなく相手のことを考えているものもある。

「取りに帰らない」と答えた子の理由の中にも、「自分で集めないのが悪いから」などのように相手がどう思うか考えていないものや、「ちゃんと話せば分かってくれる」や「自分がルールをやぶると、さとしくんまで怒られるから」と相手のことも考えているものもある。

そして、友達と考えを交流(役割演技)した後に、もう一度考えた結果、「取りに帰る」と答えた子は15人、「取りに帰らない」と答えた子は14人、「どちらとも言えない」と答えた子が1人となった。最初に考えたものから、4人の子が「取りに帰らない」から「取りに帰る」の考えに変わった。もちろん「取りに帰る」「取りに帰らない」の考えは変わら

ないが、その理由が変わった子も、数多くいた。

自分のことしか考えずに出した答え、あるいは相手のことも考えて出した答えなど様々だが、理由をしっかりとっていることや、考えに変化があった子がいるということから、児童は、自分なりに友情とルールの間で葛藤し、その葛藤の末出した考えを友達と伝え合うことによって、より自分を見つめ直し考えを深めることができたのではないかと考える。

3) まとめ

実は、今回の授業を行った5カ月ほど前に、同じ価値を扱った授業をしている。資料の内容は、今回の資料「わすれもの」に似ていて、主人公が紙ひこうき大会に出場する。ここではルールで一人二枚の折り紙が配られ、その折り紙を折ってひこうきをつくるのである。しかし、一枚でとびきりの紙ひこうきができた主人公は、折り紙をなくしてしまった友達にあげるのか、それとも一人二枚というルールをしっかりと守るのかどうしようか悩むという話である。「あげる」と答えた子は21人、「あげない」と答えた子は9人であった。「友達だから」「困っているから」という理由で「あげる」を選んだ子が多く、偏りが出た。その後、今回と同じように役割演技を通して友達と考えを交流した後、もう一度考え直した結果、「あげる」は17人、「あげない」は12人、「その他どうするかわからない」が1人となった。

友達と自分の考えを交流した結果、考えが変化した子が数多く見られたが、さらに、前回は偏りが出たものが、今回の授業では、友達よりルールを守ると答えた子が多かったことから、授業を通して自分の考えを見つめ直し、より深く考えることができたのではないかと考える。しかし、「取りに帰る」「取りに帰らない」、「あげる」「あげない」のように答えではなく、それを選んだ理由に注目すると、自分のことしか考えていないような自分本位のものが多いのも確かである。ここでの道徳的価値の高い理由は、友達のことと学校のルールの両方のことを考えているからではないだろうか。友達のことを考えて「取りに帰る」にしても、「もう遊んでもらえなくなるから。」といった理由ではなく、友達のことや学校のルールのことを考えた理由、例えば「自分が約束を破られたら嫌だし、友達が困ってしまうから。」や「先生に事情を話していけば大丈夫だと思うから。」などである。また、学校のルールを守り「取りに帰らない」にしても、「自分が怒られるから。」といった理由ではなく、「友達だけ怒られるのはだめだから、友達と一緒に先生に事情を話す。」などの理由である。一回限りの授業ではなく、日常生活の中で、あるいは引き続き授業を行っていくことで、よりたくさんの方の考えに触れ、そこで自分で考えたことや思ったこと、聞いたことなどが将来大人になったときの財産になって欲しいと考える。

資料

わすれもの

まさるさんは、運動が苦手でした。でも友達のとしさんから、ドッジボールのとり方や逆上がりを教えてもらって、やっとなできるようになりました。だからまさるさんは、としさんをとっても大切な友達だと思っていました。

まさるさんが得意なのは、工作です。来週の図工の時間は、動くおもちゃを作ることになって

いるので、まさるさんはみんながびっくりするような自動車を作ってやろうとはりきっていました。

まさるさんは、「さとしさんは何を作るんだろう。」と思って、聞いたところ、さとしさんはちょっと困った顔をして、「ぼく、船を作りたいんだけど、使おうと思っている発泡スチロールがなくて困っているんだ。」と言いました。まさるさんは、家にちょうどいい発泡スチロールがあったのを思い出して、「ぼくのうちにあるよ！だから持ってきてあげるよ。」と言いました。さとしさんは、それをいてほっとしている様子でした。

「ああ、よかった。お願い、頼んだよ。」と嬉しそうに言いました。

ニコニコしているさとしさんの顔を見て、まさるさんも何となくいい気分になりました。

今日は、楽しみにしていた図工の日です。まさるさんははりきって学校に出かけました。校門をくぐり、下駄箱に向かおうとした時、「まさるさん、おはよう。」と、上から大きな声が聞こえました。見上げると、廊下の窓から、さとしさんが手をふっています。

まさるさんも「おはよう。」と言おうとした時、はっとしました。さとしさんと約束していた発泡スチロールを忘れてきてしまったのです。別の袋に入れて、机の横に置いたので、つい……。まさるさんは家に電話をして、お母さんに持って来てもらおうと思いましたが、お母さんはもう仕事に出かけている時間です。まさるさんは、さとしさんががっかりすると思うと、たまらなくなりました。走って帰れば何とか朝の会には間に合うかもしれない、取りに帰ろうと思い、もどりかけたその時、学校のきまりを思い出したのです。

まさるさんの学校では、忘れものを取りに帰ってはいけないことになっています。この前も、5年生の男の子が忘れ物と取りに帰って、車にひかれそうにねりました。さいわい怪我はしませんでした。先生はその話をした時に、

「もう一度約束です。忘れものをして、取りに帰ってはいけません。」と、きびしい顔をしながら言いました。まさるさんは、その先生の話思い出しながら、どうしようと思いました。

図 80 資料「わすれもの」

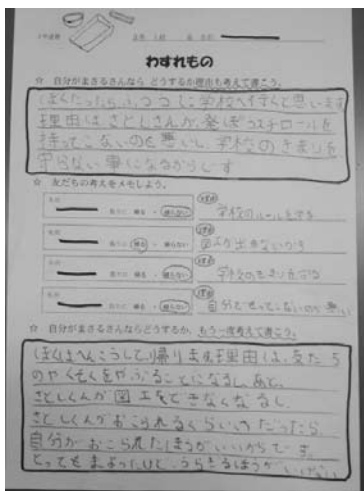


図 81 A児のワークシート

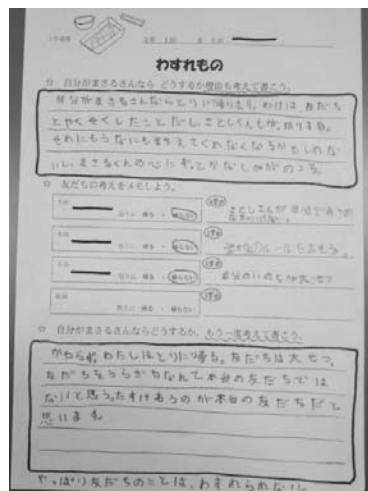


図 82 B児のワークシート

実践6 小学5年生

(1) 主題 相手のことを思いやる

資料名 「すれちがい」 (出典「明るい心 6年」)

内容項目 寛容・謙虚 2-(4)

(2) 主題・資料への思い

1) ねらいと価値

5、6年生における内容項目2-(4)は「謙虚な心もち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にする」となっている。高学年になると児童をとりまく学校生活における人間関係は大きく変容し人間関係の幅も広がっていく。小さな共同体から大きな共同体に移行するにあたっては、他者に対する寛容さや謙虚さが不可欠であるが、この時期は自己本位な言動に陥りやすく、自分と異質なものを受け入れることがまだ十分でない。自分自身にも不十分な部分があったり、失敗や過ちをおかしてしまうことがあったりすることを自覚し、相手の立場になって物事を考え、他者を理解したり受容したりすることの大切さを考えさせたい。

2) 資料について

本資料は、よし子とえり子の二人が、言葉のすれちがいによって仲違いをしてしまったことをそれぞれの立場で日記に記したものである。

よし子とえり子は、一緒にピアノのおけいこに行く約束をした。しかし、えり子は、母に急なお使いを頼まれて、約束の場所に時間通りに行くことができなかった。えり子の事情も聞かずに、よし子はえり子に腹を立ててしまう。また、えり子もよし子が理由に耳を傾けてくれないと、苛立ちをみせる。結果的に二人は、お互いに「もうつきあいたくない」と思ってしまう。

日常によくありがちな題材で共感が得られやすく、ねらいとする価値に迫るにあたって適切な資料といえる。

3) 児童の実態

本学級は、男子13名、女子13名の26名のクラスである。集団全体は、比較的小となしく落ち着いた雰囲気がある。男子に比べて女子は心身ともに成長の早い児童が多く、思春期特有の人間関係の悩みを持つ割合が高い(定期教育相談アンケートによる)。男子はギャングエイジから脱脚して、集団全体を見渡して声かけができるリーダー格が2～3名いるが、多くは人間関係が閉鎖的で、小集団が複数存在する形である。女子は前述のように成長が早い児童が多く、男子に比べて閉鎖性は低い。ゆるやかなグループはあるものの、誰がグループに入ってもそれを受け入れたり、自分とは異質なタイプが入ってきても排除したり拒絶したりすることはほとんどみられない。一方で、自分の思ったことを友達であってもなかなか言えなかったり、リーダー格の児童に流されたり依存したりしがちな面がある。

集団生活力を養うためには、自我を抑え他者を受容するスキルが、高学年では必要とな

ってくる。自己に謙虚で他者を理解することで、より良い学級集団が形成されるように、この資料を活用していきたい。

4) 関連教材

| |
|-------------------------------------|
| 道徳 「わざとじゃないよ」(5年) 「深雪ちゃんのこと」(中1) |
|-------------------------------------|

(3) わらいにせまるための具体的な手立て

1) 資料選び

5年生は、「個」中心の思考から、「集団」を意識した思考に成長していく時期である。学級集団が成熟していく後半の過程(後期)で、互いを思いやる寛容さを一段階レベルアップすることをねらいとして、本資料を選んだ。本資料は、日常的にありそうなささいな出来事で話が進行していき、児童は感情移入しやすいと考える。

2) 提示方法

先入観をもってしまうと「模範解答」を出したがる児童もいるため、敢えてテーマを伝えずに、「よし子」の日記部分を配布する。話の内容を正確に把握するために、時系列を分かるように表形式にして、行動を書き込むようにする。その後、自分が「よし子」の立場ならどう思うか感想を書かせ、素直な気持ちを引き出そうと考えた。

本時は、児童個々の心と向き合う活動を中心に据えるため、基本的にグループ活動は行わず、時系列の表で内容に間違いがないか、すれ違いの原因がどこにあるかなど、客観的な内容を確認するペア活動にとどめたい。

展開においては、答えが画一的にならないように、話の続きに条件をつけない。よし子とえり子の仲直りを期待したいが、必ずしも結果がそうならない場合は、どのようにしたら仲直りができるか追加発問して対応する。

授業の前後で変わった自分自身の気持ちを振り返るだけでなく、仲間の気持ちの変化も共有できるように、ワークシートを教室後方に掲示する。「相手を理解する」といったテーマの詩を紹介し、教室に掲示することで、仲間を理解する意識を継続させたい(図83)。



図 83 相手を理解するテーマの詩

(4) 本時の学習

1) 目標

- 相手の気持ちや考えを知り、それを大切にしていこうとする広い心を育てる。

2) 準備

教師・・・ワークシート・詩の掲示物

児童・・・筆記用具

3) 学習過程

| 主な学習活動と予想される児童の反応 | 形態 | 指導・支援の留意点 |
|---|----|---|
| 1 よし子の日記を読み、時系列に沿って行動と気持ちを表にする。 | 全体 | ○ 行動と気持ちを区別するのが苦手な児童には、まず行動だけを表に記入するよう指示する。 |
| 2 よし子の立場に立って、えり子への気持ちを書く。 ・もう友達でいたくない ・約束を破るなんてひどい | 個 | ○ 発問の際に「よし子役になりきって」など、よし子に共感できるようにする。 |
| 相手のことを受け入れる心をもとう | | |
| 3 えり子の日記を読み、えり子の立場に立って気持ちを書く。 ・約束を守れなくてごめんなさい ・なんで理由を聞いてくれないの ・私にだって理由はあるのに | 個 | ○ えり子の資料はよし子の資料と色を変えて区別する。 ○ よし子が理由も聞かず、理解しようとしなない悔しさを共感できるようにする。 |
| 4 えり子の行動と気持ちを時系列で表に書き足す。 | 個 | ○ よし子とえり子の行動と気持ちを並列で書くことで、すれ違いの発端を探し出せるようにする。 |
| 5 表を見ながら、よし子とえり子とのすれ違いの原因はどこかを考える。 ・約束がはっきりしていない部分 ・電話をかけつづけなかったから ・変更するときの手段を決めていなかったから | ペア | ○ お互いに非があることに気づかせつつ、一方的な態度をとったよし子に非が多いことを意識させる。 |
| 6 この後どうなっていくのか自分でお話の続きを考える。 ・よし子が謝って仲直りする ・お互い謝って仲直りする ・仲直りする | 個 | ○ どちらにも足りなかった気持ちとは何か、という発展発問をする ○ ただ「仲直り」だけではなく、できるだけ具体的な方法を考えるように指示する |

| | | |
|--------------------------------|----|--|
| 7 きむの詩を読み相手を理解すること（寛容）について考える。 | 全体 | ○ 自分を理解してもらうことよりも相手を理解することで人間関係がより円滑になることを意識させる。 |
|--------------------------------|----|--|

（5）考察

1）本時の授業について

① 資料選び

こちらの意図したとおり、感情移入をすることができた児童が多く見られた。実際に自分がその立場だったらどういう行動をとるかという視点で、模範的解答ではなく率直な意見が多数を占めた。

高尚な遠い世界の話ではなく、今まで経験したかもしれない「はっ」とする機会を作れた点では、成功したといえる。

発達段階に合わせた内容も、特に成長の早い女子に効果が見られたと思う。

② 提示方法

テーマを伝えていないものの、本時の前に学活で伝言ゲームなどを実施して、言語コミュニケーションの難しさを体験していたため、なんとなく学活とのつながりを感じている児童も見られた。よし子の気持ちになって感想を書く部分は、かなり実生活に近い感想を引き出すことができた。

時系列ですれ違いを確認していく作業では、行動を見落とす部分があるなど、本文に注目して書き出すことが難しい児童もいた。国語の授業での精読が不足していると感じた。時系列で行動を洗い出すことによって、すれ違いの原因がはっきりとしたので、児童が自身の生活に重ね合わせて「こういうことを注意しよう」という意識も見られた。

話の続きを書くという方法は、国語の物語文で使っているのだから、比較的慣れた様子で続きを書いていたが、「問題解決」という意識付けが不十分で発問の正確さとの確かさが課題といえる。

終末の工夫における詩は、若者に人気がある作品を使用することで、関心を高くもつことができた。

2）児童の変容

冬休みを挟んで学校生活にブランクがあったので、1ヵ月経った後の児童の様子には、少し不安があった。休みが明けてから、学活で席替えをしたり、生活班の役割分担を決めたりなど、学級集団での決め事が多くあり、児童の行動観察をするには、好機であったと言える。

自分たちで決め事をする時に、必ずといっていいほど独りよがりな発言をしていたA君は、自重気味に話し合いに参加していた。言葉巧みに自分の都合のいい方向に話を進め、思い通りにならないと攻撃的な発言が多かったが、今回の話し合いでは、協力的とはいえないものの、和を乱すような言動は見られなかった。席替えをする際に「この班で仲間にそっぽを向かれたら自分の居場所がなくなる」といったつぶやきも聴かれた。

思い込みが強く否定的な言葉が多い B 子は、自らの言葉で仲間を拒絶する傾向があり、変容が期待されたが、相変わらずの否定的な発言で、あまり効果が見られなかった。相手を理解することに軸足を置いていたので、理解してもらうために自分が発信する言葉については、あまり効果が見られなかった。

人間関係は自己と他者の双方向のコミュニケーションであり、自らがシャットアウトしてしまうと、「すれちがい」すら起こらないということを痛感した。今後の展開には、さらなる工夫が必要である。

3) まとめ

道徳は、答えがひとつではなく、学級の数分の答えがあると考えます。子どもたちが「個」から「集団」に世界を広げていく中で様々な心の葛藤があったり、時には傷つけたり傷つけられたりすることがあるだろう。そうした場面に出くわした時に、本授業を思い出してもらえよう、余韻をできるだけ継続する様々な工夫をしたり、他の資料を使用したりして、同じ主題で児童の「はっ」とする気持ちに迫っていききたい。道徳部会でたくさんのヒントを得ることができたので、他学年や中学校での道徳につなげていけるような授業展開をしていけるよう、今後も励みたい。

資料

| | |
|--|--|
| <p>すれちがい (一) 瓶田 よし子</p> <p>今日は午前中で授業が終わり、学校を十二時ごろに出た。 えり子さんへ 「ピアノのおひげにいいしょに行こうよ。四時と五時のどっちにする？ わたし、お母さんが出かけるかもしれないから、いっしょを聞いて電話するわ。いっしょの広場で遊んでから行くわね」 「ええ、いいわよ。」 「ええ、いいわよ。」 と、約束しながら、家に帰ってきた。 すぐお母さんはお風呂に入って、二階の部屋でピアノの練習をした。 二時になったので十へあり、母に、えり子さんから電話があったかどうかを聞いた。母は、どなり少し行っていたが、なかつたよと答えた。 少し待っていたが、どうも落ち着かないので、こちらから電話をかけた。 えり子さんのお母さんが電話口に出られて 「今ちよっと、スーパーにお使いに行っているの。すぐ帰ると思うわよ」と言われた。時計を見ると二時半だった。三十分もあればよいと思いつて、 「三時になったら、いっしょの広場で待っているから、伝えておいてくださいな」 と、こどろけをしたのだ。 三時に、自転車でお母さんの広場に行き、五分、十分、三十分近くも待った。はるか立ってきて、「一人でピアノのけいこはくんとした。 四時すれすれころ、えり子さんがやってきました。 「めんね、あ。・・・」 と、言いわけを始められた。わたしは 「なによ、約束を破っておいて、今なの・・・」 と心の中を思っ、知らん顔をしていた。もう、えり子さんはほじき合いたくなくなつた。</p> | <p>(二) 中村 えり子</p> <p>学校の帰り道で、よし子さんとピアノのけいこに行き、約束をした。時間は、わたしのほうで電話することにした。 母は電話を切っているところへ、久しぶりに連く親せきのおじさんたちがたすねてくれた。母は、「えり子。急いでスーパーへ行って、お肉とたまご、夏ミカンを買ってきてよ。」 そのとき、ピアノのけいこは五時にしようと思つて、よし子さんに電話をかけた。だれも出なかつた。急いでいるので、後でまた電話をかけるもどにして外へ飛び出した。 スーパーに入ったら、とても混雑していた。レジの前もいっぱい。十五、六人ぐらいいんどんでいたので、まわった。 「まよったなあ。早く電話しなさいいけいけいけど、よけいおそくなあ。」 「やうやう、お金もはらって外へ出て、あわてて家に帰ると、母が。」 「おそかったわね。よし子さんか電話があったら、いっしょの広場で三時に待っているよ。急いで行きなさい。」 「わあ、たいへん。スーパーがこんでいて、なかなか車がこないんだもの。」 と、言いつつ、表に飛び出し、松並木の道を走って広場に向かった。 広場には、よし子さんのすがたはなかった。 「かっ！自分に三時なんて決めて、こどろけもあるのに・・・。」 ピアノの先生の家でよし子さんにあったので、話しかけたら、つんど横を向いてしまった。 「わたしは、いっしょのわけがあるのよ。聞いてくれたらいいのに・・・。」 もう、よし子さんといっしょに、ピアノのけいこに行きたくないと思つた。</p> |
|--|--|

図 84 資料「すれちがい」

実践 7 中学 2 年生

(1) 主題 感謝の気持ちを伝えよう

資料名 「心と心のハーモニー」(自作資料)
内容項目 集団生活の向上、役割と責任 4-(4)

(2) 主題・資料への思い

1) わらいと価値

自分がクラスの一員としての自覚をもち、互いに励まし合い、高め合って学校生活をおくろうとする心を育てる。

2) 資料について

生徒の実態に合わせて資料を作成し、どこを中心発問にするか、道徳的価値をどの場面にもっていくか考え作成した。

3) 児童の実態

本学級はすでにある程度男女とも交友関係は築かれており、休み時間に生徒同士、教室内で仲良くしていることも多い。しかし、文化のつどいででの合唱練習で、ささいなことで揉め事が起きてしまうこともあった。

4) 関連教材

| |
|------------------------------------|
| 道徳 「わたしは言った」(中1) 「明かりの下の燭台」(中3) |
|------------------------------------|

(3) わらいにせまるための具体的な手立てと工夫

1) 資料選び

文化のつどいででの合唱など、学級での団結やクラスメートとの協力が必要な行事が多いときに、学級が一致団結する素晴らしさや、そこから生まれる互いへの友情や充実感について考えさせ、互いに積極的に関わろうとする心情を育てる。

2) 提示方法

文化のつどいにむけての合唱練習の時期に合わせて、学級の体育大会の取り組みで頑張っている様子や、手作りした学級旗の写真を入れたワークシートを工夫して、学級のために、自分は今後どうしていくべきかを意欲的に考えられるようにした。また、このワークシートの裏面に、事前アンケート結果を印刷しておき、以前の結果と今の自分との変容に、自分自身で気付くことができるように配慮した。

(4) 本時の学習

1) 目標

互いに励まし合い、高めていこうとする心を育てる。

2) 準備

自作資料、ワークシート

3) 学習過程

 学習形態：個別→ 個 ペア→ ペ グループ→ グ 一斉→ 斉 全体→ 全

| 段階 | 学 習 活 動 | 教師の支援・指導上の留意点 | 評 価 |
|----|---------|---------------|-----|
|----|---------|---------------|-----|

| | | | |
|---------------------------------|---|--|--|
| つ か む 10 分 | 1 あいさつをする。 [齊] 2 体育祭でがんばったことを 考え、話し合う。 [グ] 3 本時の目標を知る。 [齊] <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 全員で何事にも力を合わせて取り組もう。 </div> | <ul style="list-style-type: none"> • 体育祭を振り返り、学級のよさについて目を向けさせ、ねらいとする価値への方向付けをする。 | 積極的に話し合 いに参加できたか (観察) |
| 取 り 組 む 15 分 | 4 資料を読んで話し合う。 [個→グ] | <ul style="list-style-type: none"> • 教師から2つの発問をする。 • 美咲と和也は合唱コンクールをどう考えているのだろう。人物の表面的な行為ではなく、クラスに対する思いやスタンスの違いに気付かせていく。 • 由佳を突き動かしているものは何かを用意し、さらに話し合いを活発にするとともに、個人的な頑張りではなく、学級や友達への思いに気付かせていく。 | 積極的に話し合 いに参加できたか (観察) |
| 深 め る 15 分 | 5 今まで学級のために何をしてきたか、これからどんなクラスにしていきたいかを考え、ワークシートにまとめて発表する。 <ul style="list-style-type: none"> • 黒板に書いた答えについて、説明する。 [齊] | <ul style="list-style-type: none"> • ワークシートにまとめる時間をしっかり確保する。書き終えた生徒には、自己の成長に気付くことができるように、ワークシート裏面の各自の事前アンケート結果を確認するよう指示する。 | 合唱練習の取組 に協力していこう とする意欲はもて たか。 (ワークシート) |
| 振 り 返 る 3 分 | 6 教師の話を聞く。 [齊] | <ul style="list-style-type: none"> • 今日の自分の活動を振り返りさせ学習カードに記入させるように指示する。 | 本時の取り組み を通して、学級の一 員として、学級を よりよい集団にし ていこうとする態 度が見られたか。 (観察) |

4) 評価

- 授業に積極的に参加することができたか。(観察・発言)
- 学級の一員として互いを尊重し、協力する気持ちを高めることができたか。
(ワークシート・観察)

(5) 考察

1) 本時の授業について

① 資料選び

文化のつどいでの合唱など、学級での団結やクラスメートのとの協力が必要な行事の多いときに、学級が一致団結する素晴らしさや、そこから生まれる互いへの友情や充実感について考えさせ、互いに積極的に関わろうとする心情を育てるために、この資料を自作した。

② 提示方法

文化のつどいにむけての合唱練習の時期に合わせて、学級の体育大会の取り組みで頑張っている様子や手作りした学級旗の写真を入れたワークシートを工夫して、学級のために自分は今後どうしていくべきかを意欲的に考えられるようにした。また、このワークシートの裏面に、事前アンケート結果を印刷しておき、以前の結果と今の自分との変容に自分自身で気付くことができるように配慮した。

2) 生徒の変容

(生徒)「今までただ何も考えず合唱をしていたが、全員で団結して取り組みたい」「このクラスでこのメンバーで合唱をできる時間を大切にしたい」等のコメントがあった。

3) まとめ

文化のつどいでの合唱にむけての練習に積極的に取り組み、本番を終え、このクラスが大好きだという生徒の発言や、合唱コンクールについて団結し、いい雰囲気を取り組んだという声が、生徒から度々あった。

そこで、合唱に興味を示さなかった生徒が、積極的に練習参加への声かけを行うようなことも見られるようになった。また現在では2月に行われる生徒会企画の「城中生の主張」に、クラス全員で参加する予定であり、その練習に積極的に取り組んでいる。

資料

「だめだめ、全然合っていない！」美咲の声が教室に響き渡った。

それは11月に行われる、合唱コンクールに向けた練習中の出来事だった。指揮者の美咲は、絶対に最優秀賞を取りたいと考えていた。

「ちゃんと歌ってるじゃないか。」

歌の苦手な和也の声が入った。

「音程が外れてるでしょ。ふざけないでよ！」

いらいらした美咲は、また大声を出した。」

「美咲、言い過ぎじゃない？」

伴奏者の由佳の言葉も耳に入らなかった。

確かに合唱はみんなが一つにならなければいいものではない。だが、やる気のないクラス



メートを見ると、いっそ歌が上手な人たちだけでできないかと考えてしまうのだった。

ところが、9月下旬、由佳が突然重い病気にかかり、手術と苦しい治療が必要になった。担任の田村先生から、由佳は手足が思うように動かせないと聞いて、美咲はショックを受けた。由佳の代わりに伴奏ができるのは、指揮者の美咲だけだった。新しい指揮者には、和也が選ばれた。

新編成での練習が始まった。美咲は気負いすぎてミスを連発した。和也も美咲のようにタイミングのよい指示を出すことはできず、リズムを取るだけで精一杯だった。

「そこで、指示出すんでしょ！」

とうとう我慢できずに、美咲が口を出した。突然の言葉に、

「おまえだって、間違っただけだろ！」

と和也がどなった。美咲は和也をにらんだ。クラスの雰囲気はどんどん悪くなり、合唱の練習どころではなくなっていた。

10月半ば、由佳の面会ができるようになったと聞き、美咲はすぐに病院へ向かった。合唱の練習の様子を伝えることを思うと気が重かった。

病室に入った美咲は、由佳の変わりように驚いた。手術は成功だったが、後遺症が残って痛々しかった。しかし由佳は、大きな手術跡のある頭を隠すために被っていた帽子を取り、

「こんな頭になっちゃったよ。」

と、にっこり笑って見せた。髪は無かった。

ベッドの脇に置かれたスケッチブックを何気なくのぞき込んだ美咲は、息をのんだ。

「下手でしょ。まだ、途中だけだね。」

由佳が笑った。それは、由佳がリハビリを兼ねて書いたクラスメートへの応援メッセージだった。所々読みにくい文字もあったが、由佳が精一杯書いていることは痛いほど伝わってきた。

「合唱コンクールまでに完成させるね。これが、私がみんなのためにできることだから。」

帰り道、美咲は由佳の力強い姿と、あの言葉が頭から離れなかった。

「私がみんなのためにできること。」

翌日、美咲は田村先生の許可を得て、朝の会で由佳の様子をクラスメートに話した。そして、合唱コンクールに向けて、クラスのため、そして病と闘う由佳のため、一人一人がやれることは何か考えようと、真剣に呼びかけた。

美咲は、今まで以上に伴奏の練習に力を入れた。

そして、和也に指揮の仕方をアドバイスするようになった。

最初はとまどっていた和也も、要領がわかってくると持ち前の明るさを発揮して練習を盛り上げるようになっていった。他のクラスメートもパート練習を進んでしたり、お互いにアドバイスしたりする姿がみられるようになった。

放課後、田村先生が和也と美咲に声をかけた。



「3組は、ずいぶんうまくなったな。」
とほめてくれた。和也が、
「みんなの心が一つになってますから！」
と答えた。かたわらで由佳への招待状を書いていた美咲は、和也にVサインを送った。
合唱コンクール当日、由佳が病院から外出許可を得て、久しぶりに教室に戻ってきた。
車椅子に乗った由佳が話し始めた。
「病気のせいで、迷惑をかけました。私も参加できなくて残念です。ステージには上がれないけど、しっかり聴きます。頑張っただね！」
たどたどしいが、力強い言葉だった。
合唱コンクールが始まった。出番を待つ間、由佳からの一人一人へのメッセージを各自が読んだ。心のこもったメッセージだった。読み終えた美咲は、立ち上がってみんなに言った。
「由佳も一緒に頑張ってきたんだ。全員でステージに上がろう。みんな、いいよね。」
みんな力強くうなずいた。拍手がわき起こった。由佳は一瞬とまどったが、笑顔でうなずいた。
3組の出番が来た。和也を始め男子数人で車椅子に乗った由佳をステージに上げた。
合唱が始まった。クラス全員が心一つにして歌っているのを誰もが互いに感じ合っていた。美咲も、隣に座った由佳に励まされ、精一杯ピアノを弾いた。万雷の拍手の中、合唱が終わった。美咲は、自然に涙があふれてきた。
そのとき、
「ありがとう。よかった、このクラスで。」
由佳はそうつぶやいた。

図 85 資料「心と心のハーモニー」(自作資料)

5 成果と課題

主題に沿っており、かつ、子どもの心に迫る効果的な資料や、世の中で起きている旬の話題など、資料内容の吟味を行った。

子どもたちの生活の中で起こりうる問題を扱った資料は、物語の主人公に自分自身を投影しやすく、より身近なこととして考えることができたようだった。実話を元に作られた資料は、現実味を帯び、子どもたちに起こりうる問題としてとらえさせることができた。そこで、主題に沿った資料を選ぶことは、有効な手立てであることが分かった。

教師が子どもの実態を把握し、道徳授業の実施時期の検討を行った。子どもの実態にあわせた主題で道徳授業を行うことは、自分の内面を見つめるきっかけとなり、資料の吟味とともに、実施時期も大切であることが分かった。

道徳の時間において、資料は、道徳の時間の主題を構成する大きな要素の1つである。心に響く「読み物資料」を中心に、計画的、継続的に用いることが大切である。資料が子どもにとってどう受けとめられるかが、道徳の授業の成否に大きくかわる。教師の視点

からの資料分析と、子どもの視点からの資料の受けとめを照らし合わせて、教師が考えてほしいことと、子どもが自ら考えたいと思うことが重なるようにすることが大切だ。そのため、今後も1つの資料について、どう活用できるかを検討し、子どもの実態等に応じて実践時期を考え、弾力的に活用できるようにしていきたい。

提示方法の工夫では、資料を一度に提示する、区切って提示する、順番を入れ替えるなどの資料の扱い方や、プリント配布、拡大提示、読み聞かせなどの資料の見せ方、その他、机の配置、記録・発表方法などの工夫を検討し、実践を行った。

ホワイトボードを活用した資料提示の方法は、児童の興味関心を引き、視覚効果が大きいことが分かった。また、役割演技の際のお面や掲示物としても活用できた。PCやiPadに絵本の挿絵を画像として取り込み、大型テレビなどのモニターに投影し拡大提示する方法で実践を行うこともした。どの子も集中して画面を見ながら話を聞いていたので、資料提示後、すぐに主題に迫る発問をしても内容が理解できていた。大画面の映像で子どもが登場人物の気持ちを感じ取り、心情を深める手助けとなったと考える。これからも、資料の内容把握に、絵本の電子化は効果的であることが分かったので、積極的にとり入れていきたい。

道徳の1時間の授業で子どもの心は変わる。それは、ワークシート活用方法では、個人で書いた後と交流をした後の2回行うことで、考えの変容をワークシートにおいて確認することができた。しかし、その高まった心情を継続的にもち、価値の主體的な自覚のもとに、道徳的实践につなげていくことが、課題であると分かった。

また、子どもたちの道徳的実践意欲の継続を図るために、道徳の時間で使用した掲示物や子どもたちの手紙文や感想文などを掲示した。これにより、子どもたちの実態を教師のみではなく、学級の子どもたち全員が知ることができた。学級掲示の充実を図ることは、子どもたちの道徳的実践力の継続に有効な手段であると分かった。掲示物も教室のみに掲示するだけではなく、他の学年の子どもたちも見るように廊下に掲示し、校内掲示の充実を図ることで、より道徳的実践力が増すのではないだろうか。さらに、道徳の授業時間だけでなく、朝の会と帰りの会の充実を図り、子どもたちの道徳的実践力を高めるようにしたいと考えた。

今回の実践を通して、子どもの実態を把握し、高めたい心情に合う資料を見極め、資料提示を工夫することで、道徳的心情を高められることが分かった。また、1回の実践にとどまらず、繰り返し行ったり、資料を掲示したりすることが、次へのステップ、道徳的実践につながるきっかけとなることも分かった。道徳的実践力は、1回の道徳の授業だけで身につくものではない。それを実践に移していくために、日常生活の中から、客観的に自分を見つめる機会を設け、子どもたちによりよい自分を意識させていきたい。

おわりに

今年度の研究は、小学校・中学校を対象にしたので、人間的にも精神的にも大きな幅の

中での実践例が集められた。研究を進めるにあたって、どのように道徳的価値が高まったかをはかる手立てとして、授業実践前の学級（児童）の様子と、実践後の学級（児童）の様子を対比して、その実践効果をはかることも試みた。その結果、子どもたちに身近な問題を取り上げた資料であったり、教師の実体験などで余韻を残し自分で価値判断できる終末にしたりすることで、児童が主体的に価値の葛藤に取り組み、他との意見の交換により、自ら道徳的価値を高めることにつながる傾向にあることが分かった。しかし道徳的な心情は高まりを見せたが、それが道徳的实践につながるかどうかについては、今回の研究だけでは言い切れない。継続的に良質な道徳の授業を行うことや様々な主題について考えさせるとともに、内面での高まりを具体的に実践するための直接体験の場を多く設定することも必要である。そのためには、道徳を学校教育活動の中心にすえ、全活動の中で捉える必要があると考える。

今後も、子どもたちが主体的に道徳的心情を高め、それが実践につながっていく授業を創造していきたい。

すべての子どもが楽しく、分かる授業を目指して 意欲的に関わり合う授業の工夫

片山 富廣（犬山市立城東小学校）
金原 佑介（犬山市立犬山中学校）
玉置 佑樹（犬山市立城東中学校）
畑中 彩（犬山市立南部中学校）
近藤未弥子（犬山市立南部中学校）
柴田 直子（犬山市立東部中学校）
伊藤 寿啓（犬山市立今井小学校）

はじめに

「学び合い」を軸として、異校種間の先生や、様々な教科でメンバーが構成された部会となった。最初は、まとまるかどうか心配であった。そこで、「私たちが目指す授業とは何か」という共通した話題から、部会の話が広がった。特に若い先生方からは、「盛り上がる授業がしたい」「子どもたちが積極的に意見を言い合う授業がしたい」などという思いが共有された。さらに、目指す授業のベースにある目指す子どもの姿を「すべての子どもが楽しく授業に参加してほしい」また、「すべての子どもが自分なりのペースで学習を理解して学力として身に付けてほしい」という願いから、主題とサブテーマを設定した。

1 研究仮説

研究主題に迫るために、次のように仮説を設定し、研究の方向付けをした。

仮説 1 教師が、教材の提示方法や発問の仕方を工夫すれば、子どもたちは楽しく授業に関わり、学習意欲の向上と学力定着につながるであろう

仮説 2 教師が、的確なテーマを設定すれば、子どもの思考力がまし、子ども同士が関わり合いながら、確かな学力を身に付けていくであろう。

この2つの仮説のもとで、「学び合い」をテーマとして集まった者が、共有することができる研究方法を、「授業方法を互いに発表し合い、学び合う場の明確化」と位置付け、研究を進めることにした。

2 目指す授業スタイル

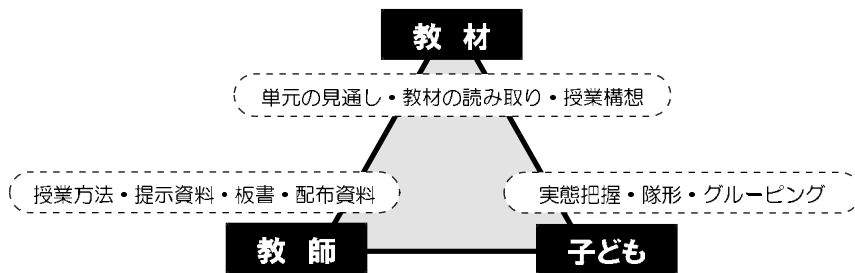
次の5つを「良好な授業のスタイル」と位置付け、授業の基本と捉えた。

- 子どもたちに自由と安心（安堵感）が感じられる
- 授業の中で仲間を大切にしようとしている
- 子どもたちのしゃべり方が安定している
- 指導者に笑顔と振り向かせる人間性が感じられる
- 授業に子どもを飽きさせない工夫がある

3 授業で、子どもの学力を高めるための条件

子どもが学びながら確かな学力を身に付けていくためには、教材と教師と子どもとの3つの立場

が良好で、バランスのとれた関係にしておかなくてはならないと考える。そこで、それぞれの立場で工夫したり、留意しなければならない点を明確にしたりしながら、授業方法を改善に目を向けるよう示唆した。



4 学び合いを成立させるための条件

上の3つの立場から、「学び合う」場面を作り出すための具体的な方法や留意する点を明らかにした。

- ① 教材研究の必要性
 - ・単元の全体計画と身に付けさせたい学力の把握
 - ・葛藤や多様な考えがうみ出される教材と場面の読み取り
 - ・子どもが意欲をもつような教材の場面の選択
 - ・的確な（話し合いが成立する）学習の課題の設定
 - *すべての授業・すべての単元において学び合いが成立するわけではないことの念頭にする。
- ② 教師力（授業力）の必要性
 - ・自分の授業スタイルの確立（教師の持ち味）
 - ・集団指導と個人指導のバランス
 - ・明確な（分かりやすい）指導方法
 - ・提示資料や学習資料（書き込み用にプリント）の工夫
 - *教師が出しゃばらないで、子どもが動く（動きたいと思わせる）ための授業のイメージをもつ。
- ③ 子どもの実態把握の必要性
 - ・その教材に、子どもが興味や意欲があるか。
 - ・学習をするための良好な人間関係か。
 - ・授業の規律（話し合うときのルール）ができているか。
 - ・課題に対応できる子どもの基礎的な学力が身に付いているか。（教材の理解ができているか。）
 - ・グルーピングが的確か。
 - ・話し合いのための隊形が的確か。
- ④ 授業の展開と構成

「一人での学び」→「グループでの交流」→「全体での交流」の授業展開

 - 「一人での学び」
 - ・じっくりと考える時間の保証
 - ・学びたい・知りたいという気持ちにさせる課題の的確さ
 - ・自分で考えをまとめさせたり、意見を言うための準備をさせたりするための教師の準備物
 - 「グループでの交流」
 - ・多様な考えが出されるようなグルーピング
 - ・授業としての仲間を認め合える公正な人間関係
 - ・グループでの役割分担（司会者・意見者・（記録者））
 - ・隊形の工夫
 - ・話し合いが行き詰まったときの教師の出場所。（違う見方、反対の意見の提案）
 - ・考えが出ない子へのアドバイスや示唆
 - 「全体での交流」
 - ・学習規律（話し方・聴き方・質問や意見の切り返し）が第一（これが学び合いの基本）
 - ・教師の切り返しの大切さ（方向性の示唆）

- ・教師のまとめ方、褒め言葉（次の授業への意欲に）
- ・個人の評価（光った意見、発言の仕方の工夫、仲間の考えを変えた発言等）
- ・全体の評価（聴き方・伝え方のつながり、話し合いの方向性等）

5 研究の実際

(1)どの生徒も周りに関わり合うことができる授業作りを目指して(中学校1年 社会)

1 単元 古代までの日本

2 本時の目標

- (1) ア 聖徳太子の政策が、天皇中心の国づくりを目指していたことが理解できる。
イ 仲間との交流を通してしっかりと学び合いに参加することができる。
- (2) 研究主題（副主題）との関連（自ら追求し、仲間と共に高め合う生徒の育成）
座席の配置を工夫したり、学び合いに必要な助言・アドバイスを与えたりすることで共に高め合う子どもの姿に迫りたい。
- (3) 目標及び研究主題に迫る手立て
 - ・参加度が高まり、周りに関わり合うことのできる机の配置をする。《手立てA》
 - ・全員が関わることができるように、2人もしくは3人で資料集を一冊使う。《手立てB》
 - ・教科委員が司会を行い、全体で意見交流を行う。その生徒間での意見交換で、つながる学びを目指す。《手立てC》

3 目指す学び合いの授業

どの生徒も安心して授業に参加できるように、ルール of 徹底を目指す。答えが1つしかない問題を全体交流で取り上げるようなことはせず、いくつもの意見が出てくるような課題を設定して授業を進めていく。

4 学習過程

| | | 個人→ <input type="checkbox"/> 個 | | ペア→ <input type="checkbox"/> ペ | | 一斉→ <input type="checkbox"/> 斉 | | 全体→ <input type="checkbox"/> 全 | |
|--|--|--|--|--------------------------------|--|--------------------------------|----------------------------------|--------------------------------|--|
| 段階 | 学 習 活 動 | 形態 | 教師の支援・指導上の留意点 | | | | 評 価 | | |
| 導入 5分 | 1 聖徳太子について知っていることを調べ伝え合う。 ・10人の話を一度に聞くことができる。 ・仏教を取り入れた等 | <input type="checkbox"/> 個 3分 | <ul style="list-style-type: none"> ・小学校での歴史学習で学んだこと、知っていることをまず個人で考えたあと、ペアで発表して確認する。 ・聖徳太子の写真を黒板に掲示する。 | | | | 聖徳太子について興味を持つことができたか。 (発言・発表) | | |
| | 2 学習の課題と授業の流れをつかむ。 | <input type="checkbox"/> ペ 3分 | | | | | | | |
| <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 聖徳太子はどんな国づくりを目指したのだろうか？ </div> | | | | | | | | | |
| | 3 主な制度について3種類の資料を使い、話し合う。 【個人でワークシートに記入→ペアで交流→全体で交流】 | <input type="checkbox"/> 個 3分 | <ul style="list-style-type: none"> ・参加度が高まるような机の配置にする。(座席を中央に向ける)《手立てA》 ・教科委員が全体交流の司会を行い、話し合いを進めるよう促す。《手立てB》 | | | | | | |
| | i 冠位十二階 ・色によって階級が | <input type="checkbox"/> ペ 4分 <input type="checkbox"/> 全 5分 | | | | | | | |
| | | | <ul style="list-style-type: none"> ・冠位十二階が家柄や身分によって位が決まるわけではないことを気付くこと | | | | | | |

| | | | | |
|-------------------|--|--|---|--|
| 展 開 38 分 | 違う。 ・能力のある人を登用した。など ii 遣隋使 ・進んだ文化や制度を取り入れようとした。 ・対等な関係を目指した。 iii 十七条の憲法 ・争いがないようにする。 ・仏教の影響が強いなど 4 聖徳太子がめざした国づくりのねらいについて考える。 ・天皇中心の国づくりを目指した。 ・仏教を取り入れた国づくり。など | <input type="checkbox"/> 個 3分 <input type="checkbox"/> ペ 3分 <input type="checkbox"/> 全 4分 | ができるよう助言を与える。 ・この時代の隋の情勢について助言を与え、それを踏まえ考えられるようにする。 ・十七条の憲法では生徒が考えやすいように現代の言葉で記してある資料を与える。 ・3つの資料を使った話し合いに全員が参加できるように資料集は2人もしくは3人程度で一冊利用する。 《手立てC》 ・生徒が周囲と伝え合う様子を観察するため机間支援し、あまり参加できていない生徒がいれば身近な具体例を助言する。 | 3つの制度の特徴を理解できたか。(ワークシート) 聖徳太子の目指した国づくりを見出すことができたか。(発言・発表) |
| | 5 聖徳太子が目指した国づくりについて、3つの改革の中でどれが一番効果的だったか考え発表する。 | <input type="checkbox"/> 個 5分 <input type="checkbox"/> ペ 5分 <input type="checkbox"/> 全 6分 | ・生徒自身が聖徳太子の立場になり、自分だったらどの政策を行っていくか考えることができるよう促す。 ・資料で学んだことを生かして考えた話し合いかどうかをつかみ、生かしていない生徒には学んだ資料の特徴を説明し、自分なりの考えを持つことができるようにする。 | |
| | 6 学習を振り返り、自己評価をする。 | <input type="checkbox"/> 個 3分 | ・本時の授業への参加度や理解度を評価させ、学習へのさらなる意欲化を図る。 | 聖徳太子のねらいが理解できたか。(振り返りカード) |
| | ま と め 3 分 | | | |
| | | | | |

5 評価

ア 天皇中心の国づくりにおいてどの制度が一番効果的であったか、みんなの意見も参考にして自分の考えを持つことができたか。

イ 自分の意見だけでなく仲間の意見も取り入れて学習に取り組むことが出来たか。また仲間の意見を参考にして新たな発見や考えを持つことが出来たか。

6 成果と課題

- 多くの生徒が知っている人物であったため、政策についても聞いたことがあり、比較的スムーズに考えることができた。
- 個人からペアで話し合うことにより、しっかりと自分の考えを持つことができ、積極的に話し合いに参加できていた。
- 教科委員が中心となって全体交流を展開していく形が定着しつつあるので、周りの生徒も授業の流れを理解している。そのため先を見越して学習できている生徒が多い。

- 内容が非常に詰まっていたために、最後の一番考えたい課題についてあまり時間をとることができなかった。学習過程の「3」に関しては、個人→グループ→発表という形で進めたのが良かったと感じている。

(2)課題提示の工夫と学び合いのしかけ (中学校1年 数学 少人数)

1 単 元 変化と対応

2 本時の目標

- (1) 暗号を解くことを通して、座標の特徴を理解することができる。
- (2) 仲間と協力して暗号を解くことができる。

3 目指す学び合いの授業

本時の課題解決を通して全員の生徒がお互いに関わり合いながら学び合う姿を目指している。そのために3つの手立てを考えた。

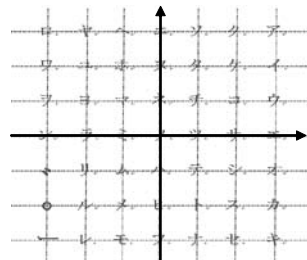
1つ目は、課題の工夫である。生徒が導入の段階で学びたくなる課題になるようにした。課題を暗号にして、並び替えたら1つの文になるようにして、生徒の学びたいという意欲を高めるのに役立てたい。

2つ目は、ヒントカードの導入である。個人追求の場面で時間が長いと手が止まってしまう生徒が多くいる。手が止まってしまう生徒に向けて考えたのがヒントカードである。1分おきにヒントを提示することで、個人追求の時間に思考が止まらないようにしていきたい。

3つ目は4種類の暗号を用意したことである。個人追求のときには、班員は他の課題を解いているため自分がその課題を解かなくては、暗号が解読できないという意識が生まれ、いつもより真剣に課題に取り組むことができる。また、みんなで関わって暗号を解くことを促すために、班で追求するときには、全員の暗号が解読できなければ文章が完成しないような仕組みにした。個での追求をしっかりすることで、班での活動も活発に行っていきたい。

4 学習過程

| 段階 | 形 態 | 学 習 活 動 |
|-----------|------------------------------------|---|
| 導入 5分 | ペア 全体 | ①音声計算トレーニングに取り組む ②単元名と本時の課題を知る 『暗号を解読して、座標の性質を理解することができる』 |
| 展開 42分 | 個 班 全体 全体 個→全体 | ③暗号を解読する。 手が止まっている子に対しては、ヒントカードを配布する ヒント1：基準を探せ!! ヒント2：基準は(0, 0) ヒント3： ヒント4：(0, 0)は『ノ』である ④暗号を並び変えて言葉をつくる ⑤全体で発表をする ⑥座標の特徴についてまとめ、演習問題を解く ⑦暗号を考えて問題をつくり、解きあう |
| まとめ 3分 | 個 | ⑧本時のふりかえりをする |



5 評価

ア 座標の性質を理解して、座標を読み取ったり、座標の位置を示したりすることができたか。

イ 自分の考えを持ち、仲間に伝えることができたか。

6 成果と課題

○ 課題を工夫したことで、導入の段階で生徒が早く問題を解きたいという気持ちになれたので、授業が最後まで良い雰囲気の中で行うことができた。しかし、導入の時間が多くかかってしまい、最後の交流の時間が短くなってしまったので、もう少し早く課題に取り組ませるべきだった。

○ なかなか考えが浮かばない生徒が、ヒントが出るたびに新たな考えを見つけようとしている姿が多くあり、生徒の思考を刺激することができた。

○ 個人追求の段階で自分がやらなければいけないという意識が生まれ(図 86)、課題に一生懸命取り組む姿や班での追求のときに仲間と協力して頭を寄せ合って考えあう姿があった(図 87)。しかし、自分の考えを仲間に上手く伝えるということが、なかなか上手いかなかったため、そのための手立ても考えなければいけないと感じた。

○ 「すべての子どもが楽しく、分かる授業を目指して」というテーマで実践を行ってきて、授業の中で生徒が分かったと思う瞬間と楽しいと感じる瞬間は、とても似ていると感じた。授業の中で、分かったと思う瞬間と楽しいと感じる瞬間のどちらも生徒の顔はパッと明るくなり、表情が生き生きしている。その生き生きした姿がとても大切である。授業の中でたくさんの生き生きした姿を見るためにも、授業の中でより多くのしかけをしていきたい。



図86 個人で追求



図87 班での追求

(3)臨場感あふれる場面設定を考えた導入の工夫とグループでの翻訳(中学校2年 英語TT)

1 単元 Let's Read 1 A Magic Box

2 本時の目標

- (1) 登場人物の気持ちを読み取りながら、台詞を考えて翻訳をすることができる。
- (2) グループでの活動に積極的に参加しながら学び合いに参加することができる。

3 目指す学び合いの授業

授業の目標を達成するために、まずは根本的に英語が楽しいと感じる授業を作り上げていくことが大切である。英語嫌いな生徒を作らないためにも、「難しい」という印象を与えたくはない。本校の英語の授業は、単元によって少人数で授業を進めたりTTで授業を進めたりしている。このA Magic Boxの単元では、TTで授業を進めることによって、毎時間教師二人で役になりきって劇風に物語の内容を導入する。その後6人グループを作り、登場人物の気持ちを読み取りながら翻訳に挑戦させる。英語の得意な生徒を中心に訳させていくが、日本語の表現力の豊かな生徒もいるので上手に話し合いをさせながら進める。全体で確認する時には名訳があれば全体の場で紹介する。訳し方は一つではないので、台詞一つでも班によって個性が現れ、またそれを全体で交流することにより色々な訳し方があるということを学ばせたい。この授業を通して、少しでも多くの生徒が一生懸命

班員と関わり、英語の面白さを感じ取ってほしいと思う。

4 学習過程

| 段階 | 学習活動 | 形態 | 教師の支援 |
|------------|---------------------|------|--|
| 導入 15分 | 1 Singing | 個 | ・表情豊かに元気に歌うように励ます。(T1) |
| | 2 教科委員クイズ | 全体 | ・出題する生徒に助言と賞賛を送る。(T2) ・教科委員の指示で取り組んでいる様子を観察しながら、教科委員クイズがスムーズに進むように支援する。(T2) |
| | 劇風な物語文の場合に合った翻訳をしよう | | |
| 展開 25分 | 3 導入 | 全体 | ・教師二人で実際に役になりきって英語劇をすることにより、生徒の興味を引き付ける。(T1、T2) |
| | 4 新出単語練習 | 全体 | ・フラッシュカードを用いることにより、前を向き大きな声で発音できるようにする。(T1) ・発音の分からない生徒に個別に支援する。(T2) |
| | 5 翻訳 | グループ | ・登場人物の気持ちを読み取りながら、翻訳するように指示する。(T1) ・日本語の表現力の豊かな生徒もいるので上手に話し合いをさせながら進める。(T1) ・つまづいている生徒には、グループの仲間と積極的にかかわり合いながら訳を考えるように促す。(T1、T2) ・考えがまとまらないグループの生徒に助言する。(T1、T2) |
| まとめ 10分 | 6 全体交流 | 全体 | ・台詞一つでも色々な訳し方があるということを伝える。(T1) ・全員が本文の内容をしっかりと理解出来るように、分かりやすく説明をする。(T1) |
| | 7 T or F | 個 | ・まとめとして、本文の内容をよく理解しているか声掛けをする。(T1) |
| | 8 Q&A | 個 | ・机間支援をし、理解が不十分な生徒には個別に支援する。(T2) |
| | 9 振り返り | 全体 | ・本時の目標をもう一度確認し、達成できた生徒を賞賛する。(T1) ・次時の予告をする。(T1) |

5 評価

ア 登場人物の気持ちを読み取りながら、場面に合った翻訳をすることができたか。

イ グループの仲間とかかわり合いながら、授業に参加することができたか。

ウ 本文の内容をよく理解することができたか。

6 成果と課題

「すべての子どもが楽しく、分かる授業を目指して」というテーマのもと、導入と翻訳するときの隊形を工夫した。まず導入では、教師二人で劇風に物語の内容を紹介した。この物語では農夫婦と老婆が登場し、農夫婦が空腹の老婆に水や弁当を与える場面があるので、実際にバンダナをかぶったり水の入ったペットボトルや弁当箱を持って来たりした。英語が苦手で普段なかなか教師の話

す英語を理解出来ない生徒もいるが、教師が普段とは違う動きを見せるとしっかりと前を向いて英語を聞き、少しでも理解しようと努力している姿が見受けられた。またジェスチャーを用いることによって、英語を理解することが出来なくてもだいたいの意味を理解することが出来ていた生徒も多くいた。ジェスチャーや話す口調、雰囲気などからだいたいの意味を読み取ろうとすることは、実際の英会話においても大切なことであるので、導入時にこのことが出来ていたことはある程度の成果と言えるだろう。またグループで翻訳する時には、英語の得意な生徒が中心になって翻訳するように指示をし、グループ活動がスムーズに行えるようにした。また教師が二人いるので、考えが出ないグループへアドバイスをしたり、グループの仲間と上手に関わることができていない生徒への支援をしたりした。最終的にはほぼ全員の生徒が本時の目標を達成できていた。

ほとんどの生徒がグループでの活動に積極的に参加していたものの、一部の生徒は友達のをそのまま写しているだけになってしまっていた。どうしてもレベルの差はあるものの、グループでの翻訳の時間にもう少し仲間同士の学び合い教え合いの雰囲気を作ることができると良いと思う。

(4) 学び合いの形態を工夫し、個の理解力向上を目指して (小学校5年 算数 少人数)

1 単 元 面積

2 本時の目標

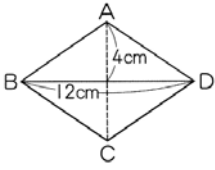
- (1) ひし形の面積の求め方を考え、公式の意味を理解することができる。
- (2) ひし形の面積の公式を使って、面積を求めることができる。

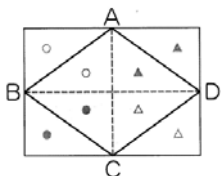
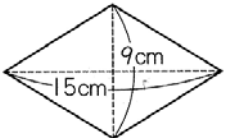
3 目指す学び合いの授業

- (1) 個人で考え、ペアで話し合い、グループでまとめ、自分の考えを伝え合い、様々な考えにふれることで、全体へ発表する意欲が高まるようにする。
- (2) 友達と交流することで、算数を苦手とする児童も学習内容を理解し、自分なりに説明できるようにする。

4 学習過程

学習形態： 個別 ペア グループ 一斉

| 段階 | 学 習 活 動 | 形態 | 教 師 の 支 援 と 留 意 点 | 評 価 (評 価 方 法) |
|-----------------------|--|---|---|--|
| つ か む 5 分 | 1 前時の学習内容を 確認し、本時の学習 課題と学習の流れを つかむ。 | <input checked="" type="checkbox"/> | ○ 台形の面積の公式を確認する。 ○ 学習課題と学習の流れを知らせ、 学習意欲を高める。 | ○ 本時の学習課題を つかみ、学習意欲を もつことができた か。(表情) |
| | ひし形の面積の求め方を考え、公式を使って面積を求めよう。 | | | |
| と | 2 ひし形の面積の求 め方を考える。 ○ 三角形で考える。  | <input type="checkbox"/> ↓ <input type="checkbox"/> ↓ <input checked="" type="checkbox"/> ↓ <input checked="" type="checkbox"/> | ○ ワークシートの図形に自分の考え を書くよう指示する。 ○ 面積の求め方が分からない児童に は、ヒントカードをを渡し、考えの 手助けとする。 ・ 三角形の面積の公式 ・ 四角形の面積の公式 ・ 方眼の目盛りが入った図形 | ○ 自分の言葉で、 ひし形の求め方につ いて友達に説明 することができた か。(活動の様子) |

| | | | | |
|-------|---|------------------|--|--------------------------------|
| り | ○ 長方形で考える。  | | ○ 個人からペアで話し合い、グループで意見交換したものを発表用プリントに考えを協力して記入するように指示する。 | |
| く | 3 ひし形の面積を求め、その面積の公式を考える。 4 P13②の面積を公式を使って求める。 | 個 ペ 斉 個 | ○ 三角形や四角形の面積の公式を利用して面積を求めるように促す。 ○ 長方形で面積を求める方法から、公式を考えるように指示する。 ひし形の面積=(対角線)×(対角線)÷2 ○ 戸惑っている児童には、ひし形の面積の公式をもう一度確認して解くように支援する。 | ○公式を使ってひし形の面積を求めることができたか。(ノート) |
| む |  | | ○ 対角線が長方形のたてと横と同じであることを再度確認する。 $9 \times 15 \div 2 = 67.5$ 67.5 cm^2 | |
| 35分 | 5 P13③の面積を求める。 | 個 | ○ 早く終わった児童には、「もっと練習のP109⑤」の問題を考えるように指示する。 | |
| まとめ5分 | 6 本時の学習を振り返り、振り返りカードに記入する。 | 個 | ○ 個やペアでがんばったことや分かったことをカードに記入するように促す。 | ○本時の学習を振り返ることができたか。(振り返りカード) |

5 評価

- (1) ひし形の面積を三角形や長方形の面積の求め方から考え、友達と意見交換し、発表することができたか。
- (2) ひし形の面積を求める公式を対角線を使って、導き出すことができたか。
- (3) ひし形の面積を公式を使って求めることができたか。

6 成果と課題

- 個人からペアで話し合うことは、しっかり自分の考えがもてない児童にとって、友達の考えを聞くことで理解でき、次へのステップにつながるようになってきた。
- 友達との学び合いで、友達に分かりやすく説明することにより、自分の考えがよりはっきりし、また、そのことにより自分の考えに自信がもて、発表意欲が高まるようになってきた。
- 友達の意見発表から、自分とは違う考え方や新しい発見に触れることで、自分の思考であやふやな部分や中途半端なところが解明し、正しい考えをもつことができるようになってきたようである。
- 資料提示において、視聴覚資料(大型テレビ使用)や表・図・さし絵などを利用し、興味・関心を高めてきた。特に大型テレビでは、動画の活用は児童を授業に引きつけるのに有効であった。しかし、問題点として、教材に合った視聴覚資料の不足を感じている。

(5) 関わり合う中で考えを深め、知識として定着させる授業の工夫(中学校2年 英語)

1 単 元 Multi Plus2町紹介

2 本時の目標

- ア 4文以上の英語で住んでいる町の紹介を書くことができる。
- イ 友達の発表を聞いて、質問したり話し合ったりできる。

3 目指す学び合いの授業

信頼感のある雰囲気の中で、互いの作品を発表したりグループのメンバーから質問を受けたりできる。他者と友好的に関わり合いながら、自分の考えを深めたり習った知識を定着させたりできる授業を目指す。教師として、生徒同士が十分にに関わり合えるようなきっかけを作っていきたい。

4 学習過程

| 段 階 | 学 習 活 動 | 形 態 | 教師の支援・指導上の留意点 |
|--------|----------------------------------|------|--|
| 導入5分 | 1 Q&Aを行う。 | ペア | ・大きな声で行うように指導する。 |
| 展開37分 | 2 教科書の新出単語・本文を知る | 個 | ・新出単語が定着するように、何度も発音する。 |
| | 3 本時の課題を知る | | ・本文の構文などを説明し、英作文を作る際の参考になるようにする。 |
| | 自分の町を紹介する文を作り、仲間に発表しよう。 | | |
| | 4 紹介文を作る。 | 個 | ・分からないところは、周りに聞いても良いと伝える。 |
| | 5 紹介文を発表する。 ・質問を受ける ・発表を聞く | グループ | ・班員が分かりやすいように、発表するにはどうすればいいかを問いかける。 |
| | 6 質問を加えた紹介文を清書する。 | 個 | ・聞く態度や話す態度について考えさせる。 ・友達からの質問の答えを、加えた紹介文を作るように指示する。 |
| 振り返り3分 | 7 本時の振り返りをする。 | 個 | ・課題にきちんと取り組めたかどうかを確認し、今後の学習に意欲をもたせる。 |

5 成果と課題

今回、「学び合いB」グループでは、「学び合いを成立させるための条件」として「グループでの交流」が大切だと話し合った。実践では、それを念頭に置き、小グループで英作文を発表し合う授業を行うことに決めた。こうした活動を行うのは初めてのことで、正直不安であった。

班の中での発表では、質疑応答する場面において、質問をする役割の生徒は、予め書いてあった英語の質問をすることができた。また多くの生徒が、質問に対し短い英文を即興で作り答えることができた。答えることができない生徒も、なんとか単語だけでも発しようという姿勢が見られた。生徒の顔はイキイキしており、その理由は「自分の考えを英語で話す」「答える」ということが、少しでもできたからではないかと感じた。それぞれの班の雰囲気も和やかで活発であり、その様子から小グループ単位で発表を行っても、生徒は達成感が得られることが伝わってきた。

「すべての子どもが楽しく、分かる授業を目指して」というテーマで実践を行ったが、やはり『「楽しい」と感じるのは「分かる」と感じた瞬間なのだな』と実感した。今回の実践は、本物のコミュニケーションとは少し違うが、それでも「自分のことを話す」「人の話を聞く」という意味では、

意味のあるものだったと思う。

しかしながら、課題はとても多い。本時では、前述したとおり「互いの英作文の内容を質問し合う」ことが、大切なポイントだったが、肝心の「質問」は、同じ班の上位の生徒を真似ただけのよう内容が多数並んだ。また文法的な間違いも多数あったが、その場では指導しきれなかった。普段から、基礎学力を身に着けておかないと、大切な「交流」が間違いを助長したりする場になりかねないと実感させられた。

しかしながら、英語はコミュニケーションの道具なので、「分かりやすく話すこと」と「しっかり聞くこと」ことは大切である。それはとりもなおさず「学び合い」の原点だと感じるので、今後の授業では、こうした点を結び付けて計画を立てていきたい。



図88 小グループで自分の英文を発表しあう生徒

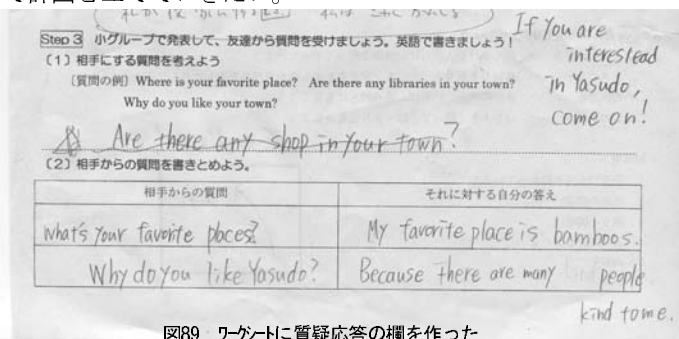


図89 ワークシートに質疑応答の欄を作った

(6) 学級の全員がわかる授業を目指して、意欲的に関わり合う交流の工夫(中学2年理科 TT)

1 単元名 動物の生活と生物の進化

2 本時の目標

- (1) 肺から取り入れた酸素がどのようにして細胞に運ばれるのかを文章で説明できる。
- (2) 仲間と協力して主体的に課題に取り組むことができる。

3 目指す学び合いの授業

生命を維持するはたらきである「呼吸」と「血液の循環」のまとめとなる授業である。今まで学習してきた呼吸器官や血液、心臓はそれぞれ血管でつながっており、血液が全身を循環することで酸素と二酸化炭素の交換が行われていることを理解したい。

本時の学習活動では、生徒が主体的に課題を解決するために仲間同士で自由に交流できる時間(以下、ピアタイムと呼ぶ)を設けた。さらに、みんなでゴールを達成することを目標とすることで、わからない生徒に対して教えることができる、わかっている生徒に教えてもらいに行くことができるような温かい人間関係を育みたい。そうして出された多種多様な意見の中から、互いの意見を認め合い、精選する中で自分の意見を深めることができることを目標としたい。

4 学習過程

| 段階 | 学 習 活 動 | 形態 | 教 師 の 支 援 | |
|----------|---|-----------------|-------------------------------------|--------------------------------|
| | | | TAの関わり | TBの関わり |
| 導入 5分 | 1 教科委員が授業を始める。 ・ オープニングテスト (5問) ・ 到達度の確認 ・ 本時の課題とゴールの確認。 | 個 全体 | ・ 出題する教科委員をサポートする。 ・ 到達度に対して讚める。 | ・ 準備ができているか 机間支援を行いながら確認する。 |

| 肺から取り入れた酸素がどのようにして細胞に運ばれるのかを説明しよう | | | | |
|-----------------------------------|--|----|--|---|
| 展 開 4 2 分 | 2 課題の説明を聞く（5分） ・ 空気中から肺の毛細血管へ。肺から心臓へ、心臓から全身へ。全身の毛細血管から各細胞へ。 | 全体 | ・ 前時までの復習を板書を用いて簡単に説明する。 | ・ クラス全員がゴールを達成するためにどのように活動すべきか考えるよう伝える。 |
| | 3 課題に取り組む（30分） ・ 資料を使い自分で調べる。友達に聞く。先生の答えを参考に。様々な手段の中から自分に合った方法で課題を解決する。 | ピア | ・ 時間を指定し、それまで自由に交流するよう伝える。 ・ 良い取り組みが行っている生徒の可視化をする。 | ・ わからない仲間に対して声かけをしてあげられるよう促す。 |
| | 4 ゴールの確認を行う（7分） ・ ひとりでも見ないで本時の課題に取り組む。 | 個 | ・ 用紙を配布し、何も見ないで課題に取り組むよう説明する。 | ・ 机間支援を行い、課題に取り組めていない生徒を把握する。 |
| ま と め 3 分 | 5 振り返りを記入する。 | 個 | ・ ピアタイムでの様子を評価し讃える。 | |

5 評 価

- ア 主体的に課題を解決しようとしていたか。
- イ ピアタイムでは生徒同士で活発に関わり合っていたか。
- ウ 課題に対して文章で表現することができたか。

6 成果と今後の課題

生徒同士が意欲的に関わり合う授業を目指して、グループの枠を越えた自由な交流を設定し、多くの時間を割いた。グループの仲間に対してわからないことをうまく伝えられない生徒も、素直に話せる間柄であれば、わからないところを率直に伝えることができたようである。

生徒同士で交流する姿は様々であった。同じ集団の中で納得がいくまでじっくり考えたり聞き合ったりする姿（図1）や、各集団で話し合われている内容を参考にして答えを模索していく姿、教師の解答をまわりの生徒同士で議論、吟味している姿（図2）などが見られた。どの生徒も自分に合った交流の仕方ですれぞれじっくりと課題に取り組んでいた。最後に行ったゴールの確認では多くの生徒が文章で表現することができていた。

また、一人で悩んでいる生徒に対して声をかけ、自分の意見とを照らし合わせ、確認し合う姿があった。「全員が課題達成」という目標を掲げたことで、ほぼ全員が誰かと交流することを意識して活動できていた。その一方で、唯一最後まで誰とも関わろうとしなかった生徒がいた。まわりの生徒もその生徒と関わろうと行動する様子はなかった。他の授業でも教えようと試みても本人が拒絶するため、まわりの生徒も諦めているようである。

教えられる側の生徒は答えを求めるために積極的に交流することが多いが、教える側の生徒が積極的に教えにいかうとする姿はまだまだ少ない。あらかじめ教師が事前に配慮すれば、教えようと動くことができる生徒もいる。自発的に教えたいと思えるような活動の工夫が課題である。しかし、どのような活動であっても良好な人間関係があってこそである。日頃から温かい人間関係を育むことが最重要課題であると感じた。



図90 集団で解決し合う姿



図91 教師の解答を議論・吟味する姿

空気中の酸素が全身の細胞に運ばれるしくみについて文章で説明しよう
 ① 次の語句を必ず1回は使うこと
 (肺静脈、大動脈、ヘモグロビン、赤血球、血しょう、組織液、心臓、左心房、左心室)
 ロから入った空気が肺動脈を通り、気管、気管支をとおして肺野に行く。
 肺野が肺動脈、肺動脈が毛細血管へと運ばれる。
 毛細血管の中にある血は、赤血球があり赤血球の中のヘモグロビンが酸素を
 血液とともに運ぶ。
 いっぽう毛細血管は肺静脈に集まってくるため、毛細血管から肺静脈へ血液が
 運ばれる。
 肺静脈から左心房、左心房から左心室へいき、心臓の筋肉により左心室から大動脈
 へと運ばれる。
 大動脈から動脈、動脈が毛細血管へ運ばれ、全身へ運ばれる。
 毛細血管を通っている間に、毛細血管から血がろ過されて出て組織液となり、
 各細胞を潤す。その組織液に酸素がたまり、各細胞に酸素が

空気中の酸素が全身の細胞に運ばれるしくみについて文章で説明しよう
 ① 次の語句を必ず1回は使うこと
 (肺静脈、大動脈、ヘモグロビン、赤血球、血しょう、組織液、心臓、左心房、左心室)
 ロから入った空気が肺動脈にたどり、ヘモグロビンを持つ赤血球にのりか
 ねて肺静脈に流れ、心臓の左心房へ来る。そして左心室に血液がたまり、
 してそこから大動脈へ出て、血液の流れに酸素を持つ赤血球が全身の血
 管にいきわたる。その過程で、血管から出て組織液となり、各細胞に
 酸素がたまり、各細胞に酸素が

空気中の酸素が全身の細胞に運ばれるしくみについて文章で説明しよう
 ① 次の語句を必ず1回は使うこと
 (肺静脈、大動脈、ヘモグロビン、赤血球、血しょう、組織液、心臓、左心房、左心室)
 ロから入った空気が、気管を通り、肺動脈の中へ入る。この中へ酸素は、肺動脈を
 通って、毛細血管の中へ入る。赤血球の中へ酸素は、ヘモグロビンの中へ入る。
 この酸素は、毛細血管の中へ入る。そして、毛細血管から左心房へと行き、心臓の
 左心房へ入る。そして、心臓の左心室へ入る。そして、心臓の左心室から大動脈
 へと運ばれる。大動脈から動脈、動脈が毛細血管へ運ばれ、全身へ運ばれる。
 毛細血管を通っている間に、毛細血管から血がろ過されて出て組織液となり、
 各細胞に酸素がたまり、各細胞に酸素が

先生が考える答え
 ロから吸い込んだ空気中の酸素は気管と気管支を通過して肺動脈に入る。
 肺動脈に入った酸素は、肺動脈を通り抜け、毛細血管の中に入る。
 毛細血管の中には赤血球、白血球、血小板、血しょうを含む血液が流れている。
 酸素は赤血球中のヘモグロビンと結びつくことによって血液の中を運ばれる。
 この酸素を多く含んだ血液は動脈と呼ばれ、動脈に集まって心臓の左心房に流れ
 込む。
 心臓は血液を吸い込み、送り出すポンプの役目をしている。
 心臓の左心房に入った血液は左心室に入ると、心臓の筋肉のはたらきによって、大動
 脈から動脈、さらには全身の毛細血管へと流れていく。
 毛細血管からは血しょうが染み出して、組織液となって細胞のまわりを満たしている。
 この組織液に酸素が溶け出し各細胞に酸素が行きわたる。

図92 ゴールの確認答案例と教師の解答

おわりに

大山市の授業研究会で集まった仲間が、一つのテーマを通して互いに自分の考えを述べ合い、そして、自分の実践を仲間の実践と比較しながら振り返り、授業についての考えを広げることができる場とな

ったことは最大の成果であるといえる。これまでの数回を振り返り、各回の成果として捉えたい。

① 「学び合い」を柱とした部会が成立

- 10数名から、2つの部会に分かれて研究することが決まった。教科は、小学校2名、中学校社会1名、中学数学1名、中学理科1名、中学英語2名というメンバーで構成され、当初は、何ができるかという不安を抱いた。
- 一人一人の思いが、「良い授業をしたい」「盛り上がる授業づくりをしたい」という気持ちで会を進めていくことを確認する。
- メンバーには講師の先生も含まれており、教科が違うことも考えて、とりあえずは、基本となる「学び合い」についての考え方を共有することから話し合いを進めた。

② 「学び合う（合うことができた）」（子どもが生き生きとして充実した授業となった）実践資料の持ち寄りと意見交流

- それぞれが実践資料をつくり、どういった場面で「学び合い」として成立したかを探る。
- 学び合いが成立した要因に次の点があることが明らかとなった。
 - ・設定したテーマが良かった
 - ・全員が活躍する場面を教師が設定した
 - ・子どもにじっくり取り組む場を提供し、その上に立って、関わり方を工夫した
 - ・段階を踏んだ課題の提供に工夫を凝らした
 - ・子どもが話し合いをするための資料づくりが良かった
 - ・教師が支援をする手だてが段階的であり、的確であった

③ 部会のテーマの決定

これまでの実践の成果を全員で共有化する中で、『「学び合う」子どもたちが育てば、子どもたちは楽しく、積極的に授業に参加し、自らの力で理解し、確かな学力として身に付けていこうとする』という考えから、テーマを設定した。（「すべての子どもが楽しく、分かる授業を目指して」）

そして、「学び合い」を深めていくという考えの上に立ち、「そのためにはどのような関わらせ方をさせていけばよいか」という教師の支援と授業の工夫を探ることをサブテーマとして設定した。（意欲的に関わり合う授業の工夫）

④ テーマとサブテーマに沿った実践と仮説の検証

目指す授業と「学び合い」を成立する場面について、考えを深め、共通の考えとして位置付け、各学校で実践を繰り返す。2つの仮説に基づき、「学び合い」が成立する授業を模索し、検証を試みる。

⑤ 資料づくり

12月に入り、資料づくりに入る。臨時で、授業研究会以外にも集まって、実践の検証を行った。特に中学校の先生方は、忙しい時期で大変であった。

⑥ 発表準備

年が改まり、できあがった原稿をもとに、発表の準備を行う。「教師同士が同じ方向で、数多く関わる中から、良いアイデアと方法が生み出され、子どもたちが意欲的に関わり合う実践が生まれていく」ということに気付く。

⑦ 仮説の検証

それぞれのメンバーが、学び合いう実践を振り返り、仮説を検証し、学び合いが何であるかを検証した。次の4つの「教師の工夫」が学習意欲と確かな学力につながっていることを確認した。

学習意欲をもち、確かな学力を身に付けようとする子ども

教 材

教師の学び合いのための工夫

- ① 教材提示 ② テーマ設定
- ③ 授業構成 ④ 発問

子ども

⑧ 発表

一人一人の学び合いの実践を発表する。子どもたちの学び合いは、実は、教師同士の学び合いから始まることを実感する。

⑨ 番外

- たまたま出会った年代も違う仲間ではあるが、人と人とのつながりを大切し、今後も「学び合い」を深めていく研究を推進していきたい。
- 「研究会」という固い枠の中の間人間関係ではなく、ざっくばらんに話ができる会ももつことができた。互いの情報交換をしながら、皆が関わり合い、つながり合っていくことの大切さを実感することができた。

最後に、「学び合い」が機能し、それを基にして学力として高めていくためには、子どもたちの良好な人間関係が大切である。子どもたちの人間関係をつくり上げる原動力は、教師の資質や人格にある。その資質を磨くために、教材に目を向けながら、子どもたちの現状に寄り添った授業づくりを心がけ、さらに、人格を磨くために、同僚との関わりを大切にしていきたい。子どもたちから慕われ、魅力のある教師を目指して、これからも互いに高め合いたい。

郷土を好きになる子どもを目指して 私たちのまち犬山を見つめる学習を通して

曾我麻里子 犬山市立楽田小学校
鱸 真人 犬山市立犬山中学校
中野 金弘 犬山市立栗栖小学校

はじめに

社会科では、地域の社会的事象の意味や働きを考える上で、必要となる知識や技能を身に付けるとともに、地域社会に対する誇りや愛情を育てることが求められている。しかし、地域社会に対する興味・関心は高くても、授業以外では、身近な地域を観察したり、疑問を確かめるために地域に出かけたりする姿は、あまり見かけることはない。このことは、私達教師が、学習するのに適した地域素材を教材化し、その素材との出会いから様々な疑問を引き出し、自分で解決することの楽しさや面白さを味わわせることができなかったためだと考える。また、児童の生活と関係がある地域素材を単元指導計画の中に計画的に位置付けることが十分ではなく、社会的事象の概念をつかませることはできていても、地域社会とのつながりを理解させるところまではできなかったことにもよると考えられる。したがって、地域と児童とを直接かかわらせていくことで、地域社会と自分とのつながりを深く理解し、地域社会の一員としての自覚をもつようにすることが大切であると考えた。児童は地域社会とかかわり、課題を解決していくなかで、学習や実生活に生かせる知識や技能を学び、地域社会の一員であることを自覚するようになる。また、地域とかかわることで、自分の住む地域を理解し、大切にしようとする心が育っていく。幸い犬山市には、数多くの史跡、伝統芸能・工芸や農業、漁業などの地域素材がある。そこで郷土を愛する児童・生徒を育てる授業を作ることをテーマに研究を進めることにした。

1 研究の仮説

次のように仮説を設定した。

郷土を題材に授業をすれば、郷土を愛する子どもになるだろう。

2 研究の手立て

研究の仮説に迫るために、次のような4つの手立てを考えた。

- ①児童・生徒が興味をもてる教材の開発する。
- ②地域素材を単元指導計画の中に意図的、計画的に位置付ける。
- ③フィールドワークなどの体験学習を行う。
- ④地域の専門家の方から話を聞く。

3 授業作り研究・社会科の活動経過

| | |
|-----|--|
| 第1回 | 「児童が社会を好きになるためにはどうすればいいか。」について話し合う。子どもは身近なものに興味をもつ。また犬山市には歴史的なものがたくさんあるので、郷土のことをテーマにした研究をしようということになった。「郷土を好きになる子どもの育成。」を課題にした。 |
| 第2回 | 「郷土をどのように単元に取り入れていくか」について話し合った。また単元に取り入れたテーマをどのように授業にするかについて考えた。 |
| 第3回 | 具体的な単元の単元計画とフィールドワークの計画を行った。 |
| 第4回 | 郷土を題材にした授業の指導案の作成について検討した。 |
| 第5回 | 中学校社会科で、郷土学習やフィールドワークをどのように単元に入れていくかについて検討を行った。 |
| 第6回 | 中学校社会科で、郷土を題材にした授業の指導案の作成の仕方について検討した。 |

4 研究の実際

実践1 小学校5年社会 水産業のさかな静岡県

(1) 単元計画

| 時 | 単元 | 学 習 活 動 |
|---|-------------------|--|
| 1 | 焼津市とかつお | ・ 写真や図からかつお漁に興味を持ち、主題図やグラフを読み取って、分かったことを話し合う。 |
| 2 | かつお漁のしかた | ・ 一本釣りときまき網漁の違いについて写真や図をもとに話し合い、かつお漁についてノートにまとめて発表し合う。 |
| 3 | かつおの水あげがさかな焼津港 | ・ 焼津港にかつおが多く水あげされる理由について予想し、写真や地図帳を調べて、港全体の工夫を話し合う。 |
| 4 | 水産業の変化 | ・ 生産量や働く人、輸入量の変化をグラフから読み取り、理由を予想して発表し合う。 |
| 5 | 浜名湖の養殖業 さいばい漁業 | ・ うなぎの養殖業やさいばい漁業について調べ、養殖に携わる人の努力や工夫について考える。 |
| 6 | 新鮮なまだいを消費地に | ・ 水あげされたまだいがどのように消費地に運ばれているのか、また新鮮なまま運ぶための工夫について調べる。 |
| 7 | 木曾川のアユ漁 (本時) | ・ 木曾川のアユが減少し続けている理由をグラフや資料から読み取り、理由を予想して発表し合う。 |

| | | |
|---|------------------|---|
| 8 | 愛北漁業組合 江口さんの話 | ・ 江口さんの話から、アユが減少した理由を知り、木曽川のアユを守るために、どうすればよいか考える。 |
|---|------------------|---|

手立ての②で記したように、地域素材を単元指導計画の中に計画的に位置付けた。静岡の水産業で学んだことから、木曽川のアユの減少を考えられるようにした。さらに手立て④で記したように、地域の方との交流を第8次に計画し、第7次で考えた現象の答えを聞くことにした。

(2) 本時の活動

1) 本時の目標

木曽川のアユが減った理由を資料から読み取り原因を多面的に考えることができる。

2) 指導のポイント

本単元の「水産業のさかんな静岡県」では、水産業に関心を持ち、水産業が自然環境を生かして営まれ国民の食生活を支えていることや、漁場の分布、水産業に従事している人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ運輸の働きなどを理解するとともに、国民生活を支える水産業の発展について考えようとするを目標にしている。さらに、学習した知識の着実な習得と応用として、犬山を流れる木曽川を取り上げることにした。市内を流れる木曽川がかかえる問題を自分たちの問題としてとらえ、どのように解決していくとよいのかを考えることができるようにしたい。そして、子どもたちがますます郷土を好きになるように願う。

本時は、その中で減少した木曽川のアユに着目した。前時までで、子どもたちはわが国の水産業の様子について学習問題を見だし、資料を活用するなどして考え、解決させてきた。また、漁業の変化や水産資源の減少などの問題や、環境問題と国民生活との関わりを学んできた。そこで、学習した知識の着実な習得と応用として、本時でアユの減少を資料から読み取り、その理由を自分の経験や既存の知識から考え、話し合うことができるようにしていきたい。

3) 学習過程

| 学 習 活 動 | 指 導 上 の 留 意 点 | | |
|---|---|------|------------------------|
| 1 木曽川での鮎の友釣りの写真から鮎の生態について知る。 ・ 鮎を鮎で釣っています。 ・ 「おとり鮎」というのだね。 ・ 鵜飼も鮎をとっていたと思う。 ・ この間、鮎を食べました。 | ・ 鮎を食べたことがある人や、実際に釣ったことがある人がいるかどうか聞き、鮎が身近なものである印象をもてるように助言する。 ・ カツオ漁と比較しながら考えられる教科書やプリントを活用する。 ・ 友釣りの仕方や、漁中の様子がわかる写真や鮎の生態が分かる資料を用意する。 | | |
| 2 木曽川のアユの漁獲高の推移のグラフを読み取り、減少していることを知る。 ・ 16年と19年は増えているね。 ・ 23年はほとんど捕れていないよ。 | ・ 平成24年度はどうなっているかを推測させることで、漁獲高が年々減少していることを切実なものとして捉えることができるようにする。 | | |
| <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 20%;">学習課題</td> <td>なぜ木曽川のアユは減ってしまったのだろうか。</td> </tr> </table> | | 学習課題 | なぜ木曽川のアユは減ってしまったのだろうか。 |
| 学習課題 | なぜ木曽川のアユは減ってしまったのだろうか。 | | |

3 木曾川の鮎が減った理由を考える。

- ・鮎を取りすぎたと思う。
- ・外来種とかも原因かなあ。
- ・川が汚れたのも原因だと思う。

4 資料をもとに、木曾川の鮎が減った理由を話し合い、一番の原因をグループで考え発表する。

5 次回、愛北漁業組合の江口さんの来校を伝え、本時の内容をふり返る。

・考えられない児童には、教科書 P75 の漁業の生産量が減った理由に立ち返えられるようにする。

・一番の原因だと思う根拠を、理由をつけてグループで話し合えるように、大事だと思う個所に線を引いていくように指示する。

本時では、手立て①に重点を置いて活動した。太字で記入されているところは、児童に資料を提示するところであるが、資料がいかに魅力的に児童に映り、興味を引くかを考えた。特に下線の個所は、資料を読み解き、減少理由を予想する大事な場面なので、提示する資料に大変苦労した。以下は提示した資料の一例である。図 93 は、導入時に使用した。教師が木曾川に実際に足を運び、友釣りをした時の写真である。図 94 は、発問時に提示した。この図を読み取り理由を考えていった。出典は、愛北漁業組合が実際に測ったデータである。図 95 は、アユが一年魚であることや、生まれた川に戻ってくる習性などについて理解するための資料である。図 96 は木曾川のアユが減った原因を考えるための資料である。愛北漁業組合の理事長である江口さんによると、「犬山頭首工」が、アユの減少の原因と考えられるので、児童にそれを気づかせるための資料である。その他に、外来種についてや、犬山市の漁業就業者数や、水質についての資料などを用意した。



図 93 アユ釣り

木曾川のアユの漁獲量の変化

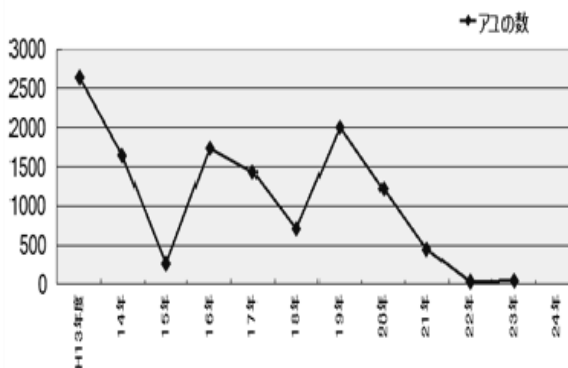


図 94 木曾川のアユの漁獲量の変化

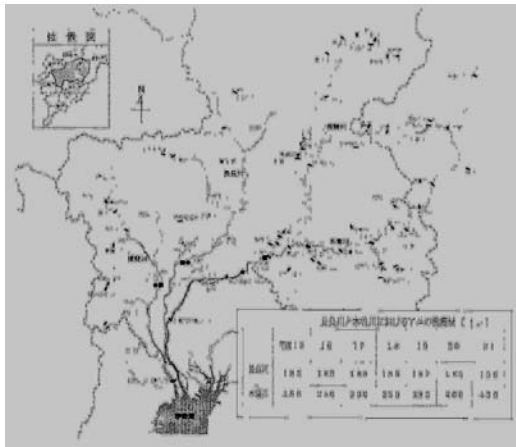


図 95 木曾川と長良川のダムの数と漁獲高

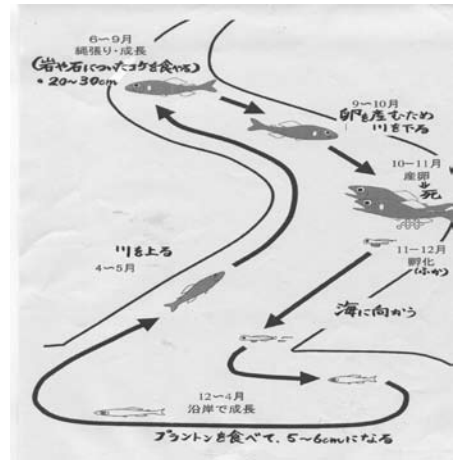


図 96 アユの一生

4) 授業記録 (抜粋)

| 時間 | 教師の活動 (発問・支援・板書など) | 児童の発言 (つぶやき・様子) |
|----|---|----------------------------|
| 1分 | 「先週の土曜日に先生は趣味があるんですけど・・・」 | M「つり！」 |
| | 写真提示 「これ、何をつっていると思う？」 「鮎、みんな知ってる？鮎のどんなことを知ってる？」 | 「鮎！」 T「鮎の寿命は1年」 O「魚」 |
| 5分 | 「今日先生は、こんなものを用意してきました。」 (鮎の旅の図を提示) | |
| | 「今までどんな魚出てきた？どこでとれる魚だった？」 「鮎は川でとれます。鮎は岩についた苔を食べながら、9月になると卵を産みに川をくだってくだね」 写真提示 「そしていよいよ11月くらいになると、産卵・・・産卵って？」 | 「海」 「上流」 「卵をうむ」 |
| | 「ここで魚どうしが結婚して、卵を産むと死にます。そして卵が11月から12月にかけて孵化する。それから赤ちゃんになって泳いでいく。鮎はこうして海に行き、プランクトンを食べて大き | |

| | | |
|-----|---|--|
| | <p>くなったら、6月から9月に川の上の方にあがっていき、ぐるっと1年になります」</p> | |
| | <p>「なんで今日こんな話をしているかというと、先生がとってきたこの川はどこだと思う？」</p> <p>「先生は岐阜出身なので、よく長良川で遊んだんだけど、皆でいうと」</p> <p>「じゃあ木曾川に鮎はいる？」</p> | <p>「木曾川？長良川？揖斐川？」</p> <p>「木曾川？」</p> <p>「いない」</p> |
| 10分 | <p>「いないと思う人？」</p> <p>「これ見たことない？」</p> <p>(鵜飼のパンフレット提示)</p> <p>「鵜飼は鮎を捕るからきっと鮎はいるんだね」</p> | <p>「鵜飼！」</p> |
| | <p>漁獲量の変化のグラフ</p> <p>「じゃあ読んでみよう」</p> <p>「縦がとれた量、横が平成とかの年」</p> <p>「気づいたことある人・・・」</p> <p>「24年はこのグラフ書いてないんだね、いないから書いてないと思った？」</p> <p>「24年は、23年が少なすぎて調べたをやめたんです。他に当ててみて」</p> <p>「じゃあまがったり下がったりして、このままいくとどうなりそう？」</p> <p>「ということはこのグラフは？」</p> | <p>(グラフのタイトルを読む)</p> <p>I「22年と23年が全然とれていない」</p> <p>NM「Rくと似ていて、22、23、24年は全然とれていない」</p> <p>T「一番鮎がとれた時期は平成13年」</p> <p>H「鮎の捕れた量が下がったり上がったりしている」</p> <p>TS「魚がいなくなる」</p> <p>「さがっていく」</p> |
| | <p>「じゃあ今日の課題」</p> <p>「ということで今日の課題は」</p> <p>『なぜ木曾川のアユは減ったのだから』</p> | <p>課題をプリントに記入</p> <p>(黙々と記入)</p> |
| | <p>「思いつくことたくさんたくさん。こんな理由じゃないかなあ・・・」</p> <p>「半分以上は書けたかな？じゃあ今書けたものを発表してもらいたいと思います。」</p> <p>(発表内容を板書)</p> | <p>T、Yは既にダムについての記述あり</p> <p>Y「木曾川の鮎が他の川に行ったから」</p> <p>MA「少し似ていて、川が汚れて他の川に行った」</p> <p>K「釣るときにメスをつつてしまうと、次に卵がうめないから減ってしまう」</p> |

| | |
|--|--|
| 「だから他の川に行ったと」 | OK「つけたしで、メスだけじゃなくてオスをとってもできなくなる」 |
| 「じゃあ他は？」 | MA「鮎のつりすぎ」 T「ダムをたてたから、川に上がれなくなった」 |
| 「うーん・・・これにつけたしは？逆に質問とか大丈夫？」 「これは皆どう？質問とかない？じゃあ他に」 「・・・温暖化意味大丈夫？」 「わからなかったらわからんってきいていいと思うよ、緊張しないで」 | MA「なぜダムをたてたら、鮎が住めなくなるんですか」 T「川をせき止めるみたいになるから、鮎が川にあがって卵をうめない」 O「つけたしで、ダム以外の、犬山橋とかでも住む場所がなくなっている」 IA「大雨のあとに増水して流れがはやくなったりするから鮎がいなくなると思う」 MA「温暖化」 O「船とかで上流の急流に流されたりする」 MA「急流って何ですか」 O「流れがはやいところ」 |
| 「いいね、わからんこと質問できて。答えられるK君もすごい」 「まだあると思うけど、今からグループ活動するのでそこで伝えてください」 | M「外来魚に食べられた」 II「外来魚って」 MS「外国から来た魚」 T「排水などで水が汚くなっている」 O「排水って？」 T「家から出る下水」 (まだ数人挙手) 「中の水を外に流し出すこと」 |
| 「いろんな意見を資料から読み取ってみたね。この答えは今日は話しません。実は次の時間に、これを調べたおじさんが犬山にいるんだけど、来てくださるので、原因をきいてみよう」 | |

5) 考察

享受型の授業をしないようにと始めた研究であったが、授業記録を見ると分かるように、圧倒的に教師が話している時間が長く、児童はほとんど発表していない。教師の説明は少なく、児童の考える時間や、話し合う時間の確保をしなければならない。次に資料についてであるが、読解したり、考えたりする時間が少ない割に、資料が

多すぎたせいで、児童が、資料を理解できなかつた。また、資料が多すぎて、どれに焦点をあてればよいか分からなくなつた班もあつた。

この時間、一番盛り上がったのは、一番最後の「いろんな意見を資料から読み取つてみたね。この答えは、今日は話しません。実は次の時間に、これを調べたおじさんが犬山にいるんだけど、来てくださるので原因をきいてみよう。」と児童に伝えた時だつた。答えが解らないもどかしさと、答えを教えに来てくれる方が見えるという楽しさで、みんなが歓喜の声を上げた。不思議なことは、その後起こつた。児童が私の周りに次々と集まり、授業で使つた資料を欲しいというのである。「なんで欲しいの。」と尋ねると、「おじさんが来るまでもっと考えたい。」という意見が圧倒的に多かつた。その後児童たちは、自主学習で授業の内容をより深く調べ、考えてきた。さらに発展させ、鶴飼いについて調べている児童もいた。また、資料を「家で、家族に見せたい。」という子もいた。私のアユ釣りの写真にも多くの子が集まり、「これ、あの辺りの川でしょう。」「どれだけつれたの。」など、次つぎと話は膨らんでいった。

単元計画 8時に計画されていた、愛北漁業組合の組合長、江口さんの話を聞く会は、とても有意義であつた。自分たちで考えたアユの減少理由を直接尋ねることができるので、子どもたちは真剣に話を聞いていた。主な原因として産卵場所に石がなくなつたことによるという話を聞いた後の児童は、運動場の石拾いの時に、「この石を木曾川においてこよう。」と話したり「木曾川にみんなですべて石を置きにいこう」と計画しようとしていたりしていた。また、「洗剤の使い過ぎは魚によくはない。」「外来種を放流するな。」など、自分の生活と木曾川を関連付けて考えるようになった。「先生、また木曾川のことをやりたい。」という児童もいた。

しかし、次の単元で工業に入ってしまったために、犬山市との関連を私が捉えていなかったもので、地域とつなげた授業を展開できていない現状がある。

実践 2 中学校 2 年社会・地理 アジア州 —アジア州をながめて②—

(1) 単元計画

| 時 | 単 元 | 学 習 活 動 |
|---|--------------------|--|
| 1 | アジア州をながめて① | <ul style="list-style-type: none"> アジアの自然について、雨温図などの資料から概観し、基礎的・気温的な知識を身につける。 アジアの人口について、統計、分布図などの資料から概観し、その特色について考察する。 |
| 2 | アジア州をながめて② (本時) | <ul style="list-style-type: none"> アジアの文化・産業について、写真・グラフなどの資料から読み取り、基礎的・基本的な知識を身につける。 自らの郷土とアジアの文化・産業を比較し、アジア・郷土それぞれのよさを見つける。 |
| 3 | 経済成長がいちじるしい | <ul style="list-style-type: none"> 中国とインドの急速な工業化の様子を、本文や資料から読 |

| | | |
|---|-------------|---|
| | 中国とインド | み取る。 <ul style="list-style-type: none"> 中国とインドの急速な工業化による格差の拡大などの課題について理解し、その対応策について考察する。 |
| 4 | 急速に変わる東南アジア | <ul style="list-style-type: none"> 近年、アジアの国々の製品が日本に大量に輸入されていることから、特に東南アジア諸国の産業に関心を持つ。 東南アジア諸国の都市と農村の変化の実態を、写真、統計資料などから考察する。 |
| 5 | 多様な民族と経済成長 | <ul style="list-style-type: none"> 写真や分布図などから、西アジアや中央アジアの国々の特色を読み取り、アジア州全体の多様性を理解する。 アジア州の急速な成長の答えを考え、これからのアジアの発展の予測をする。 |

平成 24 年度の新学習指導要領への完全移行により、中学校社会科の地理は一年次に世界地理を、二年次に日本地理を学習する。現中学二年生はその過渡期に当てはまるため、一年次に履修していない世界地理を履修している。

世界・日本の地理を地域ごとにクローズアップし学習していくという形態のため、手立て②「地域素材を単元計画の中に計画的に位置づける」は困難を伴った。たとえば中部地方の単元で犬山を取り上げるのはよいが、ヨーロッパの学習で犬山を取り上げると学習内容が単元構想と乖離してしまうのである。そこで、今回は独立した単元として地域素材を利用するのではなく、「〇〇と比べて日本はどうなのか」しいては「〇〇と比べて犬山はどうなのか」と、郷土を世界や日本の各地と比較するためのものさしとして用いた。この方法の利点は、地域素材をどのような内容の単元にも編入できうることである。

(2) 本時の活動

1) 本時の目標

- アジア州の文化・産業などの基本的な知識を身につける。(知識・理解)
- アジア州の文化・産業などを犬山と比較し、その違いに気づき、アジアの文化と犬山の文化のよさをそれぞれ気づく。(関心・意欲・態度)

2) 指導のポイント

本単元では世界の中のアジア州に目を向け、まずはアジア州の自然環境、歴史・文化、産業などの面から州の様子を大観する。その後、急速に成長し変化するアジア州の現在に迫っていく。また、アジア州以外の地域もほぼ同様の流れで進んでいく。

(1) でも述べたように学習内容と単元計画が乖離しないように、世界を知るためのものさしとして地域素材を用いることとした。具体的には、アジアの文化・産業を学習する過程で、「〇〇の地域はこのような文化を持っている。では、日本はどうだろうか」等を問いかけ、日本とアジアがつながっていることを気づかせる。そのうえで、「では犬山と比べてはどうだろうか」という問を發し、自分たちの身の回りの文化・産業に目を向けさせ、比較させる。このねらいの一つは、自分の身近なものとの比較をすることにより、アジアの文化・産業をより理解することである。さらに、普段は意識しない身の回りの環境を比較

対象にすることで犬山のよさを改めて考えさせ、自らのふるさと犬山のよさを再発見させることにある。このように授業を進めることで、学習内容と犬山をリンクさせること、他の単元にも応用可能であるなどの利点があると考えた。

3) 本時の学習過程

| 生徒の活動・反応 | 形態 | 教師の支援・評価 |
|---|---|--|
| <p>〈みつける〉</p> <p>①チェックテストをする。</p> <p>②教科書を読み、アジア各地の文化の特色をつかむ。</p> <p>課題提示</p> <p>犬山がアジアの文化に影響を与えているものはあるのか考えよう。</p> | <p>個</p> <p>全体</p> <p>全体</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・前回の復習をし、内容を確認する ・アジアの地区ごとに異なった文化が存在すること、それらの文化が多くの地域の影響を受けていることに気づかせる。 |
| <p>〈高め合う〉</p> <p>③文化とは何か学級で共通の認識を持つ。</p> <p>④ 外国の文化で日本に影響を与えているものはないか考える。</p> <p>クリスマス 野球・サッカー</p> <p>⑤ 日本の文化で外国の文化に影響を与えているものはないか考える。</p> <p>漫画 寿司・日本食</p> | <p>個</p> <p>↓</p> <p>全体</p> <p>個</p> <p>↓</p> <p>全体</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・意見が出てこないときは、「言葉は文化なのか」「スポーツは文化なのか」など問いかける。 ・普段の生活で、日本固有のものとは何か、外国由来のものはないかを分けるよう指示する。 ・ニュースやテレビなど、メディアから得られる情報で何かないかたずねる。 |
| <p>〈ふりかえる〉</p> <p>⑥ 犬山から世界に発信されているものはないか考える。</p> <p>ふりかえりカードに、本時の学習についてのふりかえりを記入する</p> <p>次時へ</p> <p>ふりかえりカードの活用</p> | <p>班</p> <p>↓</p> <p>全体</p> <p>個</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・なかなか思い浮かばない生徒には、犬山でほかの町や市に自慢できるものはないか考える。 ・文化以外でもよいということを伝え、いろいろな視点から考えることを伝える。 |

| | |
|--|---|
| | <p>・アジア州の文化・産業の特色や、改めて気づいた犬山のよさなどを記入するように伝える。</p> |
|--|---|

(4) 考察

今回の授業でまず感じたのは、生徒のふるさとの関心の高さである。犬山のよさを生徒に尋ねたとき、意見を出せる生徒は少ないと考えていた。しかし実際には多くの生徒が勢いよく手をあげ、「犬山城」「げんこつ」「犬山焼き」「わん丸くん」などと答えた。授業を行ったクラスは、普段、積極的に手をあげない生徒が多いが、今回の授業ではそのような生徒も積極的に挙手、発言をしていた。このことから、生徒の意欲や関心を高めるのに地域話題が有効であることが考えられる。また、授業後に、「犬山って意外といいところなんだね」と生徒が言っていたことも印象的であった。授業の雰囲気も、終止盛り上がりがあった。

しかし、反省点として、犬山のよさを資料を使って提示できず、生徒の意見のみで進めてしまったことにある。生徒は自分の意見を発表することができ、生徒内で意見の交流ができたが、資料を用いていないので話の広がりが限定的であったと思われる。社会科的な技能を郷土の学習に用いることができれば、社会科の内容だけでなく、技能も自分の生活を考える上で役立つことを実感できたかもしれない。これは次回の授業への反省点・課題である。

他の学習でも日本や犬山のことを考える時間をもうけ、一回一回の結果ではなく、最終的に郷土のことを考えられるように長期的視点で社会科の授業の計画を考えていきたい。

5 研究の成果と課題

実践を通し、手立てに基づく成果と課題を以下のように検討した。成果としてまず、手立て①「児童・生徒が興味を持てる教材の開発」について。はじめにでもあげたが、児童・生徒に地域社会に対する誇りや愛情を育てることが社会科の果たすべき課題である。地域教材の開発により、社会科の授業を単に知識の受容であったり、自分自身とは無関係のできごとであると考えていた児童・生徒の考えが、自らに密接に関係していると考え始める者が増えた。これは大きな成果である。②「地域素材を単元指導計画の中に位置づける」も、単元構想の工夫や、一時間一時間の授業の展開の中に少しずつ編入させるなどの工夫により、地域素材を組み込むことができた。④「地域の専門家の方から話を聞く」も非常に有効な手段であったと考える。

単元構想や教材の工夫により、今までよりも意欲的に授業に取り組む児童・生徒の姿が見られたり、その後興味をもって独自で調べたりするようになったのが今回の最大の成果であると考えている。授業中に「犬山ってどんないいところがあるのだろう。」「犬山の問題は何だろう。」と考え、社会科の授業が自らの暮らしに結びついていると気づくことができた。

目指す子ども像の「郷土を愛する子ども」に近づいたと実感できる。

また課題としては、今回の実践では成果とともに、さまざまな課題も見つかった。まず1つ目に手立て②「地域素材を単元指導計画の中に計画的に位置づける」、③「フィールドワークなどの体験学習を行う」では、単元計画をそろえるために学年の協力は欠かせず、またフィールドワーク等は学校全体の活動の計画にも影響する。③は興味・関心がわくということは分かっているが、実際には準備や調整に困難が伴い、その困難を克服するには多くの課題が残っている。2つ目に、④「地域の専門家の方から話を聞く」については、話を聞く時間や時期の調整の問題がある。また、地域の専門家の話を聞くのは有効ではあるが、一回専門家の話を聞いてそれで終わりではまったく意味をもたない。さらに長期的な展望を考える場合、「今年は講演があったけど、次の年はない。」「〇〇先生が異動になったから、連絡をくれる人がいなくなった。」などと、学校としての教育の方針がぶれてしまうということもおこりうる。

課題を解決するためには、当然であるが常に協力し合える教師集団や体制を作ること、学校全体で目指す子ども像を共有し行動することが重要である。

おわりに

今回の研究で我々は「郷土を学ぶ」ことに視点を置き取り組んできた。その結果、郷土を取り上げると子どもたちが大きな関心と興味を持って、楽しく授業を受けられると言うことが明らかになった。次回は、さらにこの研究を発展させ、「郷土で学ぶ」ことを実践していきたいと考える。「郷土そのものを認識するためには、郷土そのものだけをくわしくみただけではいけない。むしろ郷土を一度こえて、しかる後に郷土をかえりみる必要がある」（藁坂端午）というように、郷土を、身近に見たり、聞いたり、調べたり、たしかめたりできる生きた教材として活用し、子どもたちが生きていくうえで、物事の事象などの理解において、目に見えない関係や構造や法則を理解させるのに役立つ、という立場で活用していきたい。いずれにしても郷土が子どもたちの「生きる力」の支えとなるような指導を今後も続けていきたい。

楽しく学習や活動に取り組む姿を目指して

－機能訓練を取り入れた学習の工夫－

武山 綾乃(犬山市立犬山北小学校)

前田 実希(犬山市立犬山南小学校)

井塚 裕士(犬山市立城東小学校)

杉本 暁美(犬山市立城東小学校)

はじめに

本部会では、特別支援学級の担任が集まり研究を行った。それぞれの学級によって、在籍する児童数・学年・障がい・躰きがさまざまである。互いが児童の実態を報告し合い、それぞれの個性を大切にしながら児童を伸ばす手立てをさぐりたいと考え研究・実践を行ってきた。

子どもたちに「生きる力」を育むことが、学校教育の目標である。特別支援教育にとって「生きる力」を育んでいくためにはどんなことが必要なのであろうか。また、「生きる力」を育んだ子どもはどんな姿だろうか。それぞれの学級に在籍する児童の実態や障がいを話し合うなかで、機能訓練という言葉が浮かび上がった。それぞれの児童がより良く生きていくためには、身体に付随する様々な機能のうち、どの機能に、どのような働きかけをするとより効果があるのか考え、実践にあたることにした。

障害者基本法が改正され、「可能な限り障害者である児童及び生徒が障害者でない児童及び生徒と共に教育を受けられるよう配慮」することなどがいわれるようになった。今後、支援を必要とする子どもと接していく機会が増えていく中で、それぞれの実態から考えられる躰きを克服するための支援方法を工夫し、楽しく学習や活動に取り組む姿を目指して研究を進めることにした。

1 主題設定の理由

本来、障がいの有無に関わらず、どの子どもも楽しく学習し、伸びていきたいと願っている。同様に保護者も子どもの成長を強く願っている。しかし、特別支援学級に在籍をする子どもはまさしく「きめ細かい手厚い支援」のもとで「ゆっくりと成長」していく存在である。その支援の仕方は子どもの抱える障がいの状況や程度により様々である。子どもが自分の良さを発揮しながら伸びていくためには、教師が子どもの状態を十分把握した上で熟考し、教材の提示や支援の仕方、訓練方法の仕方が大きなカギを握る。そこで、本部会では自分の学級に在籍する様々な困難を抱えている子どもをよく観察・理解し、一人一人に合わせた機能訓練や工夫ある指導を進める。そして周りの児童や交流学級の児童と関わりながら学習能力や運動機能を習得できるよう、有効な機能訓練を取り入れてや、周りの人との関

わり方に焦点をあてた実践に取り組んだ。

2 研究の仮説

- 苦手とする運動や、困難としている活動を見極め、それを補うための機能訓練を計画的に工夫し実践を継続することで、意欲的に活動に取り組み、学力・運動能力が向上するであろう。
- 周りの友だちと関わりながら活動することで、所属意識を高め、結果として学力や運動能力が向上するであろう。

3 研究の実際

〈児童A 4年生女児〉

(1) 学級の実態

- ・ 本学級は肢体不自由学級で、4年生の女児が一人在籍している

(2) 児童の実態

- ・ 脳性まひのため車椅子で生活している。
- ・ 身体障害者手帳1種1級、療育手帳A判定。
- ・ 図工・体育・音楽・学級活動・総合的な学習の時間は交流学級で学習している。
- ・ 1年生程度の国語や算数に取り組んでいる。
- ・ 手足の筋肉の硬直が強く、手足を動かすにくい。
- ・ 食事やトイレ、移動など、多くの場面で介助を要する。
- ・ 誰かがそばにいて助けてもらうことが当たり前になっていて、日常的なことを自分でやりたいがらないことがある。(車椅子を動かす、ものを取ってくる等)
- ・ 両手を使ったり、手と目を同時に使うような2つ以上の動きを取り入れた活動は集中できず、疲れやすい。
- ・ 好奇心旺盛な性格のために新しいことに挑戦してみたいという気持ちは強いが、長続きしない。

(3) めざす子ども像

- ・ 上肢の機能を高め、日常生活で少しでもできるようになることを増やす。
- ・ 自分で動ける喜びを味わい、積極的に自分で動こうとする。

(4) 手立て

- 1) 具体物を使い、指をコントロールする活動
- 2) タブレット型端末を用いた学習
- 3) ゲームなどを通じた、学級の友だちと協力して楽しむ活動

(5) 実践

1) 具体物を使い、指をコントロールする活動

手の基本的な動作である、開く、握る、つかむ、つまむなどが苦手な児童Aに、基本的な動作を身につけてほしいと考え以下の実践を行った。

① パズル

図 97 のようなピースの大きいパズルや、形あわせパズルに取り組んだ。指の動きや、両目を使ってものと目の距離感をつかむための練習として取り組んだ。これらは昨年度から取り組んでいたが、視力の問題で距離感がつかみにくく、うまくできないでいた。4月の時点で、形あわせパズルは円柱の積み木しか穴に入れられなかったが、親指と人差し指に力を入れて持つ練習や穴まで腕を使って正確に運ぶ練習を繰り返し、冬には立方体や直方体、三角柱の積み木が穴に入れられるようになった(図 98)。積み木がストーンと音を立てて穴に落ちるのが気持ちよく、自ら「もう一度やろう。」と言って繰り返す姿が見られた。

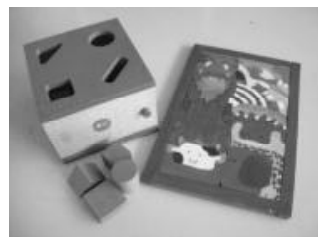


図97 形あわせパズル



図98 パズルに取り組む様子

② 新聞紙

新聞紙を用いた指の練習を実施した。1日分の朝刊を一枚ずつ最後までめくる(図 99)。紙をつまんだり重なった2枚のページを一枚ずつつまむ動作を繰り返すことで、指先の動きの練習とした。指を曲げたり物をつまんだりすることが苦手な児童Aにとって、練習を始めたばかりのころは1日分の新聞をめくるのに20分以上かかり、苦戦している様子であった。途中おしゃべりを始めたり、いらいらしたりと集中できずに教師の手を借りることも多かった。しかし、1か月2か月と毎日練習を続けていくうちに、15分程度でめくり終われるようになっていった。最初はページが重なっていることを理解できなかったが、今では自分から気づくことができるようになった。



図99 新聞めくり

また、新聞を用いて、破る、丸めるなどの指・腕を意識した動作の練習も行った(図 100)。破るためには指先に力を入れなければならないため、指が自然と紙をつまむ形になるうとする。また丸める動作にも手の平や指先を使う。この練習は3回程挑戦したが、破ることはできても、しわがつく程度で丸めるには至らなかったために本人が自信をなくし、それ以上丸める練習については実施していない。



図100 新聞やぶり

③ 磁石とり

菓子缶を活用し、缶の周りに磁石をつけ、その磁石を取って缶の中に入れる練習を実施した（図 101）。磁石の強さに違いをつけ、磁力の弱いものが操作できるようになったら少しずつ磁力の強いものに挑戦できるよう、操作段階を設けた。この活動では、指先を使って磁石をつまもうと指を動かすことができた。複数の磁石を重ねることで1つよりも持ちやすくなることや、多数の磁石を一度に移動させられることなどにも気づき、児童なりに工夫をして取り組んでいた。



図101 磁石とり

④ ペットボトルキャップの利用

ペットボトルのふたを活用してキャップ当てゲームを実施した（図 102）。ペットボトルのふたをいくつか用意し、そのうちのひとつの下にボタンを入れて隠す。キャップの場所を何度か入れ替えて、ボタンの隠されたふたを見つけるゲームである。ボタンの入ったふたを目で追うことで目の力を使ったり、ふたの下を自分で確認することでふたをつかんだり持ち上げたりという動作を自然に行うことができた。児童はこの活動を気に入った様子で、何度も繰り返し、活動を楽しんでいた。



図102 キャップ当て

⑤ マラカス作り

機能訓練の一環として、マラカス作りを行った。ペットボトルにビーズを入れ、持ち手を付けて音が鳴るようにしたもの（図 103）。ビーズを持ち上げ、ペットボトルの中にビーズを入れる活動を中心に行った。小さなものを机の上から取り上げるだけでも、たいへんな集中力を必要とする児童Aには少し難しいと思ったが、楽器等の玩具に興味を示すため、挑戦してみた。活動中に助言などはするものの、教師はほとんど手を出さずに見守った。今までボタンやキャップなどをつかむ練習はしていたが、ビーズほど小さいものに挑戦するのは初めてである。最初は苦戦していたものの、毎日練習したため早くコツをつかみ、10分もするとビーズを持ち上げることができるようになった（図 104）。ビーズを寄せてつかもうとしたり、中指をうまく使おうとしたりと、効率よくつかもうとする工夫を自分で考え出しながら活動を進めた。



図103 児童Aの作ったマラカス



図104 ビーズ

厚みのないビーズはつまむことができないので諦めるなどの取捨選択も行っていった。持ち手は洗濯機のホースだが、柔らかく凹凸があるため、児童Aの手でも握って振ることができた。ペットボトルにさらに飾りつけなどをして、音楽に合わせて楽しそうに楽器を

振り、自分だけの力で作り上げた達成感を感じている様子であった。最終的に、児童Aは30分程度で16個のビーズといくつかの鈴をペットボトルに入れることができた。

2) タブレット型端末を用いた学習

児童Aは手の力が弱く、鉛筆をしっかりと握ることが難しい。そのため筆圧が弱く、補助なしでは文字を書くことができない。パソコンに興味があり、使いたいという気持ちは強いが、マウスを思う通りに動かすことができなかつたり、マウスポインタを目で追うことができなかったりするため、うまく活用することができなかった。そこで、指で触れるだけで使うことのできるタブレット型端末を用いて学習を行った(図105)。絵合わせゲームや算数のアプリなどを用いて、目的のものに触れたり移動させたりする練習や、ひらがなアプリでひらがなをなぞり書きする練習を繰り返し行っている。タブレット型端末は指で直接触れることで動かすことができるため、思う通りに動かしたり、ひらがなを直接指で書いて練習をしたりすることができる。また、今までは避けてきたひらがなを書く練習を毎日行うようになり、書くという活動を通してひらがなの形を理解できるようになってきた。さらにひらがなアプリの音声が付伴することで自然と形と読みが一致するようになり、苦手だったひらがなの読みも速くなってきた(図106)。



図105 ひらがなアプリ



図106 タブレット型端末での学習に取り組む様子

3) ゲームなどを通じた、学級の友だちと協力して楽しむ活動

児童Aは同じ学年の友だちと関わるのが大好きだが、外で遊ぶことができず特別支援学級の教室内で放課を過ごすことがほとんどである。そこで、学年や特別支援学級の児童とも楽しく遊ぶことができるよう、百人一首やカルタ、双六やパズル等を用意し、一緒に遊ぶよう声をかけた。すると坊主めくりやトランプ、パズル、双六等で特別支援学級の友だちと遊ぶ習慣ができてきた。特に坊主めくりや双六では、勝つと嬉しい、負けると悔しいという気持ちを表情に出して、友だちと話しながら楽しく過ごすことができる。児童Aだけでは活動できないことも、周りの児童が自然に手助けをし、一緒に遊ぶことができた。しかし、トランプの場合は、児童A自身がカードを持つことができないため、誰かがついていなくてはならない。また、ルールも難しいため、理解せずに言われたカードを出すだけになってしまう。一緒に遊ぶ児童がトランプをやりたがるため参加はするが、児童Aは楽しめないでいることもあったので、今後、本児も楽しめる組みを考えていきたい。

〈児童B 2年生女児、 児童C 5年生男児〉

(1) 学級の実態

- ・本学級は知的障害学級で、2年生女児1名、5年生男児1名が在籍している

- ・2年女児（以下児童 B）は、担任が付き添う形で、給食と学年行事を交流学級です。後期からは朝の会にも参加している。5年男児（以下児童 C）は、担任の付き添いなしで朝の会、音楽、体育、給食、学年行事に参加している。その他の教科を特別支援学級で学習している。学習に関しては能力が異なる為、別々に取り組んでいる。
- ・児童 B は集中力が持続せず、基本は一对一の個別対応である。また、1時間のなかで休憩を挟みながら取り組んでいる。児童 B が休憩を取っている際も、児童 C は個別に学習を進めている。

(2) 児童の実態

〈児童 B〉

- ・療育手帳 C 判定。 ・放課と授業中の認識があまりできない。
- ・集中力が持続しない。（15分以上は学習に向かうことができない。）
- ・ひらがなは 13 文字程度読める。 ・10 までの数唱ができる。
- ・1～10 までの数字は手本を見ながら書くことはできるが、数の概念をとらえていないため事物との対応は難しい。
- ・色の認識ができない。（違いは分かるが、どんな物に当てはまるのか、何を表す色なのか分からない。色の名前はピンクのみ分かる。）
- ・じゃんけんができない。

〈児童 C〉

- ・療育手帳 C 判定。
- ・聞いたことを、繰り返し言うことは難しい。
- ・自分ができないこと、分からないことがあると怒り出す。（自傷行為を含む）
- ・物音や話声が気になり、何かの途中であつても見に行こうとする。
- ・分からないときに、何かを見てまねすることはできない。
- ・文章の内容読解ができない。
- ・注視することができない。
- ・友だちと遊ぶとき、遊び道具を分け合つて使うことができない。

(3) めざす子ども像

〈児童 B〉

- ・授業と放課との認識ができる。
- ・ひらがなの読み書きができる。
- ・一対一対応をして数を唱えることができる。

〈児童 C〉

- ・目標をもち、感情的にならず努力することができる。
- ・何かをイメージしたり、物事を考えたりしようすることができる。
- ・友だちと遊ぶことができる。

(4) 手立て

- 1) 個人のスキルや運動を高めるためのトレーニング
- 2) ふりかえり表の活用
- 3) 交流学級の児童と触れ合い

(5) 実践

- 1) 個人のスキルや運動を高めるためのトレーニング

① ぬり絵【児童B、C】

児童Bは、好きなようにぬり絵をさせると、ピンクか鉛筆で線をなぞるように書いて終了になっていた。そこで、どの部分が何であるか伝え、そこを何色で塗るかを色鉛筆を一本ずつ渡して塗らせることにした。すると、少しずつそれぞれの色を認識しながら部位を別の色で塗ることができるようになってきた

(図 107)。

初めは、色の名前や葉っぱをどの色鉛筆で塗ったらよいか分からなかったが、今では、緑の色鉛筆を見せると、「葉っぱの色」と答えることができるよ

うになり、「緑色はどれ？」と尋ねると緑色を選ぶことができるようになった。しかし、まだ、色とその名称が一致しない色がある。児童Cは、「丁寧に」「きれいに」「はみ出さないように」を目標にぬり絵を行っている。児童Cも塗り絵の回数を重ねるうちに、少しずつ目標を達成し、上手く塗れるようになってきた(図 108)。

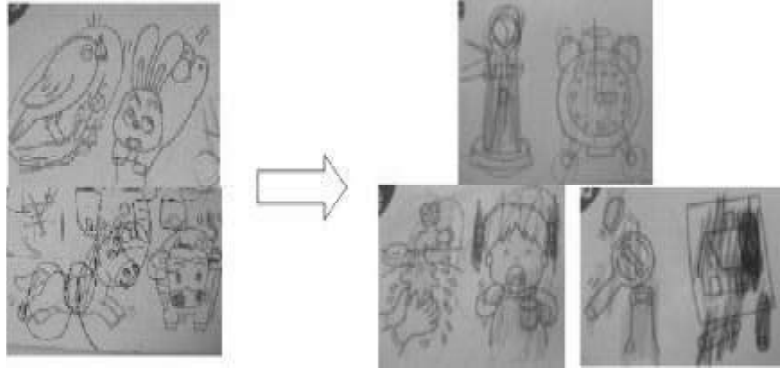


図107ぬり絵 (児童B)

② 線なぞり・迷路・点つなぎ

児童Bは、目の動きが鈍く、なかなか注視することができない。そこで、点つなぎを行うことで、目の動きが養えるのではないかと考え実践した。線を追っていく線なぞりは、目で線を追いながら最後までなぞることができ、楽しみながら取り組むことができた。点つなぎは、番号がとんでしまうことがまだあるが、定規を用いて根気よく点を結んでいる。

迷路は、ゴールまで描かれた道が認識できず、スタート地点とゴール地点を、直線で線を引いてしまっていた。そこで、二本の線を引いて簡単な道を作り、鉛筆を自動車と見立て「壁にぶつからないように安全運転でゴールしようね。」と声をかけ、一本道をなぞらせるようにした。直線の道や90度ほどのカーブを交えた道であれば、スタート地点から



図108 ぬり絵 (児童C)

ゴールまで辿り着くことができるようになった。

③ パズル

一部から全体を構成する力を養うためにパズルを実施した。児童Bは、紙芝居を横三つに切ったものや、縦横に4等分したものなど全体がイメージしやすい形を行っている(図109)。児童Cは、24～70ピースの大きさで一部から全体をイメージするのが難しいパズルに挑戦している。児童Cは、初めは友だちと一緒にいたが、今は一人でもできるようになってきた。



図109 パズル(児童B)

④ まねっこリズム

聴覚からの刺激を体感させることを目的として、耳で聞いたリズムを再現するリズム遊びを行っている。教師や子どもが手拍子をして、同じように手をたたく活動を行った。児童Bは、休符を休むことができず、4拍のリズム打ちしかできなかった。そこで、休むときには必ず「ウン」と強調して体を使いながらリズム打ちを続けてみた。すると、休むことはできないが、休符のタイミングで「ウン」と言うことができるようになった。また、「ウン」の場面でリズム打ちをしなかった時、ほめると、少しずつ「ウン」と言いながら休むことができるようになってきた。児童Cは、リズムが難しくしなければいけないので、リズム符を見せて行わせるようにしてきた。しかし、8分音符が混ざると、耳で聞いてもなかなか同じリズムを打つことは難しいようであった。できないものを続けると、怒り出してしまっているので、できるリズムに少しずつ8分音符を混ぜて行うようにした。

⑤ はしつかみ

児童Bは、はしの先をそろえて持ったり、細かいものを取ったりすることが苦手なため、はしを自然に操作できるように「はしつかみ」を行った。また、同時に色の認識を行わせることも目的とした。固いものではつかみにくいので、手芸に使うふわふわのボールをはしでつかませ、それぞれ色別の皿に分けさせた(図110)。根気よく活動に



図110 はしつかみ(児童B)

取り組めるよう、児童Bが気に入っている自分のはしを用いて行った。ふわふわのボールがつかみやすいことから、はしつかみの活動を気に入っており、集中して取り組むことができ、1時間に何度も挑戦することができた。また、色分けも同じ色同士にまとめることができている。はしの使い方については、顕著な変化は見られないが、給食を食べている時に、おかずやご飯粒がつまみにくいと感じたときなど、箸をトントンとそろえる姿がよく見られるようになってきた。

⑥ 色分け

色の異なりを認識することを目的としてビーズを色で分ける活動を行った。色々な種類の大き目のビーズを準備し、色ペンで書いた円の中にビーズを分ける活動を行った（図 111）。初めは、ピンク、青、赤、黄色など、違いがよく分かるものを用意しておき、それぞれの色に分けるよう指示した。この活動も楽しいようで、すぐに色分けを終えることができた。そこで、ピンクと薄いピンクと濃いピンクというような、少し色分けが難しいよ

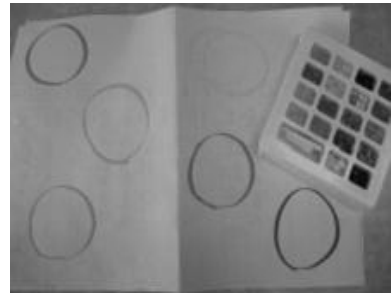


図111 色分け（児童B）

うなビーズを準備した。この活動は難しい様子で、いくつか間違えるビーズがあったり、色分けを途中で諦めてしまったりした。しかし、少しずつ繰り返すうちに、違いが分かるようになり、間違いが少なくなってきたり、間違えても自分で直すことができるようになったりした。児童Cは、色の認識はできているので、指先の感覚を養ったり、全体構成力を養うために、ビーズを紐に通すことを行っている。色の順番を指定したり、個数を指定したりして変化をつけて行っている。

⑦ 手先を直接使う練習

指先の感覚を良くしたり、手先の感覚から数字との対応を把握させることを目的として、紐でリボン結びをする練習、はさみを使った練習、ドミノ倒し、ビーズ通し、じゃんけん指を動かす練習、授業の開始・終わりの挨拶時に「○時間目」を指で示すことなどを行ってきた。

児童Bは、これまで、じゃんけんの意味も分からず、じゃんけんの「グー」「チョキ」「パー」も手で表現できなかった。そこで、何時間目かを指で数を表現させたり、指の数を一つずつ触れながら数えていったりと、指を使う機会を増やしていった。すると、何時間目かということが、ゆっくりではあるが意識的に指が動かして表現できるようになり、指の数字を見て、いくつか数えられるようになってきた。例えば、4時間目に指で「4」を表して、それが何の数字か分からなかったときは、「1、2、3、4」と触れながら数えて、「4時間目」と答えることができるようになった。そして、じゃんけんでは、初めに「チョキ」が出せるようになり、今では、じゃんけんの勝敗は理解できないが、「グー」と「チョキ」でじゃんけんに参加することができるようになった。

2) ふりかえり表の活用

① 毎日の振り返り表

一日のがんばりを振り返り、意欲につなげるために毎日の振り返り表を導入した。朝、1時間目が始まる前に、一日の予定を振り返り表に書き込み、児童が一日の見通しをもてるようにした。6月頃からは、より家庭との連携を深め、児童の意欲につなげられるよう、様式を変えた（図 112）。各時間ごとの活動内容や頑張り、その時の様子を記入できるような様式にし、それをファイルに綴じて毎日持ち帰らせ、保護者が一日の様子を確認できるようにした。すると、家庭との連携もとれ、学校で何を学んだのかが分かり、家庭でも

復習することができるようになった。また、児童の頑張りを家庭で褒めてもらえる機会が増え、児童の意欲につながった。「きゅうしょく」の欄で、「何がおいしかった」と児童が書いたり、「何は残してしまった」と児童の食生活も連絡できた。

| | きょうが | やったこと | できたかな？ | 先生 |
|---|------|-------|--------|----|
| 1 | | | 😊😊😊 | |
| 2 | | | 😊😊😊 | |
| 3 | | | 😊😊😊 | |
| 4 | | | 😊😊😊 | |
| 5 | | | 😊😊😊 | |
| 6 | | | 😊😊😊 | |

漢字で書くように
している。

児童Bは、授業の内容を自分で書き、児童Aの分は教師が書いている。

教師が、児童の授業の様子を見て、◎・○・△で評価する。

何を残したとか、食欲の様子も伝えられるので良い。

児童自身が「できなかった」「怒ってしまった」と感じたときは、このマークに印をつけている。

図112 振り返り表

児童Bは、ひらがなを十字程度しか理解できていなかったもので、マーカーで教科を書いたものをなぞらせていた。一枚ずつ持ち帰らせている時は、家で、先生のまねごとのように、全部なぞり直していたそうだが、ファイルに綴るようになってからは、大切なものと少し理解したのか、振り返り表をいじることがなくなった。また、毎日振り返り表を書き続けてきた結果、きれいになぞれるようになってきた。そして、漢字でなぞらせている曜日も、それなりに文字に見える程度になぞれるようになってきた。本人も、書けたと思ったときは「見てー」と見せにくるようになった。ひらがなが40字程度理解できるようになってからは、マーカーで文字を書かずに、一日の予定表ボードに貼ってある教科カードを見せて書くようにした。文字を指しながら、「こ」「く」「ご」と一文字ずつ伝えながら書くよう指示した。初めは、調子のいい日しか書くことができず、マーカーの字をなぞりたいと言う時もあった。しかし、続けるうちに自分で書くことが習慣になり、今では、「こくご」のみ、カードや担任の助言がなくても書くことができるようになった(図113)。

児童Cは、振り返りに書く内容が少し変わってきた。初めは、「たのしかった」「おもしろかった」と、何にでも通用する書き方であったが、「勉強した内容を書こう」と助言したり、内容が保護者に分かるように言葉を付け加えたりしていたら、「新しい漢字をやりました。」「時計の勉強をしました。」と書く内容が変化した。また、「時計でおこった。」など自分の様子を記入することもあり、前時の勉強では怒ったけど、今回は怒らなかった時は「おこらなかった。」と書くようになり自分の成長も確認できるようになった。

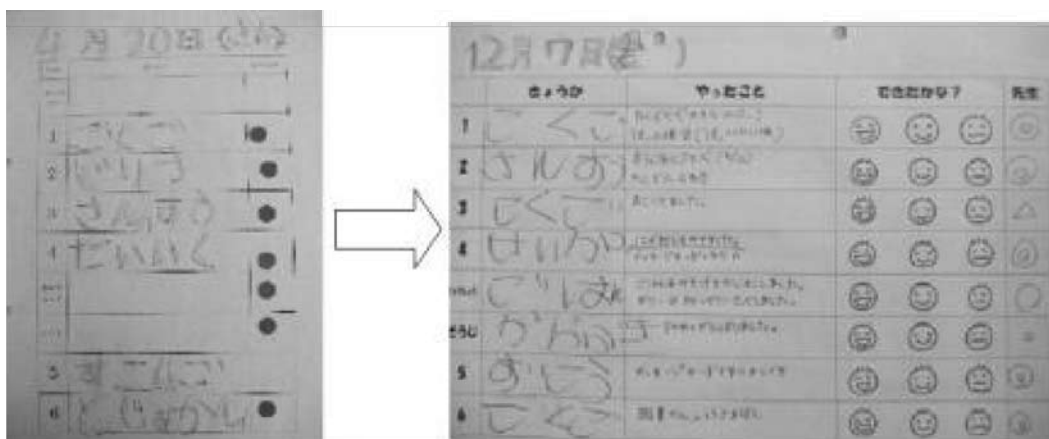


図113 振り返り表からみる児童Bの成長

② 体育時のふりかえり表

プールの約束を守らせ、意欲をもたせるためにプール用のがんばり表を作製し記入できるようにした(図114)。

1週間に3回プールに入るので、1枚に3日分記入できるようにし、先ほどの振り返りファイルに綴じて1週間分のプールの振り返りを家庭で確認できるようにした。下の方の空欄は、個別の取り組みを記入し、評価している。

例えば、児童Bは「うさぎとび」「さかな」などで、児童Cは「いきつぎ」「かえるとび」などである。この空欄は、児童と相談しながら、できるようになったら次の取り組みへと変化させている。

プールを使わない時期は、同じ様式の遊具サーキットトレーニングのがんばり表を記入させた。体育時の振り返り表は、体育が終わり教室に戻ってから記入するので、できていなくても「○」をつけるようになってしまい、振り返り表の意味がなくなっていた。その場その場で「できた」「できなかった」を確認する必要があったので、今後は用紙を実施場所へ持って行き、できたらその場でシールを貼るなどをすると児童の意欲につながるのではないかと考える。



図114 プールがんばり表

③ 音読カード・音楽カード

国語の時間には、必ず音読を取り入れているので、音読の意欲向上につながるよう、音読カードを記入させるようにした。また、同じ目的で音楽の時間にも、音楽カードを導入した。児童Bは、その日の気分によって音読をしたり、しなかったりなので、音読のことで大騒ぎすることもしばしばあった。しかし、音読カードを取り入れてからは、音読をしたがらない日も、「音読カードが書けないけどいいのかな。」と聞くと、「音読をする」と言い、音読を欠かしたことはない。「今日はどんなシールかな」と、シールが貼れるのも楽しみの一つようだ。また、音読カードに読んだ作品の題名を書くときも、毎回同じ言

葉を書いていると、助言をしなくても、自然と自分で書けるようになってきた。

④ 学習の順番

それぞれの児童が一時間に何をどのような順番で学習するのか見通しがもてるようにした(図 115)。国語と算数のみこの表示を行っている。授業の始まりに、初めに少し説明をしてからそれぞれの課題に取り組むようにした。児童はそれぞれに別々の課題をするので、今までは答え合わせを待ったり、分からないところを聞くために待ったりと待ち時間があり、集中が途切れてしまうことも少なくなかった。しかし、これを利用するようになってからは、一つの課題が終わってもボードを見れば次に何をしたら良いのかが分かり、自分で学習を進められるようになり、待ち時間も減った。新しいことや難しいことを学習する場合は、それぞれの時間帯をずらして、学習の順番を配置しておく、スムーズに学習できた。今では、授業の時間になると、児童Cは、自分で学習の順番カードを持ってきて、担任に聞きながら貼るようになった。

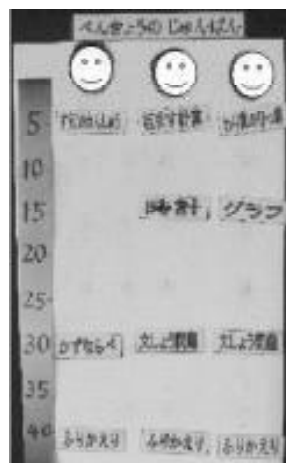


図115 学習の順番

3) 交流学級の児童と触れ合い

① 放課での遊び

児童Cは、交流学級へあまり行きたがらなかった。理由は、一緒に遊んでくれる友達がいなかったり、分からない場合、誰にも聞けず分からないままになってしまったりしていたからだ。しかし、本当は友だちと遊びたい気持ちをもっており、放課になると、運動場を見つめていた。そこで、交流学級の数人に声をかけ、特別支援学級へ遊びに来てもらうようにした。なかなか外に出て遊ぶことはないが、教室でボウリングやパズルや積み木などをして遊んでいる。今までは、同じクラスの子であっても、声をかけることができなかったが、交流学級の子がよく遊びに来てくれるようになってからは、遊ぶなかで少しずつ話をしていけるようになり、「〇〇くん、また来てね〜。」「あれ、△△くんは来ないの?」と気兼ねすることなく声をかけることができるようになった。

② 学習でのつながり

児童Cは、音楽では、リコーダーや篠笛が上手く吹けず、毎回、音楽の授業から怒って帰ってきたり、授業の前に「音楽に行きたくない。」と言ったりしていた。そこで、音楽の先生と相談し、音楽の時間は音楽の先生に振り返り表を見せて評価をもらうようにした。また、声をよくかけてくれる児童が近くになるような座席面での配慮を依頼した。すると、今までは「分からないので、教えてください。」と伝えることができずに怒っていた児童Cであったが、隣の席の子によく声をかけてもらい、教えてもらうことで、授業で何をしているのかが分かるようになった。難しそうな内容のことは、授業の前半に

行い、簡単そうな内容のことを後半に行い、「できなかった。」「分からなかった。」という思いよりも、「できた。」という気持ちが出るようにした。振り返り表にも、ここにマークに丸をつけるようになり、音楽の授業から「楽しかったー。」と言って帰ってくるようになった。また、体育の授業でも、並び方が分からなかっただけで怒って帰ってきてしまっていたが、気兼ねなく話ができる友だちができたので、聞いたり、声をかけてもらったりすることが増え、怒って戻ってくることが大変少なくなった。

〈児童D 2年生男児〉

(1) 学級の実態

- ・本学級は、知的障害学級で、在籍児童は3名（2年男子2名、2年女子1名）である。
- ・児童3名は、同じ交流学級で（国語・算数を除く）体育・音楽・生活科・図工の学習を行っている。交流の授業へ参加する際には、特別支援学級の担任が付き添う形態をとっている。
- ・特別支援学級では、国語・算数・生活単元・道徳・学級活動を行っている。

(2) 児童の実態

- ・療育手帳C判定IQ=65（生活年齢8歳0ヶ月 精神年齢5歳0ヶ月）24年9月田中ビネー「軽度精神発達遅滞」
- ・肥満。ズボンが下がり、おしりが出ていることが多い。
- ・よい姿勢の維持が難しい。よく椅子の上に正座座りして机に肘をつく。
- ・はしやすプーンを使用できるが、皿に口を近づけて食べたり、親指をかけずに碗をもったりする癖がみられる。
- ・気持ちの切り替えが難しく、集中力が持続しない。学習を最後までやりきれない。
- ・後に楽しみな活動があると、終了時間間際に課題をさらりとやり終える。
- ・交流では、手遊びをしたり、教科書の指定されていないページを読んだりして、注意が散漫である。反面興味のある昼放送などは集中してよく聞くことができる。
- ・ひらがなは読める。しかし、教科書を読むのはたどたどしい。
- ・ぬり絵は、乱雑で色が枠をはみ出す。迷路では、時々、脱線してしまう。書き始めるのに時間がかかる。また、時々ひらがなを忘れるので、ひらがな表を掲示して見せている。
- ・数字の順序は、およそ50まで、理解できつつある。計算は、15未満の繰り上がり繰り下がりのある加減の計算は指を使って行うことができる。減加法で、10から引いた数を答える。最後に、引かれる数の一の位の数を足し忘れてしまう。
- ・自分の思いを相手に伝えることができる。会話を楽しむことができる。元気で明るい。友だちとゲーム等で仲良く遊ぶことができる。

(3) めざす子ども像

- ・基本的な生活習慣の確立をはかる。

- ・読み書きの基礎の定着をはかる。
- ・友だちとかかわりを通して、学びを深める。

(4) 手立て

- 1) 基本的な生活習慣の定着
- 2) 書字の上達
- 3) 友だちとの関わりを深める

(5) 実践

- 1) 基本的な生活習慣の定着にむけて

① 衣服の着脱・衣服の整頓

生活面では、児童 D の改善させたい行動を焦点化し、優先順位を決めた。動作を細分化し、スモールステップで改善・克服にむけて指導することにした。

まず、衣服の着脱が課題と考えた。教師や親が衣服の着脱をしていたが、自分自身で着替える力があると推察した。衣服の着脱では、

- [1]左そでを右手でもち、左腕を抜く。
- [2]右そでを左腕でもち、右腕を抜く。
- [3]頭を抜く。
- [4]体操服を着る（頭を通してから、そでを通す）。
- [5]ズボンを脱ぐ。
- [6]([1][2][3]の動作が定着せず服が裏返るので)裏返しになった服を元にもどす。
- [7]上の服をたたむ。
- [8]（ズボンも裏返るため）裏返しになったズボンを元にもどす。
- [9]ズボンをたたむ。
- [10]体操袋にたたんだ服をいれる。等である。



図116 衣服を半分にたたむ練習

体育は週3回で、一年間通して、全介助で取り組んでいる。指導を入れないと、服やズボンを裏返して脱いでしまう。[1][2][3]の動作の手順が定着するよう意図して取り組んだ（図116）。

② 学習準備（朝の準備・帰りの準備など）

毎日の学習準備（朝の準備）では、

- [1]あいさつをして入室する。
- [2]ランドセルを机の上に置く。
- [3]ランドセルから連絡帳をだす。教師の机の上へ提出する。
- [4]ランドセルから筆箱・教科書・ノートを出して、机の中に入れる。
- [5]通学帽をランドセルの中に入れて、ランドセルをロッカーに置く。
- [6]名札をつける。

等があげられる。手順が定着して、生活自立につなげることを意図した。

③ 食事の仕方（姿勢・皿の持ち方など）

食事の際には、親指をかけて碗を持つように声かけた（図 117）。床面に座る際は、（側彎防止のため）あぐら座りをするように、その都度声かけた。学習時には、肘つきや椅子の上に正座すわりを、修正するように声かけた。



図117 茶碗を持つ指導場面

2) 書字の上達に向けての取り組み

- ・迷路
- ・点つなぎ
- ・ぬり絵（クーピー→色鉛筆）…ドラえもん・ポケモンのぬり絵
- ・なぞり書き・視写（漢字ドリルの書き込み。漢字ノートへなぞり書き練習）

書字の指導として「迷路」「点つなぎ」に取り組んだ。迷路では枠をはみ出さないように線を引く。点つなぎでは、点と点を正しく結ぶ。「塗り絵」では枠内からはみ出さずに隙間のないように色を塗ることを目標とした。児童 D が興味を示す課題を意図的に組み込み、これらの取り組みが「なぞり書き」「視写」等の文字を書く技能の向上につながると推察した。

「なぞり書き（カタカナ）」では筆順ごとに色分けして、始点に点を打つ配慮をすると理解が進んだ。「なぞり書き（漢字）」では、画数が少ない漢字は筆順ごとに色分けをして、画数が多くなってくると、部首カルタ等で共通する部分を意識づけた上で、部首や部分ごとに色分けして提示した。プリントを拡大して課題の指示をした。

3) 友だちとの関わりについての取り組み

- ・ことわざかるた
- ・漢字カードカルタ
- ・部首カルタ（ボードに部首を記入し提示も行った）

児童 D は、一人で課題に取り組む学習は進まないが、友だちと共に取り組む学習は楽しく取り組める。またカルタは、読み手は文を読む学習になり、取り手は読み札を聞いて札を探して取るため、聞く学習につながる。しかし、そのままカルタを実施すると、一人勝ち



図117 部首カルタに取り組む場面

する児童ができて、全員が楽しめないことが多い。そのため、ことわざカルタや漢字カードカルタでは、各児童の机の上に取り札を置いて、自分の机の上に読まれた札がある時に取る。友だちの机の上にある時は、どこにあるのかみんなに伝え合うことをルールとし、全員が楽しめるようにした（図 117）。また、部首カルタ取り札を人数分用意し、各児童が全員札が取れるようにした。読み札を聞いて、読み札の部首を見て、児童一人一人が取

り札を取れるよう配慮した。

〈児童E 3年生男児、 児童F 6年生男児〉

(1) 学級の実態

- ・本学級は情緒障害学級で、2年生男子1名、3年生女児1名、3年生男児1名、5年生男児2名、5年生女子1名、6年生男子1名の合計7名が在籍している。また、通級として1年男児が国語の時間のみ週8時間学習に来る。
- ・担任1人、加配担任1人の2人で学級を担当している。
- ・交流学級へは、児童の能力に応じ行ける児童は行き、行けない児童は特別支援学級で学習を進めている。
- ・食事や排泄、行動等介助が必要な児童は在籍をしていないが、場面によって補助を必要とする児童はいるので、その都度補助を行う。

(2) 児童の実態

〈児童E〉

- ・療育手帳C判定。
- ・ひらがな一文字ずつ拾い読みができる。平仮名のみの絵本はたどたどしいが読める。
- ・カタカナは平仮名と違うという認識はある。平仮名と同じ形の数字は読める。
- ・指を使用して1桁の足し算、1桁の引き算ができる。正答率は半分程度。
- ・数は50まではかける。順序を表す序数の意味が十分理解できていない。
- ・数字、音、量数が一致していない。(3、さん、●●●が不一致)
- ・色塗り等はみ出してしまうが、指示されたことは理解してやろうと努力する。
- ・筆圧が安定していない。そのため書いた文字が不明瞭。
- ・リコーダーの穴を正しくふさぐことができない。
- ・指先の機能がまだ不十分のため、細かい作業は苦手とし、時間を要する。

〈児童F〉

- ・療育手帳C判定。判定IQ=65 精神手帳2級。
- ・自閉症、水頭症(頭の水抜き手術2回実施)、目の手術1回。
- ・計算力、漢字能力は学年相当である。文章理解は不十分。
- ・理科は実験を怖がり、実験には参加しない。
- ・手先が不器用でコンパス、針等鋭利なものを使用する学習は怖がる。
- ・図画工作や家庭科等苦手とし、図案や構想を考えることは出来ない。
- ・走ったり、跳躍したりは自分のペースでゆっくり取り組む。
- ・基本的に手先がうまく動かず、母親や教師にゆだねる場面が多い。
- ・こだわりが強く、気に入ったものには長時間執着する(音・写真)。
- ・耳に残るフレーズは所かまわず声に出す。

(3) めざす子ども像

- ・目の動きや身体的な運動機能を高め、生活能力の発達や学習能力の向上。
- ・友だちと楽しく関わり、周りの友だちとコミュニケーションを図れるようにする。

(4) 手立て

- 1) スキルや運動能力を高めるための手立て
 - ① ビジョントレーニング
 - ② リズムの運動（体・手等）
 - ③ 具体物を活用した学習
- 2) 友だちとの関わりを楽しむ手立て
 - ① カードゲームの意図的導入（トランプ、ベアーズカード、カルタ等）
 - ② 集団遊びの導入（ビンゴ、爆弾ゲーム、ドミノ、ハンカチ落とし等）
 - ③ エンカウンター、SST、GWT の実施
 - ④ がんばり記録で、毎月学級の窓に絵を作る。

(5) 実践

- 1) 一人一人のスキルや運動能力を高める手立てとして以下のような実践を行った。

①ビジョントレーニング

毎週火曜日の朝の時間帯を活用し、目の動きを高めるトレーニングを実施した。

- ・指と鉛筆と目を使って目の動きを活発にする運動（図 118）
- ・教師と同じ動きを真似る運動
- ・迷路や点つなぎ等、目で確認し、指を動かす活動
- ・フラッシュカードによる数字当て、絵当て活動

指とペンを目で追う活動は、首を動かさず、目だけで物体を追う練習を重ねた。教師の手拍子の下、左右に目だけ動かす活動を定期的の実施した。また、動きを真似る活動は動物や動きを指定し、みんなで真似る活動を行った。ゴリラのような簡単なものは真似ることが



図118 指とペンを目で追う活動

ができるが、スポーツ等はこつを掴んで真似ないといけないので、児童 E、F にとって難しいものであった。迷路や点つなぎでは市販のものを活用し、児童が好みそうなアニメの点つなぎや迷路を活用し、楽しく取り組めるようにした。しかし、児童 E は数字を 50 程度しか覚えていないため、少ない数字の点つなぎを取り入れたが、線を引くことも指の運動につながり、筆圧が徐々についていった。フラッシュカードは、冬であればクリスマスにちなんだ絵をカードにしたりして、子どもが楽しく絵を判別できるようにした。

②運動（体・手等）

毎週水曜日と木曜日の朝の時間帯は体育館や運動場に出て、運動を行った。内容としては

- ・走る、ロクボクに登る
- ・フラフープでケンケンバをする
- ・平均台
- ・縄跳び、ゴム跳び
- ・ラダー、ボール運動（図 119）

等である。いろいろな種類の動きを取り入れ、体の様々な部位を動かせるよう工夫した。体育という感覚ではなくゲームという感覚にしたかったので、皆が楽しめる活動を実施した（図 120）。

また、教室の中では朝の会や帰りの会で時間に余裕が出来た時に、ミニ運動を行った。内容としては手拍子を真似る、進化じゃんけん、まねっこ足踏み等なるべく、体の細部まで動かすことを意識した。

③具体物を活用した学習

児童 E は学習面での遅滞が目立っていたので、具体物を多く使用し、目や耳、手を使って五感からの効果を狙い学習を進めた。国語では平仮名やカタカナを名刺程度の大きさのカードにし、言葉をつないだり、組み立てたりした（図 121）。最初は担任が言葉を指定していたが、繰り返すうちに自分で言葉をつなぎ、好きな言葉を作って楽しむようになった（図 122）。

また、児童 E は漢字に興味を示し始めていたので、漢字学習もスタートした。最初は簡単な文字から初め、漢字カードを作り（図 123）、字と絵を一緒にカードに書き、頭の中に漢字がイメージとして定着しやすいようにした。学習時には一緒に指を使って書き順を何度も何度もなぞり、体で覚えられるようにした。

算数については、数字ブロックのカードを活用した（図 124）。10 桁の中に●で色がつけてある数字ブロックのカードを見せ、10 という概念とその中の数量を把握するように言葉をかけ、フラッシュカードのように数字ブロックを見せ、その数を毎日言うようにした。

また、数字・音・数量の概念が一致しておらず、1 つ 1 つの認識も不十分であったので、カードを使い、絵と数字と読み方をカルタのようにマッチングして取る遊び



図119 体育館でのボール運動



図120 ボール運び



図121 平仮名・カタカナカード



図122平仮名カードで言葉を作る様子



図123 漢字カード

を取り入れ、みんなで時間がある時に楽しく取り合った（図 125）。特に数量のカードは子どもが喜びそうな食べ物や、乗り物、動物を描き、親しみやすいように具体物にした。

学習が進み、100 までの数字を数える学習入った時に数え方や数量を確認する学習で、エコキャップを活用した。ただ数字を言うのではなく、具体物を使い、一緒に数える練習をすることで指と目を使い、より一層定着すると考えた。その時に活用したのが色別のエコキャップである（図 12631）。いろいろな色がついたキャップを活用し、色ごとに 10 個でまとめ、10、20、30・・・といった 10 のまとまりの概念もここで確認した。色が違うので、色事のまとまりを考え、数を数えることができ、自然と 100 までの暗唱につながった。

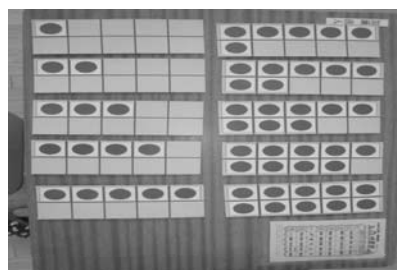


図124 数字ブロックカード

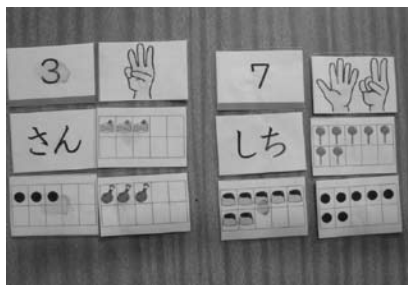


図125 数字・音・数量のカード

2) 学級として関わりを高めるための手立て

① カードゲームの意図的導入

休み時間や学級の時間を使っていろいろなカードゲームを行った。

- ・トランプ（ババ抜きや7並べ）（図 127）
- ・カルタ（ことわざカルタ、人名カルタ、国旗カルタ、動物カルタ、昔話カルタ等）、
- ・ベアーズカード

等を、その時に応じてチョイスし、できるだけみんなで楽しめるものを行った。

最初はルールを確認しながら、やり方を説明したり、みんなで楽しめるように約束やルールを確認したりした。また、道具を大切に使用しない場合には行わない等扱い方も決めて実施した。カードゲームに慣れてくると、休み時間を楽しみにし、みんなで声を掛け合い、だれからカードを引くなどじゃんけんをしながら自分たちで遊びを進める場面が増えた。



図126 エコキャップを使って数える学習



図127 休み時間にカードゲームを楽しむ様子

② 集団遊びの導入

休み時間や学級の時間を活用して積極的にを行った（図 128）。

- ビンゴ
- 爆弾ゲーム
- ドミノ
- ハンカチ落とし

等、集団ゲーム的なものを意図的に行った。

最初は心配であったが、子どもたちは予想以上に楽しそうに活動を行った。特にハンカチ落としやだいこん抜きゲーム等体をフルに活用するものは楽しかった様子で、学級活動の時間にはこれらをリクエストをし、みんなで楽しんでいる。また、時折交流学級の友だちや交流学級の先生、校長先生も一緒に遊びに加わり、集団で遊ぶことを楽しむようになった。



図128 ハンカチ落としを楽しむ様子

③ エンカウンター、SST、GWTの実施

学級活動の時間にエンカウンターや SST 等を行った。普通学級と比べると集団としての規模が小さいので、小集団で出来るエンカウンター等をセレクトして実施した。

2者択一の「あなたはどっち」では、2つに1つを選び、みんなで理由を言い合ったり、互いの理由を聞き合ったりして楽しんだ。また、SST ではみんなで指示にしたがって色を塗ったり、絵を描いたりして力を合わせて完成させる活動に燃えた。

④ がんばり記録で、毎月学級の窓に絵を作る。



図129 6月毎日のがんばり記録



図130 6月 外から見た完成の絵

絵の中に言葉を記入



図131 12月毎日のがんばり記録



図132 12月 外から見た完成の絵

その日のがんばりを毎日紙に書いている（図 129、131）。それをつなぎ合わせるとその月にあった絵になるようにし、毎日外側の窓に貼っていった。月の終わりには絵が完成するという形にし、みんなで力を合わせて絵を作り上げることを目標とした。4月は桜、5月はこいのぼり、6月はカエルと雨とあじさい・・・というように、毎月季節に応じた絵に仕上がるように、月初めにテーマを決め、書き込んでいった（図 130、132）。外から見ると、毎日少しずつ絵が完成していき、がんばったことが視覚的に増えていくという形である。毎日自分のがんばったことを確認するという意味でも、記録が目に見えて残るので、子どもたちにとってはがんばりの足跡的なものであった。また、保護者が迎えや授業参観に訪れた際には、記入してある言葉を読み、がんばりを認める場面もあった。

4 考 察

(1) 児童A 4年生女兒

1) 具体物を使い、指をコントロールする活動について

指先を使う活動は、繰り返し継続して取り組むことで有効な活動になると実感した。毎日実施することで、児童自身も手の動かし方のコツを覚え、試行錯誤しようとする気持ちも生まれてきた。活動自体は楽しいものばかりではない。しかし、今までできなかったことが一つずつできるようになっていくことが、児童 A にとって大変重要なことであり、喜びを覚えることであったため、その気持ちが児童を後押しして、活動に対し集中できていたように推察する。できる限りスモールステップの課題を与え、一つできるたびに賞賛の言葉がけをすることで、児童 A も意欲的に継続して活動に取り組むことができた。

児童 A が指先をうまく使えていない様子が、具体物を扱う活動の中ではっきりと見られたのだが、手首の緊張が強いことが手のコントロールをさらに難しくしているように感じた。そのため、手首が動かない場合はひじを上げるよう助言を行った。また、積み木や新聞など、無造作に持つとそれ以上、手の中で向きを変えたり持ち直したりすることはできない。そのため、最終的にどのような向きで手の中にあるとよいのかを考えて持つように意識させたところ、成功することが多くなった。つまむ動作についても、指に緊張があり、人差し指もびんと伸びてつまみにくい様子であったため、力が入りやすい親指と中指を使ったり、指全体を使ったりするとよいことを助言したところ、動作が滑らかになった。一般的な動作の基本にとらわれず、実際の動きからどうするとうまく活動できるのかと考え、一つ一つの動作を一緒に試していくことで、少しずつ児童 A の動きも変わっていったように感じた。

2) タブレット型端末を用いた学習について

この学習では、児童が楽しいというプラスの気持ちをもって取り組めるという点で有効であった。児童 A は日常生活の中で思い通りにならないもののほうが多い。それに比べると、自分の触った部分が反応し、指の動き通りに線が書けたり音が鳴ったりするタブレット端末は、とても楽しい道具である。そのような道具を学習に取り入れることで、以

前より児童の意欲は高まり、積極的に学習に取り組む姿勢へとつながった。ひらがなアプリでは、書く動作にさらに音声加わることで、音とひらがなの形を同時に見聞きすることになる。このアプリに毎日繰り返し取り組むことで、自然に文字の形、イメージ、読みを一致させることにつながった。ひらがなを読むことが少しずつ速くなり、音読でもその違いが分かるようになった。また、ただタブレット端末に取り組むだけでなく、姿勢をよくし、画面を遠くから見て手を動かすように心がけさせた。そのことで全体の様子を把握して手を動かすことの練習とした。そうすることで、自分の意図するところに手を動かすという練習にもなっていた。色塗りの際に思ったところに色鉛筆を動かせるようになるなど、タブレット端末以外での活動が上達する様子が見られた。

3) ゲームなどを通した、学級の友だちと協力して楽しむ活動について

児童Aは、普段一緒に過ごしていた特別支援学級の友だちが男の子であることもあり、大人と一緒に遊びたいという気持ちが強くなっていた。しかしトランプや坊主めくりなどで友だちと一緒に遊ぶようになり、友だちと過ごすことが当たり前になってきた。教師もまじって一緒に楽しむことで、みんなと遊ぶことが楽しいことだと感じ、自分から積極的に「遊ぼう」と声をかけるようになった。しかし、年上の友だちとばかり関わると遊びについていけなくなり、一人別の事をやりたいと言い出すこともあったため、単純なルールで一緒に遊べるものや一緒のレベルで遊べるような交流をもてるように働きかけをしていきたいと考えている。

(2) 児童B 2年生女児 児童C 5年男児

1) 個人のスキルや運動能力を高めるためのトレーニングについて

実践してみると、パズルや色塗り等、簡単そうであるのに、子どもにとっては難しいものだったり、反対に教師側が児童にはできないかもしれないと不安に思いながら実践してみたところ、意外に容易にこなしてしまったりと様々であった。しかし、その難易度を感じる点が、子どものつまづきの元とつながるのではないかと考える。例えば、児童Bは、実践を積んできた今でも、色ぬりは枠内に収まらない。しかし、ビーズを糸に通すことはできる。はしつかみが上達してきても、ご飯などをかきよせるのはなかなか難しそうである。恐らく、手先の感覚は少しずつ養われてきたが、手首がまだ固まったままなのではないかと考える。自分の取り組みを振り返ってみると手先指先を動かすトレーニングを行ったが、手首を意識的に動かすトレーニングは実践していない。同様に、肘もまた関係してくると考える。今後は、手首、肘も交えたトレーニングを考え、実践していきたい。

2) 振り返り表の活用について

振り返り表を活用することによって、子どもの意欲の向上につながったと考える。特に、親との連携も交えた振り返り表は、子どものやる気に直接つながり、意欲的に学習に励む姿勢へと変容していった。やはり、家庭と学校とが共に子どもの実態に向き合い、何が今必要なのかを考え、同じ目標のもと、成長を見守り支えていくことが何より子どもの成長に

つながっていくのではないかと感じた。

3) 交流学級の児童と触れ合いについて

交流学級の児童と関係を築くことは、特別支援学級の児童にとってはもちろんのこと、交流学級の児童にとっても良い効果が生まれたと考える。例えば、児童Cは、分からなくなったり、少し嫌なことがあると、物を投げたり大声を出したりと感情的になってしまうくせがあった。しかしそれは、ある程度慣れた人の前でしか出さず、交流学級の児童の前では出していなかった。だが、仲良くなった交流学級の児童に見られてしまった場面があった。驚かれ、親しくなるのを拒まれるのではないかと思ったが、その時、交流学級の児童は「そのくらいで怒るな。」と励ましの言葉をかけていたのだ。また、「分からないことがあったら俺が教えてやるから、一緒にみんなと勉強すればいいのに。」とも私に言ってきた。個人の特性について理解した上で、小学5年生の児童からこのような声を聞けるとは思ってもみなかった。これこそ、共に生きるということではないのだろうかと感じた。

〈児童D 2年生男児〉

1) 基本的な生活習慣の定着について

手指の不器用さ・読み書きの不器用さ等の生活上・学習上のつまづきが、『目と手の協応』を高めることで改善されると見立てた。目と手の協応を必要とする課題を児童の興味・関心や習熟度に応じて選択・調整して取り入れて、意欲と技能を高めようとした。

生活面の指導は、動作の流れが身につくにつれ、気持ちの切り替えができると、動作が早くなっている。定着はすすまないが、根気強く指導する必要性を感じる。姿勢については、床面には、女の子座りではなく、あぐら座りをするように声かけした。椅子には、足裏を床面につけて、おしりをずらさずに背筋を伸ばして座るように声かけした。課題としては、日常生活面の指導では、例えば、衣服の着脱等で、時間がかかっても、児童D自身が取り組むことを根気強く支援していくことが、生活自立にむけて大事であると考えた。児童D自身が、気づいて鼻水やよだれをふいたり、ずれ落ちたズボンを上げたりすることができるようになる等へと波及してほしいと願う。大人へ依存せず、身近自立ができるように、技能面のみならず、気持ちの面においても自立心を育む言葉かけ・働きかけができれば望ましいと感じる。

2) 書字の上達にむけての取り組みについて

書字の技能の向上にむけて、点つなぎは、児童Eは関心をもって取り組めた。時々、一人では次の数字の点を見つけられず、支援を必要とする場面も見られた。今では始点と終点を意識して線を書くことができるようになり、書く指導につなげることができた。書字の指導においても、なぞり書きや、足りない部分を書き足す課題を提示する等して、児童Dが、なぞなぞ・クイズの要素を感じて、課題に進んで取り組むように意図した。また、課題を拡大して提示することで、課題を簡単に感じるように配慮した。児童Dは、学年相応の漢字のなぞり書きと視写までできるようになった。一人ですすんで学習が

進まない児童 D は、カルタ取りをはじめ、集団での活動には意欲的に参加できた。部首カルタでは、部首の意識づけになり、漢字の書字学習の理解へつながったと考える。

3) 友だちとの関わりについて

友だちと関わり合うために、「カルタ（ことわざカルタ）」や「漢字カードカルタ」で、読み札を児童一人一人の机の上において役割分担した。「部首カルタ」は、児童一人一人に読み札を用意して実施した。このような工夫で、みんなで高めあえる活動の一つひとつとして、この集団では有効に機能したと考える。

(3) 児童E 3年生男児 児童F 6年生男児

1) スキルや運動能力を高めるための手立てについて

ビジョントレーニングや運動のトレーニングは、毎日積み重ねることで成長の元となることが分かった。ビジョントレーニングは最初に導入した時には、児童 E も児童 F もなかなか目を動かしたり物体を目で追ったりすることができなかった。運動も苦手としているので、手先だけでなく体全体の動きにも関係しているのではないかと推察した。そのため、トレーニングを継続して行ってきたが、毎日繰り返すことで登れなかったろくぼく登りやジャングルジム登り、できなかったボールつき、怖がって支えが必要であった平均台、スキップ、縄跳び等多くのことが徐々に出来るようになってきた。今では、自信をもって楽しく取り組む姿に変容した。また、今まで出来ていたことも速く正確になってきた（走る、ケンケン等）。活動内容が明確になってきたせいか、日を重ねるごとに、自信をもって楽しみながら活動に取り組む姿が見られ、運動機能アップと同様、要領を掴み、自信にもつながっていることが分かった。

学習については、カードや道具の適宜活用は学習の習得に大変有効であった。平仮名カードでは、最初は教師が言葉を指示していたが、徐々に自分で文字の形を認識しながらさがし、先生や友だちのヒントで少しずつ言葉の形を覚え、単語を自分で作れるようになった。また、漢字学習では、大きなカードに絵と文字をマッチングさせたことで、少し忘れかけた際には、絵を見せると思い出し書くことができた。最近では振り返りカードや日記にも漢字を使うことができたり、学習した漢字が、本や図鑑に出てくると嬉しそうに報告をしてくれるようになったりと、学習したことを生かす場面が増え、より励みとなっているようである。

算数の学習で使った、フラッシュカードは数量の認識と10まであといくつという考えを定着させるのに大変有効であった。●の数を絵として頭の中にインプットし、繰り上がりの足し算、繰り下がりの引き算の時にその絵を思い出しながら、計算を進めることができ、正解率が格段にあがった。今では、算数という枠を超え、目の運動も兼ね、ほぼ毎日、カードを見て、数字を言う練習を続けている。

2) 友だちとの関わりを楽しむ手立て

人間関係を豊かにする取り組みは、学級内でゲームや楽しい集団活動を増やすことで、

関わる楽しさを味わい、常にみんなで仲良くしていこうというムードが高まった。交流学級の友だちとも仲良く関わる場面が増えた。カードゲームや集団遊びにはトラブルがつきものである。しかし、トラブルが起きたときには、一つ一つ話を聞き、確認しながら約束やルールに戻り、みんなで楽しめるよう話し合うことができた。このトラブルも子どもたちの成長のきっかけとなり、互いに思いやる言葉かけができるようになった。ともに活動し、ともに仲良く伸びる土壌が育ってきた感がある。

また、毎日、学習記録をつけることで、一日を振り返ることが定着した。さらに家庭へもち帰ることで、1日の学習や活動内容が保護者に明確に伝わるようになった。

おわりに

本部会では、機能訓練・仲間との関わり方について研究・実践を行ってきた。目の前にいる子どもの実態を見つめ直し、これから生きていくために、その子にとって何が最も必要であるのかを考え、実践を積み重ねていくことで、わずかなものから大きなものまで、多くの成長が見られた。また、子どもが継続して取り組んでいけるよう、楽しさを見い出しながら行ってきた。その結果、訓練と呼ぶものとは異なりを見せるような、子どもの笑顔や意欲的な姿も見ることができた。こうしたことを積み重ねていくことで、自然に子ども自身に必要なものが身についていったのであろう。また、人と関わっていくことで、人と人との間で生きていくための大切なことを無意識のうちに学んでいった。

実践をしていくなかで、子どもが見せる少しのことでも喜ぶ笑顔、夢中になって取り組む姿がとても印象的であった。もちろん、そのような姿ばかりが見られたわけではない。しかし、今後も、「生きる力」を育むことを念頭に置き、子どもがより生き生きと学んでいけるような実践をしていきたい。

意欲的に学び合う児童生徒の育成

支え合い、認め合う学習集団を目指して

加藤 彬子 犬山市立楽田小学校
原田 恵利 犬山市立犬山中学校
足立 裕貴 犬山市立東部中学校
山下 知子 犬山市立南部中学校
鈴木 寛央 犬山市立南部中学校
大脇 文彦 犬山市立城東中学校

はじめに

犬山市で、授業に学び合いが取り入れられて久しい。しかし、実際には、児童生徒のつながりが薄い、自分ができれば良いと考える児童生徒が多いなどの現状もある。これらの現状から、児童生徒が学び合うよさを感じ、お互いが課題を解決するための大切な仲間だと感じてほしいと考えた。そこで、児童生徒一人ひとりが課題を解決する仲間を大切に、お互いが支え合い・認め合う中で意欲的に学び合う姿を目指したいと考え、研究課題を設定した。

本グループは、校種や教科も異なるメンバーが集まっている。そのため、それぞれの学年・教科における学び合いを取り入れた授業実践を報告し合うことで、新たな発見があり、よりよい学び合いを模索することができた。また、実践を行う前に、立場の違うメンバーで、それぞれが違った視点から指導案を検討できたことも、貴重な財産となった。そんな中で、私たち自身も授業研究会を通じ、よりよい学び合いの模索という課題の解決に向けて、意欲的に学び合うことができたと感じている。

本研究では、研究課題に迫るために、2つの手だてを考えた。それを元にそれぞれが授業を実践し、その成果と課題の考察を行った。

1 研究の仮説

交流形式やワークシートを工夫し、児童生徒の交流を活発にすることで、協力して課題を解決しようとする人間関係が育ち、意欲的に学び合う学習集団の育成につながるであろう。

2 研究の手立て

【手立て1】交流形式を工夫する。

実践1 **実践2** **実践3** **実践4** **実践5**

ペア交流・グループ交流・自由交流・学級交流など、児童生徒の交流の仕方を工夫することで、課題解決の動機づけとなり、意欲的に学ぶ場面が増えるようにしたい。

【手立て2】学習プリントを工夫する。

実践2 **実践3**

児童生徒が、活発に交流したり、交流を通して課題を解決したりするためには、学習プリントの構造や、ヒントなどが児童生徒の動きを方向づけると考える。そのため、課題解決の道筋が分かりやすい学習プリントを作成することで児童生徒の思考の助けとしたい。

3 研究の実際

実践1 どうぶつさんだいすき（小学校第1学年 図画工作）【手だて1】

（1） 本題材について

1) 学級の実態と願う子どもの姿

4月当初、何もかもが初めての小学校で「友達をいっぱい作り、いつも元気に笑顔で学校に来て欲しい」「学校に来ることが楽しいと思えるような学級にしたい」という思いから、学級目標を「げんきいっぱい ともだちいっぱい えがおいっぱい」とした。穏やかで恥ずかしがりやな児童が多いが、多くの児童が毎朝元気に登校して、友達と笑顔で生活をしている。

本学級は、何かを作ったり描いたりすることが好きな児童が多い。休み時間には晴雨に関わらず、粘土を出してせっせと自分のつくりたいものをつくる姿や、折り紙を折ったり切ったりして友達と何かをつくる姿、絵を描いて色塗りをする姿がよく見られる。特に粘土では、ロボットをつかって動かしたり、食べ物をまねてつくって切り分けたり、友達と粘土と粘土板を合わせて協力し、何両にもわたる長い列車をつくったりする様子が見られた。しかし、食べ物や乗り物など、動かないものをつくるのが格段に多い。動くロボットや人間をつくっても、ただ立っているだけということが多く、動きを想像するところまでには至っていない。粘土の扱いについても、かたまりからつくりだすというよりも、小さな部品をくっつけてこまごましたものをつくるのがほとんどである。そのため、できるだけ粘土を大きく扱って、動きや表情を出して作品をつくることに挑戦させたい。また、周りの様子にも着目させて情景をつくり込み、作品に広がりをもたせたい。

先日、秋の校外学習で東山動物園に行った。もちろん、動物園に行くのが初めてという児童は少ないが、実際に生きて動いている動物を間近で見て、においをかいで、鳴き声を聞いてくるという児童の体験は、ただ想像に頼って製作するよりも確実に作品に生かされていくはずである。まだ記憶が新しいので、児童の関心が高く、意欲も喚起しやすい。また、家で動物を飼っている児童もいる。動物と実際に触れ合った経験は、作品に大きく影響してくると考える。

2) 題材について

本題材に取り組む前に、1年生最初の粘土の題材「ねんどでつみき」で、様々な形の粘土のかたまりを積み上げて、できた形からイメージを膨らませて作品をつくるという活動を行った。その中で、児童はいろいろな形の粘土を積んだり並べたりしながら、何かに見立てて作品を仕上げていき、建物や動物、雪だるまや乗り物など、さまざまなものができあがった。平面に近い作品になってしまった児童がいたので、本題材においては、粘土を平面でなく立体として捉えた作品をつくることができるようにしたい。

また、動物園から帰ってすぐに、印象に残った動物の絵を描いた。動物の体を描きながら、「しっぽはこんな形」「顔はこんな色」と動物の姿を細部まで意識することができた。この活動は、本題材にそのまま生きてくると思われる。

本時では、前時で製作した自分の動物をグループごとに組み合わせて、「動物ランド」をつくる。動物たちに関わりをもたせることによって、作品と作品がつながり、個々の作業の中では考えられなかったイメージが広がって、新たな創作意欲が高まることを期待したい。児童のイメージの中で、動物たちが会話をしだしたり動きだした

りしたら、作品にも表情や動きが加わり、より楽しい動物ランドができあがると考える。そのため、授業の中では、まず動物たちの話し声を想像させる。動物たちの言葉を声に出してみれば、動物が何をしているかイメージが広がり、それに合わせて周りの情景も浮かんでくるはずである。それから、動物の目線を意識させ、それに合わせた首の向き、手足の動きを考えさせる。周りの情景は、粘土や場合によっては画用紙を用いて必要なものを付け足す。そうして、グループで思い描いた動物ランドをつくっていく。その過程で、友達と作品についてのやりとりやつぶやきが多く聞けたらと思う。

本題材を通して、自分の思い描いたように自在に形が変わる粘土の面白さを改めて感じさせたい。そして、全体を見た上で足りないものを付け足してつくることによって、作品の幅を広げ、イメージしたものが具体的な形になっていく面白さや、個人製作では感じられないような楽しさを感じさせたい。また、児童が自分の作品と友達の作品を並べてみることで、さまざまな見え方を考えたり、自分と異なった友達の新たな視点に触れたりして学びが広がり、そのよさや面白さを認め合うことを期待したい。

※_____は、研究主題に迫る授業者の思い・手立て

(2) 具体的な支援の手立て

ア 個々に製作してきた作品を組み合わせて、グループで一つの作品を作る

友達の作品と自分の作品を組み合わせることで、個人製作では見られなかった形や表現、動き、周囲の風景などが新しく生まれ、協力して作品を作ることに意欲をもつことができるのではないか。また、共に一つの作品を作り上げる中で自然と会話が生まれ、その中で自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりして、よりよい作品を作ろうという気持ちをもつことができるのではないか。

イ 鑑賞カードを用いて、友達の作品や自分の作品のよいところを見つける

お互いのよいところを伝え、相手のよいところを見つけようという姿勢を育てることで、自己肯定感や友達の作品のよさを認める気持ちを持ち、友達と意欲的に関わろうとする姿勢の育成につなげられるのではないか。また、学級の中で人間関係をよくすることができるのではないか。

(3) 授業の実際

1) 題材の目標

ア 粘土で好きな動物をつくることを楽しもうとする。

(関心・意欲・態度)

イ つくりたい動物を思い付き、どんな形にしようか考える。

(発想・構想の能力)

ウ つまみ出す、付ける、へらで模様を刻むなど、表し方を工夫する。

(創造的な技能)

エ 自分や友達がつくった動物について話しながら、作品のよさに気付くことができる。

(鑑賞の能力)

2) 学習計画 (2時間完了)

| 時 | 学 習 活 動 |
|-----------|--|
| 1 | <ul style="list-style-type: none"> 身近な動物や動物園の思い出などを基に、お気に入りの動物を思い浮かべる。 粘土を使い、自分が思い浮かべた動物になるように、つくり方を工夫しながらつくる。 |
| 2 (本時) | <ul style="list-style-type: none"> 粘土を使い、自分が思い浮かべた動物になるように、つくり方を工夫しながらつくる。 つくりながら動きを想像したり情景を付け足したりしてイメージを広げ、動物ランドをつくる。 つくった動物を、友達と見せ合ったり話し合ったりして振り返る。 |

3) 本時の目標



動物の組み合わせや動きを工夫して、イメージを広げながら楽しく動物ランドをつくり、友達の作品のよさを感じることができる。

4) 準備

教師：粘土、色画用紙、鑑賞カード、さまざまな大きさの画用紙、セロハンテープ
 児童：作品、粘土板、(はさみ、セロハンテープ)

5) 授業の経過

※ゴシック文字は本時で中心となる「学び合い」の場面

| 主 な 学 習 活 動 | 形態 | 留 意 事 項 ・ 支 援 【 評 価 】 |
|--|-------------|--|
| 1 自分のつくった動物を見て、友達の動物と組み合わせると、動物たちがもっと楽しそうになることを想像する。 | 5分 一斉 | <ul style="list-style-type: none"> 動物が集まるともっと楽しくなるとい期待をもつことができるよう、児童に動物の気持ちを想像させる。 |
| <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> たのしい どうぶつランドをつくらう </div> | | |
|  | |  |
| 図 133 導入の様子 (動物の写真を多く用意した。) 図 134 導入時の児童の様子 | | |
| 2 つくった動物をグループごとに組み合わせ、友達と話し合いながら動物ランドをつくる。 (1) 動物たちが何を話し、何をしているのか想像する。 | 25分 グループ | <ul style="list-style-type: none"> 色画用紙を用意し、その上に動物を並べてみて、動物ランドを想像しやすくする。 例を紹介して、想像しやすくする。 積極的に作品を手を持って動かすよう指示する。 面白いイメージができた児童のアイデアを積極的に紹介し、誉める。 グループで活動することが難しい児童には、他の児童の会話に耳を傾け |
| <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 何か動物たちの声が聞こえてこない？ 動物たちは何て言ってるかな？ 動物たちは何をしているところかな？ </div> | | |

「もういいかい。まあだよ。」
って言っているよ。
みんなでかくれんぼをしているよ。

ライオンとトラが
闘っているよ。

ごはんを
食べているよ。



図 135 作品をつきあわせて考える様子

(2) 動物に動きを加える。

じゃあ、動物になって動いてごらん。
どこを見ている？手は？足は？首は？



図 136 作品を組み合わせ動きを加える様子

(3) 粘土や、場合によっては画用紙を用いて、周りの情景を付け足す。

今動物たちはどこにいるの？想像してごらん。

森でかくれんぼをしているよ。

森だから木がたくさんほしいな。

させたり、友達作品と自分の作品をつきあわせて考えさせるよう支援する。

- 形を自由に変えられる粘土の利点に着目し、手や足、鼻などを動かしながら動きをつけさせる。
- 動物がしていることを動作化し、体に動きを加えさせる。
- 動物たちのいる場所、周りの様子を想像させることで、全体のイメージが広がるよう支援する。
- できた動物ランドには名前をつけ、していることの説明も考え、紙に書かせる。

【動きや組み合わせを工夫してイメージを広げ、新しい形を考えることができたか。（発想・構想の能力）】<作品>



図 137 動きが加わったゴリ



図 138 動物の周囲に情景を付け足す様子

3 鑑賞カードを用いて、できた動物ランドを、みんなで見合う。

〇〇ランドへ みんなでかくれんぼをしていて楽しそうだね。

△△ランドへ ゾウがくだものをとっているところがおもしろいね。

10分
個人

- 鑑賞カードを用いて自由に鑑賞し、鑑賞したグループにカードを渡す。
- 作品のよいところを必ず一つ誉めることと、1枚は隣のグループに、もう1枚はどのグループに書いてもよいという約束を確認する。

【自分や友達がつくった動物を見て自分たちとの違いや作品のよさに気付くことができたか。（鑑賞の能力）】<鑑賞カード>

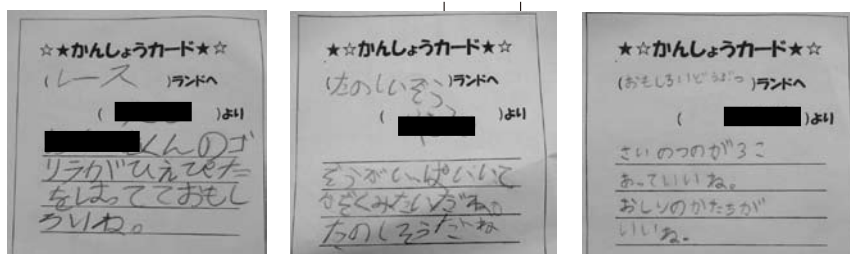


図 139 友達への鑑賞カード

4 できた動物ランドをもう一度全体で眺めて、振り返りをする。

5分
一斉

・友達からもらって嬉しかった言葉を発表させて、どれも楽しい動物ランドになったことを確認する。



図 140 できあがった動物ランド

6) 板書計画



7) 評価規準

イメージを膨らませながら動物の動きを工夫して作品をつくり、友達の仕事のよさを感じることができたか。

(4) 成果と課題

図画工作の授業では、作品が出来上がるまではほとんどが個人作業で、途中と最後の作品鑑賞で友達と関わる、というパターンが多い。

あえて途中鑑賞という時間を設けなくても、児童は友達の仕事をよく見ており、作品や友達との交流が自然に行われているが、途中鑑賞の時間では、友達に刺激され作品が変化したり、手が止まっている児童がヒントを得て作り出すきっかけになったりすることがよく見られる。完成した作品の鑑賞では、友達から自分の仕事を誉めてもらうことで自分の作品に愛着をもったり、友達のよいところを見つけようとしたりする姿が見られる。

今回の授業では、そのような鑑賞の時間ばかりでなく、製作の時間の中にも学び合いを

取り入れることはできないかということを中心に考えた。個々で作ったものを組み合わせて、グループで一つの作品を作る中で、個人作業では生まれなかった風景や場面、動きが生まれれば、関わることに意味ができる。そうすることで、研究テーマの「意欲的に学び合う姿」につなげたいという思いから、学び合いの中心を製作過程においた。

実際、個人作業で動物を作った段階でも、教師側から作品を紹介したり積極的に誉めたりする中で、表現の幅が広がり、自然と学び合いが行われていた。爪先・たてがみまで注意深く製作している子、サイのお尻の形を本物に近づけようと表現に試行錯誤する子、耳を付ける位置が分からず苦勞する子など、さまざまな姿が見られた。困っている児童は友達の作っているものや掲示された写真を見て自分で解決していたし、児童同士で互いに刺激し合って、作品の細部にまで心が配られるようになっていった。

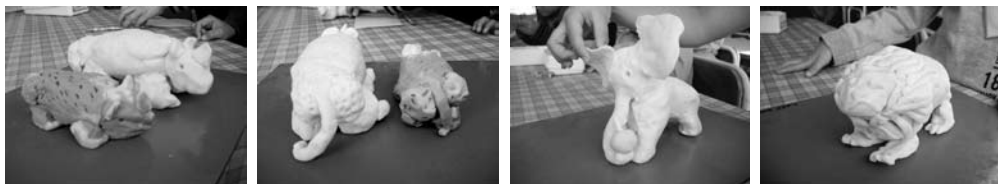


図 141 できあがったサイの親子 図 142 サイのボコボコしたお尻の様子 図 143 鼻の動きを工夫したゾウ 図 144 たてがみや爪を工夫したライオン

しかし、個人製作までは順調にいていたものの、いざグループで作品を組み合わせて動物ランドを作ろうという段階になると、とりあえず動物同士の顔を付き合わせるだけで、なかなかイメージが広がらなかったグループが多かった。原因は、教師側からの課題提示の仕方がよくなかったことにあるように思う。「どうぶつランド」という言葉自体が、イメージしづらいようだった。このことは、指導案の検討段階で予測された。イメージをもたせるため、課題を提示する際に、どうぶつランドの作品例を示すべきか迷ったが、低学年はそれに引きずられることが多いことから、今回は提示することをやめた。しかし、結果として提示した方がイメージを抱きやすく、スムーズに製作が行えたのかもしれない。

困っているグループは、教師の個別の呼びかけによりとりあえず動かしてみる中で、ようやく友達と会話が始まり、森の中になるグループ、レースをするグループ、食事をするグループなど、それぞれのグループらしさがでてきた。

鑑賞については、授業内で時間が十分にとれず、別の時間に行ったため、簡単に述べる。鑑賞カードのやりとりでは、児童が一人あたり平均5枚ものカードを書き、どの児童も意欲的に友達の作品のよいところを見つけ、積極的に誉めていた。鑑賞カードの約束である、「1枚は隣の人に書くこと」「どこがどのようによいか詳しく誉めること」について、児童は回を追うごとにできるようになってきていた。友達に誉められることで自分も相手を誉めようという気持ちが生まれ、やりとりを意欲的に行う姿がどの児童にも見られた。

この授業を通して、発見が一つあった。初め、私の考えの中では、友達との「会話」がないと「学び合い」はできないと考えていたが、友達を作るものを目で見たり、情景設定から足りないものを想像したりして、それぞれが黙々と作り足しをしながら一つの動物ランドを完成させていく姿が見られ、無言の中でも学び合いが行われている姿を見ることができたように感じた。図画工作ならではの学び合いであるかもしれない。

今回、図画工作の授業では、自然と学び合いが行われることもあるが、教師側が児童同

士が関わるしかけを設定していくことで、より意欲的に友達と関わる姿が生まれることが分かった。そのような関わりにおいては、何よりも普段からの児童同士、教師と児童との人間関係がよいことも、大切な要素である。普段の学校生活全てを通して、自然と助け合い、学び合えるような関係づくりをしていきたい。

実践2 Writing Plus 1 学校のホームページ（中学校第1学年 英語）【手だて1・2】

(1) 本単元について

本単元はある学校のホームページを通して、何かを紹介する際に必要な表現及びフォーマットを学習する。本時では紙上でのものだが与えられた設定の中で、自分達の伝えたい情報をまとめ英語で表現していく。そうした作成過程の中で、それらを人に紹介するためにどんな情報が必要かを考え整理し表現する。また既習事項を利用することで表現の幅を広げたい。これからますます国際化、情報化が進む現代社会においては協調性や、積極性のあるコミュニケーション能力が重要視される。そのため本単元では仲間とかかわり合いながら紹介文を作成し発表する場面を設定した。

(2) 具体的な支援の手だて

ア 交流形態の工夫

本単元内で設定された仲間と協力して行う活動において担当学級5クラスでは、それぞれ交流形態を変え実践を行った。ある課題を達成するために最適とされる交流形態は、課題ごとに違うと考える。同じ授業内容・課題であっても課題への迫り方で学びが変わる。今回は本時の学習課題を達成するために、始めから班やペアで協力して活動する場面を設定したクラス、あるいは個の時間を大切にし、その後それぞれの意見や考えを持ち寄る場面を設定したクラスなどとアプローチの方法を変えた。本時においてより学びが活発になる形態はなんであるか、また今後の指導において本時のみならず豊かな学びのための参考としたい。

イ 教材の工夫

本研究ではアの手だてに加え教材の工夫にも力を入れた。本時の目標の一つは「基本的な表現やフォーマット、既習事項を利用して英語で紹介文を書くことができる。」である。本時において必ず押さえておきたい文法事項、そしてこれまでに学習してきた既習事項をいかに活用できるようにするかワークシートに工夫を加えた。生徒が課題を達成するために必要な手だてを最低限におさえることで子ども同士の関わりも増え、より学びが活発になると考える。

(3) 授業の実際

1) 本時の目標

ア 基本的な表現やフォーマット、既習事項を利用して英語で紹介文を書くことができる。
 イ 与えられた設定で仲間と関わりあいながら、意欲的かつ積極的に作業に取り組むことができる。

2) 授業の経過

実践 2-1

| 生徒の活動・反応 | 形態 | 教師の支援・評価 | | | |
|---|---|--|---|--|--|
| <p><みつける></p> | | <p>音声単語シートの活用</p> | | | |
| <p>① 英語で挨拶をして、既習単語の発声練習をする (6分)</p> <p>課題提示</p> | <p>全体 ペア</p> | <p>・頭と耳を英語に慣らし、英語の授業に集中できるように支援する。</p> | | | |
| <p>与えられた設定で、班で自分の町の物や建物を紹介するホームページを英語で5文書くことができる。</p> | | <p>情報カード、和英辞書の活用</p> | | | |
| <p><高める></p> | | | | | |
| <p>② 班ごとにカードを引き、与えられた設定でホームページを作成する (25分)</p> | <p>班</p> | <p>・教科書、ノート、和英辞書などを利用して活動に参加するように指示をする。 ・表現や文法事項での問題がある場合には、できる限り教師ではなく班の仲間に尋ね、ともに考え解決していくような活動になるように支援する。 【評】 与えられた設定で仲間と協力して紹介文作成の作業に取り組むことができたか。</p> | | | |
| <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 33%; padding: 5px;"> <p>Welcome to Inuyama City. Inuyama City has a big castle. It's near Inuyama junior high school</p> </td> <td style="width: 33%; padding: 5px;"> <p>Wanmaru is a nice dog. Wanmaru lives in Inuyama City. He is 10 years old. His birthday is October 10th.</p> </td> <td style="width: 33%; padding: 5px;"> <p>Delicious sweets "Genkotsu" Genkotsu is a Inuyama's special product. It's from Iida of Gifu. We love it.</p> </td> </tr> </table> <p>～ってどう書けばいい？ 辞書で調べてみよう。 犬山にはこんなものがあるんだ。 こうやって書いてみたらどうか？</p> | <p>Welcome to Inuyama City. Inuyama City has a big castle. It's near Inuyama junior high school</p> | <p>Wanmaru is a nice dog. Wanmaru lives in Inuyama City. He is 10 years old. His birthday is October 10th.</p> | <p>Delicious sweets "Genkotsu" Genkotsu is a Inuyama's special product. It's from Iida of Gifu. We love it.</p> | | |
| <p>Welcome to Inuyama City. Inuyama City has a big castle. It's near Inuyama junior high school</p> | <p>Wanmaru is a nice dog. Wanmaru lives in Inuyama City. He is 10 years old. His birthday is October 10th.</p> | <p>Delicious sweets "Genkotsu" Genkotsu is a Inuyama's special product. It's from Iida of Gifu. We love it.</p> | | | |
| <p>③ 作成したホームページを班の代表が発表する (8分)</p> | | | | | |
| <p>④ それぞれの班のホームページを見て回る (3分)</p> | <p>全体</p> | <p>・自分達のホームページで紹介した物と作成過程で工夫した点を中心に発表ができるように助言する。 ・聴く姿勢に注意して発表が聴けるように促す。</p> | | | |
| <p><ふりかえる></p> | | <p>ふりかえりカードの活用</p> | | | |
| <p>⑤ 本時の学習のふりかえりを記入する (6分)</p> | <p>個</p> | <p>・自分の班との違い、いい点や工夫を加えた方がいい点など、見る観点を伝える。 【評】 基本的な表現やフォーマット、既習事項を利用して英文が書けているか。</p> | | | |
| <p>⑥ 教師による本時の学習過程の評価を聞く (2分)</p> | <p>個</p> | <p>・活動の中で頑張ったことや他の班のホームページを見て感じたこと、班で作成したホームページ</p> | | | |

| | | |
|--|----|---|
| | 全体 | の中から1文お気に入りの英文を書くよう指示する。 ・班活動での生徒同士の関わり合いを中心に、本時のまとめをする。 |
|--|----|---|

実践2-1は班活動を取り入れ、それぞれに違う課題を与えホームページ作成を行った。4つの封筒の中には各班、別々の課題と作業がスムーズに進むようにとあらかじめ括弧抜きの英文をヒントとなるよう用意した。班で協力して作業を滞りなく進めることができたが、生徒一人一人にヒント文を渡していたとしたら違った展開があったのではないかと、もう少し高い課題を与えてもいいのではないかと、というご指導を頂いた。また各班に、いくつかのテーマを別々に与えるのではなく、あえて同じテーマのものを与え班ごとに表現の違いがあることに気づかせてみるほうが、より良いのではという反省も生まれた。これらのことを踏まえて、次時では括弧抜きのヒント文をなくし日本文から考え、そこから英訳するといったより高い課題へと、同じテーマを各班に与えそれぞれの表現の違いから英語で表現することの幅広さを感じるようなものへと構成を変えた。

実践2-2

| 生徒の活動・反応 | 形態 | 教師の支援・評価 |
|--|--|---|
| <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"><みつける></div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">① 英語で挨拶をして、既習単語の発声練習をする（6分）</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">② 前時の復習をする（5分）</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">班でディズニーランドのホームページを英語で書くことができる。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"><高める></div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">② 班でディズニーランドのホームページを作成する（25分）</div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> Welcome to Tokyo Disney Land. Tokyo Disney Land is 29 years old, We have a lot of wo </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> Welcome to TDL. Tokyo Disney Land is Chiba, in Japan. It is cute mouse. </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> Welcome to Dream world !! Do you know Tokyo Disney Land ? </div> </div> <p style="text-align: center;">～ってどう書けばいい？ 辞書で調べてみよう。</p> | <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">音声単語シートの活用</div> 全体ペア 全体 班 | ・頭と耳を英語に慣らし、英語の授業に集中できるように支援する。 ・前時の本分内容の音読、文法事項のおさえを行う。 ・教科書、ノート、和英辞書などを利用して活動に参加するように指示をする。 ・表現や文法事項での問題がある場合には、できる限り教師ではなく班の仲間に尋ね、ともに考え解決していくような活動になるように支援する。 【評】仲間と協力して紹介文作成の作業に取り組めたか。 |

| | | |
|------------------------------------|-------------|----|
| こういう順番で書いたらどう？ こうやって書いてみたらどうかな？ | | |
| ③ 作成したホームページを発表する (8分) | | |
| | ふりかえりカードの活用 | |
| ④ それぞれの班のホームページを見て回る (3分) | | 全体 |
| <ふりかえる> | | |
| ⑤ 本時の学習のふりかえりを記入する (6分) | | 個 |
| ⑥ 教師による本時の学習過程の評価を聞く (2分) | | 個 |
| | | 全体 |

・聴く姿勢に注意して発表が聴けるように促す。

・自分の班との違い、いい点や工夫を加えた方がいい点など、見る観点を伝える。

【評】基本的な表現やフォーマット、既習事項を利用して英文が書けているか。

・活動の中で頑張ったことや他の班のホームページを見て感じたこと、自分が担当した英文を一文書くよう指示する。

・班活動での生徒同士の関わりあいを中心に、本時のまとめをする。

実践2-2では実践1を受け、より高い課題へと考えヒント文をなくしたのだが、この授業を行った11月の段階で生徒らはまだ英語学習を本格的に初めてまだ半年程である。語彙力、文法力ともに一から全てを考えるとという活動はあまりにも難しく作業にも時間がかかってしまった。授業の様子から学力上位層の生徒らにとっては充実した時間となったようだが、学力低位層の生徒らにとってはなかなか作業に関われない部分もあった。この実践で見つかった新たな課題は生徒一人一人が必ず関わられるような手立てが必要だということだ。生徒同士の関わりを大切にしたいと班活動を取り入れたが、課題が高すぎると結局教師に尋ねる回数が増え仲間と共に考え練り上げていくという過程が失われしまうのではないか。もっと今の生徒らの現状をとらえ困難だけれども解決できそうだなというラインを考えなければなと感じた。全ての班が同じテーマで作成するという点では同じものなのに全く同じものは一つもなく、仲間が書いた英文をみて様々な表現に触れることができた。

実践2-3




実践2-3は班活動で行ってきた作業をペアへと変えた。授業構成は実践2-2同様でこれまで以上に一人一人が必ず作業に関わり、協力しなければ達成できないような設定をした。班活動よりもペア活動のほうが英語に関わる回数もより増え、それぞれに役割が確実にうまれるので全体の感触としてはペアのほうがよかったように感じる。けれども使用しているワークシートでは既習事項をうまく使えるような工夫がないという課題があがった。ここに改善前後のワークシートを資料としてのせる。

改善前

Writing Plus 1 : ティスニーランドのホームページを猫で作ろう!!

☆東京ティスニーランド☆

| | |
|--------------|--------|
| 所在地 | 千葉県浦安市 |
| 開業日 | 1983年 |
| アトラクション数 | 44 |
| お店 (おみやげ) | 52 |
| 飲食店 | 54 |
| キャスト数 (遊園地内) | 777人 |


☆使えるといい表現☆
 Year(s) old We have This is a picture of
 ※その他、今までに学習してきた表現を使えるといいですね♪

☆まずは自分で英文かいてみよう☆

☆猫で作るホームページを書いてみよう☆

☆ Tool Box ☆

| | | |
|------------------------|-------------|--------------------------|
| attraction (s) アトラクション | Mickey ミッキー | Cinderella castle シンデレラ城 |
| Souvenir shop(s) お土産屋 | Minnie ミニー | Tokyo Disney Land |
| Food shop(s) 飲食店 | Donald ドナルド | cute かわいい |
| Parade(s) パレード | Daisy デイジー | beautiful 美しい |
| Electrical 電気の | Goofy グーフィー | delicious おいしい |
| Wonderful すばらしい | Pluto プルート | christmas tree クリスマスツリー |
| need 必要 | dream 夢 | happiness 幸福 |
| hope 希望 | give 与える | ... etc |






Name: _____

改善後

Writing Plus 1 : ティスニーランドのホームページをペアで作ろう!!

☆東京ティスニーランド☆

| | |
|--------------|--------|
| 所在地 | 千葉県浦安市 |
| 開業日 | 1983年 |
| アトラクション数 | 44 |
| お店 (おみやげ) | 52 |
| 飲食店 | 54 |
| キャスト数 (遊園地内) | 777人 |


☆絶対使いたい3表現☆
 Year(s) old 創立～年
 We have ～がいる・ある
 This is a picture of ～の写真です

☆まずは日本語でかいてみよう☆

☆ペアで作るホームページを英語で書いてみよう☆

☆ Tool Box ☆

| | | | |
|------------------------|-----------------------|--------------------------|-------------------|
| 素晴らしい g | 良い n | おもしろい i | 好き i |
| 本当に r | ～してください p | 多くの m | たかさんの (3rd) a |
| ～しよう L | 有名な f | 夜 n | 楽しむ e |
| attraction (s) アトラクション | Souvenir shop(s) お土産屋 | food shop(s) 飲食店 | |
| parade(s) パレード | electrical 電気の | Cinderella castle シンデレラ城 | Tokyo Disney Land |
| delicious おいしい | dream 夢 | happiness 幸福 | hope 希望 |
| | give 与える | | |



Name: _____

具体的に変った点はワークシート左下の「使えるといい表現」と「絶対使いたい3表現」、右下のTool Boxの中の単語だ。前者は少しの言い回しの違いだけで本時の基本的な文法事項であるこの3つの表現を生徒が積極的に使おうとしたり、習っていない単語を最初から与えるよりも、すでに授業で扱った単語を頭文字だけ表示したことで自分達で考えるようにしたことで生徒同士が「なんだっけ?」と考えたり、その単語をどうにか使って表現をしようとする姿がみられた。既習事項を上手く使えるような工夫を加えたところ自分達だけで課題を解決しようとしたり、教師に対する質問も減り作業に集中できた様子だった。この実践ではやはり生徒達にとっての限界ラインと生徒達の能力を知ることで、課題を解決するための道筋をある程度作っておくことが大切なのだと感じた。

実践2-4・5

実践4・5も実践3と同様に行った。作業形態もそのままペアとし積極的な関わりあいがみられた。

(4) 成果

交流形態と教材の工夫・改善という手だてによって、生徒らは対教師でなく子ども同士の横の繋がりのなかで活動することができた。生徒らは難しい課題になればなるほど、ついつい教師に頼りがちだ。また課題達成が容易すぎるのも、班やペアによっては手持ち無沙汰になる。今回これらの手だてを加えることで学びを我がごとととらえ、仲間と協力する態度を養えたと感じる。

(5) 今後の課題

本研究において改めて生徒の発達段階に合わせて課題のレベルを変えていく必要があると感じた。課題がすぐに解決できるようなものでも、あまりに現状では解決するのに困難なものでありすぎるのも、そこに「学び合い」はうまれない。現段階の発達と学習レベルに沿った限界ラインを日々探し求める事が大切であるのだと感じる。また個、ペア、班といった、形態も扱う内容によってどれが一番最適かを考える必要もある。しかしながら今回は班よりもペアで行った時の方が効果があったと述べたが、果たして本当にそうであったか。もし班で行う場合はどんな手だてができたか、個の能力は本当に上がったのだろうかという思いもある。仲間と共に頑張れた事で最終的にはやはり個の能力が上がってほしいという願いもある。本研究で少なくともこうして考え実践し得た成果、あるいは課題や反省を今後の指導に十分に生かしていきたい。

実践3 現代の民主政治と社会（中学校第3学年 社会）【手だて1・2】

(1) 本単元について

現在の日本は、中央集権体制から地方分権が進み、地方公共団体の政治が注目を浴びるようになってきた。2012年の夏に、竹島、尖閣諸島を巡る領土問題が話題となったとき、国の対応を批判する声が地方からあがったのは記憶に新しい。また、地域政党が国政に参加する意欲をみせるなど、その動きは活発である。

私たちの住む愛知県では、名古屋市という地方中枢都市があり、愛知県のなかでも名古屋市が大きな力を持っており、県の政治を考えた時、名古屋市の持つ影響力は無視できない。名古屋市が愛知県に対して協力や批判を行うことで県の政治の方向性も決まりかねない。このような現象は、地方公共団体が国に対して行うことと同じであり、大阪府や愛知県などの地方公共団体は、以前に比べ、発言力が増していると言える。だからこそ、国は地域政党の動向にも注目しており、地方からの声というのは影響力をもっていると言える。

本学級の生徒は、自分の考えをもとに級友と話し合い、自信をもって発表ができる生徒が多い。互いに考えを確認することで挙手や発言ができています。これは、社会科が苦手な

生徒も周りの級友との関わり合いを通して自信をもって挙手をしている姿が多くあり、意欲的に取り組むことができていると思われる。しかし、自分の考えを明確にもつことが難しい課題に対しては、自分の思考よりも相手の意見をそのまま取り入れていることが多い。

これまで、生徒たちは国の政治や仕組みを学習しており、国会、内閣、裁判所という国の三権について学習をしてきている。国の政治を具体的に捉えていくために、第1節で、「市長になって考えてみよう」という学習を通して、架空の市の市長になったつもりで、住民の意見や要望を聞き、自分ならどう市を変えていくか主体的に考え、さらに級友の意見を聞くことで思考が深まり、自分なりの意見を持って政治を理解していく学習をした。また、第2節で、裁判員制度について学習していく際、模擬裁判を行い、将来直面するであろう事柄について実際に触れ、自分たちが裁判員として評議を重ねることで、司法について様々な面から学習をしてきた。そして、第3節では、地方の政治の仕組みについて学習していく。本時はその1時間目にあたる。第1節で、大まかに現代の民主政治について学習をし、第2節で、日本の政治の仕組みを、国会の役割、内閣の役割、裁判所の役割という3つの面から学習をしてきた。本時では、さらに身近な単位である、地方の政治について目を向けていく。

生徒たちは国の政治と仕組みを理解した上で、この単元では、国と地方の政治や仕組みの違いを学ぶ。生徒の立場からすると、地方は国よりも近い存在で、捉えやすいものであると考える。まずは、自分たちの住む地域で行われている政治が遠い存在ではなく、少しでも自分たちに関わりのあるものだと感じることができるよう、地域の現状を知ることから始める。自分たちの住む地域に対する要望を考え、地域の課題を発見していく。その上で、どの行政単位で仕事を行っているのか理解することで、地方自治についての理解を深めることができるようにしていきたい。本時ではYチャートを使い、ものごとを分類することで思考を整理する。また、自分の考えを級友たちと共有し、話し合いを深めていくために、Yチャートを使って書く活動を行う。この単元は国と地方公共団体の違いを把握していくことで、地方の政治の仕組みを理解していくことが目標である。Yチャートでの分類を通し、国や県、市町村単位でどのような仕事があるかを理解することで、目標を達成していきたい。

(2) 具体的な支援の手だて

ア Yチャートシートを活かして、思考の整理を行う

今回の授業で行うYチャートを使った分類は、自分の考えを整理しながら書く活動である。考えを班員と共有し、話し合うことを通し、自らの意見だけではなく他者の意見を聞く。言語活動を通して互いを認め合い、新たな発見に気づき、表現していく生徒を育てていきたい。

イ 個人の考えをしっかりと持ったうでのグループや学級交流

話し合いを深めていくために、自らの意見をしっかりと持つことが必要であると考え。時間を割り、意見をまとめたうえで、話し合いに臨む。まわりに流されず、自分の意見を主張できるかどうか、また、他人の意見を聞き、理解に努めることができるかどうかが重要である。

(3) 授業の実際

1) 単元計画 (19時間完了)

- ①第1節 現代の民主政治・・・5時間
- ②第2節 国の政治の仕組み・・・9時間
- ③第3節 地方の政治と自治・・・5時間
 - ア わたしたちと地方自治・・・1時間 (本時1/5)
 - イ 住民参加の拡大・・・1時間
 - ウ 地方自治の制度・・・1時間
 - エ わたしたちの政治参加・・・1時間
 - オ 地方財政・・・1時間

2) 本時の目標

- ア 国や地方公共団体の政治に対する関心を高め、学習に意欲的に取り組むことができる。
- イ 政治に関する様々な話題や課題について、対立と合意、効率と公正などの見方や考えを活用して、多面的に考察するとともに、主権者として政治参加の在り方について考えることができる。
- ウ 国や地方公共団体の政治に関する新聞記事や法令、判例などの資料を様々な方法で収集・選択し、政治や社会の現状や課題などについて読み取ったり、文章や図表などにまとめたりすることができる。
- エ 国や地方公共団体の政治の仕組みについて、主権者や地域住民などの立場から理解することができる。

3) 授業の経過

| 段階 | 学 習 活 動 | 形 態 | 教師の支援・指導上の留意点 |
|-----------------------|--|-----|---|
| つ か む 8 分 | 1 学習カードを見て、本時の学習課題を知る。 | 一斉 | <ul style="list-style-type: none"> ・学習カードを配付し、日付を書いて、本時の学習課題・目標が把握できるようにする。 ・地方公共団体の仕事が、自分たちの生活に身近な存在であることを理解できるようにする。 ・住民の意思に基づいて地方の運営がされていることに気付かせる。 |
| | 2 教科書の本文を音読し、本時の学習内容をつかむ。 | 一斉 | |
| | 3 住民自治の内容について、教科書P.92の写真1をもとに地方公共団体の主な仕事をつかみ、住民自治の意味について理解する | 一斉 | |
| | 地域の現状を知り、地方自治のしくみについて説明しよう。 | | |

| | | | |
|---------------------|---|-------------------------------|---|
| <p>とりくむ 12分</p> | <p>4 自分たちが住んでいる地域の現状を知り、地域に対しての要望を考える。</p> <p>「自分が住んでいるところで困っていること、不便なことや、期待することは何だろうか」</p> <p><u>予想される生徒の反応</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツができる広い公園がほしい ・防犯対策をしっかりとしてほしい ・ゴミが落ちているところがあるので、もっときれいな街にしてほしい ・映画館を作ってほしい ・駅が遠くて困っている ・コンビニが少ない ・祭りがもっとあってほしい ・大きなショッピングセンターを作ってほしい <p>5 地域に対する課題や要望を、国・愛知県・犬山市のうち、どこに要求すべきかYチャートを使って分類する。</p> <p>「課題や、要望は次の3つのうち、どこに対して要求すると効率が良いだろうか」</p> <p><u>予想される生徒の反応</u></p> <p>国に対して 法律を作ってほしい</p> | <p>個人</p> <p>ペア</p> <p>個人</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・一人最低3個以上、ノートに書くように伝える。 ・書くことが難しい生徒に対しては、教科書P.93の地域の課題を参照しても良いことを伝え、単語で終わらず、文章で書くように指示する。 ・ユニークな発想や考えは全体で取り上げ、価値づけすることで、意欲的に書こうとする雰囲気をつくる。 ・3個以上見つけた生徒は起立させる。 ・3分間、時間を設けて考えさせ、意見がでてこない場合は、他の生徒の板書を参考にさせることで、自分の意見を書くことができるようにする。 ・ペア同士で確認し合うことを伝え、確認し合うことを通して、発表をしやすくする。 ・机間指導をし、できたペアのなかから全体に広めたい要望を黒板に板書をするよう指示する。 ・以下のような例を出し、参考にすることで意見を書くことができるようにする。 <p><u>予想される生徒の反応</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゴミやたばこのポイ捨てについて ・犬山になくて名古屋にあるものについて <ul style="list-style-type: none"> ・市よりも小さな単位の町内会で行われる事柄についても言及する。 ・Yチャートでの分類の仕方を説明し、自分の考えを整理できるようにする。その際、分類が偏ってもいいように指示する。 ・どこに分類してよいか迷う場合は、重なって分類をしても良いことを指示する。 ・課題や要望について分類することが難しい生徒に対しては、どの行政機関が一番早く、課題に取り組んでくれるかを考えるよう指導をする。 |
|---------------------|---|-------------------------------|---|

| | | |
|--|--|--|
| | <p style="text-align: center;">消費税を下げしてほしい</p> <p>愛知県 犬山市に に対して 対して</p> <p>公園の建設 公園の建設 ゴミのポイ捨て禁止条例を 作ってほしい ゴミのポイ捨て禁止条例を 女子サッカー チームをつく てほしい 犬山祭をもつ と盛り上げて ほしい 大型の娯楽施 設がほしい</p> <p>6 班で個人のYチャートシー トを交流し、分類をする。</p> <p>7 班ごとの考Yチャートを学 級全体で交流し、分類をする。</p> <p>8 自分たちに身近なことは、 自分たちに近い自治体で行っ たほうが作業や仕事の効率が 良いことを理解する。 「自分たちの生活に（近い、 関係する）ことは、（近い、 身近な）ところで行うべき」</p> <p>9 地方分権が進められている 経緯を考える。 「仕事や財源を国から地方に移 すことがなぜ、自分たちの生活 にとって良いことなのだろう か」</p> <p>予想される生徒の反応</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分たちの生活に関係のあることを国が行うよりも県 | <ul style="list-style-type: none"> 実際に愛知県や犬山市で取り組んでいるものを例示し考えることができるようにする。 終わった生徒には、課題や要望についてそれぞれ、分類した理由を考えるように指示する。 明確に分類できない項目については円の中にいれておくことを指示する。 分類した理由を班で発表してもらうことを伝え、誰が当たっても発表できる準備をするよう伝える。 個人の考えを発表するとともに、班員の意見を聞くことで、統一したよりよい分類にできるようにする。 各班、1分ずつ発表をし、意見や質問がある場合は班に対して質問を行う時間を確保する。 円の中に分類したあいまいな課題や要望があるため、自分たちの生活に影響が及ぶまでに時間がかかることを抑える。 「自分たちの生活に（ ）ことは、（ ）ところで行うべき」という文例を提示し、適語を考えることで、地方自治の考え方を導くようにする。 地方分権一括法について、理解が深まらない生徒に対しては、資料P.78②を参考に、変更点に気付かせる。 本時の授業を振り返ることで、表現できるようにする。（適語補充につながる。） 意見が出にくい場合は、教科書P.92を参考に例を出して考えることで、表現できるようにする。 |
|--|--|--|

| | | | |
|----------------|--|-----------|---|
| <p>ふりかえる5分</p> | <p>や市など、身近な地方公共団体が行ったほうが効率が良いから。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゴミの収集を国に頼むよりも市に頼む方が良い ・火事するとき、県や国に頼むよりも市に頼む方が良い <p>10 学習カードに、地方自治がなぜ、民主主義の学校と呼ばれるのか記述をする。</p> <p>予想される生徒の反応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国と比べ、地方の政治は住民の意思に基づいて行われるものだから ・国と比べ、地方の政治は住民たちによって行われるものだから ・国と比べ、地方の政治は自分たちの生活により近いものだから <p>11 記述を発表し、学級全体で交流する。</p> | <p>一斉</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・教科書P.93を参照し、「国と比べ地方の政治は…」という書き出しで始めることを指示をする。 ・説明できるように、準備しておくことを伝える。 <ul style="list-style-type: none"> ・考えがまとまらない生徒に対しては、発表をした生徒の意見を参考にし、自分の考えを学習カードに書くことを指示する。 |
|----------------|--|-----------|---|

4) 板書計画

| | | | |
|---|--|--|---|
| <p>第3節 地方の政治と自治</p> <p>1 わたしたちと地方自治</p> <p>住民自治…住民の意思に基づき、地方の運営を行うこと。</p> <p>市町村などの地方公共団体</p> <p>(地方自治体)で行われる。</p> <p>自分の住んでいるところで～して欲しい ～で困っていることは何だろうか。 ～に期待する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公園をつくってほしい。 ・スポーツ施設を作ってほしい。 ・映画館を作ってほしい。 ・防犯対策をしっかりとってほしい。 ・駅を作ってほしい、道路を作ってほしい。 <p>↓</p> <p>分類してみよう</p> | <p>国に対して</p> <ul style="list-style-type: none"> ・法律の制定 ・裁判所の設置 <p>愛知県に対して</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ施設建設 ・公園の建設 ・映画館の建設 ・防犯対策の徹底 ・条例の制定 <p>⇒自分たちの生活に(近い・関係ある)ことは(近い・身近な)ところでやるべき</p> | <p>犬山市に対して</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ施設建設 ・歩きタバコの禁止 ・公園の建設 ・映画館の建設 ・防犯対策の徹底 | <p>地域⇒住民自身で運営(住民自治)</p> <p>↓</p> <p>国から自立した地方公共団体をつくる</p> <p>原則がある</p> <p>⇒ 地方自治</p> <p>※民主主義の学校</p> <p>ブライス</p> <p>地方分権</p> <p>仕事や財源を国から地方に移す。</p> <p>※地方分権一括法(1999年)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「機関委任事務」の廃止 ・地方公共団体の判断で仕事を行う「自治事務」 ・国が実施方法を指示する「法定受託事務」 |
|---|--|--|---|

5) 評価規準と評価方法

ア ペアやグループでの話し合い、調べ学習に意欲的に取り組むことができる。

【観察・学習カード】

イ Yチャートを活用して、国と地方公共団体の役割を分類することができる。

【Yチャートシート・ノート・発表】

ウ 地方自治が住民自治の原則を基本として成立していることを理解することができる。

【発表・学習カード】

(4) 成果と課題

思考の整理という点では、Yチャートシートの活用は大いに役に立ったと思われる。しかし、下の資料4にも載せたこの分類を確認していくことも大切ではないかと指摘を受けた。本単元では、国のように大きい単位に自分たちの要望を出してもなかなか反映されにくく、自分たちの生活に関係のあることは、身近なところ（県・市町村単位）で行われるべきであることに気付くことが目標であったので、分類の確認を怠ってしまったことが反省である。以下の写真は生徒の様子である。



図146



図147

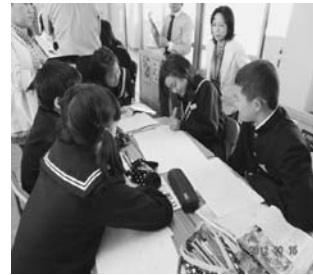


図148

課題としては、このシンキングツールは有効な手立てであるので、単発で終わらずに様々な面で使用していくことである。考えをアウトプットすることを通して、整理をしていくことができるので、発表もかなりスムーズであった。話し合いを深めていくには、単元の中で、どれだけの時間を与えていくか調節が難しいところである。

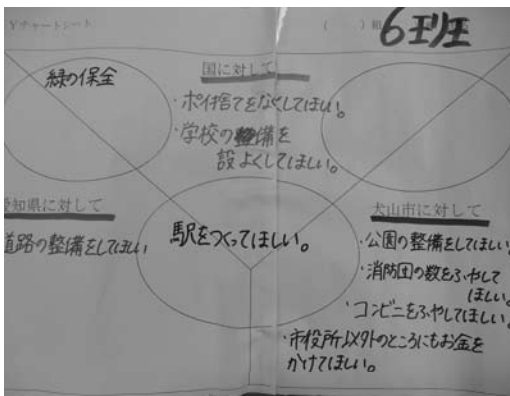


図 149

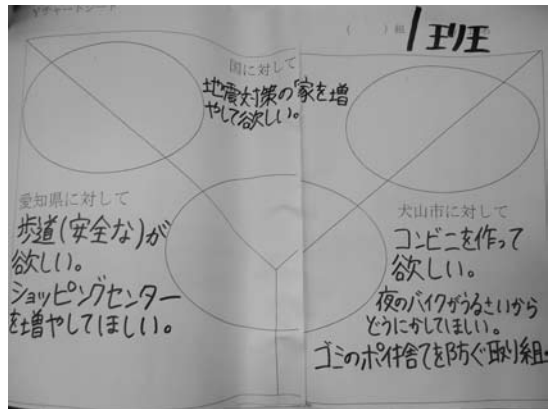


図 150

実践4 物質のすがた（中学校第1学年 理科）【手だて1】

（1）本単元について

本単元では、身近な物質を様々な角度から調べることで、日常生活を科学的な目で見る目を養いたい。また、「物質の状態変化」や「水溶液」では、状態変化や溶ける様子を粒子モデルで表現することで、目に見えないレベルでの物質の様子をイメージし、目の前で起こる現象を、合理的に説明できるようにしたい。

本学級の生徒は、男子16名、女子17名の合計33名で構成されている。明るく前向きな生徒が多い。特に男子は自分の手で調べることが好きで、理科の実験を楽しみにしている生徒が多い。一方、一部の生徒がやる気を出せないこともあり、その時は、周りの生徒がその生徒を誘って一緒に実験したり話し合ったりしようとする雰囲気がある。しかし、クラスみんなで学び合う際、生徒のかかわりを見ていると、気楽に話せる仲の良い友達との交流に終始している場面が多く、「クラスの仲間」という全体の意識はまだ低く感じる。また、科学的な用語を用いて筋道立てて説明することには慣れておらず、これからつけていきたい力である。

そこで、本単元では、自分達の手で行う実験をできる限り多く取り入れ、まずは安全に実験を行う操作方法を身に付ける中で、実験グループでの連携を深めたい。そして、仲間と関わる「ピアタイム」を設定し、自由に交流しながら学習することで、多くの生徒とかわかるよさや、自分たちで課題を解決していくことのおもしろさを実感させたい。また、「ピアタイム」において、説明を聞いてくれた相手にサインや評価をもらうなどの工夫をし、「ピアタイム」でのかかわりがより活発になるようにしたい。

本時は、身近な物質であるロウを加熱して融かす実験を行う。その中で、固体が液体になったときに体積は増加するが質量は変わらないことを理解する。そして、体積が増加した結果、液体になると密度が減少すること、結果として固体のロウは液体のロウに沈むことなどを見出し、順序を追って説明させたい。この説明をより分かりやすいものにしたがり、自分の説明で相手が納得してくれるかを確かめたりするために、「ピアタイム」を用いて、できるだけ多くの生徒に説明する活動を計画した。活発に「ピアタイム」を活用する中で、本時の課題を全員が達成できることを期待している。

（2）具体的な支援の手だて

ア ピアタイムを活かして、よりよい説明ができるように交流する

本校では、仲間と関わる時間を「ピアタイム」と呼び、生徒同士が主体的に学び合うことを大切にしている。ロウを融かしたときの質量、体積、密度の変化を、実験結果をもとにして、たくさんの仲間に分かりやすく説明する活動を取り入れることで、自分の考えを表現したり、よりよい考えを取り入れたったりして、理解を深められるようにしたい。また、相手にサインをもらうことで、表現する意欲づけとしたい。

イ 相手の意見をしっかりと聴いて、内容を理解し、相手の説明を4段階で評価する

ピアタイムにおいて、相手の意見をしっかりと聴くことが、仲間と高め合うことにつながる。そのため、聴くための手立てとして、相手の説明が自分にとってどのくらい分か

りやすかったかをA～Dの4段階で評価し、サインをすることとした。このことで、相手の意見の中身をより注意深く聴いてほしいと考えた。

(3) 授業の実際

1) 単元計画 (26時間完了)

- ①いろいろな物質・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10時間
- ②気体の発生と性質・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4時間
- ③物質の状態変化
 - ア 状態変化と質量・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2時間 (本時1/2)
 - イ 状態変化と粒子の運動・・・・・・・・・・・・・・ 1時間
 - ウ 状態変化と温度・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2時間
 - エ 蒸留・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2時間
- ④水溶液・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5時間

2) 本時の目標

- ア ロウが固体から液体に状態変化したときの質量、体積、密度の変化について意欲的に調べることができる。
- イ ロウを固体から液体に状態変化させる実験を、目的意識をもって行うことができる。
- ウ ロウが固体から液体に状態変化したときの質量、体積、密度の変化について説明できる。

3) 授業の経過

| 段階 | 学びの過程と活動 | 形態 | 教師の支援 | |
|--|--|----|--|-----------------------------------|
| | | | TAのかかわり | TBのかかわり |
| 導入 5分 | 1 教科委員が授業を始める。 ・ チェックテスト (3問) ・ 到達度の確認 | 個 | ・ 教科委員の最初の活動がスムーズに進むよう支援する。 | ・ ワークシート等の準備ができているか机間支援をしながら確認する。 |
| | 2 本時の課題と授業の流れを知る。 | 全体 | ・ 本時の課題を板書し、本時のゴール、授業の流れを伝える。 | ・ 全体の様子を観察しながら、本時の課題をつかめたか確認する |
| みんなで、状態変化したときのロウの質量、体積、密度の変化についてできるだけ分かりやすく説明できるようになるう | | | | |
| 展開 40分 | 3 身の回りの物資の状態変化について想起する。 | 全体 | ・ 状態変化とはどんな現象を指すのか、日常の具体的な場面からイメージをてるよう支援する。 | ・ 水の状態変化の写真を提示する。 |
| | 4 ロウを固体→液体に状態変化させ | 全体 | ・ 体積の測定にはビーカーのラインを用い | ・ 実験の準備をする。 ・ 全体の様子を観察し |

| | | | | |
|-------------------|---|-----------------------|--|--|
| | <p>る実験方法を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 固体になっているロウを観察して、質量を測る。 ・ 弱火でゆっくり加熱して、ロウを融かして液体にする。 ・ 質量と体積の変化を記録する。 <p>5 課題を解決するために、ロウを融かす実験を行う。</p> <p>6 課題について意見交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自由に交流し、より分かりやすく説明する。 ・ 相手の説明の分かりやすさをA・B・C・Dの4段階で評価する。 | <p>グループ</p> <p>ピア</p> | <p>ること、質量の測定には電子てんびんを用いることを伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ てんびんは0を確かめながら2～3回繰り返して計らせる。 ・ 密度は、体積と質量から求められることを確認する。 ・ ガスバーナーを安全に使い、やけどがないように注意を促す。 ・ 融けたロウがこぼれないよう注意を促す。 ・ 実験結果も含め、質量、体積、密度がどう変化するか多くの人と確認させる。 ・ 自由に動き回り、なぜそう言えるか、できるだけ分かりやすく、より多くの人に説明するよう指示する。 ・ 説明の評価規準を示す。 ・ より分かりやすい説明を取り入れていくよう促す。 | <p>ながら、実験方法を理解できたか確かめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 実験が正しく安全にできているか、机間支援をする。 ・ 器具の片付けの指示をする。 ・ 積極的に交流できているか、机間支援する。 ・ 説明のポイントを支援する。 |
| <p>まとめ 5分</p> | <p>7 状態変化したときのロウの質量、体積、密度の変化についてまとめ、振り返りを行う。</p> | <p>個</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 振り返り用紙に、本時の課題についてのまとめをさせる。 ・ 次時の予告をする。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 振り返りが書けているか机間支援をする。 |



図 151 固体のロウを融かして液体にする実験



図 152 ピアタイムで関わる様子

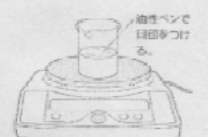
4) 板書計画

本時の課題 みんなで、状態変化したときのロウの質量、体積、密度の変化についてできるだけ分かりやすく説明できるようになろう。

質量 固体 \Rightarrow 液体 変化
 体積 \xrightarrow{g} \xrightarrow{g}
 密度 固体のロウは 液体のロウに 浮く？沈む？

ピアタイム
2:10まで

固体のロウが液体になると
 質量は _____ なり、
 体積は _____ なり、
 密度は _____ なる。
 (～から。～だから。)



5) 評価規準と評価方法

- ア ロウが固体から液体に状態変化したときの質量、体積、密度の変化について意欲的に調べられたか。 【観察・ワークシート】
- イ ロウを固体から液体に状態変化させる実験を、目的意識をもって行うことができたか。 【観察】
- ウ ロウが固体から液体に状態変化したときの質量、体積、密度の変化について説明できたか。 【観察・ワークシート】

(4) 成果

交流した人数は多い生徒で11人と交流していた。その生徒は普段から興味関心が高く、学力も高い生徒である。大抵の生徒は4、5人と交流していた。交流していなくても、まとめをしっかりと書くことで、深く考えていた。

男子はピアタイム中に交流を活発にしていたが、女子は少ない人数だが、じっくり交流したり、一人で考えをまとめることに集中したりしている生徒が多かった。

また、聴く際にも、相づちを打ったり「どうゆうこと？」などと質問したりしながら好意的に聴く姿が見られ、相手にA～Dの4段階で評価し、サインしていた。

「『学び合い』は、意欲的に学習するのに、とてもよいですか。」というアンケートには、Aそう思う17人、Bどちらかといえばそう思う14人、Cどちらかといえばそう思わない1人、Dそう思わない1人の回答があった。9割以上が学び合いを肯定的に受け止めていることから、生徒が学び合いによって意欲的に学習できると自覚していることが分かる。

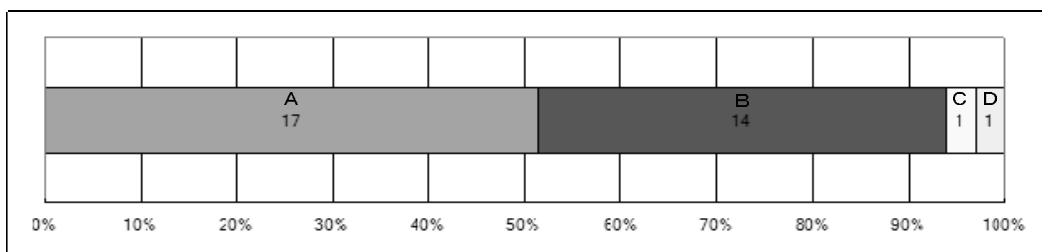


図152 「『学び合い』は、意欲的に学習するのに、とてもよいですか。」のアンケート結果
 Aそう思う Bどちらかといえばそう思う Cどちらかといえばそう思わない Dそう思わない

(5) 今後の課題

ピアタイムを始めとする効果的な学び合いについて、まだまだ検討の余地がある。例えば、分からない生徒は、分かる生徒の答えを写すだけでなく、しっかり説明してもらい、それでも分からないところは質問したりして考えを深めることができるようになることが理想であると考えている。また、ピアタイム中に一人でもくもくと考えを深めていた生徒もいたが、交流することだけがすべてではない。学び合いは生徒が意欲的に学習するための手段であり、目的ではないことを再確認し、生徒同士の交流が、形だけにならないよう、生徒の学びを見つめ、検証しながら、更に研究を深めていきたい。

実践5 動物の生活と生物の進化（中学校 第2年理科）【手だて1】

(1) 本単元について

本単元の目標は、「身近な動物についての観察、実験を通して、動物の体のつくりとはたらきを理解させるとともに、動物の種類やその生活についての認識を深める」である。これまでに、中学校第1学年で「植物の生活と種類」について学習している。ここでは、生物の体は細胞でできているということを理解させるとともに、動物の体のつくりとはたらきや行動のしくみについての学習を通して、動物についての総合的な見方や考え方を養わせたい。

また、動物の体のつくりや子の生まれ方などの特徴を分類し、生物が存在する環境に関連させながら考えさせたい。さらに、生物の進化とは、様々な環境に適応することであり、進化によって生物の多様性がもたらされているということを理解するとともに、生物の理解を深め、生命尊重の態度を育てることが大切である。

本時では、肺から取り入れられた酸素がどのようにして細胞まで運ばれていくかということについて説明できるようにするものである。動物の呼吸・血液循環のまとめの授業であり、そこまでの内容を理解していないと説明することはできない。そのため今回の授業を通して、動物の呼吸から血液の循環までを説明できるようにしたい。

(2) 具体的な支援の手立て

ア ピアタイムを活かして、仲間と関わりながら理解を深める。

この単元は動物を主に扱うということで生徒の学習意欲は高い。しかし、自分がわかればそれでいいという生徒が多いため、学級全体でできるようになるという意識をしっかりと持たせたい。そのため南部中学校独自の学び合い活動であるピアタイムの形式で授業を行った。具体的には、今回の授業時間のほとんどを自由交流の時間と設定し、好きな仲間と教科書を見たり、ノートを見たり、便覧を見たりなど、生徒たちだけの力で自由に「肺から取り入れられた酸素が細胞まで運ばれるしくみ」を説明できるようにまとめていく。同時に教師が考える答えも黒板に提示した。

イ 確認テストをすることで、評価を明確にする。

授業の最後の時間に何も見ずに紙にまとめてもらうテストを行うということを伝え、その確認テストを評価するということを伝えた。またこのときに、できていない生徒がいれば学級全体の評価をさげるということを伝えた。活動の出来を全体責任としたことで、自分だけでできていれば良いと考える生徒を減らし、お互いが協力し合うという生徒の活動を活発にした。教師は何かを教えるというよりは、生徒同士をつなぐパイプ役に徹しながら「一人だけでできて意味がない。最後のテストで全員ができるようになること」ということを強調することで生徒同士の学び合いを目指した。

(3) 授業の実際

1) 単元計画 (43時間完了)

- ①細胞のつくりとはたらき・・・・・・・・・・・・・・・・・・4時間
- ②生命を維持するはたらき
 - ア いろいろな呼吸器官・・・・・・・・・・・・・・・・・・2時間
 - イ 血液とその循環について・・・・・・・・・・・・・・・・5時間 (本時1/5)
 - ウ 消化と吸収について・・・・・・・・・・・・・・・・・・9時間
- ③行動のしくみ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8時間
- ④動物のなかま・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9時間
- ⑤生物の進化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3時間

2) 本時の目標

- ア 肺から取り入れられた酸素が細胞に運ばれるしくみを意欲的に調べることができる。
- イ 肺から取り入れられた酸素が細胞に運ばれるしくみについて説明することができる。

3) 授業の経過

学習形態：個別→個 ペア→ペア グループ→グループ 全体→全体 一斉→一斉 ピアタイム：ピア

| 段階 | 学習活動 | 教師の支援・指導上の留意点 | 評価 |
|--|---|--|------------------------------------|
| つかむ5分 | 1 これまでの学習を振り返る。 <input type="checkbox"/> 斉 ・呼吸器官や心臓のつくり | <ul style="list-style-type: none"> ・ 活動は「ピアタイム」で行うものとし、自由に交流してよいことを理解させる。 ・ 授業の最後に何も見ずにまとめてもらうテストを行うことを伝え、生徒の学習意欲を高める。 ・ 学級全員が課題を達成できることが目標と伝え、学び合いを促す。 | 本時の学習課題に興味・関心を持つことができたか。 (行動観察) |
| | 2 本時の課題を把握する。 <input type="checkbox"/> 斉 | | |
| <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> みんなで、肺から取り入れた酸素はどのようにして細胞まで運ばれるか説明できるようになろう。 </div> | | | |

| | | | |
|-------------|---|---|---|
| 取り組む 30分 | 3 ピアタイムで自由にまとめ ていく。 ピ | <ul style="list-style-type: none"> 教師はパイプ役に徹することで、生徒同士のつながりを促していく。 学級全員がわかるようになることが目標だと呼びかける。 | ピアタイムの活動を活発に行ったか。 (ワークシート・行動観察) |
| 深める 10分 | 4 何も見ずにまとめるテスト を行う。 個 | <ul style="list-style-type: none"> 全員が課題を達成するために動いていたかを、このテストで評価するということを伝え、生徒の意識を高める。 | 酸素が運ばれるしくみを科学的に説明することができているか。 (ワークシート) |
| 振り返る 5分 | 5 ワークシートに本時の取り組みや理解度を自己評価する。 個 | <ul style="list-style-type: none"> ピアタイム中の活動で、活発に交流を行っていた生徒を賞賛する。 | 学習の成果や取り組みを正しく評価することができたか。(ワークシート) |

5) 評価規準と評価方法

ア 肺から取り入れられた酸素が細胞に運ばれるしくみを、意欲的に調べることができたか。
【観察・ワークシート】

イ 肺から取り入れられた酸素が細胞に運ばれるしくみについて、説明することができたか。
【観察・ワークシート】

(4) 成果

授業の後半に何も見ずにもう一度文章で表現してもらおうという課題を与えたため、全体の学び合いの意識が高まっていた。ピアタイムでは、自分の好きな子に聞きに言ったり、この子ならわかるだろうと考えて、自由に動き回ることができるため学び合い活動が活発に進んでいた。また、理解できていないのにいつまでも一人で考えて、自分から交流ができていない生徒に対して、教科委員に助けに行くように指示した。また、はやくに通りの理解を終えた生徒のもとに集まるよう、声かけを行った。

ワークシートを見ると、32人中、20人の生徒が酸素が細胞に運ばれるまでを説明することができており、10人の生徒が時間が足りない様子だった。まったくできていないという生徒は2人だった。

教師は生徒と生徒をつなぐパイプ役に徹することで生徒同士の学び合い活動が円滑に進んでいく。そのため生徒一人ひとりの様子をよく観察していくことが重要であると考えた。

(5) 今後の課題

授業の後半に確認テストのような形でテストを行うと伝えたこと、またこの確認テストを評価すると伝えたことでピアタイムの活動が活発になった。しかしこれは、「評価されるから頑張ろう」という外発的な要因であり、全ての生徒自らが学びあいたいと考えて動いたわけではない。そのためこれからは、学び合いをしたことで今回の確認テストの結果が良くなったことなどを伝えて学び合い活動を行うことの素晴らしさに気づかせていきたい。そして、確認テストなどがなくとも、クラス全体で学び合いができるような学級をつくっていけると良いと思う。

4 成果と課題

(1) 手だて1について

学習集団を個からグループにしたことで表現の幅が広がり、協力する喜びを感じる姿を見ることができた。また、お互いを評価しながら交流したり、その後の目的がある交流をした場面では、多くの仲間と関わり、積極的に考えを深める姿が見られた。

一方、課題を解決する際、ゴールがイメージしにくい場合に、児童生徒の活動が停滞し、児童生徒同士の交流ではなく教師に質問する場面が増えてしまったことから、仲間同士で課題を解決する場面では特に、ゴールが具体的にイメージしやすい課題を設定する必要性を感じた。さらに、課題の難易度が易しすぎると、意欲が低くなって交流が生まれなかったり課題そのものに取り組もうとしなかったりする児童生徒の姿も見られた。また、難しすぎると何をしていたかわからず交流がスムーズに進まなくなることも実感した。そのため、それぞれの学級の実態に合った難易度やヒントを与えることで、児童生徒同士の交流が活発になり、課題解決につながる事が分かった。その必要性を再確認したい。

(2) 手だて2について

学習プリントにのせるヒントの出し方を工夫することで、先を見通すことができ、仲間同士で相談し、解決しようとする姿が見られた。また、話し合う前に個人の考えを整理してから話し合うことで、考えの深まりを見ることができた。

Yチャートなどの学習プリントは、繰り返し活用することで思考の整理方法が身につけていくものと考えられるので、計画的に使用することで、思考を整理した上で話し合う習慣を身につけさせたい。また、学習プリントにどれだけ時間をかけ、交流にどれだけ時間を割くかというバランスについても、検討事項の一つであると考ええる。

II 犬山市公開授業研究会・ 授業研究会成果発表会の記録

24年度 犬山市 第1回 公開授業研究会

学校は子どもたちが学び合う場
公開授業研究会は教師が学び合う場



各グループの検討内容を交流

ビデオ授業で犬山の学び合う学習を研修しましょう！
研究協議で授業の見方を鍛えましょう！！

- 1 期 日 8月1日（水）
- 2 開始時刻 13時00分（受付開始12時半）
- 3 場 所 犬山福祉会館4階中ホール
- 4 その他 参加希望氏名等を別紙様式にて報告してください。
（資料等を準備する関係です。FAX またはメールで。宛先は参加者名簿に記載）

当 日 の 予 定

- | | |
|-------|---|
| 13:00 | 開 会 |
| 13:10 | 小学校1年国語科ビデオ授業参観 授業者 羽黒小 杉山結生教諭 |
| 13:45 | 中学校2年理科ビデオ授業参観 授業者 城東中 江口康之教諭・山田洋子教諭 |
| 14:20 | グループ協議（1グループ6人程度、他校・異校種との交流） ・授業を観る視点をもとにして、自分の授業に取り入れたいことや他に工夫できる点について付箋紙で洗い出す。 ・他のグループが洗い出した付箋紙の内容を見て回り交流する。 ・他のグループの意見も参考にして本日の授業分析を行う。 |
| 16:30 | 本日の振り返り |
| 16:40 | 中京大学教授 杉江修治先生の指導・助言 |

教師は授業で勝負！

教師の合い言葉は「忙しい！」。しかし、忙しいからといって授業をおろそかにはできません。1時間1時間が子どもたちにとって、かけがえのない1時間だからです。授業改善を目指す教師は集まれ！ワイワイガヤガヤと話し合っているうちに目の前が開けてくると間違いなし！！



公開授業研究会

— 教師も ともに高め合う —

8 月 1 日（水）に犬山市福祉会館で、本年度第 1 回公開授業研究会を開催しました。夏季休業中にもかかわらず、全部で 76 名の先生方に参加いただきました（小学校教員 47 名、中学校教員 22 名、高校教員 3 名、大学教員 1 名、市教委関係 3 名）。今回は、杉江先生の呼びかけで、三重県や東京、名古屋の高校の先生にも参加していただきました。

1 開 会

- あいさつ

中京大学教授 杉江 修治 先生

2 ビデオ授業参観

- 小学校 3 年 国語の授業

犬山市立東小学校教諭

野村 実香 先生

- 中学校 2 年 理科の授業

犬山市立城東中学校教諭

江口 康之 先生

3 研究協議

- (1) 授業を観て感じた《自分の授業に取り入れたい点》と《他に工夫できる点》を付箋紙に書いて模造紙に貼る。
- (2) 他グループが書いた内容を見て回る。
- (3) 授業を観る観点に従い、研究協議。グループで共通理解されたことを画用紙に見やすく記述する。
- (4) 他グループが記述した内容を見て回る。

4 本日の振り返り

5 指導・助言

中京大学教授 杉江 修治 先生

本日は、左記の日程で行いました。この公開授業研究会も、今回で通算 10 回目になります。これまでにビデオ公開授業として、小学校の部で、「国語」「道徳」「体育」「外国語活動」「算数」、中学校の部で、「理科」「英語」「社会」「数学」「音楽」「国語」の優れた実践を紹介してきました。

ビデオ授業の視聴もとても有意義なのですが、毎回参加者の皆さんが熱心に協議する時間も、とても意義があります。今回も、時間を忘れ、熱心な話し合いが繰り広げられました。研究協議では、6～7名の少人数グループでじっくり話し合う時間と、他のグループの話し合いの跡を見て回って、新たな観点を見つけるようにしたので、授業について深く話し合うことと、多くの先生方の意見を知り、広く考えることもできたのではないかと思います。後述しますが、振り返りでは、研究協議の持ち方が好評であったとの意見がたくさんありました。

1 開 会

開会のあいさつで、杉江先生は、次のように述べられました。

- 授業を観る視点が今回も示されているが、実のない形式的なものであってはなりません。常に子どもの成長を考えたものとすべきです。ですから、いつでも、どの教科でも同じというわけにはいきません。
- 教科の力を伸ばす視点を常に考えておくことも大切です。
- 子どもは、常に成長しています。その成長の意欲を高めることに、教師は心を砕くべきでしょう。子どもによって、教師も育てられているのです。
- 子どもは、この単元・授業を学ぶことで何が身につくのか、それを子ども自身が知っておかなくては、学習の効果は上がりません。本日の実践の中でも、そのことが、垣間見られることと思います。

2 ビデオ授業参観

ビデオ授業参観の観点を、あらかじめ次のように設定し、参加者に提示しました。

- ① 児童・生徒の学習意欲を高める仕かけは、どのようになされていたか。
自分なら、この授業でどのように仕かけていくか。
- ② 教科の力を高める仕かけは、どのようになされていたか。
さらに、教科の力を高めるためのアドバイスはないか。
- ③ 授業の中で教師は、どのような役割を果たしていたか。
あなたは、日頃、どのような指導・支援に心がけているか。
- ④ 学び合い、高め合う授業とは、児童生徒にどのような姿がみられる授業か。
また、どのような学習活動に取り入れると有効か。

小学校3年国語の授業 犬山市立東小学校 野村 実香 先生

* 単元名：読んで、考えたことを発表しよう（12時間完了）

教材名：海をかつとばせ（本時9／12時間）

* 授業者の思い

- 根拠となる叙述を明らかにして感想や意見を伝える活動は、他教科や日常生活でも求められる言語活動である。漠然とした感想や思いつきの意見ではなく、登場人物の行動、会話、気持ちを表す叙述を確実にとらえることを中心に学習を進めていきたい。
- マイノート（本文をコピーし、余白を作ったもの）にサイドラインを引き、その叙述をもとに読み取ったことを余白に書いていく。発表の際は、根拠を明確にして、自分で話すことができるようにしたい。
- 本時では、登場人物の人柄を読み取り、登場人物に手紙を書く活動を通して、自分についても考えられるようにしたい。また、自分の考えを友達に伝え、友達の考えを聴くことで、登場人物と自分だけでなく、友達と自分にも感じ方の違いがあることに気づかせたい。

- * 本時の目標
 - ・ 友達の考えと自分の考えを比べて聞き、叙述をもとに友達に伝えることができる。
(話す・聞く)
 - ・ 全体交流で話し合ったことをもとに自分の考えを文章化することができる。(書く)
- * 本時の流れ
 - ・ 前時までの活動を振り返り、本時の活動に意欲をもつ。・・・ワタルに手紙を書くことを伝え、話し合いへの意欲づけをする。・・・一斉→個人
 - ・ 「海をあげるよ」に出てくるワタルはどんな子が考え、全体で交流する。・・・初めは泣き虫で甘えん坊だったことを根拠に、ワタルの成長に気づく。自分で読み解いた考えを、叙述をもとに友達に伝え、友達の考えと比較しながら聞く。
・・・個人→全体
 - ・ 話し合ったことをもとに、ワタルに手紙を書く。・・・「海をかつとばせ」で書いた手紙を思い出し、自分と比べて書く。・・・個人
 - ・ 手紙を交換し、交流する。・・・友達に感想を伝えたり、友達の考えに質問したりする。・・・ペア→全体
 - ・ 手紙を発表する。・・・ワタルの成長を踏まえた児童の手紙の発表を聞き、並行読書への意欲をもつ。・・・一斉
 - ・ 本時の振り返りと次時の予告を聞く。・・・一斉

中学校2年理科の授業 犬山市立城東中学校 江口 康之 先生

- * 単元名：原子をもとに説明しよう（1時間完了・・・本時）
- * 授業者の思い
 - ・ 城東中現職教育のキーワードである「つながる」の具現化として、理科では、実際に実験や観察などを通して、自ら課題を追究する意欲を高めたり、仲間とともに学び合う機会を増やしたりして、授業改善に取り組んでいる。
 - ・ 本時は、二酸化炭素の中でマグネシウムが燃焼する実験を行う。「二酸化炭素中ではものが燃えない」という既成概念がある中、未知の化学変化を予想することは、自ら追究する意欲を高めると考えた。
 - ・ 仲間とともに実験したり話し合ったりする「つながる」活動を通して、仲間とともに課題を解明していく喜びを感じ取ってほしい。
- * 本時の目標
 - ・ マグネシウムの燃焼に興味をもち、仲間とともに二酸化炭素中でのマグネシウムの燃焼について、意欲的に追究することができる。(関心・意欲・態度)
 - ・ 二酸化炭素中でマグネシウムが燃焼する理由を、原子モデルを用いて説明することができる。(科学的思考)
- * 本時の流れ
 - ・ 燃焼について復習し、ろうそくや紙についた火が、二酸化炭素中では消えることを確

- 認する。・・・マグネシウムが空気中で激しく燃焼したことを想起させる。・・・一斉
- ・ マグネシウムが二酸化炭素中で燃焼するのか予想する。・・・二酸化炭素中でろうそくや紙の火が消えることを演示し、課題解決の意欲を高める。・・・一斉→個人
 - ・ 実験方法の説明を聞き、実験をし、結果をまとめる。・・・生徒自ら、同じグループの仲間とつながりながら、安全かつ正確に実験を行い、課題に即したまとめをする。
 - ・・・グループ→個人
 - ・ 二酸化炭素中のマグネシウムの燃焼について、原子モデルを使って説明する。・・・具体的な論拠となり、話し合い活動が活性化するために、原子モデルを使って話し合う。・・・個人→グループ
 - ・ ホワイトボードに書かれた内容を読み、意見を交流する。・・・マグネシウムが二酸化炭素中の酸素を奪ったことに気づくなど、よい意見を選んでメモする。・・・全体
 - ・ 学習カードによる本時の理解度調べと振り返り・・・正しく自己評価し、自分の成果や課題をつかむ。・・・ペア→個人

3 研究協議

- (1) 授業を観て感じた《自分の授業に取り入れたい点…赤い付箋紙》と《他に工夫できる点…黄色の付箋紙》について各自で考え、小中別の模造紙に、指導過程に沿って貼りました。

(例：D グループが模造紙に貼り付けた付箋紙の内容)

小学校3年国語の授業 犬山市立東小学校 野村 実香 先生

《自分の授業に取り入れたい点…赤い付箋紙》

- * 単元全体・授業全体を通して
 - ・ マイノートを使うことにより、児童自ら行間を読もうとする意欲をもっていた。
 - ・ マイノートを使うことにより、教科書の本文と自分の意見をすぐに見比べられる点がよかった。
 - ・ 単元指導内容の段階を3つに分け、付けたい力を ①読み取る力→②書く力→③広げる力として構成していったのがよかった。
 - ・ 単元を通した取り組みで、子どもたちもゴールや到達目標が分かる。
- * 導入について
 - ・ 本時のめあてが、一度やっているものなので、子ども自身見通しが立てやすい。
 - ・ 一単元の読み取りだけでなく、関連した発展教材に取り組むことで、読み取りの力が伸びる。
- * 展開について
 - ・ 互いの考えが聞きやすいような配置に、机がしてあった。その配置は、顔を見て話すということにもつながっていたのがよかった。
 - ・ 小学校段階から話し方や聞き方の意識付けをすることは、大切である。(話し方名人・聞き方名人という表記は、子どもの意欲が上がる。)

- ・ 「声の大きさ表」は、児童にとって分かりやすい目安なので、教師の工夫として素晴らしい。今何をする時間なのかも明確に把握できる。
- ・ 教師の立ち位置が、子どもの視線の邪魔にならない位置で、よかった。
- ・ 段階評価の観点に、伝えることと聞くことの両方があり、子どものめざすものが、はっきりしている。
- ・ 話し合いが進まない時に、教師が言った「なんで？」という追加の質問で、子どもがまた、深く考えようとしたところがよかった。
- ・ 似ている意見から相互指名していたが、これは、日ごろからの取組の成果であろう。
- ・ 似ている意見を相互指名できるということは、自他の意見を比較して、その相違点を意識しているからこそできることである。
- * まとめについて
 - ・ 手紙を書くということで、自分の考えをまとめさせることと、文章を書く力を付けることの両方ができていた。
 - ・ 手紙という取り組みやすい形にしたことで、自分の考えを自分の言葉で書きやすくなっていた。



《他に工夫できる点…黄色の付箋紙》

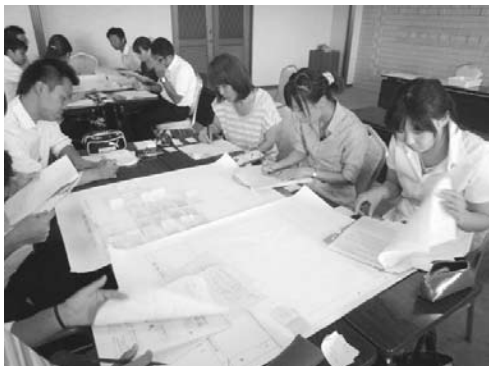
- ・ 板書がほとんどなかったが、キーワードだけでも記した方がよかったのではないかな。
- ・ 子ども同士で話し合う時間を十分に確保するとよいのではないかな。また、グループ活動の際、教師はあまり出て行ってはいけない。機を見て支援するとよいのではないかな。
- ・ 子ども主体で話し合い活動も授業全体も進められていたが、教師が前面に出て、まとめたり、導いたりする場面も必要ではないかな。
- ・ 友達の考えと比較しながら聞いて、自分の意見を高めることができたか、それを明確にはかる評価の手だてを考えるとよい。

中学校2年理科の授業 犬山市立城東中学校 江口 康之 先生

《自分の授業に取り入れたい点…赤い付箋紙》

- * 授業全体を通して
 - ・ ITの役割分担がはっきりしており、どちらも有機的に活動していた。
- * 導入について
 - ・ 予想を立てさせる際、「よく燃える」「少し燃える」「すぐ消える」という3つを示し、視点を明確にしていたので、予想を立てやすかった。
 - ・ 予想を立ててから演示することで、意欲をもって参加することができていた。

- 既習事項や燃焼についての発問が多く、学力を高める工夫が見られた。



- 実験前に演示実験をすることで、生徒が実験の
手順を把握しやすかった。
- 演示実験に、生徒がとても興味を示していた。

* 展開について

- 原子モデルを説明するために、マグネットを効果的に使っていた。
- 実験器具や筆記具などの整頓という、実験に取り組む基本ができていた。
- ホワイトボードを貼る＝発表。余分な説明がなかったので、一生懸命ボードを見ていた。

《他に工夫できる点…黄色の付箋紙》

- 教師主導でなくするために、初めに本時の流れを一通り説明してはどうか？
- 実験結果のみにこだわる傾向への手だてとして、予想の段階で理由を述べさせてみてはどうか。
- 他のホワイトボードを正していくのではなく、その意見の説明や感想を求めるという方法もある。
- まとめを発表する前に、予め観点を示しておくべきではなかったか。（実験前に何に焦点を当てて実験するのか観点を与えるとよい。）
- 実験時の役割分担は、みんなが動くよう、教師がするとよいのではないか。
- 化学反応式を考える前に復習をすると、残るものが何なのか分かりやすい。
- どの班の発表が分かりやすかったか聞いていたが、それをどのように生かすのか、つながりが見えなかった。
- ホワイトボードを貼る際に、似た意見同士まとめてはるなど、分類しながらはるということを入れると、生徒の科学的な目や、他との相違点を考える力を伸ばすことにつながっていく。

(2) 他グループが付箋紙にどのような内容を書いているのか、見て回る時間を 10 分取りました。

(3) 授業を観る視点に従って、研究協議を 70 分行いました。模造紙に張られた付箋紙の内容や、見て回った他グループの意見も参考にしながら、活発な話し合いが行われました。グループで共通理解した内容は、記録係が、画用紙にまとめました。

(4) 各グループがまとめた内容を自由に見て回る時間を 15 分取りました。

(例：E グループが模造紙に貼り付けた付箋紙の内容)

小学校3年国語の授業 犬山市立東小学校 野村 実香 先生

視点① 児童の学習意欲を高める仕かけ

- ・ 同じ作者の別作品を次段階で取り扱うのは、とてもよい単元構成（単元デザイン）。
- ・ 自分と同世代のモデルについて考える→自分の思いや成長を手紙に自分と重ねて表現できる。
- ・ 学び合いのスタイルをより深い読みができるものへと移行するのが、教師の出番。発問を工夫することで、捉えにくかったことが分かりやすいものになる。
- ・ 取り上げるべき一文をどこにするのか、どう扱うのか、それが教師の見極める力。
- ・ 板書は教師の出番。黙って見守る部分と教師が軌道修正すべき部分、揺さぶる部分との区別をする。そのためにも、板書も必要。
- ・ 手紙を書く＝自分の思いのアウトプット。自分と比べながら自分の思いを表現できる。



視点②教科の力を高める仕かけ

- ・ 課題設定（単元設定・準備・支援）を、形ではなく、教師の思いやねらいを明確にしてデザインする。
- ・ 手紙の内容の変化から、教師は、子どもの心情の変化を見つけること。子ども自身は、他者との違いを見つけ自分の考えと比べながら、自分の意見を伝えることで、国語的な考える力や話す力が伸びていく。
- ・ 個性的な読み取りを認め、その背景を考えさせるのも、深まりがあつてよい。

視点③教師の役割

- ・ 教師の強い願いやねらいがある場合、板書はしないということもあるだろうが、キーワードのみを記すなど、子どもの発言を途切れさせないことが大切。
- ・ よい取組・授業へのチャレンジは、常に大切。視察や校内研修などで、授業をたくさん見て学ぶ。時には、「いつもの自分」を捨ててみることも大切。

視点④学び合い高め合う授業における子どもの姿

- ・ 個人差を認め、互いに学び合う中で、どの子も伸びることを目標にする。
- ・ 違う意見に対して、安易な容認も批判もよくない。多くの友達と交流し、たくさんの

意見を聴くとともに、自分の考えを伝える。「そうだよね」とか「やっぱりぼくは・・・」という互いに尊重しながら自分の考えをもつことが大切。

中学校2年理科の授業 犬山市立城東中学校 江口 康之 先生

視点① 生徒の学習意欲を高める仕かけ

- ・ 燃焼を子ども自身がどう納得し説明できるか、それを子どもの言葉からまとめることが、本時の主活動ではないだろうか。
- ・ この炭素 (C) は、どこから来たのか、それを追究する眼を養いたい。
- ・ つなぐ教師の言葉と子どもの施行の連続性が弱かった気もする。

視点②教科の力を高める仕かけ

- ・ 燃焼とは何か、自分の言葉でアウトプットするために、「予想(仮説)→実験→考察→まとめ」という授業構成をしっかりと組み立てる。
- ・ 「ああ、そうだったんだ」という言葉が聞けるように、授業の内容を理解・定着させたい。
- ・ 以前の学習より、酸素は、炭素よりマグネシウムにくっつく力が強いことを想起させることで、本時の謎を解く方法もある。原子モデルでの説明の補助や裏付けになる。

視点③教師の役割

- ・ 子ども自身が「なぜ?」と思い、それを追究するために、教師の発問が重要になってくる。「どこで」「何を」「どのように」発問するかを見抜く力を養いたいし、そのためには、単元全体を見通し、教科全体の中での本時の位置をはっきりつかんでおくことが大切である。
- ・ 学び合う姿勢はできているので、今後は、自立解決のレベルアップにつながる課題設定が求められる。
- ・ 時数のしぼりではなく、子どもの力の定着や成長を考えて単元を捉え、その構成を考えることが大切。

視点④学び合い高め合う授業における子どもの姿

- ・ 子どもが話そうとする姿=犬山の取組の成果。今後は、話し合いの質の向上が課題である。
- ・ 何のために、何をめざして話し合いをするのか、話し合いの必然性を子ども自身が確認できるような単元構成・授業展開が望まれる。
- ・ 個人の考えをもとに仲間との話し合いや取り組みがある。その後は、また個人に返す活動が必要。
- ・ まとめをおろそかにしないよう、まとめの段階で、自分の考えを書いたり意見を言ったりすることに、しっかりと取り組ませたい。

- ・ ここまでは到達したいという点までは、全員到達させたい。

4 本日の振り返り

下記の項目で本日の振り返りをするとともに、自由記述で感想を書きました。

1 ビデオ授業参観から学ぶことができましたか。

- ① () 多くのことを学べた。 ② () ある程度学べた。
③ () あまり学ぶことがなかった。 ④ () 全く学ぶことがなかった。

2 授業を観る視点は適切でしたか。

- ① () 適切である。 ② () まあまあ適切である。
③ () あまり適切ではない。 ④ () 全く適切ではない。

※加えると良い視点があれば記してください。

3 研究協議から学ぶことができましたか。

- ① () 多くのことを学べた。 ② () ある程度学べた。
③ () あまり学ぶことがなかった。 ④ () 全く学ぶことがなかった。

4 今回の研究協議の方法についてお答えください。

- ① () 授業を観るヒントをたくさん得ることができた。
② () 付箋紙を使うので論点が分かりやすい上、記録も残り考えを整理しやすい。
③ () 以前のように2回の研究協議を行い、より多くの人と交流して多くの意見を聞きたい。
④ () その他(具体的に：)

* 振り返りを集計した結果、次のようになりました。(回答数68)

| 項目 | ① | ② | ③ | ④ | 合計 |
|----|----|----|---|----|----|
| 1 | 24 | 38 | 6 | 0 | 68 |
| 2 | 33 | 35 | 0 | 0 | 68 |
| 3 | 47 | 21 | 0 | 0 | 68 |
| 4 | 30 | 35 | 7 | 14 | 86 |

・・・4については、複数回答が多くありました。

* 4の④その他に寄せられた、主なご意見

- ・ 小中の交流ができたのはよかったが、中学校区ごとで話し合いをしてもよかった。
- ・ 少人数であり、異校種、異役職の混合グループは、視点が様々で、勉強になった。
- ・ 見て回る回数は、2回でなくてもよかった。後の1回は、どちらでもよい気がする。



・ 固定したビデオで録画されていたり、声が聞こえにくかったりしたので、他のグループを見て回るのは、とても有効だった。

5 杉江先生の指導・助言

・ 自主・自律、協同は、犬山の授業改善の基本です。いかに子どもの主体的な学びを促す課題を設定するかを、そこに授業づくりは、かかっています。

- ・ 校内の、全ての教員が、めざす子ども像を共有する必要があります。目指すものが具体的かつ明確でなければ、研修を重ねても成果は上がりません。そこを統一して共有するからこそ、手だても考えられるし、成果も課題もはっきりしてきます。各学級・各学年だけで教育しているのではなく、学校が一つになって目標に向かって研修を重ねることこそ、大切です。
- ・ 相手を信頼し、互いに認め合うことが、協同の基本です。そのような集団なら、学び合うことも成果が上がるでしょう。
- ・ なぜ発表するのか、なぜ聞くのかといったことを事前に示すことで、子どもの学習意欲は変わってきます。学習の筋道やゴールを知らせることとともに、この学習をすることで身につく値打ちを知らせることも大切です。
- ・ 常に、子どもが自分で判断できる問いかけや課題を設定しましょう。例えば「手紙を書こう」ではなく、「よりよい手紙を書きましょう」とか、「友達の手紙を読もう」ではなく、「だれの手紙が心に残ったか後で推薦してもらってから、そのつもりで読もう」というような教師の声かけの工夫で、子どもの課題意識と課題への取組の主体性が向上します。
- ・ 気心知れて励まし合い、鍛えあう集団へ、進化させることを考えてください。

◎ 参加者の感想（一部抜粋）

- ・ 研究協議グループの中に、小中それぞれの先生がいたので、互いに日頃の思いなどの交流ができてよかったと思います。
- ・ 経験の多い、ベテランの先生の授業も、ビデオ公開していただきたいと思います。
- ・ 子ども同士で学び合い、高め合う授業のアイデアについて知ることができました。単元の目標をしっかりもち、独自の教材を取り入れた授業にも挑戦してみたいです。
- ・ アドバイザー的な先生が一人入っていただいていたので、疑問をうかがったり分からないところの解説をしていただいたりして、とても勉強になりました。
- ・ 本当に勉強になった4時間でした。特にマイノートの活用や発表の仕方、TTの授業の形については、早速9月から実践しようと思います。この夏休みを有効に使って、今後の授業を練っていきたいです。
- ・ 全体会で発表という形でなく、自由に見て回る方法はよかった。付箋に書く時間が短かったのも、事前に配っておき、メモしながらビデオを見るという形も考えられる。

- 子どもの学習意欲を高めることの重要性について確認できました。また、意欲を高めるための発問や授業の流れを工夫することの大切さと難しさも感じました。
- 付箋紙に自分の感じた点を書いたのは、自分の考えをまとめる上で、役に立った。
- 小グループでの話し合いだったので、一人ひとりの思いがしっかり聞けた70分となった。言葉で表現すると、感情が伝わってきて、とてもよい刺激になった。
- 初めて参加しました。子どもたちの姿を見、教師の姿を見、具体的に学び合うこの方式は、とてもよかったです。若い先生方ともしっかりとお話ができました。
- ビデオのとり方を工夫して公開していただけたら、教師の活動や板書、児童生徒の活動など、いろいろな場面が見られ、もっと参考になったと思います。
- 授業者の方が行っていた方法を自分自身も取り入れていた。ねらいをもって取り組んでいたのよと思っていましたが、グループの方の意見から、そのマイナス面にも気づかされた。様々な角度からの視点に触れることができたので、今後の授業に生かして



いきたいと思う。

- ビデオ授業についての研究協議は、とても勉強になりましたが、それ以上によかったのは、普段の自分を振り返ることができたことです。普段自分は、どんなことに気をつけているのか、どんなことに気づけていないのかということについて考えました。自分のことを振り返ることで、より実のある研究協議になった気がします。
- 2つの授業を通して、授業の内容や展開だけでなく、板書のあり方や教師の立ち位置、何気ない一言についてなど、普段の自分の授業でも見直したい点が見つかりました。
- 質問したいこともあったので、質疑応答の時間が少しでもあるとよかった。
- 同じ授業を観ても、様々な視点からの話し合いになったので、とても勉強になった。
- 研究協議では、課題を明確にすること、何のために活動するのかが分かる指示が大切であることが分かった。参加してほんとうによかった。ありがとうございました。
- 授業を観て思ったのは、教師の思いと授業が重なっていないこともあるのだと気が付いた。子どもをどう活動させ、何をめざすのか、明確にイメージしながら授業を組み立てなくてはならないと思った。自分の授業でも客観的な視点をもって取り組みたい。
- 1時間の授業の流れを大人を目線ではなく、子どもの目線で考えなければならないということが分かった。
- 付箋の字が小さいので、見て回るときは大変でしたが、自分の考えを観点ごとにまとめるためには、とても有効でした。
- スタートして10年、犬山の学び合いは、今大きな転換期を迎えていると感じています。形ではなく、子どもたちの力を伸ばすことができる授業を行うために授業を改善する

のだと思います。これまでの実践や実績をもとに、真の学力が付くようにレベルアップする必要があります。その意味で、今日の会もよいきっかけとなると思います。

- 単元見直し学習の有効性と必要性を改めて感じた。夏休みを利用して、納得いくまで教材研究をしたい。
- 公開授業研究会でも、その教科の大家のような方の授業が見てみたい。
- 授業を進める上で、何が大切なのか、どのような発問をしたら意見が深まるのかということについて考えることができた。
- 犬山の先生ばかりだと、どうしても井の中の蛙になってしまうので、他県からの先生方がいて、客観的に自分の実践を振り返ることができた。
- 協同学習の理念を教師が理解しているか、また、なぜこの学習に取り組むのかという価値を子どもに伝えられるかといった、教師サイドの勉強も大切である。
- 「自分だったらこうしたい、このように工夫する」という気持ちをもって研修することが、本当はこの回の一番の目的ではないかと思う。自分を振り返ることができた。
- たくさんの意見を聞くことは、とても勉強になる。よい授業をめざすには、普段気づかない点を指摘し合うことが、こういった研修会の意義だと思う。
- 小学校でも中学校でも、国語という教科としての力をどう伸ばすかという課題については同じなので、今回の研究協議は、とても役に立った。
- 中学の理科では、学力の低い子にどのように理解させるのか、疑問です。難しい内容だけに教師の出番が多くなり、生徒が受身的になってしまいます。学習レベルを落とさずに、生徒の意欲を高めることは、簡単ではないと思いました。
- 授業を観る視点は、本校現職教育にも取り入れたい。
- 学び合い高め合う授業研究会と、杉江先生のお名前を見て参加しました。ビデオを見て、「これが学び合いなのだ！」と驚愕しました。協同の理念をどこまで自分が深め自分のものにしていくか、それが課題だと痛感しました。
- だれもが自分の思いを口にできるのは、とてもよいことです。それに対して広い視野（経験）から助言できる先生が、もう少しいるとよいと思いました。犬山の教育の向上のためにも、個の指導力の向上のためにも、忙しいかもしれませんが、主任クラスがもっと参加することを望みます。



（文責：城東小学校 五味 公人）

24年度 第2回 公開授業研究会

学校は子どもたちが学び合う場
公開授業研究会は教師が学び合う場



小グループによる意見交換

ビデオ授業で犬山の学び合う学習を研修しましょう！
研究協議で授業の見方を鍛えましょう！！

1 期 日 12月25日(火)

提出期限： 12月18日(火)

2 開始時刻 13時00分(受付12時半から)

提出先：城東小学校事務局

3 場 所 犬山福祉会館4階中ホール

4 その他 参加希望氏名等を別紙様式にて報告してください。
(資料等を準備する関係です。FAX またはメールで。宛先は参加者名簿に記載)

当日の予定

- | | |
|-------|---|
| 13:00 | 開 会 |
| 13:10 | 小学校1年国語科ビデオ授業参観 授業者 羽黒小 杉山結生 教諭 |
| 13:45 | 中学校3年社会科ビデオ授業参観 授業者 (犬山) 東部中 足立裕貴 教諭 |
| 14:20 | グループ協議(1グループ6人程度、他校・異校種との交流) ・授業を観る視点をもとにして、自分の授業に取り入れたいことや他に工夫できる点について付箋紙で洗い出す。 ・他のグループが洗い出した付箋紙の内容を見て回り交流する。 ・他のグループの意見も参考にして本日の授業分析を行う。 |
| 16:30 | 本日の振り返り |
| 16:40 | 中京大学教授 杉江修治先生の指導・助言 |

教師は授業で勝負！

教師の合い言葉は「忙しい!」。しかし、忙しいからといって授業をおろそかにはできません。1時間1時間が子どもたちにとって、かけがえのない学びの時間だからです。授業改善を目指す教師は集まれ! ワイワイガヤガヤと話し合っているうちに目の前が開けてくること間違いなし!!

平成 25 年 1 月 11 日

犬山市授業研究会

犬山市小中学校長会



平成 24 年度 第 2 回

公開授業研究会

— 教師も ともに高め合う —

12 月 25 日（火）に犬山市福祉会館で、本年度第 2 回公開授業研究会を開催しました。冬季休業中にもかかわらず、全部で 76 名（小学校教員 48 名、中学校教員 21 名、高校教員 2 名、大学教員 4 名、市教委 1 名）の参加がありました。また、今回も杉江先生の呼びかけで、東京や埼玉、福井や大阪の先生の参加もありました。

1 開 会

○ あいさつ

城東小学校長 水谷 茂 先生

中京大学教授 杉江 修治 先生

2 ビデオ授業参観

○ 小学校 1 年 国語科の授業

犬山市立羽黒小学校教諭

杉山 結生 先生

○ 中学校 3 年 社会科の授業

犬山市立東部中学校教諭

足立 裕貴 先生

○ 小学校 1 年 算数科の授業

犬山市立城東小学校教諭

西部 舞 先生

3 研究協議・・・各グループ

○ 授業を観る観点に従って記録した

《自分の授業に取り入れたい点》と《他に工夫できる点》をもとに、3つの実践について研究協議を行う。

4 協議内容の共有・・・全体交流

5 指導・助言

中京大学教授 杉江 修治 先生

6 閉会（本日の振り返り）

当日は、左記の日程で行いました。

この公開授業研究会も、今回で通算 11 回目になります。これまでにビデオ公開授業として、小学校の部で、「国語」「道徳」「体育」「外国語活動」「算数」、中学校の部で、「理科」「英語」「社会」「数学」「音楽」「国語」の優れた実践を紹介してきました。

ビデオ授業の視聴も、とても有意義なのですが、毎回参加者の皆さんが熱心に協議する時間も、とても意義があります。今回も、時間を忘れ、熱心な話し合いが繰り広げられました。研究協議では、5～6名の少人数グループでじっくり話し合う時間と、他のグループの話し合いの跡を見て回って、新たな観点を見つけるようにしたので、授業について深く話し合うことと、多くの先生方の意見を知り、広く考えることもできたのではないかと思います。振り返りでは、校種や、学年が違った方と話し合うことがとてもよかったという意見も、多く聞かれました。

1 開 会

開会のあいさつで、杉江先生は、次のように述べられました。

- 授業を観る視点が示されていますが、それに沿って、これは自分も取り入れてみたいとか、自分ならどうするというように、常に自分の実践と照らし合わせて観るべきです。
- 授業をする場合、教師の「教えたい」という思いばかりでは、子どもの、自ら学ぶ意欲を欠いた、受動的で形式的な授業になってしまいます。子どもは、常に成長しています。その成長の意欲を高めることに、教師は心を砕くべきでしょう。
- 教科の力を伸ばす手立てを常に考えておくことも大切です。
- 子ども自身が単元を見通して、学習の筋道やゴールを意識しながら授業に取り組むことで、学習の効果が上がります。この単元・授業を学ぶことで何が身につくのか、それを子ども自身が知っておくことが、大切です。



2 ビデオ授業参観

ビデオ授業参観の視点を、あらかじめ次のように設定し、参加者に提示しました。

- ① 児童・生徒の学習意欲を高める手立ては、効果的であったか。
自分なら、この授業でどのような手立てをとるか。
- ② 教科の力を高めるために、手立ては工夫されていたか。
さらに、教科の力を高めるための工夫はないか。
- ③ 授業の中で教師は、適切な指導・支援を心がけていたか。
あなたは、日頃どのような指導・支援を心がけているか。
- ④ 授業の中で、学び合い、高め合う場面が、見られたか。

参加者には、これらの視点をもとに、「自分の授業に取り入れたい点」と「ほかに工夫できる点」について、ビデオを観ながら授業記録用紙に記録することで、その後の研究協議に活かすように図りました。

小学校1年国語科の授業 犬山市立羽黒小学校 杉山 結生 先生

- * 単元名：本はともだち （7時間完了）
教材名：ずうっと、ずっと、大すきだよ （本時4／7時間）
- * 授業者の思い
 - 語り手の伝えたいところやポイントとなる場所に気付き、登場人物の気持ちが読み取れるようにしたい。

- ・ エルフが年老いて元気がなくなっても、主人公の「好き」という気持ちが変わらないことを本文から読み取り、想像させたい。
- ・ 変わっていくエルフの様子やその時の主人公の気持ちがそれぞれの児童の中で広がり、自分の体験や経験と結び付けて考えていくことを期待したい。
- ・ グループや全体の交流を経て、人の考えをよく聞くことや自分の考えを見直して、書き加えることなどに取り組ませたい。



* 本時の目標

- ・ 「ぼく」がエルフのことが好きだとわかる部分を進んで見つけることができる。
(関心・意欲・態度)
- ・ エルフが年をとっていく場面の様子を読み取り、「ぼく」の気持ちを想像して書くことができる。
(読む)

* 本時の流れ

- ・ 前時の学習を振り返り、本時の流れと課題を確認する。・・・全体
年をとっていくエルフへの「ぼく」の気持ちをかんがえよう
- ・ エルフの様子や「ぼく」の気持ちに注目しながら音読する。・・・個人
- ・ エルフの様子が前の場面と変わったところに棒線を引き、その様子を読み取る。
→線を引いたところを確認し、エルフの年をとってきた様子に気付く。
・・・個人→全体
- ・ 「ぼく」がエルフのことが好きだと分かる文や言葉に波線を引き、その気持ちを読み取る。→波線を引いた中から、好きだという気持ちが一番伝わる場所を選んで赤線で囲む。
・・・個人
- ・ 赤線で囲んだ部分から、エルフに対する「ぼく」の気持ちを想像し、ワークシートに書き込む。→書き込んだ気持ちをグループで紹介し合い、友達のよい考えを自分のものに付け足して書く。
・・・個人→グループ
- ・ 全体で交流し、エルフを大事に思う気持ちを確認する。→再度自分の文を読み返し、全体交流で気付いた考えを付け足す。
・・・全体→個人
- ・ 本時の振り返りを観点に従って行う。
・・・全体

中学校3年社会科の授業 犬山市立東部中学校 足立 裕貴 先生

- * 単元名：わたしたちの暮らしと経済 (21 時間完了)
教材名：暮らしと経済・・・「コンビニエンスストアの経営者になってみよう」
(本時 1 / 4 時間)
- * 授業者の思い
- ・ 本時は、経済分野の導入部分であり、公民の学習の中で生徒が苦手意識をもちやす

い分野である。そこで、身近な存在のコンビニエンスストアの利益を上げるために、立地条件を考える学習に取り組んだ。

- 個で考え、班や全体で交流する中で、企業が、利益向上のためにどのようなことに心を配っているのかに、考えを及ばせたい。
 - 品揃えも考えることで、消費者の行動と、生活と経済の関係について気づかせたい。
- * 本時の目標
- シミュレーションを通して学習意欲を高め、経済に興味・関心をもつことができる。
(関心・意欲・態度)
 - 経営者と消費者の立場からコンビニエンスストアの立地について考えることで、生活と経済の関係に気付くことができる。
(思考)

* 本時の流れ

- 学習カードより、経済の学習に取り組むことを知る。→コンビニエンスストアの自分の利用状況について考え、本時の課題をつかむ。・・・一斉

どうやったら売り上げがあがるだろうか

- 学習シートに、選んだ土地の理由を「立地条件」と「資料」を参考に記入する。→売り上げをあげるために、開店後、どのような品揃えにするとよいか考える。・・・個人
- 出店候補地ごとのグループに分かれ、自分たちがなぜそこに決めたのか、どんな商品展開でいくのか話し合い、グループとしての考えをまとめる。・・・グループ
- 各グループの発表を聞き、全体での意見交流をする。・・・グループ→全体



- 他のグループへの質問や意見を通して、なぜ他の土地を選ばなかったのか考える。→コンビニエンスストアの利点は何か考える。・・・個人→グループ
- クラスの意見をまとめ、出店場所を決める。・・・一斉
- 本時の学習を振り返る。・・・一斉

小学校1年算数科の授業 犬山市立城東小学校 西部 舞 先生

- * 単元名：ひきざん(2) (13時間完了・・・本時7/13時間)
- * 授業者の思い
- 毎時間授業の初めに、ひきざん50問からなる3分間チャレンジ問題を行い、答えた数・正解数・全問正解したかどうかを記録していくことで、計算の習熟を図りたい。
- 減加法のやり方を、さくらんぼの図と合言葉を使って繰り返し説明させることで、計算の仕組みを理解して解けるようにさせたい。
- 本時では、計算カードを使っているいろいろな問題に挑戦させ、どんな問題でも合言葉を使ってやり方を説明し、解けるようにさせたい。

- ・ 本単元では、3分間チャレンジによる「計算の習熟」と、減加法で解くためのさくらんぼの図や合言葉による「思考の定着」の2つをねらいとして、学年全体で単元見通し学習に取り組んだ。学級ごとの実践を持ち寄り、授業の反省点や改善点について毎時間話し合い、より児童の理解に即した授業に改善していこうと考えた。



＊ 本時の目標

- ・ (十何) - (1位数) で繰り下がりのあるひき算について、計算方法を理解し、どんな問題でも計算の仕方を説明して解くことができる。 (知識・理解)

＊ 本時の流れ

- ・ 3分間チャレンジ問題に取り組む。 . . . 個人
- ・ 本時の学習内容と流れをつかむ。 . . . 一斉

どんなひきざんでも、けいさんのしかたをせつめいできるようにしよう

- ・ 数図ブロックを動かしながら、 $14-9$ のあいことばシートの書き方を確認する。
→板書のさくらんぼの図で確認する。 . . . 一斉
- ・ 計算カードのひき算の仕方を考える。→ペアで話し合い、あいことばシートを完成させる。 . . . 個人→ペア
- ・ (習熟度を高めるために) 計算の仕方を説明して、たくさん問題を解く→うまく説明できない時はペアに教えてもらうことや、聞く側もあいことばシートを見ずに相手の説明をよく聞くことに注意しながら、相手をかえて練習を重ねる。 . . . ペア
- ・ 3分間、自分一人で計算カードの問題をあいことばを唱えながら解く。 . . . 個人
- ・ 振り返りの視点と基準に沿って、学習の到達度と学び合いの達成度を振り返る。 . . . 一斉

3 研究協議

(1) 授業を観る視点に従って記録した《自分の授業に取り入れたい点》と《他に工夫できる点》をもとに、3つの実践について、グループごとに研究協議を行いました。協議を重ねていくうちに、その授業を題材として、「学び合い」や「協同」の理念にまで議論が進んでいったグループもあったようです。

小学校1年国語科の授業 犬山市立羽黒小学校 杉山 結生 先生

(各グループが画用紙にまとめた内容の抜粋)

《自分の授業に取り入れたい点》

- ・ 学び合いに臨む姿勢、理由を言いながら発言する様子などから、学習のルールが徹底していたのを感じる。

- 相手の出来を評価する拍手を3回と示したことで、人の発表をよく聞くことや、どう
いう発表がよいのかという評価の基準が児童にもたらされる。
- 音読する前に、気を付ける点という、よい基準を示したことがよかった。
- 発表者が、全員に向かって話せるように、立ち位置をかえていた点がよかった。
- 発表の仕方を示していたので、安心して発言していた。
- 棒線（——）と波線（～）を使い分けて引くように指示することで、観点をもって
児童が文を読むので、内容の読み取りがスムーズにいく。
- 「きらりさん」として友達の頑張りを認めることで、互いを認める心を育んだり、個
人の頑張りが期待できたりする点がよかった。
- 「きらりさん」を決めることで、人の意見をよく聞く子が育つ。
- 発表する際、何らかの理由を言っていた点がよかった。
- 黒板の掲示物が手書きであったことと、子どもの意見が書き込めるようになっていた
ことがよかった。
- 前時に使った掲示物が見えるので、学習の軌跡をたどり、振り返りやすい。
- 質問を精選しており、児童の学びにつながりやすかった点がよかった。
- みんなで確認しながらマークを貼っていったので、視覚的に分かりやすい上に、学習
の確認が学級でできていた。
- 聞く側も頷きながらであったり言葉で反応したりしながら、しっかり聞いていた点。
- 書く・聞く・話す のバランスがとれた授業であった。
- 初発の感想をよく分析していたので、児童の反応を予想して授業を進めていた点。
- 自由に安心して意見が言える学級集団であるのがよい。

《他に工夫できる点》

- 模造紙にまとめた内容が多すぎて、どこを見ればよいのか、視点が定まりにくいので、
大事な部分だけを黒板に貼り、もっと子どもの意見を板書してもよい。
- 「どうですか」→「いいです」では、多数決に終わってしまうので、少数意見でも
拾う話型の指導や、少数意見に理由を言う場を設定することが必要。また、「どうで
すか」→「わかりません」と言う児童への対応は、どうすればよいか、課題である。
- スキスキカードを簡単にまとめすぎている。
- 意見交流のための時間設定が短かったなので、もっとじっくり話させる。まとめて意見
が分かれた時は、子どもの意見を戦わせて、子どもが納得する形で終わりたい。
- 反応する時、口々に言うと、児童も教師も何を言っているのかつかみにくい。
- 一問一答の形の間答では思考が深まらないので、発問の工夫が必要。
- 「好きと分かる」部分に線を引くのではなく、「エルフの気持ちが分かるところ」に線
を引いて、「好き」につなげていってもよかった。
- 1年生には、授業のテンポが速すぎたように思う。
- 授業が、児童から出てきた疑問を取捨選択したもので構成されていたり、それをもと

に話し合うことができたりするとよい。

- ・ 線を引いた理由を聞いていたが、それを広げて意見交流にもっていくとよかった。
- ・ 読み取りを全文するのではなく、大切なところに絞っていき、そこを深める。
- ・ 終末でもう一度音読すると、内容の理解が深まったと思う。
- ・ 課題をはじめに示し、その到達度基準も示すことで、授業の達成度が各自測れる。
- ・ 振り返りは、教科としての力をいかにつけたかという観点で行いたい。

《学び合い・その他について》

- ・ 1年生の段階から、学び合いの基礎を作るための意見に対する反応の仕方をしっかり教えていきたい。また、聞く姿勢がしっかりとしていると、学習への参加度が上がってくる。友達の意見を聞いた後、自分の考えと照らし合わせることで、意見が練り上げられていき、学びの質が高まる。
- ・ 低学年のうち、話型がないと話し合いが難しいが、高学年になるにしたがって自分の言葉で話し合いができるようになっていくとよい。
- ・ 自分の言葉で発表することが難しい子もいるから、実態に応じて、話型や話し合いの進め方などを掲示しておくもよい。
- ・ 授業の参加度のうち、「話す」「聞く」「書く」「考える」の割合を、授業や単元、教科によって考えることが必要である。
- ・ 「いいです」や「違います」という話型をいつまで指導するのか。自由な発想や深まりのために、子どもの自然な反応・声でいけたらよい。
- ・ ワークシートだけでなく、ノートを使うことにより、文字を正しく形を整えて書くことや、文の書き方の基本を育てることもできる。



中学校3年社会科の授業 犬山市立東部中学校 足立 裕貴 先生

(各グループが画用紙にまとめた内容の抜粋)

《自分の授業に取り入れたい点》

- ・ 身近な話題で導入に入ったので、学習の流れをイメージしやすく、課題に取り組みやすくなってよかった。
- ・ 題材が面白いので、経済分野の導入として、全員授業に参加できたことがよかった。
- ・ 導入時の発問が、後に出てくる資料につながっていたのがよかった。
- ・ 選んだ土地ごとにグループになったことで、偶然のグループができあがったが、それでも協力して話し合える学級の雰囲気がよい。
- ・ ワークシートの発想がよく、考えやすくまとめやすいものになっていた。他教科でも活用したい。

- 選ばなかった理由を考えることが自分の考えを改めて考え直す機会となり、視点を変えて自分の考えの裏付けをしていた点がよかった。
- 教師の言葉かけにより、グループ内での役割分担や助け合いが行われていた。
- 苦手意識をもちやすい経済分野を、自分の生活と結び付けて考えさせたところが、よかった。
- 教師の立ち位置や話し方によって、自然に生徒同士の話し合いにつながっていた。
- 司会者への指示が的確だったので、グループの話し合いがうまく進んでいった。
- 一つの見方だけでなく、様々な要素を含んだ発問により、多方面から問題解決しようという意欲が高まった気がした。
- 聞く姿勢がよく、他を尊重する気持ちが見て取れた。
- 自由に意見が言えていたし、話し合いが活発にできていた。

《他に工夫できる点》

- 教材を犬山に置き換えて考えると、さらに身近に感じ、話し合いの真剣度が違う。
- 学級で出店する場所を決める必要があったのか。最後にもう一度自分の考えに戻ること、本時の学習のまとめとなるし、本時に学んだことの振り返りにもなる。
- 今後の授業にどのように本時をつなげていくのか、見えなかった。終末のところで、次時への橋渡しとしてのインフォメーションが必要ではなかったか。
- 資料が少ない。時間ごとの利用者数や人口規模、土地代や賃貸料などの要素も与え、多角的に見ることで、深く考えていけたのではないか。
- 立地ごとのグループでなく、生活班ごとに立地を考えることで、様々な意見の比較が小グループ内ででき、その話し合いから、本時の課題解決のためには何が必要か、自分たちで探させる方が、学び合いによって高め合えたと思う。
- 司会者に指示したことを紙などに書いて渡すことで、班の中にも話し合いの要点が浸透していったと考える。
- 立地条件で盛り上がっていたが、人々の暮らしにもっと目を向けなければ、社会科としての学習が深まったとは言えない。
- グループの話し合いや質疑応答をするには、人数が多すぎる。もう少し少なくすれば、もっと多くの生徒が真剣に考えたり発言したりすることが期待できる。
- 本時の課題は「どうやったら売り上げがあがるだろうか」であり、その一つの要素が立地を考えることである。資料としてのグラフが、生かされていなかった。
- 課題からずれないためにも、最後に個人思考に戻るべきで、本時の学習のまとめをさせたい。

《学び合い・その他について》

- 学び合いを仕かけることで、生徒自らが学ぶ意欲を高められる授業にしていかななくてはいけない。自ら学ぶことにより、本当の学力がついていく。

- ・ お互いの意見を忌憚なく言ったり聞いたりできる学級経営が、協同の基礎である。
- ・ グループ学習で期待できることは、多様な考えに触れられること、自分たちで問題解決しようという力がつくこと、平等な集団で意思決定する力を育むことなどである。
- ・ 資料を読み取り、理由をつけて説明する力を、小学校のうちから育てていきたい。
- ・ 最初と最後の自分の考えを比較することにより、自分の意見の変容の元となったキーワードにたどり着く。そのことが、本時の課題や学習内容につながるよう、授業を計画することが大切である。
- ・ 相手を納得させるためには、それなりの根拠が必要で、考えるための資料の用意は、授業者として必要である。

小学校1年算数科の授業 犬山市立城東小学校 西部 舞 先生



(各グループが画用紙にまとめた内容の抜粋)

《自分の授業に取り入れたい点》

- ・ 3分間チャレンジに取り組む児童のやる気の高さを感じた。継続して取り組むことが大切だと感じた。3分間チャレンジの記録表により、自分の成長が分かる。
- ・ 3分間チャレンジの答え合わせを逆からやることで、全員が最後まで参加できるし、もっと解こうというモチベーションのアップにもつながる。
- ・ 全問できなくても、解いた問題が全問正解なら「やったぜ 100 点！」となることで、だれもが達成感を感じられる。
- ・ 1年生として、課題に取り組むあの集中は、素晴らしい。単元構成や取り組む課題、授業メニューを見習いたい。
- ・ ひき算の計算の仕方を自分の口で一生懸命説明しようとしている児童の姿から、毎日の積み重ねの大切さを感じた。
- ・ ペアで解き合うことにより、達成感を感じ、意欲が高まる点がよかった。
- ・ 学習ルールの徹底がなされており、活動するところと教師の話を書くところの区別がしっかりついていた。
- ・ 練習時間が確保されているので、基礎的な力が定着する。
- ・ 話す側、聞く側のどちらにも観点が与えられていたので、児童が、学習の主体者として授業に取り組めた。
- ・ 穴埋めのあいことばシートが効果的であった。使う方もそうだが、その使い方によって聞く側の評価が変わるというのも、児童の習得しようという学習意欲の向上につながっていた。
- ・ TIT2 が見本を見せることで、児童にとってよい手本となり、その後、学習を進める際

の規範となる。二人の打合せができていた点がよかった。

- 毎日、教師が振り返りカードをチェックすることで、児童の学習意欲の向上につながっている。たいへんだが大切なことである。
- 思考力の育ちと知識の定着のために、あいことばシートは大切だと感じた。
- 考えるだけでなく、問題数もこなすことで、計算力もついていくと分かった。

《他に工夫できる点》

- ざわざわした中での活動だったので、果して正確にペアの子の説明が聞き取れているのか疑問に思った。そこで「2人で聞こえる声で言う」という指示を与えてはどうか。
- たくさんのサインをもらいたいばかりに急いで説明している。落ち着いて取り組む工夫を考えたい。
- できる子にとっては、あいことばが、かえってじゃまになっていないか。
- 説明について、児童間の確認だけでなく、教師が確認する場があってもよいのではないか。
- 減加法の定着のために、減減法がおろそかになっていないだろうか。両方のよさを理解して、それを使い分けることが、本当の目的ではないのか。さくらんぼ計算のパターンしかない場合、思考が広がらない。
- ほとんどの子が説明することができていたので、もっと高い課題設定ができたのではないか。もっと混乱する場面（例えば減加法を使うことが不合理である場合… $14-3$ など）を設定すれば、混乱するうちに学習内容を応用する力が養われる。
- 答え合わせはペアでも十分できるし、その方が自分の学習となる。
- あいことばがもう少しシンプルでないと、この先の学年になってとっさに応用できない。速く正確に計算するためには、もっとシンプルでリズムよくなければ、使い道に限られる。
- ますのあるノートに正しく書くことも、1年生としては大切なことではないか。
- 減加法と減減法を子どもに選ばせ、互いのよさを話し合わせることで、広く応用する力が育つ。そういう学び合いもよかったのではないか。

《学び合い・その他について》

- 学び時計により、児童自身が学習の見通しをもって授業を進められる。教科や内容によって、ぜひ取り入れたい。特に、障がいのある子どもには、有効だと考える。
- 書くときの姿勢や鉛筆の持ち方などの指導は、どの段階でも必要である。
- 問題が難しくなると、間違った学び合いになる。答えを教えることでなく、ヒントを与えあうところに学び合いがある。
- 学習用具の準備はもちろん、時間中の片づけ方も身につけることで、学習への集中力が違ってくる。
- 全員が分かるための学び合いの体制作りが必要である。互いに尊重し合え、失敗も成

功もみんなで認め合える集団になっていれば、学び合いによって、学級も伸びるであろうし、個人もそのレベルごとに伸びるであろう。

- 学年全体で、単元見通し学習に取り組んでいることで、多角的に教材を見ることができ、より一人ひとりの児童に合った指導ができる。
- 単元や授業の初めに、学び合いの目的や全員でのゴール、個人でのゴールを設定し、それを毎回確認することで、自ら高め合える。
- 評価の基準を示すことで、自らの学習の道筋をイメージしやすくなり、それを達成する方法も考えやすくなる。自分を見通すことができるようになると、自己教育力も向上する。
- 学び合い＝話し合いではなく、話し合いは、学び合いのあくまでも一つのツール。大切なことは、学び合いによって学習内容が定着し、教科の力も向上することである。

4 協議内容の共有

各グループがまとめた内容を自由に見て回る時間をここで10分取りました。他のグループのまとめを見ながら、自分の考えと比べ、その違いや同じ点を見つけていくのです。この活動のよさは、自分の考えに確信がもてることや自信がもてること、広がりももてることや深まりが期待できることなどが上げられます。みなさんとても真剣に見て回られ、静寂の中にも緊張感のある10分間となりました。そこで得たことや本日の研修全体で感じたことなどは、後述します「本日の振り返り」に記していただきました。



5 杉江先生の指導・助言

- 学級経営は、協同学習のもとです。みんなで学ぶことができるクラスは、協同で学ぶうちに、クラスとしての高まりや団結を自然に目標とし、自分たちで育っていこうとします。相手を信頼し、互いに認め合うことが、協同の基本です。そのような集団なら、学び合うことも成果が上がるでしょう。
- 協同的な学習に、年齢や発達段階は関係ありません。先日何った高校でも、個人思考からペア学習、グループ学習へと進み、学習課題に迫っていました。また、橋爪子ども未来園では、5歳児が7人で話し合い、宝探しゲームを進めていました。何を行うか（学習するか）はしっかりしている課題設定の場合、学習意欲の高まりが期待でき、子ども自ら学び合おうとします。
- 課題や指示がぼんやりとしていたり実態に合わなかったりした場合、子どもの自立・自律は、望めません。
- ただ、子どもが自立的・自律的に動けるようになったからといって、それで満足して

いては、知らぬ間に崩れていきます。教師は、課題設定や指示の精査を心がけるべきでしょう。また、自立・自律をめざす学校運営をしましょう。

- WHYの部分をあいまいにせず、もう一歩深く考える習慣を、教師も子どもも身につけていくことが大切です。
- 協同的な学びというと、短絡的に「話し合い」に結論付けることがあります。そうではありません。また、話し合えば生徒主体の授業かということ、それも違います。話し合いは、あくまでも一つの方法です。大切なのは、互いのよさや失敗を認め合い、互いに高め合うことです。その中で、教科としての力も高めていくことが大切です。
- 振り返りをしない授業は、子ども主体の授業とは言えません。自分の学習の成果をしっかり見つめ、次の意欲につなげさせたいものです。
- 教師の仕掛け次第で子どもは動きます。よい仕掛けを心がけましょう。
- 勉強は、自分が変わることであり、自分事として捉えることが大切です。そう考えられる子は、生きていることも自分事として、捉えることができるでしょう。

＊ 羽黒小学校 杉山 結生 先生の授業（小学校1年 国語科）について

- 授業の組み立てを論理的に考えましょう。最後にどうの手紙を書くのか基準を示しそこに到達するための学習活動を立てていくとよいでしょう。
- 学習の達成度を測るためには、第1時に書いた手紙と最後に書いた手紙を比べるのも一つの方法です。
- 第1時に単元全体の解説をし、単元で学ぶことを示すことにより、1時間ごとの重要性が増します。また、毎時間、見通しをもって学習に取り組むことができます。
- 子どもの参加度が高い授業でした。きらりさんは、仲間のよさを認め合ううえで、よい取り組みです。それがよい学級集団・学習集団につながります。
- 課題をもって話し合ったり音読したりすることで、観点をもった活動になります。

＊ 東部中学校 足立 裕貴 先生の授業（中学校3年 社会科）について

- 社会科の学習として、本時の学習はどんな価値があるのか、本時の課題の値打ちは何なのか、教師はこの課題をどう捉えさせたいのかなどを考えて授業を組み立てると、より明確に、本時の学習の流れが見えてきます。
- 自主・自律、協同は、犬山の授業改善の基本です。いかに子どもの主体的な学びを促す課題を設定するか、そこに授業づくりはかかっています。
- グループの意見を発表する時、発表する側は課題に沿ってできますが、聞く側も何について聞くのかという、明確な課題をもつとよいでしょう。
- コンビニエンスストアの立地について、授業の初めと終わりの自分の考えを比較すると、学習の成果が分かり、振り返りにもなります。

＊ 城東小学校 西部 舞 先生の授業（小学校1年 算数科）について

- 単元の初め、第1時で、単元全体について説明していたことで、この学習の価値を児童が把握しています。単元のゴールを知ることで、学びの見通しをもって学習を進められるので、より学習が自分事として捉えられます。
- 3分間チャレンジは、続けて行うことで、自分自身の成長を知り、次の目標をもつことができる、よい取り組みです。
- 3分間チャレンジの最後に、点数を隣の子が転記することで、結果が共有できます。それにより、一人ひとりの実態を他の子もつかむことができ、学びの授業の共有化につながっていきます。
- 本時では、ペアで活動する時の課題が、明確になっていました。何をするかはつきりさせることで、学習課題への正しいアプローチができます。
- この授業は、1時間だけ特に研究されたものでなく、単元見通し学習として、学年で取り組んできたものです。だから、毎時間実践の後に検証し、計画を見直してから実践するというサイクルができていたようです。これにより、児童のみならず、教師間にも学びの文化が育っていきます。

6 閉会・本日の振り返り

下記の項目で本日の振り返りをするとともに、自由記述で感想を書きました。

1 ビデオ授業参観から学ぶことができましたか。

- ① () 多くのことを学べた。 ② () ある程度学べた。
 ③ () あまり学ぶことがなかった。 ④ () 全く学ぶことがなかった。

2 授業を観る視点は適切でしたか。

- ① () 適切である。 ② () まあまあ適切である。
 ③ () あまり適切ではない。 ④ () 全く適切ではない。

※加えると良い視点があれば記してください。

・・・授業によって、視点を1・2個に絞るとよい。

3 研究協議から学ぶことができましたか。

- ① () 多くのことを学べた。 ② () ある程度学べた。
 ③ () あまり学ぶことがなかった。 ④ () 全く学ぶことがなかった。

4 今回の研究協議の方法についてお答えください。

- ① () 授業を観るヒントをたくさん得ることができた。
 ② () 授業記録用紙を使うので、記録も残り考えを整理しやすい。
 ③ () 以前のように2回の研究協議を行い、より多くの人と交流して多くの意見を聞きたい。
 ④ () その他(具体的に：)

* 振り返りを集計した結果、次のようになりました。

(回答数70)

| 項目 | ① | ② | ③ | ④ | 合計 |
|----|----|----|---|---|----|
| 1 | 38 | 29 | 3 | 0 | 70 |
| 2 | 40 | 27 | 3 | 0 | 70 |
| 3 | 42 | 24 | 4 | 0 | 70 |
| 4 | 57 | 3 | 3 | 7 | 70 |

* 4の④その他に寄せられた、主なご意見

- ・ 授業記録用紙が用意され、とても役に立った。付箋の時よりよい。
- ・ グループのまとめをする際、画用紙に「自分の授業に取り入れたい点」を黒で、「他に工夫できる点」を赤で色分けして記入することで、まとめやすかったし、他のグループの意見も見やすかったので、よかった。
- ・ 他のグループの話し合いの結果がしっかり見られて、よかった。
- ・ 今回のように、1回の研究協議で、十分である。
- ・ 3つの授業について話をするので、時間的に短く、まとまった話ができなかった。
- ・ 研究協議の時間を、もう少し長くしてほしい。

◎ 参加者の感想（一部抜粋）

- ・ 研究協議は、とても勉強になりました。今後も続けてもらえると力になります。来年もよろしくお願いします。
- ・ この3年ほど参加しています。授業を観て深く考えることで、私自身の授業についての反省の大きな機会になっています。教職課程担当なので、ここでの学びを学生に還元したいと思います。
- ・ 犬山の先生方が、「定着」ということを念頭に置いて学び合いを有効なものにしようと研鑽されていることが、とても刺激になり、来てよかったと思いました。
- ・ 当たり前のことが行われていないのが、現実です。犬山市の取組をモデルに、自分の現在を見つめ直したいと思います。
- ・ 杉江先生の「教師の仕掛け次第で子どもは動く。」ということばが一番心に残り、今後の授業づくりをがんばりたいと思った。
- ・ 今回は、3つも実践が聞けてよかった。・・・（多数あり）
- ・ どの実践からも、見習うべき点、勉強になる点が多々あった。心から御礼を言いたい。
・・・（多数あり）
- ・ 研究協議のグループには、いろいろな校種、学年の先生がいて、違った視点からの話が聞けてよかった。・・・（多数あり）
- ・ グループ協議では、多くの工夫すべき点を話し合えたので、とても充実した会となり、ためになった。
- ・ 研究協議からも、他校の実践の様子がよく分かり、よかった。



- 研究協議では、市外の方とも話ができて、新しい目の付け所も教えていただき、有意義であった。
- 小学校の実践は、本当に様々なことを教えてくれます。中学・高校をこえ、大学や大学院でも見習うべきところが、たくさんあるなと感じました。
- 自分は中学校なので、小学校の先生から授業について大切なことを教えてもらえて、

とてもよい機会となった。

- 今までの公開授業研究会の中で、一番よかった。研究協議の方法も適当であった。
- ふだん拝見することができない他校の授業を観ることができ、大変勉強になった。高学年への系統的なつながりがとても重要だと改めて気が付いた。低学年から高学年、そして中学へと、より共通理解・認識が必要であることを学んだ。
- 見通しを立てて伝えていくことが大切なので、生徒が納得できるよう、指示や課題の提示を心掛けていきたいと思います。
- 明確さは大切です。指示も評価も、はっきりしていることが重要だと思います。
- 小学校1年の国語・算数は、年明けから実践できそうなことが多くあった。
- 中学校の授業からは、教科が違ってても、子どもたちが意欲的に取り組む手だてなどを学ぶことができた。
- 前回は、付箋紙を使っていたが、画用紙と2色のペンだけで十分スムーズに話し合えた。ビデオの音量もよかった。
- 授業を観るポイントに加え、学びを深めていくにはどうすればよいかについて、多くのヒントを得られたように思います。
- どのような場面で、子どもたちは学びに楽しさや喜びを感じるのか、小学校の実践や他教科の実践で見ることができたのでよかった。
- 前回も参加しました。ビデオの撮り方など改善点もあり、よかった。研究協議の方法も、今回の方がよいと思った。
- ビデオ授業が3つもあり、どれも方法や形式が異なっており、参考になることが、とても多かった。
- ビデオ3本は、少しきつかった。公開するのは、校種・学年をばらばらにしてほしい。しかし、とても有意義な会だった。
- 今回小学校1年の実践が2つあった。前回も小3の国語だったので、小学校高学年の国・算以外の教科など、色々な学年・教科の授業を公開してもらえるとよい。
- 若手の授業もよいが、ベテランの先生方の授業を観て、勉強させていただく機会もほしいと思いました。
- 授業者への質問の時間があるとよいです。そうすると、話がつと深まります。

- 3つの授業の共通点は、子どもに「根拠」のある意見・反応を求めていることだと思いました。杉江先生もおっしゃっていたように、WHYの部分をあいまいにせず、もう一歩深く考える習慣を身につけていくことが、これからの自分の課題だと思います。
- 授業記録用紙が準備してあったので、「自分の授業に取り入れたい点」と「他に工夫できる点」をメモしながらビデオを観ることができ、とても有効な時間になった。
- 小学校と中学校の状況の違いを知った。小学校で取り組んでいることを中学校でつないでいく（発展させていく）必要があると感じた。
- グループ内に、授業発表者と同じ学校の方がいて、どのように授業をつくり上げたのか聞け、大変参考になった。研究協議では、よかった点だけでなく、工夫するとよい点についてもたくさん聞け、参加者の意識の高さ、日頃からの授業に対する姿勢をうかがうことができ、刺激になった。小中連携が、もっと深まるとよいと思った。
- 3つの授業についての協議の時間が足りなかったので、もう少し長くしてほしい。
- 3つの授業を観て、自分の課題を振り返ることができた。授業に力を注いでいる先生方の姿は、学級が落ち着いてきて怠惰になりつつある自分には、目の覚める思いだった。杉江先生の「子どもが動き始めた時、教師の気が緩む」という言葉を聞き、年明けから授業に力を注いでいかなくてはならないと思った。
- 研究協議では、一人では思いつかない視点や意見を知ることができてよかった。課題を意識して授業をする必要があることや、子どもの学習レベルにあった授業をしなくてはならないということを感じた。
- 他グループの意見を知ることで、自分のグループとは違う意見を学べてよかった。
- どの授業も、とても参考になりました。子どもたちが意欲的で、「子どもは、授業のあり方で大きく成長するものだ」と改めて感じることができました。自分も頑張りたいと思います。
- グループでの研究協議では、よい点が多くなるケースがよくあるが、鋭い視点で意見を言う先生がいたので、授業を観る時や授業を組み立てる時の参考になった。
- 杉江先生の言われた、WHYは大切だと思いました。
- 小1の授業を2つ観た。学び合いの基礎、授業態度の基礎を観て、「こんなにもできるのか!」と驚いた。1年生であれだけ聞くことや学ぶ意欲が育っていれば、高学年・中学校になったら、どんな学び合いができるのか楽しみである。1年生でできた基盤をもとに、学年を経るごとに一段一段積み上げていきたいものである。
- 求められる姿が、小1と中3では大きく違い、「学び合い」の根本とは何かを再考する機会となった。
- 3つの授業を観て、学習のルールの定着が大切だと感じた。
- 最後の全体交流の仕方が、効率的でよいと思いました。



- 話し合う観点が多くあったので、1つのテーマに沿った話し合いがしづらかった。授業研究会の延長なので、「学び合い」についてだけ話し合っても深めていってもよかったと思う。
- 授業ごとに、授業を観る視点をはっきりさせるとよかった。自然にグループの話し合いでは、限られてきた。視点を限定しないで、ふだんの授業をそのまま見つめ、思うところを協議することで、様々な視点が各グループから出てくるのもおもしろい。
- その場では把握しにくいので、事前に指導案が見られるとよい。また、その中に工夫した点も書かれているとよい。
- 今回のような全体交流もよいが、そこに深まりがあるともっと良い。
- 授業研究の根本の「学級経営」についての研究会を設立してもよいと思った。特に少経験者にとっては、有効であると思う。
- 教科の力をいかに学び合いの中から身につけさせるのか、考えていきたい。
- 浮きこぼしのないように、考えていくことも大切だと思う。
- 授業を観て、疑問や問題点を話し合い改善し、また実践しては話し合うという繰り返しが、よい授業をつくり上げていくためには必要だと改めて感じた。
- 「子どもの学びを促す教師は、仕掛けをする」ことと「子どもが動くための工夫」について学習させていただきました。
- 授業のビデオでは、発表を聞いている子どもたちの姿も映してほしかった。
- 学び合いを意味あるものにするという視点で勉強させていただいた。子どもが真に「分かる」ための手立てや、教師のコーディネートについて意見交流できた。
- 授業を観る観点、本日の会の進め方を初めに示されたので、ビデオを観る時に観点を絞って観ることができた。自分だったらと考えながら観ることができたのもよかった。
- 子どもたちが、我慢して学ぶのではなく、楽しいとか、もっとやりたいという気持ちで学べるような授業ができるとよいと改めて感じた。

(文責：城東小学校 五味 公人)



平成24年度
**授業
 研究会だより**



平成25年3月14日
 犬山市授業研究会
 犬山市小中学校長会

平成24年度

授業研究会成果発表会

- 今年の成果を共有し合う -

2月19日(火)に犬山市福祉会館で24年度の授業研究会成果発表会を開催しました。年度末にさしかかり慌ただしい時期と重なりましたが、60名の会員がこれまで研究的実践で積み上げてきた内容をまとめ発表しました。発表会には、会員の他に羽黒小飯田校長先生、楽田小梅村教頭先生にも参加いただきました。

当日は右記のような日程で行いました。今年度も、グループ交流という形ではなく、全体に伝えることを意識して、グループの成果をまとめることに重点を置いた発表会にしました。グループ交流にすると、少人数で発表し合い質疑応答するので、一人一人に発表する機会があって参加度が高くなったり、疑問点も気軽に聴くことができたりという利点がありますが、グループとして伝えたいことが、きちんと全体に伝わり、成果の共有ができるとは言い難いので、全体の前での成果発表会にしました。

成果発表会プログラム

- 1 開 会
 - あいさつ
 - 中京大学教授 杉江 修治 先生
 - 犬山西小学校長 三輪 芳久 先生
- 2 グループごとの発表
 - ・学び合いA部会
 - ・学び合いB部会
 - ・国語1部会
 - ・国語2部会
 - ・国語3部会
 - ・算数・数学部会
 - ・特別支援部会
 - ・社会科部会
 - ・道徳部会
- 3 指導助言
 - 中京大学教授 杉江 修治 先生
- 4 閉 会
 - 城東小学校長 水谷 茂 先生
- 5 今年度の振り返り

1 開 会

杉江 修治 先生(概要)

- ・先日米子市の中学校に行った。そこでは先生が、生徒の面倒をよく見ていた。細かいところまで一人ずつ指示を出していたが、それだけでよいのか疑問を感じた。生徒に身につけたい、課題解決の力や主体的・自律的な力が育つような指導を、いつも心がけてほしい。
- ・今日は、1年間の成果をまとめた発表なので、楽しみにしている。この成果をもとに、次のステップに進んでほしい。

三輪 芳久 先生（概要）

- ・この授業研究会の意義の一つに、学校だけでは味わえない、小中連携がある。日頃の実践の中で行き詰ったことも、互いの実践を持ち寄ることで解決することもある。
- ・今日の実践発表会では、他の部会の発表からも生かせるものを感じ取り、持ち帰ってまた明日からの実践に生かして行ってほしい。そして、今日学んだ成果を一人一人が学校に持ち帰って、広げて行ってほしい。

2 グループごとの発表

(1) 発表の方法は次のように決めました。

- 各グループごとに発表し、他のグループは聴く形式で行う。その際、聴く側は発表内容について感じたことを下記のような評価シートに記入し、それを発表終了後に発表グループに渡す。
- 1グループの持ち時間は10分とし、概ね発表8分質疑応答2分とする。
- 各グループでレジメを用意し、口頭発表することを基本とする。

(2) 発表内容は以下のとおりとしました。

- 研究の仮説、研究の方法、実践、考察を分かりやすく伝える。
- 仮説の検証について十分に吟味し、説得力あるものにする。統計的な資料提示があれば、さらに説得力が増す。
- 持ち時間を考慮し、内容を精選する。研究の全容は実践資料としてまとめる「平成24年度実践資料」を参照することにする。



《グループによる成果発表》

成果発表会評価シート

()グループの発表を聴いて

- 1 研究の手立ては、仮説を立証するのに適切であったか。 ・ ・ ・ ・ A B C D
- 2 効果的に実践が行われ、研究主題に迫るものであったか。 ・ ・ ・ ・ A B C D
- 3 実践を生かした考察であり、授業改善につながるものになっていったか。 ・ ・ ・ ・ A B C D

A：達成していた B：ほぼ達成していた C：やや不足していた D：不足していた

【感想】

3 指導・助言（概要）

中京大学教授 杉江 修治 先生

- 授業研究会の取組は、自分の実践を見直し創り上げる契機になっている。子どものよい姿が毎回見られるように創り上げてほしい。「子どものよい姿」が、次の実践への新たな出発点である。
- 学習ステップが細かすぎると、教師主導の授業になってしまう。子どもたちが自ら考え、その発想を生かして授業を創り上げることができるような、大きなステップの授業がよい。
- 授業がうまくいかない場合は、その手立てがよくないからと考え、工夫したり、新たな仕掛けを考えたりしてほしい。それができているのが、犬山の学びの文化である。
- 授業では、既習事項をしっかり押さえ、そのことが元になって次の学習に進んでいくという、有意義な学習にしていく。
- やるべきことは、授業の最適化であり、そのために研究的実践をPDCAサイクルを進めていくことが大切である。
- 研究的な実践を重ねていくうちに、先生方も変容していくであろうが、子どもの変容をしっかり押さえることで、次のステップを考えていける。
- 子ども自身が、「ともに育つ」という意識がもてる指導、実践でありたい。そのための指導の一貫性と統合性を、教師は常に意識しておかなければならない。
- 今年度研究したことは、年度が替わってもゼロにならない。しかし弱まっていくかもしれない。だから自分に取り入れられそうなことや感じたこと、なるほどと思ったことをできることから実践に移すとよい。また、同じ学校に広げることで、より高い学びの文化につながる。



《杉江先生による指導・助言》

4 閉会（概要）

城東小学校長 水谷 茂 先生

- 授業研究会に参加されている先生方は、「犬山の学び」を担っているという自負をもつとよい。それほど中身の濃い、研究的実践であり、発表であった。
- 授業研究会は、堅いイメージではないことが分かったと思う。研究主題に沿ったそれぞれの実践を持ち寄り、話し合う中で、よりよい方向性がかめたのではないかと。何かヒントをもらったら試してみようと思えることや学校を越えた話し合いによって、「学びの同僚性」が育まれていった気がする。
- 自分が変わらないと、子どもは変わらない。常に子どもとともに成長していく教師でありたい。

5 今年度の振り返り（抜粋）

(1) 今年度参加してプラスになったこと

- 部会の先生方と指導面での工夫や困っていること等について交流することができ、やり方を学んだり同じ悩みに共感したりできた。
- 子どもに焦点を当て、教材の工夫を意欲的に行えた。
- 今年度は、国語の教科的な力を高めるための手立てを教えていただき、それを実践して子どもが変容していったことが確かめられたのでよかった。「教科の力」を伸ばすことにこだわって指導することができた。
- 日々の教科研究に加え、「どんな児童を育てたいのか」という意識が、より明確になった。その具体的な手立てを考え、検証する機会となったことがよかった。
- 道徳部会に入ったことで、毎回の道徳の授業を大切にして取り組むことができた。部会の先生方の話を聞き、資料の提示の仕方や、資料そのものをどうするかなど、考える機会となり、とても勉強になった。
- 他校の取組を知る、よい機会となった。授業をする前に意見を出し合いながら案を練り、その授業がどう展開されたか報告を聞くのが、とても楽しみだった。同じテーマで語り合えるメンバーと定期的に学び合うことができ、勉強になった。
- 月に一度の交流ではあったが、他教科・他校の取組を知ることと、自分の取組を振り返るよい機会となった。また、授業や学級経営を行うための引き出しを増やすことができた。
- 子どもたちに求める学び合いを自分たちがしていたと気付いた時、学び合いの理解にまた一歩近づいた。
- 杉江先生のお話の中に出てきた「研究的実践の文化をつくる」ことが大切だと感じた。学び合いが表面に出過ぎ、考え違いしがちだが、初心に帰ることができた。
- 2回目の参加だが、昨年と違う仮説だったので違った視点で授業を観ることができた。
- 自分の実践について、意見を聞くことができ、プラスになった。
- 研究という堅い内容でなく、授業についての雑談の中にも、きらりと光るものがあるような気がした。
- 活発な意見交流を論理的な文章にすることで、国語の力がつくことが検証できた。
- 振り返りでしっかり時間をとって作文に取り組むことの、時間確保が難しいと指摘されたが、工夫して時間を生み出すことの大切さを感じた。



《成果発表の様子》

- はじめは、月1回でも参加が負担になるのではないかと思っていたが、実際は、とてもよい時間が過ごせた。この研究会を通じて、自分では気づくことのできなかった改善点や工夫を知ることができたことが、有意義であった。
- 小中の連携によって研究を進めることができ、とても貴重な経験ができた。また、異なる学年で共通の手立てに取り組むことによって、どの手立てが有効であったか、

幅広く確認・検証することができた。

- 指導の手立ての共有化ができ、自分の授業にも取り入れてみた。
- 発達段階は違っても、算数・数学でつきたい力は、小も中も共通して思考力であった。それぞれ違う指導スタイルなので、実践例を聞き、取り入れたい点が多くあった。
- 自分の指導する目標が見つかり、様々な手立てを試すことができた。これは、子どもの成長にはもちろん、私自身の成長にもつながったように思う。
- 「仮説→検証」という、当たり前のことを再確認できたのがよかった。
- たくさんの資料や、場合よっての資料の提示方法など、多くを知ることができた。
- 異動してきたばかりの自分にとって、多くの先生方と知り合いになれ、同僚性を育むことができたことがよかった。
- 情報網が広がり、自分の視野が広がったことが大きな財産になった。
- 国語において、「言葉」に注目して学習を行うことで、発言や記述の内容に具体性をもたせることができた。考えの根拠が明らかになると、学び合いが充実することが分かった。「学び合い」は「話し合い」ではないので、仲間の意見のよさに気付いたり自分の考えを伝えたりする中で、考えを深めることを目標にした。だから自分のグループの実践は、大変勉強になった。
- 授業を組み立てる考え方や注意すべきポイント等を、ベテランの先生から教えていただき、自分自身成長を感じることができた。
- 「他との相違を考えながら、自分の考えを分かりやすく話す」という、子どもにも共通するスタンスで毎回臨んだ。指導の幅を広げることができ、とても勉強になった。自分の考えている「学び合い」と、他の先生方が考えているものが共通のものであったことから、犬山全体が、その感覚に近いことが分かり、よかった。
- 話し合いの中で、先生方の大切にしている授業への思いや教育観をうかがうことができ、自分を振り返る元となった。
- 杉江先生からもたらされる最新の教育情報や資料によって、広い外の世界を観、自分に活かそうと考えられた。
- 低学年中心の部会だったので、今この段階では何をすべきかという、共通の話題から話し合えたことが、とても自分の自信になった。
- 市内の先生方と継続的に話し合える機会是他にないので、他校の様子を聞くことができ、とても参考になった。「学び合い」の方法を共有できたことが、とてもよかった。
- よい実践を行うためには、授業だけでなく、ふだんの学校生活をしっかり成り立たせることが大切だということ学んだ。
- 自分一人だけではできないような教材研究を行うチャンスをいただいた。はじめは、何をどうしてよいかさっぱり分からなかったが、杉江先生やアドバイザーの先生のご指導により、道筋が見えてきた。
- 子どもが本当に楽しい授業は、自分が楽しい授業である。自分自身の教科指導に対する思いが、大きく変わった1年であった。
- 異校種、異教科、異学年で集まったからこそ、多様な意見を聞くことができ、自分の考えに広がりを持てた。違う教科の実践の手立てを、何とか使えないか考えるのが、とても楽しかった。自分も学び合いをしていた。

- 同じ教科を教える者同士、教えることの悩みや喜びを共有できたし、その学年では何を教えるのか、発達段階を追って考えることができた。

(2) 感想

- 子どもを多方面からじっくり観察し、客観的に見つめるよい機会となった。
- 月1回だったが、他校の先生方と話すことができ、つながりを感じることができてよかった。
- 道徳の評価について、いつも悩んでいたが、具体的な変容として教えていただき、児童の様子をよりの確に把握することができた。今年は、道徳の授業一つ一つが、自分自身の成長につながり、それを子どもたちに還元することができた。
- この1年間で充実したことに学級づくりがある。「皆で一緒に伸びていこう」という学級にすることが、どの実践でもベースになることが分かった。ここで得た実践を、研究紀要を読みながら今後に生かしていきたい。
- ふだんの授業で悩んでいたことに話し合いの中でアドバイスをいただいたり共感していただいたりして、勇気がもたらえた。自分の教師力アップが子どものために必要なもので、今後も研修していきたい。
- 日々の教育活動をしながら実践を積み重ねまとめるというのは、大変な労苦であったが、まとめることで実践の位置づけを再確認することにつながるので、大切だと感じた。
- 学校現場にも若い世代が増えたが、忙しい中で中々研修が行えていないようだ。だからこの研究会は、とても有意義であると思う。また、実践が形として残っていくため、1年の研究が、自身の財産となる。来年もまた、ぜひ参加したい。
- それぞれの現職教育テーマが違う中、指導案のみで研修をしていくことは、難しい面もあった。そんな中でも、若い先生方は、新しい方法や他校の取組を知ることができ、よかったのではないかと考える。
- 最初は知らない人ばかりで堅苦しかったのが、実践を報告し合ううちに「親しみ」を感じられるようになった。「雑談」が楽しいと感じられたらそれも大きな成果といえる。
- ますます多忙化する中で、この会の負担は軽くない。特に勤務時間内に会が終わらないのは、大きな難点だ。価値のある活動でも、全体のバランスが必要である。
- 子どもは、求めれば求めるだけ成長していく。自分自身、教材研究に励み、指導法をもっと学び、子どもの「もっと伸びたい」という欲求に応えていきたい。
- この研究会を有意義なものにするかどうかは、各個人の意識次第である。継続して参加している人は、この会の有効性を感じていることと思う。こういう人の実践は、大変大きな成果を上げた。自分の実践を発表する機会を確保するということが、この会の一番大きな意義だと感じている。来年度、この会がなくなるのは、残念である。
- できるできないは別として、多くの手立てや工夫、知識を学び、それを自分の力の一部として実践に挑戦できたことは、とてもよかった。今日は、他の部会の実践報告も聞くことができたので、これらを自分の土台としていきたい。
- 同じ研究主題、仮説に基づいて実践を持ち寄ったので、手立てが有効かどうか、多方面から検証できた。自分一人の研究では自信がもてないが、データが多いので、検証内容には、自信がもてる。このことも、授業研究会のよいところだと思う。
- 今日の成果発表会に来てよかったと思ったことは、様々な教科の取組に触れることが

でき、自分でも取り入れてみたいとか、すぐにやれそうだと感じられたことだ。また、まだまだ自分は、改善が必要だとも感じた。

- 毎回自分の実践を見直す機会となった。犬山のめざす「協同学習」の知見も深まったので、より多くの教員が参加するとよいと思った。「研究的実践」という言葉を忘れないでいたい。
- 小中連携の大切さは分かっているが、なかなか改善されない。しかしこの研究会では、教科の指導を通してそれができた。小中の指導の連続性について話題にできたが、単元領域がそろっていなかったので、話し合いの深まりがあまりなかった。同じ領域の単元で、段階的にたどって研究を進めていけば、より深まりがあったと考える。
- 自分に足りないものが、話し合いの中で見えてきた。勉強し続けなければだめだなあと実感できる時間でした。
- 本日の発表は、短い時間だったので、十分に研究の概要を伝えられなかった。もう少し、事前準備をしておけばよかった。
- 市内の4中学校区ごとにグループを分け、〇〇小と◎◎中というようにつなぐことで、連続性をもった研究や学びになると思う。
- 市内にこんなに研究熱心な先生がいることに感動した。しかし負担が大きいことも確かであるので、もっと気楽に実践を紹介し合える会でもよいのではないか。
- 成果発表会の発表に、もっと見せる要素を入れてもよかった。
- 毎日、「どうしたら子どもたちにとってよい授業ができるか」考えながら授業を行っているので、テーマをもって研究することは、そこまで大変ではありませんでした。
- 今年度は、ビデオ実践紹介もやった。大変だったが多くの方から意見をいただき、勉強になった。
- 授業内容のよい悪いについては、一人で研究していても方向が定まらないので、他者のアドバイスや実践を知ることが大切である。また、「いかに話すか」について工夫すれば、子どもたちの意見を引き出しやすいと思う。そのためには教材に体験的・主体的に取り組んでいけるようにする必要がある。だから授業研究会のように、様々な授業実践に触れ、一つのテーマについて話し合うことは、とても有効であると考えます。
- 本年度参加して本当によかった。回を重ねるごとに、話し合う時間が足りないと思ってきた。この会は、深く自分の授業を見直す機会となった。参加前後で大きく変わったのは、授業に対する見方で、「学び合いつてなんだろう」と聞かれたら、今なら少しは答えられる。
- 毎回の話し合いで、教科についての理解を深めることができた。話し合ううちに、同じ悩みに安心したり自分に足りないものに気付いたりし、これからの実践に前向きに取り組もうと考えるようになった。一人ではできないことばかりだった。
- 仮説を立て、授業を実践していく過程は、本当に勉強になったし、めざす子どもの姿に近づかせるために、この研究会に参加してよかったと思う。
- 教師という仕事の理解がまだまだ足りないと感じることができた研究会だったので、来てよかった。まだ来ていない若い先生方にも、行った方がいいと進められる。
- 最初は何をしていいかわからなかったが、終わってしまうと寂しいものだ。ここで学んだことを、学校で生かしていきたい。



《主題にそった実践を報告する様子》

- 今まで取り組んでいた手立てでも、こちらが意図して取り組んだ場合は、その成果や効果に違いがあることが分かった。こういう研究会に参加していなかったら、見落としていたこと、気づかなかったことがたくさんあったのだと分かり、勉強になった。
- 確かにつらい時期もあったが、多くの実践データが得られた。それを活用して、これから役立てていきたい。
- 研究会で話す 90 分間は、子どものことだけをじっくり考えられる時間であった。
- 現在は中学校勤務だが、小学校の先生とも実践について話し合ううちに、将来の自分のための力を蓄えられたと感じた。
- 今回アドバイザーがどの班にもついたが、様々な角度からアドバイスをいただき、ためになった。
- 杉江先生がおっしゃった「生徒の変容」をしっかりと検証しなければ、その実践が教師の自己満足になってしまうので、計画的に研究し、検証することの大切さを感じた。
- 教科や学年、校種をこえて協議したので、自分や身の回りの先生方の授業について、役立てられることが多い気がする。ここで学んだことや知ったこと、気づいたことなどをこれからも意識して広げていきたいと思う。

(文責：城東小学校 五味 公人)

監修者

杉江 修治 中京大学国際教養学部教授
博士（教育心理学）

水谷 茂 前犬山市立城東小学校校長

地域の学校を貫く研究的実践の文化づくりと授業改善 —犬山市授業研究会2012年度の成果 (協同教育実践資料20)

2013年9月2日 第1刷発行

著者 犬山市授業研究会

監修者 杉江修治・水谷 茂

発行 一粒書房

〒475-0837 愛知県半田市有楽町 7-148-1

TEL. 0569-21-2130

編集・印刷・製本（有）一粒社（代表 都築延男）

〒475-0837 半田市有楽町 7-148-1

TEL. 0569-21-2130

ISBN978-4-86431-237-0 C1337

協同教育実践資料 20

地域の学校を貫く研究的実践の
文化づくりと授業改善

ISBN978-4-86431-237-0

C1337 ¥2500E

定価 2,500円+税